

奇譚クラブ

1957年 6月号

体験告白
我が異常性の記
創作 L・T 商会
佐川増夫 南時夫



6月号

昭和三十一年五月二十八日印刷 (第十一号 六月号) (毎月一回一日発行) 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

奇譚クラブ

昭和三十一年六月号

6

奇譚クラブ

昭和三十一年五月二十八日印刷 六月号 (第十一号 第五号) (毎月一回一日発行) 昭和三十一年四月二十日第三種郵便物認可

定価二百円

(送料八円)

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



IBM. 2805

奇譚クラブ最近号主要目次

昭和三十年

○十月号(復刊第一号)

【定価二百円(十16円)】

口絵

美しいドアー……四馬 孝画
頭立二馬車……畔亭 数久画
水中の女……都築 峰子画

緊縛フォト・オンパレード

黒のシユミーズ……川辺 砂登子
縋……伊吹 真佐子
どういふポーズを……萩 千恵子
とるの？……萩 千恵子

ボリウム……加賀 利江子
ながし……須川 令子
朝日を浴びて……須川 令子
うつつ……加賀 利江子

旅の縛られ女優……藤田 節子
悪……藤田 節子
ボクの責め方……宝塚 三三子
女性の下着について……水上 流太郎

鼻のじめめ……北谷 英二
奈落の欲情……沢井 和雄
お膳の型と種類……久利 須照人
二個のイチジク洗腸……花村 恵美子

完全なる執事……坂田 信治
サティズム雑感……村岡 助治
女工哀史以前……南 洋一郎
乗馬ズボンの女腹切……藤山 秀緒

女性刑務所体験記……田辺 愛子
少年自虐の方法……岡村 耕二
男性自虐の方法……岡村 耕二
玉稿落穂集……編 集

アブ追求三〇年の回顧……山田 正実
幽囚十ヶ月……伊藤 和彦
女性切腹面に憑かれた男……高原 正夫

素足礼讃……高原 正夫
新しいコルセット……一柳 真砂子

○十一月号(復刊第二号)

【定価二百円(十16円)】

口絵

私の洗腸論……数 正三
映画に見た淡いマゾ……畔亭 数久
アクロバット通信……九州 俊野
残虐なる女性達……森本 登造

みものむし……畔亭 数久
小さな運動会……四馬 孝
漂う女二題……都築 峰子
賭場の獲物……滝原 純子

小入島の捕われ人……北原 虹児
女教師……杉原 精二
上げてくる潮……依田 義賢
掃除日の出来事……宮崎 昭平

告白……古川 裕夫
変態小説論……佐東 増夫
幽囚十ヶ月……寶塚 三三子
ボクの責め方……羽村 京助

レスボスと洗腸……藤山 秀緒
稲古着姿の女腹切……二 保志津子
命がけの遊び……沼 正三
あるマゾヒストの手帖から……辻 隆

拷問に笑う女……宮崎 昭平
賭けられた娘……永崎 長平
お灸と腰巻……芳野 肩美
私にも貴女の下着を……伊勢 進

淫美礼賛……森本 登造
残虐なる女性達……沖野 恵美子
被虐より増進へ……坂田 信治
完全なる執事……久利 須照人

洗腸器と共に……朝路 昭平
或るソドミアの告白……宮崎 昭平
サティズムへの憧れ……京町 一郎
王稿落穂集(二)……編 集

女優の素足……高原 正夫
百合子の記録……波羅田 譲一
映画雑誌芝居の緊縛場面……波羅田 譲一

○四月号(復刊第三号)

【定価二百円(十16円)】

口絵

アクロバットと曲馬団……鍛冶 真三
続・岩瀬祥一のお灸院……岩瀬 祥一
続・映画に観た淡いマゾ……畔亭 数久
セーラー服姿の切腹写真……編 集

女子プロレスリング雑感……鬼山 集
密……青葉 真一
同愛の土に告ぐ……天泥 盛英
蜂の胸四十五センチ……川上 明

昭和三十一年
○四月号(復刊第三号)

苦痛の夢……四馬 孝
第二次会の披露宴……宮崎 昭平
戦国夜盗……畔亭 数久
ナイロスのレインコート……萩 千恵子

「こんなポーズで？」……佐賀 美智子
「お気に召すかしら」……加賀 利江子
「手首が痛いから早」……加賀 利江子
く解いてエ！……加賀 利江子

おしめ放浪記……畔野 当磨
黒人少女の飼育……黒岩 慶
或る切腹マニヤの恋文……笠原 孫之介
正月映画の縛られ女優達……蟻城 美由子

幽囚十ヶ月……香田 一郎
山口式ボテイビルの御紹介……山口 幸一
キヤルマタの美……香付 彦彦
魔の味……高木 伸夫

ドストエフスキイの嗜虐性……野中 愛三
女性乗馬考……馬場 喬次
サシスチンの独白……原 美智子
ボクの責め方……宝塚 三三子

女剣士の切腹について……青山 芳樹
春日ルミ様へ……守口 栄吉
少年矯正院体験記(みせしめ)……獄 収一
私は訴えるアブ・放談……水上 流太郎

完全なる執事……坂田 信治
鼻のプレリユード……北谷 英二
映画の緊縛断片……緑 猛比古
マニヤ誕生……坂野 上信彦

○五月号(復刊第四号)

【定価二百円(十8円)】

口絵

体験告白記 お膳の研究……須藤 律夫
残虐なる女性達……森本 登造
切腹願望と臍窩……沢 清克
縛られた女優達……升岡 金吉

ああこの恍惚境……小村 二郎
シイソー……永井 昇次郎
洗腸雑記……狩井 麗作
洋画に於ける緊縛場面……佐巻 洋策

蜂の胸にこたえて……笠置 俊郎
倒錯の英雄織田信長……辻村 隆
「話の屑籠」……松井 頼子
玉稿落穂集……編 集

赤い花は泣いている……松井 頼子
○五月号(復刊第四号)

案晴しいシヨ……四馬 孝
モデル嬢の表情(緊縛写真集)……須川 令子
加賀利江子……萩 千恵子
淑やかな令嬢、メイドの拘束服……萩 千恵子

スチユアーデスの晒し……宮崎 昭平
赤い花は泣いている……宮崎 昭平
幽囚十ヶ月……香田 一郎
完全なる執事……香付 彦彦

戦国夜盗……畔亭 数久
体臭日記……坂田 信治
築王やしき(異常体験記)……相沢 次郎
おそい目覚め……足立 一夫

灰色のノート……矢崎 竜一
箱……多山 美歌
奴隷に与える手紙……森山 太一
奇妙な禪……森山 太一

責めとフェチズム……加賀 利江子
魔の白鳥……畔野 当磨
お膳の研究(二)……須藤 律夫
生埋め願望……長岡 健一

陰花への憧憬……青山 芳樹
悲風落穂集……編 集
玉稿落穂集……編 集

読者原稿募集 (皆さまの共同広場建設のために)

【研究発表】

アブノーマルに関する研究や発案、小論文等、平易にして本誌の読者に興味を持たすようなもの、十枚迄、採用篇には本誌三月分を贈呈いたします。

【創作】

異色ある題材を現れて立つ野心ある新人の出現を期待します。枚数は三十枚迄、未発表の作品に限る。採用篇には本誌三月分以上贈呈致します。

【体験告白手記】

皆さまの偽らざる真実の叫びを募ります。枚数は三十枚程度掲載篇には一篇につき千円乃至三千円の賞金を呈します。誰でも人には一篇位は直ぐ書けるものです。生々しい体験や告白を是非お寄せ下さい。

【ポケット告白】

文体や用紙などは一切問いません。十枚以内の短い告白物を気軽に書き下さい。採用篇には本誌三月分を贈呈いたします。

【映画、雑誌通信】

映画や雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項についての通信をお待ちします。出処は必ず明記して下さい。掲載の分には本誌二月分乃至三月分贈呈いたします。

【口絵並に挿絵】

画材はサド、マゾ、浣腸、切腹等御自由です。優秀なる作者には継続的に御依頼いたします。

【編集者或は執筆者への公開状】

編集者執筆者或はモデル嬢等に対しての読者の皆様からの公開状を募ります。適当なものは本誌上に掲載の上、回答を求めることとします。本誌三月分贈呈。

(開放した誌面を御利用下さい)

【私のイメージ】

熱烈奔放なイメージをどしどしぶっ放して下さい。どんな荒唐無稽なものでも奇抜なものでも結構です。採用分には本誌三月分以上贈呈します。

【実写写真】

御自身写されたものに限りません。裏面又は別紙に説明とデータをお忘れなく。採用分には相当謝礼。

【アイデア】

将来本誌にて企画すべきものの全般につき出来るだけ詳細に、掲載の如何に拘らず優秀なものには千円迄の謝礼を呈上いたします。

【私は訴える】

皆さまの胸に持つおられる誰にも云えない諸々の悩みや御意見主張等を発表して下さい。本誌ならでは取り上げないような内容のもの。採用のものには本誌二月分以上贈呈。

【レポート】

新聞記事の切り抜き或は見聞等、皆様の興味をお持ちになった事件等につきお知らせ下さい。掲載篇には本誌二月分贈呈。

【読者通信】

編集者、執筆者、投稿者等への便り、前号の批評、希望、或は編集や雑誌のあり方等に関して忌憚なきお便りをお寄せ下さい。ハガキにて結構です。つとめて誌上に紹介します。

【読者交歓室】

読者相互間の文通呼び掛け応答等の頁を新設いたしますから御遠慮なく御活用下さい。文章はなるべく簡単明瞭にお願いします。

○締切は別に定めません。到着順に最近号に掲載します。原稿の第一頁には応募の種目を明記しておいて下さい。

奇譚クラブ編集部

●本誌月極購読料●

一月分一冊(送料八円)二百円
三月分三冊(送料共六)六百円
半年分六冊(送料共千二百)二百円
一年分十二冊(送料共二千四百)四百円

本誌は一切書店売りは致しませんので、購読御希望の方は、直接発行所へお申込み下さい。一月分一冊、お申込みの方は必ず送料八円の御加算を願います。半年分御申込の方には景品として手札型写真三枚、一年分お申込の方には景品としてキャビネ型写真三枚を贈呈いたします。

奇譚クラブ

第十一巻第五号
毎月一回一日発行
定価二百円
(送料八円)

六月号

昭和三十一年五月二十八日印刷
昭和三十一年六月一日発行

編集人 箕田 京二
印刷兼発行人 吉田 稔
大阪市阿倍野区晴明通一丁目八五番地
発行所 天 星 社

振替口座大阪五〇〇四二番

本社に対する御送金は挾込みの振替用紙を御利用の上、受領証をお送り下さい。確実に早くて大変便利です。振替用紙御入用の方はお申込次第お送りいたします。(但し御注文品と同送しない時は、八円切手の封入を願います)

〔奇譚クラブ最近号主要目次〕

アブノーマル・モノローグ……竹谷 十三
拷問に笑う女……辻村 隆
○六月号（復刊第五号）
定価二百円（千8円）

口絵

美貌の屈辱……四馬 孝・画
孤島の捕われ人……アメリカ雑誌より
佐賀美智子ボーズ集……松岡 孝・画
私室でのプレイ……宮崎 昭平・画
深夜のホール……宮崎 昭平・画
修道院の神室……藤 見 郁
大衆文学に現れた真の描写……藤 見 郁
赤い花は泣いている（第三回）……松井 一朗
幽霊の自己愛について……門田 幸一郎
奈子の自己愛について……門田 幸一郎
流石の自己愛について……門田 幸一郎
悲風上原……門田 幸一郎
奴隷に与える手紙……門田 幸一郎
私のアイディアと回想……門田 幸一郎
サデイズム小説の魔力……門田 幸一郎
変つた切腹の魔力……門田 幸一郎
マゾ・スクラツ帳より……門田 幸一郎
甘美なる被虐の幻想……門田 幸一郎
脱獄に對する私見……門田 幸一郎
小説マゾヒズム芸術時評……門田 幸一郎
現代マゾヒズム芸術時評……門田 幸一郎
お仕置遊戯……門田 幸一郎
フエチシストの文学ノート……門田 幸一郎
緊縛女体難考……門田 幸一郎
一輝先生……門田 幸一郎
最近の縛り時代映画から……門田 幸一郎
お膳の研究……門田 幸一郎
玉落穂集……門田 幸一郎
映画に現れたムツキ……門田 幸一郎
サデイズムツクな漫画……門田 幸一郎
○七月号（復刊第六号）
定価二百円（千8円）

拘束服の装着……四馬 孝・画
道化者の集まり（アメリカ雑誌より）……門田 幸一郎
ネルソン提督……門田 幸一郎
新入モデル嬢紹介……門田 幸一郎
パイプの馬……門田 幸一郎
馬を御す令嬢……門田 幸一郎
大衆文学に現れた真の描写……門田 幸一郎
奈子の自己愛について（二）……門田 幸一郎
幽霊の自己愛について……門田 幸一郎
お灸を据えた女の魅力……門田 幸一郎
赤い花は泣いている（第四回）……門田 幸一郎
少年姿体美増進法……門田 幸一郎
私のコレクシヨンより……門田 幸一郎
「真め」の芝居難考……門田 幸一郎
少年雑誌……門田 幸一郎
玉落穂集……門田 幸一郎
被虐の切腹幻想……門田 幸一郎
女性の下着マニアの告白……門田 幸一郎
マゾヒズム断想……門田 幸一郎
H氏の奇妙な告白……門田 幸一郎
サデイズム小説の魔力……門田 幸一郎
私のおしめマニア……門田 幸一郎
乙女の腹切抄……門田 幸一郎
○八月号（復刊第七号）
定価二百円（千8円）

「太陽の季節」を斬る……東山 綱策
「鼻」と「変型しはり」……東山 綱策
幽霊十ヶ月……東山 綱策
目決する従軍看護婦たち……東山 綱策
奈子のA感覚について……東山 綱策
賭けられた洗腸……東山 綱策
最近の縛り映画から……東山 綱策
赤い花は泣いている……東山 綱策
奇譚クラブに寄せて……東山 綱策
私のコレクシヨンより……東山 綱策
統一少年雑誌……東山 綱策
瀧沢の前夜……東山 綱策
緊縛映画速報欄……東山 綱策
最近の映画から……東山 綱策
春日ルミ様まいる……東山 綱策
玉落穂集……東山 綱策
新聞紙上に出た切腹実話……東山 綱策
探偵小説新考……東山 綱策
蜂網完成……東山 綱策
とりこの白人娘……東山 綱策
○九月号（復刊第八号）
定価二百円（千8円）

映画に現れた拷問場面……左巻 跋策
現代マゾヒズム芸術時評……左巻 跋策
探偵小説新考……左巻 跋策
芝居の責め、紅血欠血……左巻 跋策
最近の映画から……左巻 跋策
悦庵に關する一考察……左巻 跋策
「切腹の歴史」……左巻 跋策
私のコレクシヨンより……左巻 跋策
玉落穂集……左巻 跋策
最近の縛り映画から……左巻 跋策
○十月号（復刊第九号）
定価二百円（千8円）



奇譚クラブ

復刊第十五号
六月号 目次

クツワの装置

四馬 孝・画

地下室の拷問二題

滝れい子・画

振袖狂女 宮城野由美子の吊し責めシーン

楓月太郎提供

縛られた女優たち

楓月太郎提供

「疾風からす隊」「怪盗まだら蜘蛛」

『ある夢想家の手帖』(「奴隷貿易」より)

楓月太郎提供

緊縛映画名場面集

「新東宝「真田十勇士総進軍」」

「新東宝「謎の紫頭巾」」

我が異常性の記

南 時夫

上野の山の切腹面

月岡 映子

おしめと浣腸の幻想

日下 絹子

ある女給の体験

アベック裸にし暴行

体験告白私のキタ・セクシユアリス

山本 節夫

續・飛行服姿の女腹切

藤山 秀緒

「切腹」の短歌

合津波羅木利会一同

緊縛映画雑感

楓 月太郎

マンヒズム見たり聞いたりためしたり

春木 俊野

最近の話題と通信

近藤 一



機り責に関するノート	甲斐 仁参	62
女 装 通 信		65
ある夢想家の手帖から	沼 正三	66
切 腹 随 想	須藤 律夫	72
灰色のノート	矢崎 龍一	76
創作・LT商会	佐川 増夫	80
北原純子様の御病氣	佐々木ツトム	86
私は女であるというお話	北原 純子	94
ふんどし幻想	松原三千代	100
未来幻想 家畜人ヤブー (第六回)	沼 正三	102
沼 正三だより	沼 正三	112
切 腹 通 言	中康 弘通	113
責 画 師 の 話	本田 由郎	114
加虐送別会	青葉 模一	118
浣腸器具考	本田 一夫	121
續・潰滅の前夜	土路 草一	128
懐しい「浪人街」の牛裂の刑	嵯峨美也子	144
円照寺七思議「辯才天利益雪解」	伊藤晴雨作並に 画甲斐仁参提供	146
女サジストの記(一)	鷹野めぐみ	150
時 評	麻生 保	151
読者提供のアイデア	高井 好晴	152
妻を立木にしぼる		153
『和装教室』	白金 紅次	154

○十二月号 (復刊第十号)

【定価二百円】(〒8円)

口絵

新着フォト紹介(一) 北原純子・画

「いであゆ」より 拘束服とマスク、欧米式新スタイル (雲井久子)

現代マゾヒズム芸術時評 滝れい子・画

文学に現れた責めの描写 藤見子・画

私のふんどし(二) 松原三千代

異性より同性に興味 畑村一提供

コルセット・マンボ 東林一郎

スカーフトへの魅力 岸本不二夫

牢獄の花嫁 鳴山平

黄色オラミ誕生 真木不柳

和装女の縛り責め展覧会 小西鉄二

美女決闘場面 アイデア 南秀三

女武者自刃 藤山正三

ある夢想家の手帖から 沼田正三

醜態への幻想 淡美一郎

玉落種集 北原純子

魂を病む人 近藤真一

私F4の独り言 青葉真一

多量人ヤブ 沼田正三

女性化願望と女性ホルモン 古井真哉

糸の体験 高橋よしえ

最近の映画から 白石保

美とワイセツの限界 柳沢吉市

緊縛映画速報欄 千葉栄一

防音具使用による窒息死 近藤正男

マゾ・クラブの結成を望む 山田東一

バスガールに硫酸 越野

告白責めとフェチの自画像 原忠正

現代マゾヒズム芸術時評 忠正

昭和三十三年

○一月号 (復刊第十一号)

【定価二百円】(〒8円)

口絵

新着フォト紹介(アメリカ) (2)

花嫁受難二題 北原純子・画

「ボウニー分岐点」の一場面 鳴門の狂鬼(水戸黄門漫遊記第十話)

ADESUGATA 須川令子・画

お灸せめ 北原純子・画

欧米式新スタイル(5)

文学に現れた責めの描写 藤見子・画

花と刃 北原純子

フェチに関する切抜きから 阿川純子

天は知つてゐる 宝塚三三

黄色オラミ誕生(第二部) 木真不二夫

大奥女決闘 京妻仁生

電気責めに関するノート 甲斐正三

ある夢想家の手帖から 沼田正三

女性切腹の体験(上) 田谷敬生

ある女給の体験 日下絹子

麻酔切腹 青葉真一

遊女八重路の責め 本門由一郎

女性への度から(折檻と拷問) 長門睦郎

続々・乗馬スボンの女腹切 藤山正三

女性素足礼賛 高原秀三

家畜人ヤブ(第二回) 沼田正三

舞踊女優の責めの体験 岸本不二夫

最近の「縛り映画」から 嵯峨美也子

少年期(母と子の手紙)(2) 山口幸一郎

戦地での同性愛 東山幸一郎

読者提供のアイデア 高井安晴

サジスチンの半生記 鷹野めくみ

「魔海の業火」 弓野崇

児童雑誌にみた惨虐性 東一朗

玉落種集 編集部

映画速報欄 藤木集

フェチを脱いだ肢体美 畑木集

ムチ打ちと「緊縛」 間島真一

緊縛映画と雑誌の挿絵 千葉栄一

○二月号 (復刊第十二号)

【定価二百円】(〒8円)

口絵

新着フォト紹介(アメリカ) (3)

洋面スチール名面集(四場面) 北原純子・画

先でのお仕置「猿轡を嚙まされた女優たち」 須川令子・画

欧米式新スタイル(6) 北原純子・画

我が異常性の記 南秀三

オースト・スタイルの女腹切 藤山正三

ある夢想家の手帖から 須藤正三

姫君に手を出すな 本田由一郎

花と刃(二) 北原純子

マゾヒズム見たり聞いたり 春木俊野

サジスチンの半生記(三) 鷹野めくみ

秀緒の告白 藤山正三

家畜人ヤブ(第三回) 甲斐正三

サデイズムの芽 岸本不二夫

女教師の責め折檻 本門由一郎

異人屋敷の裸女 白田紅次郎

現代マゾヒズム芸術時評 辻村隆

証の屠龍 原金忠

フェチに関する切抜きから(2) 阿川純子

白衣の傍観者 菅野ふみ

読者提供のアイデア 高井安晴

「スロース・クラブ会則」 並木新晴

私の「縛り美五原則」に就て 月岡映子

洗腸とおむつ(二) 松原三千代

秋のふんどし

○三月号 (復刊第十三号)

【定価二百円】(〒8円)

口絵

新着フォト紹介(アメリカ)

スクリーンで縛られた女優たち 四馬孝・画

海真の悲劇 栗原伸・画

習作 栗原伸・画

浴槽の新妻 栗原伸・画

森の小径で (秋千恵子嬢)

大映映画「魔の花嫁衣裳」より 南時夫

我が異常性の記 北原純子

花と刃 荒尾謙介

髪と絵

マゾヒズム見たり聞いたり 春木俊野

正月映画を中心の縛られ映画 嵯峨美也子

あぶり責め奇聞 本田由一郎

フェチに関する切抜きから 阿川純子

「捕われの令嬢」についての 中谷正三

ある夢想家の手帖から 沼田正三

悪魔の勝利を夢みる男 佐々木信一

或る女装マニヤの記 森本直樹

洗腸レポート 島三郎

特異な角度から 九雅直樹

私のふんどし 松原三千代

燃ゆる男装 藤山正三

或るアブ・マニアの告白 東林一郎

女同志の吊り責め 岸本不二夫

刺青の朝 鳴山平

極美悲願 加藤千春

ある女給の体験(2) 日下絹子

サジスチンの半生記(4) 鷹野めくみ

「洗腸」に関する告白 岸本不二夫

虐待された女中 佐原直樹

少女の切腹 中康弘

電気責めに関するノート(続) 甲斐正三

邦画もシネスコの縛り映画へ 嵯峨美也子

続・潰滅の前夜 土路草一

スクリーンで縛られた女優たち 千葉栄一

○四月号 (復刊第十四号)

【定価二百円】(〒8円)

口絵

女性運動機能測定器 四馬孝・画

縛られた女優たち 榎月太郎

緊縛映画名場面集(一) 榎月太郎

スクリーンで縛られた女優たち 榎月太郎

縛られ拷問を受けるシナ・ロドリジ 藤木集

我が異常性の記 南時夫

縛とフリーフ(二) 池田ふみ子

マゾヒズム見たり聞いたり 春木俊野

探險服姿の女腹切 藤山正三

スロース・クラブ 並原秀緒

女優を縛る監督達 升岡金吉

クツワの装着

(「続・潰滅の前夜」のアイデアより)

これは又なんという素晴らしいサディスティックな
場面でしょうか。美貌の女性と憎々しげな男と
に対する空想は際限もなくひろがってゆく。

四馬孝画



拷問二題



スパイ容疑で憲兵隊に捕えられた可憐な姑娘は、身に覚えのないこととて頑強に否定したため、哀れにも、地下室へ逆さに吊り下げられた。ジメジメと湿っぽく薄暗い地下室には、一瞬華やかな色彩をふりまいたが、無実の罪で捕われた姑娘の運命や如何に。

地下室の

戦時中、防空壕がわりに使用していた穴倉は、長い間放置されていたのでムツとカビくさい空気をふき上げてきた。旦那から若い燕を持っていると疑われた三味線の師匠は、色気溢れる身体をもだえて激しい嫉妬の嵐に吹きまくられるのであった。

(滝 れい子・画)



由美子の吊し責めシーン

＜楓月太郎提供＞



後手高手小手のまま吊し責めにあう宮城野由美子のアップ。



次第に縄は引き上げられてゆく。胸に喰い込む縄目の痛々しさ。

大 映 『振 袖 狂 女』 宮城野



カメラは上へ移動して、固く握りしめられた後手の指を写している。



・縄を天井近く引き上げられたところ、苦痛にゆがむ宮城野の表情。

縛られた女優たち

(楓月太郎・提供)



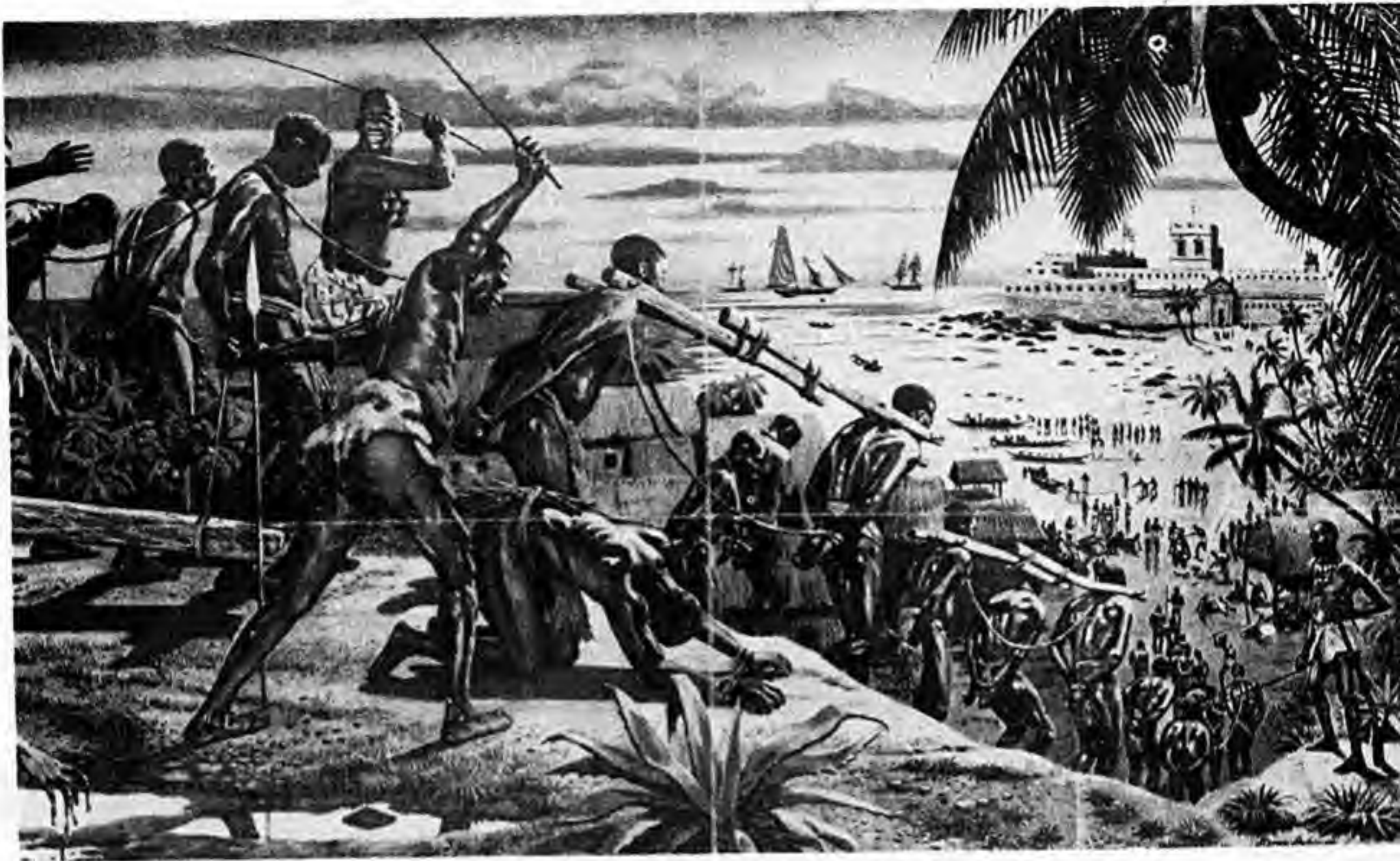
松竹 「疾風からす隊」

(草間百合子)



大映 「怪盗まだら蜘蛛」

(ニューフェイス)



「ある夢想家の手帖」

(沼 正三) より

＜第109項「奴隷貿易」参照＞





新東宝映画 (真田十勇士総進軍) 藤木の実



新東宝映画 (謎の紫頭巾) 宇治みさ子
(4月号167頁 速報欄追加参照)



新しい文献研究誌

奇	譚	ク	ラ	ブ
---	---	---	---	---

1957年 6月号

(第十一卷 第五号 通刊第九十五号)

我が異常性の記

—女体緊縛（その二）—

南 時 夫

第二の体験

先月号に引続いて「女体緊縛」についての私の体験の中、私自身で縛るのではなく、他人に依って縛られた女を見ると云うことに付いてお話ししよう。自分で女の人を縛るのも難しいし、それと同時に既に縄目を受けている女性を実際に見る機会も少いのが実状です。女の現行犯人でも捕って手錠をはめられた処を偶然に見ればいいですが、そんな機会はどうやらありません。私は専門の関係で東京地方検察庁を見学に行ったことがあります。あの様な特殊の場所へ行けば手錠を嵌められた若い女も見られます。しかし現在では余程の事が無ければ捕縄で縛ることはせず、まして手を背後に縛ることはしないことになっています。憲法上の基本的人権の尊重、擁護の思想からも——特に婦女子を扱う時は非常な慎重を要することになるのです。未決の場合は尚更であり、既決囚で刑務所に送られた者も、普通ならばそうひどく扱われることはありません。監護法に「在監者が逃亡、暴行若しくは自殺のおそれあるとき、又は、監外にあるときのみ戒具を使用しうる」と規定されていますが、

逃亡、暴行のおそれの少い婦女の場合は、手錠すら余りかけられることは無いのです。（戦後のことで戦前、戦中のことは論外です）従って婦女子の縛られ姿を見ることは容易ではありません。

私はよく江戸時代にでも生れていたら——なんて変なことを考えますが、その時代とて、そうさらに引廻しとか、竹矢来の中で女罪人が晒されているなんていうことは極めて少なかったでしょう。又隣家に強盗が入って、それを助けに行ったら奥さんと娘さんが縛られていた……という経験も幸か不幸か私にはありません。従って自分が手を下さずに縛られている女の人を現実に見たことは殆んどありません。一度に二十人近くの女性が縛られているのを見た——と書いても決して嘘ではないのですが、種をあかせば例のパン喰競争の時です。大学一年の時に自治会主催の運動会があったのですが、その番組の中に女子のパン喰競争があったのでまさか縛ることはしないだろうと思っていました。一人々々後手に縛られたのには驚きました。五人づつで四、五組が走りましたが、役員の男子学生が一人づつの後ろに廻ってハチ巻で手首を縛って廻ったのです。初めから縛っておかなくても良いのに全部をそうしてから号砲一発。運

動場半周ですが、カーブがあるので大変です。でも矢張りそうしつかり縛り合せてはないので途中で解けてしまう者もありましたが、多くは左右の手首を十種から二十種間隙に別々に縛られて居た様に思います。二、三人転んだ学生も見ましたが、さすがに容易には起こされず可愛想でした。その時の写真は希望者に売られる事になっていたので、女子学生の中から苦情が出て、出場した者だけに売る事で他には取止めになってしまいました。カメラを持って行かなかったことを悔いても後の祭りです。

翌年にはカメラ持参で、今日こそと思つて待っていました。それからただ手を後に組むだけになり現在に至っています。会社等の運動会でもパン喰競争はありますが女子が出場することは余りなく、あつても実際に縛ることは少いでしょう。まだ大学の運動会の方が可能性があります。以上の様に私が縛られた人を実際にこの眼で見たことは殆んど無いのですが、ただ生徒の姿の中に二人だけ、その様な光景に触れたことがありますので、皆様の考えられている「女性」という観念とは多少かけ離れているかも知れませんが、お話の内容もたわい無いけれど息抜きにお聞かせ致しましょう。

その中の一人はOといつて中学での最上級三年の生徒でした。中学三年生と云うと、十五、六でもう可成り女らしくなっています。特に身体の大きな子は、高校二年生位と殆んど変りないでしょう。そして中学生でも女としての感情を持つのはもとよりの事で、初恋もこの時分に生ずることが多いのです。私達教師もこれ等の生徒の気持を色々押し測つて教えてゆくにとっても苦勞するものでした。Oさんは南先生が好きらしいと学校内で噂になった事があります。私は当時二十二であつて、三年生とは六、七しか違わないし、先生中で最年少であつた為か、生徒からそう云う眼で見られることも不思議ではなかつた様です。でも私はOの居る級を教えた事も無ければ、親しくその子と話した事ありませんでしたので、非常に

心外に感じ、Oの担任の三十過ぎの女の先生を通して苦情を云つた事があります。余り噂が高くなつて校長その他に知れると迷惑するからです。それでも、私がその子の居る級の前を通ると、Oさん南先生がいらしたわよと、大きな声ではやし立てるのです。私は今にそんな噂も消えるだろうと思つて、そつとしておいた或る日、私が授業を終つて廊下をぶらぶら職員室の方へ歩いて来ると、今迄がやややつて居たOの級の生徒達が急に静かになつたと思うと、皆教室の中に入つて戸を閉めてしまつたのです。ところがどうでしょう。Oだけがその戸にもたれかかる様にして立っているではありませんか。

Oと云う生徒は成績も悪く、普段は男の子の様に振舞い、所謂ズベ公的な性格がある子でした。ただ顔だけは妙に男好きする顔で、決して美人の部ではなく、何んと言うか、くずれた魅力(中学生にそれまでの外部に表れたものは無いけれど)があり、身体つきにも変な色気が感じられる子でした。いつもアメリカ製の作業ズボンに真紅なセーターで廊下を飛び廻っていました。Oの担任の先生もOには少なからず手を焼いていた様です。

そんなOがただ一人戸口に立っているのです。顔は伏せたまま何か悪い事をして立たされているみたいな姿でいるOの後で、先生よとこそく囁いている声が聞えました。なんと、五、六人の生徒が教室の中から私の方をガラス越しに見ているではありませんか、私はOが何か用でもあるのかと思つて一度は立停りましたが、Oは僅かに動くだけで別に私の方に近寄つて来る気配もありません。私も変だと思つて、良く見ると、なんとそのOが後ろ手に縛られているのです。戸の隙間からその縄尻を誰かに引張られているのです。足もよく見ると、別々に縛られて、その二本の縄を教室の中の生徒達に握られている様子。勿論よく注意して見ないと判りません。然しOとしては殆んど完全に自由が奪われているので動く事も出来ま

せん。ただ下を向いたまま立って居るばかりです。私はそれに気が付くと、又、何気なく歩き過ぎ、別に何も云わずにおきました。女の子は変に叱ったりすると、かえって反撥するので出来るだけ、そつとしておいたのです。教育者としていけなかったとも思いますが



結果的にみて、そう悪い処置でもなかったと考えます。

このOが二、三日後に又、縛られました。もっとも私の眼の届かない所で生徒達がどんな遊びをしていたか判りませんが――。私がOの縛られた姿を見たのは二回きりです。二回目のは、職員室にOが入って来た時です。二、三人の他の生徒と一緒に入って来たOは職員室の入口でもじ／＼しています。別に私に用事がある様子にも見えないので、私は別な仕事をしていました。Oの担任の先生の、

「Oさん、何か用事があるなら入って来なさい」と、云う声に又入口を見ると、Oが前より多少中に入って居たけれど、未だ立っているだけで入って来ません。その時、誰かに押されたのか二、三步よろける様に進んだOを見て担任教師が、

「なあーんだ、あなた縛られているの？」と大きな声で云ったのです。縛る、という言葉に対して無関心だったのでしょうか。居合せた先生方が一せいにOの方を見た程です。

「だあーれ？そんな事をしたのは！」と云いながらその女の先生がOの方へ行った時、私も一寸席を立てて出て見ましたところ、Oを囲んで二、三人の生徒が、こそ／＼逃げて行く後姿が眼に映りました。良くは分りませんでした、Oは両手を後ろに縛られ、その余りの縄で腰を縛られて手首と結び付けられて居たのではなかったかと思えます。前からその腰縄が見えなかったのは、セーターで隠していたのでしょうか。

縛られた手首が丁度腰の辺に密着して動かなかったことからして多分、そんな具合に縛られて居たと思います。

「しようがない子ねえ——」とさも事も無げに云って先生は席に戻って来ましたが、以上Oに関してはそれだけです。今考えるとOはマゾ的性格を持っていたのかも知れません。少くとも縛られることがそう嫌いでなかった事は確かです。そうでなければ、あんなに男の子の様に勝気な子が素直に縛らせることは無いからです。

もう一人は、私が担任していた級の生徒でHという女の子でしたが、この方はOと違って成績も良く、顔立ちも綺麗でした。バスケット部の部員で背が高くよいスタイルをしていました。このHに関しては至極簡単です。私が体育の時間に、さてこれから授業に行こうと思って運動場を見下していると、その隅の方で女の子達が縄飛びをしているのが眼に入りました。縄飛びはとても流行っていて授業直前まで女生徒はこれに熱中していたのです。その中に、今度は縄の両端を持っていた二人が一人の生徒を追馳け初めたのです。一体何をするんだろうと思って見ていると二人はその縄でその生徒の身体を捕え様としているのです。とうとう縄に引っ掛けられて、両手をあちこち動かしながら、縄をはずそうとしている子を二人して引張りながらぐる／＼巻きにしていきました。その捕った生徒がHでした。

この場合は、Oと違って後手にしっかり縛られたと云うのではなく、何かの棒に巻付ける様に、Hを中心として両端の二人がお互いに逆方向にぐる／＼廻ったというにすぎません。でも縄飛びの縄は可成り長いので中学生の身体なら相当の回数巻きつける事が出来ます。Hの身体は所構わず目茶々に巻かれてしまいました。片方の腕は前に、もう一本の腕は脇に身体と一緒にぐる／＼巻きに縛りつけられたHが何か云っている様ですが上から見ている私には分かりません。縛った二人も、縛られた当のHも笑いながら何か云っていま

す。体操の服装の上からしかも左右に引張られながら肩から太股の辺までぎり／＼と縛られて上半身は棒の様にされてしまったのですから可成り痛かったでしょうに、三人とも意に介しない様な表情。それから私は下へ下りて行ったのですが、生徒達はもう整列していて私を待っていました。Hがいつ縄を解いて貰ったのか分りませんが相変らず可愛い顔を列の中に見せていました。これでは「女の縛られた姿」を見た事にはならないかも知れませんが、まあ、こんな事もあったというだけのお話をしたので。

ここで一つ自己弁護させて下さい。私の教師生活は二年（詳しく云えば一年七ヶ月）で終わりましたが、その間の体験、実見談は以上に尽きます。この様なことを、その二年間の生活から抜き出して書いてみると、私という教師が神聖な教育者の使命を忘れ、専らこの様な異常性欲を満足させていた様に誤解されそうです。この点だけは誤解しないで下さい。私は少くとも自分の趣味、欲望をこの勤めの場に実行してみようなんて云う事は毛頭考えませんでした。公私の別はわきまえて居た積りです。M先生との事も、女装云々という事も総べて私的生活でのみ行っていた事で、決して生徒を縛ってみたいとか、お説教に事付けて実行してみたという事は断じて無いのです。数学の教師として私は精一杯努力して教え、担任教師として生徒を善導した積りです。

私の手記中には女生徒しか登場しないので、女子だけに注目して居たと思われるかも知れませんが、もとより女子、男子半数ずつ居る新制中学で生徒は全部同じ様に可愛かったのです。この様な異常性格者が教師になる事自体が間違っていると云われれば私には弁解の余地は有りません。しかし、今、あんな事があった、こんな事もあったとこの種の体験、実見を思い出しても勤務場所での経験は以上の様に、生徒の悪戯の二、三回を眼で見たというだけなのです。

残りの九十九%の日数は、生徒の為に自分のあらゆる能力、あらゆる知識、教養をもって接し、生徒達をすべて妹、弟の様に愛して来たことは真実です。そして又、その当時より大分この種の傾向が強くなった今日考えて、あの子を何かの機会に縛ってみたかった——と考えることも無くは無いのですが、実際に今又教師生活に返ったとしても私は決してその様な真似はしないでしょう。又出来ずまい。私が勤めていた当時も、女の先生が生徒を素手でぶったというだけで問題となった程ですから、まして女生徒を縛った等といえれば非常な問題となります。

今でも教え子から色々手紙があり、その元気な事を喜びこそすれ無理にその娘達をブレイの対象とすることはしない積りです。（この様な立派な事を云っても唯一つ例外があるのです。それが後述するR子の場合です）。私は今でも一人々々の教え子の顔をはつきり思い出せます。それから五年経った今でも、あの当時と同じ愛情を生徒にもっているのです。本当に懐しさで一杯です。

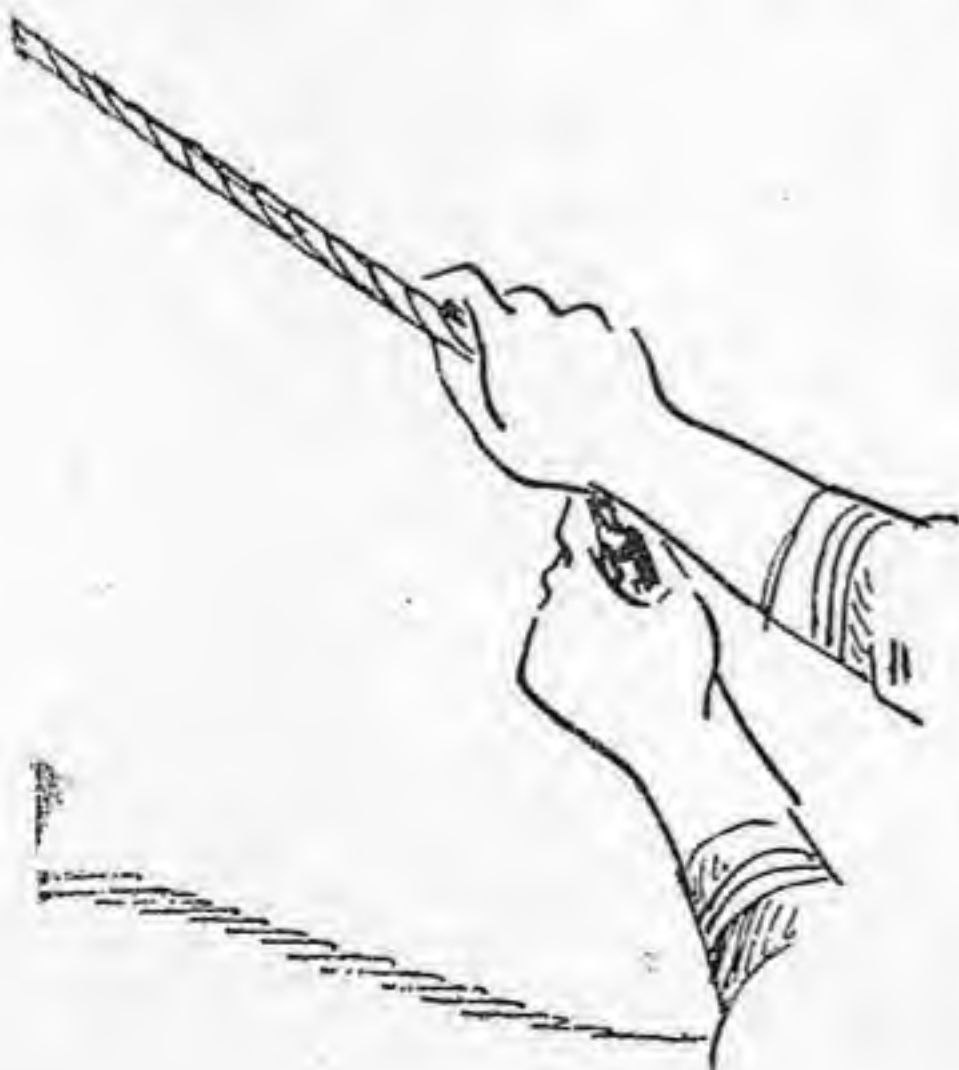
第三の体験 R子の場合

R子の場合のお話を始める前に、私は註として一つお断りしたい。このお話は未完成なのです。と云うことは過去の一定時から、現在未来と人の世の流れの中に、その過去にあった事柄のみ切り離してここにお話するのです。要するに私とR子との交渉は、未来の事は判らないまでも現在はまだ継続していることをお断りしておかなくてはならないのです。従ってこれからどの様な形で発展してゆくものやら、或は又明日にでも何かの事情が起って、ここにお話する過去の体験の一事だけで終止符を打ってしまうかも知れません。従ってここに載せる手記自体、体験自体は取り立てて奇抜なものではなければ、サディズム——少くとも女性緊縛に関するこの種の体験談としては不満足な点も多々ありましょう。もう一ヶ月又は二ヶ月後に

至れば、もっと内容の充実した手記が書けるかも知れません。又は一年後、二年後に於ても何等目新しい告白もなし得ないかも知れません。神ならぬ身ではあくまでも過去の一時点から現在までの流れのみをお話する外はないのです。

それから、内容自体が余り取り立てて云う程の事も無いのに項を別にして敢てこのお話をしようと思ったのも、一、二の理由があるのです。その一つは前述したK子の場合とこの場合ではその緊縛への誘導方法に非常な差異がみられるからです。K子は緊縛行為を習慣化しそれを意識の中に入れることは余り無かった事は既にお話しました。しかしR子は「縛り」を強く意識しているのです。K子の場合余技として終始しましたが、R子の場合「縛り」から出発してそれが余技になりつつあるという相異です。もう一つの理由はK子との体験記より、このR子との体験のお話の方が或る意味ではより参考になるかも知れないと思ったからです。それはこのお話の中に「奇譚クラブ」自身が登場して来ることと、その誘導方法が計画的であるからです。

R子というのは私の教え子の一人です。「教え子」であることと云うことが今日まで、否今後、私の心に重くのしかかっているのですが、もうくどくどと申し述べますまい。私が教鞭をとった二年



生の中に、R・Kという生徒が居ました。R・Kは非常に温順しい、眼立たない子でしたが、成績は級委員をしたことがある程です。それから良い方だったのでしょう。別に質問をする事も無く、色白の多少病的な感じのする、それでいて比較的肉付きのよい娘であったこと位しか私の印象は無いのです。R・Kが他の級の生徒であったせいもあります。私の勤務時期にはそのR子との関係は先生と生徒という関係の他は何も無かったのです。ところが私が退職してからは他生徒以上の頻発さで手紙が来る様になり、その内容も私を慕っているという感情が露骨に現れる様になりました。

その当時R子は中学三年でしたが試験の前の日には必ず私の家まで来て夕方遅くまで勉強して帰りました。私もわざわざ遠方から尋ねて来る生徒は可愛く日曜日でもあると映画を観にゆく様にもなったのです。R子は性格的に非常にじめ／＼した暗い面と思い掛けず朗らかな明るい面の両方を持った、云わば感情の変化の激しい娘でした。そして他の生徒よりは早熟だったと申せましょう。私もその扱いに随分と気を使ったのです。私は大学生として大した変化も無い生活を送って居ましたが、この時期に初めて奇クを知ったのです。



店頭で奇クを立読みした時の、私の心をかすめた種々の感情は、これまでの奇クの皆様と同じであって、別に細かく書く必要もありません。

私が奇クを知った時期とR子が急速に私に接近した時期との偶然の一致が彼女にとって、又私にとって、幸であったか不幸であったのか、私はそれより以前にK子とは別れていた時です。奇クを見た途端、その対象が欲しくなった事も改めて説明を要します。然しながら、R子は当時まだ十五、六の少女です。しかも私が半年前までは教壇から教えていた生徒です。K子を相手とした様な、縛りを余技としての種々な行為をなんでR子に対して出来ましょう。そうだからと云って縛り自体を目的に、一寸先生に縛らせて呉れ

とも云えません。現在はとも角、その当時のR子の私に対する眼はあくまでも「先生」として見詰めていた事も確かであります。私は無理にも自分の欲求を押え付けていました。

そうする中に二人とも夏休みになりました。K子を初めて縛ったのも夏。夏は人間の心を開放的にする。私は我慢しかわたのです。しかし切り出す口上に苦しみ、とうとう次の様な計画を立て、それを実行しました。休みになるとR子は殆んど毎日の様に、わざわざ電車で揺られながらも尋ねて来ました。私を慕う心も当事者の私がひし／＼と感ずる程強いものになっていました。私は奇妙な自尊と理性が強く、自分で絶対間違いないと思わない限りこの種のことは口外出来ない性質なのです。「まあ大丈夫」と思ったからこそ実行に移してしまったのです。R子がいつもの様に尋ねて来た時、私はこう切り出しました。

「学校の宿題があつて、とても忙しい……。全然分らないんだよ」

「なんの宿題なの？」

「うん。心理学の宿題なんだけど、その出された題がとても難しくてどうしても書けないんだ」

「……………」

「Rちゃんはマゾヒズムっていうのを知ってる？」

「そんなの知りません」

「女の人が虐められて喜ぶ気持ちって云うんだけど——」

この会話の中で、真偽を白状致しましょう。心理学の宿題があった事、夏休み中に書く様にせねばならない事、毎日それに頭を悩ましていた事、すべて本当です。しかしマゾヒズム云々は真赤な嘘でした。本当のテーマは「少年心理の発達過程について」というので、無理にこじつければ無関係とも云い切れませんが。R子の頭にはただ私が宿題を書くのに困っているという事実しか無かったので

「女の人が虐められて喜ぶ——なんて嘘でしょ」

「でも心理学的に云って女の人の中には大抵そんな気持ちがあるっていうことだよ」

「そうかしら。なんだか良く判らないわ」

「友達に皆女の人を実験台にしてやっているらしいんだけど」

「実験台？ 何をするの？」

「いろ／＼あるだろうけど、大抵は女の人を縛ってみるらしい……」

「縛られて気持ちが良くなるの？」

「どうもそうらしい。どうだ——Rちゃん、実験台になって呉れないか？」

「実験台に？……………」

実を云うとその日は、それでR子は無事(?)帰ったのです。私は嘘をついた事に多少厭な気持ちでしたが、何んだか成功しそうな予感がしました。どうもこの様な計画的誘導は余り発表したくないのですが、少し眼をつぶって聞いて下さい。それから二日後にR子はやって来ました。色々話をした後、

「宿題書いた？」と聞かれたのです。

「まだ全然駄目さ」

「縛られるって、どんな風に？」

「手を後ろに、それから身体を縛られるんだよ」

「……………」

「天井から吊り下げたりね……」

「まあ、それで気持ちが良いなんて本当かしら？」

「これは心理学の文献なんだけど——」

と云ってR子の目の前に置いたのが奇巧の写真でした。はっきり云えば、奇巧ではなく、復刊以前に発行されていた「KK通信」の四、五枚のパンフレットなのです。何故私が思い切ってその様な物を持ち出したか、それは責任を転化する訳ではないけれども、その

様にしてマゾ女性を発見した人の記事が奇クに載っていたからに他なりません。その小説だったか、告白だったかには、机の上には奇クのグラビアをわざと開けておき、自分は戸の隙間から様子を見ていたのです。知らずに入って来た女性のその写真を見詰めている眼にマゾの輝きを発見して、……最後には結婚する様な筋だったと思いますが、R子の前にそのパンフレットを出した私の中にその一文がひらめいた事は確かです。KK通信の中にも二、三の写真が載っています。私がR子に見せたのは、二人のモデル嬢が高手小手に縛られ、そのまま背中合せに連縛されて、その立姿を側面から写したもので、モデルが誰なのか判りません。

「まあ、裸じやないの」

R子の第一声がこれでした。

「仕方がないよ。モデルの人だもの」

「だって……」

無理もありますまい。中学三年生には、いくら同性だと云っても刺激が強過ぎました。しばらくパンフレットを引繰り返したり、時々その写真を眺めたりしているR子の顔には、ただ「驚ろいた」という表情しか見出せません。記事にあったマゾの光り等はどこにも無いのです。私はあわてました。

「文献だから極端なんだよ」

こう弁解しましたが、このまま引下る事も出来ないの、「Rちゃん！実験台になってみないか？　ただ縛られたらどんな気持かを云って呉れればいいんだけど」

「なんだかいやねえ——」

「縛ってみたいな」

私は遂に本音を吐きました。するとそれをどう取ったのか。

「縛ってみたいいいでしょ。でも何で縛るの？」

私はK子との体験者に拘らず少なからず迷惑してしまったことは

事実です。

「あれで……」私は寝巻の紐を取ってから、「両手を後ろに廻して御覧」と命令口調で云いました。

「いやねえ——」

本当に厭々ながら手を後ろに廻したのを私はその手首だけ縛ったのです。縛ってから、

「どうだい？　どんな気持？」と私はR子に聞きました。

「別に何んともないわ」

「気持が良いっていう話だけ——」

「気持がいいなんて——そんな事あるもんですか！」

後手に縛られたまま私の椅子に座っているR子は背後に廻した手を椅子の背に押付け、もたれかかってこう云うだけで、別に「いやだ」とも、「解いて」とも云いません。

「どんな気持か云って呉れないと困るんだよ。どんな気持なの？」

「だって、何んでもないんですもの——」

それから一旦解いては又縛ったり、別の縄で椅子にぐるぐる巻きつけたり、

「一人でほめて御覧！」と云って解かせたり。私はこれ等の際、決して強く縛りませんでした。夏でしたので肌は出ていましたが跡がつく様には決してしませんでした。

「一人でほめて御覧」と云うと、縛られた縄をずる／＼畳の上に引ずりながら部屋の隅へ行って私の方を見ながら、もぞ／＼身体を動かし

「どうこんなの簡単よ！」と云って解いて来ました。その様に或程度は自分で解ける様に軽く縛っておいたのです。それから私もR子に縛られました。否、私が縛らせたと云っていいでしょう。R子の様な少女に対する体験を一般化してお話することは間違っているでしょうが、少くともその女に気楽さを与える為には、僕も縛られて

みようかな」とか「今度は僕を縛ってくれない」とか云って自分も又相手に縛られる事が、何んと云うのか——その場の雰囲気というものゝが和やかになる様な気がします。勿論R子には人を縛った経験なんてありません。私の手を後に縛ったり、前に縛って

「こうしたらどお？」等云いながら足と手を一緒に結えついたり、「いい気味だ」と笑いながら何処で知ったのか私の口に手拭を巻き付けたりしましたが、手足と一緒に縛られた場合以外は私自身で直ぐ解く事が出来ました。そんな事をお互いにしては、その日は終わったのです。帰りしなに、

「遊びとしては一寸面白いわね」とR子が云ったので、私の計画は九分九厘適中した様に思いました。私と一緒に一つの部屋で幾時間も遊ぶ事が出来てR子も満足したのでしょうか。縛り「それ自体が面白かったのではなく、どんな遊びでも彼女には大差なかったのかも知れません。渋谷まで送ってゆく途中で私が

「綺麗な女の人が居るなあ」と冗談を云うと

「縛りたいんでしょう」と答えたり、多少眼立つ服装をした女の人でも歩いて来ると

「先生の縛りたい人が来るわよ」等と云っていたことからして「縛り」に対する印象も可成り在ったことも確かです。

そして私は次の機会を待ちました。二人とも休暇中の身、その機会には直ぐ訪れました。そしてその日を最後として私は今日まで女を縛ったことは無いのです。——と云うことは、その日に私が見事失敗したことに他なりません。「事実は小説より奇なり」と云うけれど矢張り小説の方が現実より旨く出来ている事を知ったのです。サディズム小説ならば、ここから私とR子の緊縛プレイが段々と佳境に入り、彼女はマゾ化して私のあらゆる要求に応じて呉れる事になるのでしょうか、私はその日から一度も彼女を縛ることをしなかったからです。これで私の拙い体験談も終わりますので、もう少し我慢

して聞いて下さい。

R子が訪ねて来た時、私が「今日はもう一步前進して」と考えた事は確かでした。その日は夏にしてはいささか涼しい日でした。R子は白の半袖の学生服に黒のスカートという恰好でやって来ました。が、間もなく私は「実験台にするから」と云う名のもとに

「又縛るの？」と云うR子を見無視して縛ったのです。勿論初めの内は、第一日と同じく軽い縛り方ではんの型だけ胸にも縄を巻いたりしていましたが、その中に「もう少し強く縛っても同じだろう」と思い出したのです。前程は快活そうな表情をしていないR子を見無視してしまつたのが結果的にみて悪かったのです。後手に強く縛りそのままで座らせておいたところ、R子はつと椅子から下りて畳の上に横向きに机の足にもたれかかって座り、しきりに何かを考え込んで沈んでいる様子でした。

後で判つたけれども、この時R子が考えていた事は「縛り」とは全然別の家庭の事でしたが、その様な気分の時にプレイを実行した私が不明だったのです。それに気がついて解いてやればよかったのに私は更に彼女の縛られた手首を持ってぐつと肩の方に押し上げながら、

「こうすればもっといいんだが」と云いました。そうしたらどうでしょう。

「したければするといいいでしょ」と強く云ったではありませんか。本当にそうされた方が良いのか。捨鉢的に云ったのかは表情並みに言葉の調子で分るものですが、その時の私はその様な冷静さを失っていたのです。余つた縄でR子の後手を背に沿って引き上げ肩の近く胸を二巻強く縛り、それを又手首に結んで所謂高手小手に縛ったのです。そうされたR子は少しの間はじつとそのまま横を向いて座っていました。が吊上げ方がひどかったので痛くなったのでしょうか。身体を動かし縛られた手首を突張ったり、引き上げようとしたりし

初めました。

が、そうする中に胸に巻いた一本が余り肩の近くにあった為か、肩からはずれて首の方へずれてしまいました。一本が首に廻った為両手は幾分下へおろせる事になりましたが、それと同時に今度は首の方が締まる様になりました。何回か縛られた経験のある人なら兎角、二回目と云っても「縛り」が遊戯の一つだとは思っていなかったR子にはこの恰好は苦しかったに違いありません。初めは両手を元の位置にもどし首の締るのを防いでいましたが、手の方がより痛くなったのか。最後には首縄が締るのもそのままに後手を出来るだけ下へ下へおろす様になりました。それに つれて顔は上って来ます。

その様な哀れな姿のR子の姿を見ながら尚も私は興に乗って猿轡まではめました。一切無言の彼女の口を手ぬぐいで縛ってしまったのです。さすがに口の中には物を含ませる様にはしませんでしたが毛髪は手拭の結目に引掛けて引張られるし、鼻はつぶれる程押しつけられたR子はそれでも何も云いません。最後です。

「足を縛らせて呉れない？」

私はこう云いました。正面からR子の顔を見ていたらここまで云えたかどうか分りません。次第々々に向きを変え、私の方にはその背後だけを見せる様に座っていたR子の顔は私の方から良く見えなかったのです。そう私が要求した時、私の方にぐっと顔をねじ向けたR子は激しく首を振り

「厭！厭！」と猿轡の中から叫びました。口の中に結め物をしていないので言葉は通じます。ふくらんだ頬が手拭で強く縛られた為、



その部分だけ凹んで見える顔をこちらに向け、「いやだ、いやだ」と云ったR子の顔も私のイメージには鮮かに残っているのです。すぐ又向うをむいてしまったR子の後で私はしばらくどうしていいか分らなくなりました。直ぐ解くのも何んだか勿体ない（……）し、痛そうに、かすかに動かしている指先、強く引

張られて皮膚が引きつって見える首のあたりを見ている中に可愛想にもなってくるし……それから十五分位そのままにしておいたでしようか。R子は私が手首を縛ってから解くまで殆んど無言であつたのも何か不気味でした。私はいつもの様にR子を駅まで送って行く途中で彼女に謝りました。痛そうに手首をさすっているR子は、「こんなに跡がついて……生徒ってつらいわ」と云つたのです。私はこの一言を聞いてそれ以来R子に縄を掛けることを止め、その話を持ち出すことも無くなったと云つても過言ではないのです。「生徒はつらい。生徒だからこそあんな事も我慢しなくてはならない。先生がどんなひどい事をして私も私は生徒なんだから……」。私はR子の短い言葉の中に私の行為を暗に非難している響きを感じて暗い気持ちになりました。足を縛られることに対して「厭！」と云つただけで「解いて下さい」とも云わずに終始無言で座っていたR子の気持が初めて分つたのです。「私が悪るかつたのだ」そう思い、自己嫌悪にも陥りました。

「生徒だから何んでも云うことを聞くだろう」とこういう不屈な考えが私の心の片隅にあつたことも否定し得ない気がしました。運動場で皆と一緒にバレーボールをしていた時の様に気楽にR子と緊縛遊戯を楽しめばよかつたのです。私は自分の欲望満足にのみ眼を向け相手の立場、気分等を無視してしまつたことを後悔しました。

それから二人とも学校が始まり逢う回数も少くなりましたが、その一週間後にR子から手紙が来しました。そして私はホッとしたのです。文面の詳細は忘れました。子供の事ですから筋の通つたことは書けなかつたのでしよう。ただ家の事情が細々と書いてあり、高校に行けないので卒業したら勤める積りだと云つた後、「先日は私が沈んでいてとても悪るかつたと思っています。色々相談しようと思つて伺つたのですが、……先生も気を悪くしないで下さい。私はもう何んとも思つていません」という様な意味の手紙だつたと思

います。私は余り打撃が大きかつた為かそれからはR子が遊びに来ても、プレイに関する話題は極力さける様にし、もっぱら映画やその他の色々な相談に乗る様にしました。

R子は中学卒業と同時に新橋の方の会社に勤めました。それから今日まで同じ様に交際しています。最後の体験談もこれで終りました。今から四年前の出来事です。新橋方面に勤め出したR子は日増に綺麗になってゆきました。私の様に十三、四才頃から十九才になる今日まで続けて見て来た眼にはその変化の早さに驚く程です。中学から高校に入つた生徒は余り変らないけれど、直ぐに東京の中心部に勤めたR子の様な場合には内外面の変わり方は激しいものがあります。化粧の仕方、服装等一切のものが洗練され、中心部を離れた私の家の近辺をR子が歩くと近所の者が振り返って見る程です。その様な環境にあつても、そして四年の才月が流れ去つた現在でもR子は私を相変らず愛して呉れているのです。(又、オノロケかと叱らないで下さい。もう少しの辛抱です)。いやそれよりも更に激しくなつてしまつたのかも知れません。愛情の性質も変つて来た様な気がします。四年前のR子は私をあくまで「先生」とそう見てきました。しかし現在では、私を相変らず「先生」とは呼ぶけれど、「異性」として見る様になりました。当然のことかも知れません。それは結婚をも意味するのです。私としても彼女の真情を知つた今出来る限りそう努力してみる積りです。

お話もお別れに近づきました。この半月前の事をお話すればそれでよいのです。

私とR子は先月の二十日夜、銀座のお好み焼屋に入り、色々話をしました。彼女は私と結婚したいと申しました。私はこう云つたのです。「僕は結婚出来ない身体なんだ」。何も結婚拒絶の云い訳では決してないのです。その様に思えたに外なりません。読者の方にはお分りでしょう。この種の性格者は正常の結婚生活はむずかしい

と自分で考えているからです。

「どうして？」

彼女は「納得出来ない」という表情でそう尋ねました。

「どうして……って、はっきり云えないけれど、結婚生活ってむずかしいものなんだ」

「……」

「Rちゃんにこんな話して良いのか分らないけど、その——何か強烈な刺激がないと満足できない身体ってあるもんだ」

「何？強烈な刺激って？」

「そりや——色々あるさ」

私はそばを焼きながらそう云いました。四年前の苦い経験もあるし、はっきり云うのも躊躇されたのです。しばらく二人とも黙っていてから、思い出した様にR子が

「私、先生に縛られたことあるわね」と云いました。私がR子をもう一度プレイの対象にしたいと思いだしたのは、この一言からでした。私の云う強烈な刺激と、四年前に自分の縛られた経験を結びつけてそう話し掛けたのか、ただ忽然とその記憶だけが甦えたのかは私には分かりません。私は渡り舟とばかり

「あああの時のR子はえらくシヤンだったな」と云ったのも、もう十九になったこの娘に対して幾分とも生徒という観念を離れた、女としての気安さからだったのです。

「あの時、私を本当に縛ったわね」

「本当に」と事更に強く云っていたらずらそうに笑いました。

「あんなの序の口だよ。もっとすごい縛り方だって……」

「強烈な刺激ってあんなことをすること？」

「うん、それもあるな。いずれにせよ、多少まずい顔でも縛ると綺麗に見えるんだから不思議さ。もう一度実験台にならない？」
「そうね、あの時と違って今なら大丈夫かも知れない」

そこまできてから私は又も四年前と同じ手を用いました。

「大学の研究室から写真を預っているんだけど、見たい？」

「どんなのだけ見たいわ」

「驚くかも知れないな」

「平気よ」

私はこうして大学の研究室にある筈のない緊縛写真をこの次の機会にR子に見せる約束をしたのです。そしてその次の逢瀬に私が彼女に見せた写真は奇クから頂いたあの「美しき縛め」第二集だったのです。末製本の、一枚々々ばら／＼の写真でした。その三十枚ばかりを喫茶店の薄暗い中で渡しましたが、彼女はすぐ袋から出して見ようとします。内容を知っている私の方が周囲の人に気兼ねして「余り大ぴらに見るなよ」と云う程でした。下の方で少しばかり見ているR子は別に大した驚き方もせず

「私よりひどく縛られているのね」と何か感心した様な口振りでしたが、その中

「全部裸じゃないの」と云うのです。これには私も困りました。

「裸より何か着ていた方がいいのに……」四年前と同じ様なセリフを聞いた時、私は女性が同性のヌードを見るのを余り好まない場合のあることを知りました。男性の場合でも同じでしょうが、同性のヌード写真を見ると自分が裸にされている様な錯覚に陥るからかも知れません。

「洋服を着ているのもあるけど今度見せるよ。早くしまっておけよ」と彼女の黒のハンドバッグへそれ等をしまわせました。

「今日、これ借りてゆくわね。ゆっくり見なくっちゃ——」

現在私はその全部と、奇クのグラビアの中で着衣で縛られている分とをR子に渡してあります。それ以後逢っていないのです。どうした訳か彼女はそれ等の写真を返そうともしません。R子と別れてから今日まで二通の手紙が来ましたが、一通はただ観て来た映画に

ついでに感想文、一通はボーナスが出たら何処か一泊で遊びに連れて行って欲しいという内容のものでしたが、その二番目の手紙にほんの三行だけ写真を見たことについての感想が書いてありました。原文を写します。

「…………あの写真拝見させて頂きました。家の人が居る処では見られないので夜、床の中で見ました。そして不思議な気持ちになりました。今迄同性の裸でもとても厭でしたが、この写真によって肉体の美しさを知りました。そして自分の肉体にも自信を持ちました。私も死ぬ程好きな人の前でなら裸になるかも知れません。……、私も貴方によってこの写真の様に縛られたら、どんなに幸福だろうと思います。私は貴方を愛しています。ですから貴方に縛られたい、しばって下さい。そしてR子も貴方を縛りたい。」

南 時夫様

R 子

私はこの項の初めに、R子に関する限り未完成だとお話ししました。未来のことは神らぬこの身には判らないとおことわり致しました。従ってこれから以後の事は書くことが出来ません。この冬休にR子との緊縛プレイに成功するか失敗するか、どうかも知らないのです。でも私はそれ程までに想って呉れるR子に対して、マゾとも思えないR子に対してあくまで慎重に接する積りです。それが私に残された唯一の理性であり良心であるのです。長々と拙いお話をし、て申訳ありませんでした。今後又この様な機会が持てたなら再びお目に掛りましょう。その時を楽しみに。皆様、お元気で、さようなら。

(完)

ローカル・レポート

上野の山の切腹画

東京人は勿論、地方のかたでも一度上京なさったことのある人なら、まずどなたも御存じの上野公園の山上の西郷隆盛の像しかしそのすぐ裏手の目立たぬ樹蔭に、明治維新の悲痛な一ページとして伝えられる彰義隊をまつた、さゝやかな社があることを知る人は少いようです。小さな敷地の中央に碑が一つ、境内には茶店が一軒、花見時でも人はチラホラです。

この小さな境内の周囲に、維新当時を偲ぶ数枚の画がかゝげられ、参詣人の足を止めています。その中に会津白虎隊の自刃の場を画いた油絵の複製があります。横一メートルほどのかなり大きな画で、表面がガラスで保護してはありますが、ほとんど雨ざらしにひとしいため、しみ込んだ雨水のため所々しみがついていますが、充分原画を偲ぶことができます。場面は想定まりの砲煙上る鶴城を背景に十六士が自刃している所で、

が、各人の切腹の姿態がまことによく画かれ、マニアには何度見てもあきないものです。ことに中央グループの、両肌ぬいで端坐瞑目している少年や、その右側の両手で刃を右腹へ力一杯ひき廻した姿の少年、また大刀を腹へ突立て、ガククリ左手を地についた少年、力つきて前につゝぶした瞬間の少年、あるいは腹かき切つてあおのけぎまに大の字になつて息たえている少年など、各人それぞれを眺めると、切腹姿態のスタイル・ブックのようで、男性切腹マニアは勿論、女性切腹マニアにもよい参考となりましょう。また、人が多ければ何気なくこの画の傍にたゞずんで、他人が——ことに女性が——この画に対してどういう反応を示すか、ひそかに観察するのもなかなかアブ的な楽しみです。とにかく、未見のかたはぜひ御一覽をおすゝめします。

(東京・篠原倫夫)

おしめと浣腸の幻想

月岡映子

初めの中は浣腸やおしめに関する記事や絵画を集めたり、また浣腸器やいろ／＼と異った柄の浴衣地で作ったおしめを集めて楽しんだり、それ等を使用して一人だけの秘かなプレイに充分満足し悦に入っていましたのが、マニア共通のことではございましょうが、次第にそれ丈では物足りなくなり、実際に他の人からそのような行為をされたりしてみたり、したいと言う欲望が強くなって参るものです。私も例外なくその一人でございます。

私のお姉さま——同性の恋人——恵子さんに私はいつも空想の中でその対象を求めています。現実にはとても想いもよらないこととでございます。

それで今日は、私が日頃から心の中に秘かに思い浮べていた夢のお話を致したいと存じます。それはあくまでも空想好きの浣腸マニアの描いた、それこそ夏の夜の花火にも似た儚ない憧憬を綴ったものでございます。

お医者さんへ薬をとりにゆき、恵子さんのアパートへ戻ると、もうすっかり暗くなって、いるのにお部屋にはまだ灯も入っておりませんでした。

ごめんなさい。おそくなって。私一寸自分のお部屋に寄って来たので、こんなにおそくなってしまいましたの。おやすみになっていらしたの。灯もつけないで……。

——ううん。電気をつけたくても起きられないのよ。足がとても痛むわ。

——そんなにお痛みになって。困ったわね。

——それに熱があるのよ。

——先生もお仰っていらしたわ。でも、そのお熱はお腹のせいだって……ですから浣腸をなさるようにとお仰っていたわ。

——さっき、往診に来て下さった時、私にもそう言っていたわ。お通じがないのは本当なの。

でも嫌だなア。浣腸なんかするの。

——先生のお仰やることは実行しなくては駄目よ。

——だって、やったことがないのですもの。

——第一、自分一人で出来るものなの？

——そりや、やって出来ないことはないわ。でもそんな御心配はいらないわ。私がして差し上げるわよ。

——嫌だ！ 貴女にして貰うなんて、恥しいわ。

恵子さんは口ではそう言いながらも、それ程お嫌でもないようでした。あるいはそう感じる私の方がマニアだからなのでしょうかし？

——すぐにしましょうね。早い方がよくてよ——本当にしなくてはいけないかしら？

私は薬局で先生に浣腸をするようにと言わ

れた時には、長い間願ひ続けていた願望がとげられる喜びで一杯でした。しかも、その方がいつも私の対象である美しい恵子さんなのです。

私は医院の門を出ると浣腸の道具をとりにいそいで自分のアパートへゆきました。私は包をほどくと階下へ水をとりにゆき、カップにグリセリンを入れ冷水を混合し浣腸の用意を手早くするのでした。

——映子さん、貴女本当になさるおつもり？ 恥しいな。観念するけど電気を消してね。

——いいわよ。消してあげるわ。きつとお熱も下がるわよ。

灯を消しても青い月の光が窓から射し入り、浣腸をするのに少しも不便を感じることはありませんでした。むしろ青い月の光は部屋全体を深い湖の底を想わせるような神秘的な感じにして、ロマンチックな雰囲気さえかもし出してくれるのでした。



おふとんをとると、もう恵さんはすっかり諦めてしまったのか静かにしていました。タオルのねまきの裾をはだけ恵さんを横臥させると、私は用意の出来ている浣腸器をとり上げました。

——口を一寸あけて、お腹の力を抜いてね。

——え。トイレにはすぐゆかせてね。足が痛いから早くは歩るけないのよ。それに私はあまり我慢強くないのよ。途中で粗相でもしたら大変だわ。

——いいことよ。御安心なさい。私におまかせになって……。

たて続けに大量の液を注入し終ると私はほっと一息つきました。脱脂綿で押さえながら、一寸我慢なさつてね、効果がないわ。とすぐにトイレにゆこうと立上がろうとする恵さんを押しとどめながらも、私は永い間の願望が達せられた喜びで一杯でした。懸命になつてトイレにゆきたいのをこらえている恵さんの横顔を眺めていると、もっと苦しめてやりたいという気持ちも起ってくるのでした。

——お願いよ。ゆかせて、私もう駄目。トイレへゆかせて、映子さん。

我慢しきれなくなった恵さんは、起き上がるうとして足に力を入れた途端、腫れ上がっている

足首が痛んだらしく、痛そうに顔をしかめると今度は更に哀願をこめた口調で

——起して頂戴、足首が痛くて一人じや起きられないの。早くして、ああ私、……。

私は恵子さんに手をかして起して差し上げる代りに用意してきてあった幾枚かのおしめを急いで拡げ丁字型にそろえ、恵子さんにおお向けになって腰を持ち上げるように言い、おしめを差し込み、手早く当ててしまおうと、その上からビニールのおしめカバーで止めてしまいました。月の光に照り出されたシャツの上に派手な柄の浴衣のおしめを当てられた恵子さんはもうなにも言いませんでした。恥しそうに御自分の手で顔をおおっておりました。白い肌に透明のビニールのおしめカバーを透して見える藍色の浴衣地のおしめは妖しいまでに私の心をゆさぶり、せつなく胸をしめつけるのでした。

それから半月ほど過ぎた日のこと——。

ふと目をさますと朝の光が水色のカーテンを透してお部屋一杯に射し込んでいました。頭の心が痛いのはきつと昨夜面白半分と同僚達から飲まれたビールのせいなのでしよう。

枕元の時計は八時一寸過ぎを指しています。今日は日曜であることに気がつく、私は再び眸を閉じ、昨夜のことを想い出そうと努力するのです。

次第に意識が明らかになると、昨夜パーティーのあった会場から恵子さんに付き添われて車に乗ったことを思い出しましたが、其の後のことは全然思い出すことも出来ず、むしろ私が自分のベッドでちゃんとパジャマを着てねていた事の方が不思議な位でした。

ふと腰のあたりが冷くぬれているのに気付きました。そっと手を入れてみると、私がいともねる前にする様にちゃんとおしめが当ててあります。おふとんは汚さずに済みましたが、記憶がない位に酔わされ、どのようにして帰って来たのかも分からないのに、いつもの習慣で自分でおしめをあてたとしたら、今更の様に習慣性のもつ恐しさに驚きました。汚れたおしめを取り替えようと、おしめカバーのホックをはずすと、ビニールのカバーでやっと水分の洩れを防いでいる位におしめはぐっしりとぬれきっていました。

そう言えばなにか夢をみたようです。自分が浣腸されているような場面もあったようでした。恵子さんが、私にそれを行っている様に想われました。

おや！ 私はいつも自分でおしめを当てる時と、当て方が違っているのに気付きました。尚更に驚いたことにはおしめは尿で汚れている丈ではないのです。

私の机の上におかれた恵子さんのお手紙が総べてのことを教えてくれました。

——映子さん。飲めない貴女をみんなでいじめてごめんなさいね。会場を出る時はそれ程でもなかったのに車で揺られた故か、お部屋に着いた時は貴女は意識を失った病人のように正体がありませんでした。とにかく寝かせて上げようと、おふとんを引いた時に大変な物を見附けてしまいました。パジャマと重ねてきちんとたたんであった数枚のおしめ、その中にはいつか貴女が私に浣腸をなさった上に無理やりに当てた時に使った、見覚えのある柄のおしめもありました。そして机の引出しからは浣腸器が簡単にみつかりました。

私はふと茶目氣を起すと、ある行動に移ったのよ。お分かりでしょう。きっと貴女は夢を御覧になったことでしょう。

終ったあとはちゃんとおしめを当て、おしめカバーで止めておいてあげました。

貴女がいつか私が病気の時に来て下さった時に、私はすでにあることを感じていました。そう私も貴女と同じマニヤだったからなのです。親しいお友達同志であったことを昨夜ほど感謝したことはありませんでした。

私の夢のお話はこれでおしまいです。お笑いで下さいませ。——

ある女給の体験

(3)

日 下 絹 子

その年、妹の縁談が成立しました。当時妹はあるミッション大学の三回生で卒業まであと一年余り残っていましたが、二年上の学生と恋愛し将来を誓っていたのです。先方の学生のお家は酒造りで名高い所のある醸造元の二男坊で、すでに卒業してお父さんが社長である酒造会社の東京支店につとめておられました。背が高く目に張りのある妹は、きっと

女子大生の間でも目立つ存在であったに違いないありません。先方は私達一家に理解があつて卒業まで妹の学資を出してもよいとのお話でしたがそんな事で妹に将来肩身の狭い思いをさせるのは可哀想です。私は自分の身をはいでも妹の学資だけは、と決心していました。妹は私より先に結婚することを気にしている

様子でしたが、引揚げ以来一家を背負つて来た私にとって妹が幸福になるのは自分の苦勞がむくいられた思いなのでした。

しばらく母の下ですごした私が、久しぶりでアパートに帰って見ると、隣りの部屋にいるバーのマダムが「来てたわよ」と拇指を立てていました。S服飾店の光夫さんだと思いましたが、これまでの私なら、すぐにも電話をかけるのですが、妹のうらやましい様な明るい恋愛を見聞して帰ったいまの私には肉体ばかりを求める光夫さんが何だかうとましく思えてくるのでした。もっと相手にロマンチックな愛を求めました。

二三日してやって来た彼は、服飾店の方が

しばらく閑なので、私を温泉に連れて行ってやると云うのです。私はそれほど気乗りもしなかったのですが生れて始めての温泉旅行という好奇心もあつて白浜へ連れて行ってもらふことに決めました。

ちようどシーズンのためか私達が乗った南紀行黒潮号は二等だというのに通路まで一杯でしたが、発車して間もなく車掌さんが補助イスを出してくれたのでやっと坐れる始末でした。右も左も一目でそれとわかる新婚ばかりで、中にはパンパンと派手にコメントを打ちながら派手な組もあり、はしやいだ陽気な空氣がみなぎっていましたが、その中で私一人が幸福から取残された様な変に気持が沈んでいました。しかし私とは逆に光夫さんは本

物の新婚以上に楽しい様子で旅館についてからも、私をつれ出しては他のアベックに混ってボートに乗ったり、生洲の魚をつり上げたりして浮れていました。お風呂の中では二つに折った濡れ手ぬぐいをムチ代りにして私のお尻をぶち、パアーンと湯殿に響きわたる大きな音を立てて私をあきれさせました。

私は温泉旅館というので、いつもより周囲に特別気を配るのですが彼はすっかりくつろいで時には傍若無人の態度でした。彼は宿の丹前に着かえ私は持っていた着がえの服でしたが、私のストッキングをはいた足首を掴んで引寄せ、「可愛い足だな」と靴下の上から踵をなぞ、足の裏をくすぐり悪戯をします。靴下が汚れたままなのと、私は足首は比較的太いので、そんな欠点を見られるのが恥かしく「大根足だからいやヨ」と足を引こうとしますが中々離してくれずそんな時は全く途方にくれてしまいます。それでもどこかで流しのギターが聞こえる頃、私のお尻を打つ彼の狂暴なウズに私もいつか一緒にひきずり込まれてしまいました。

私のアパートのお部屋の南隣りは階段です。北隣りに『バビロン』というバーのマダムがいました。小柄でやせぎすなきつい顔立ちから最初は少し取っ付き難い方でしたが、私は以前から親しくさせてもらって雑誌を借り

たり、よく朝のトーストを御馳走になったりしていました。雇われマダムだそうで、あまりここへは男の人が来た様子は見かけませんがかなり裕福そうでした。マダムは以前から私がお店を休みがちなのを知っていて自分の所へ来るよう、しきりに誘いました。最近売れっ子の女給さんが二人も結婚のためお店を引いたので目立ってお客がへり出しマダムは大分焦っている様子でした。私も時々お店へ出ても指名客をすっかり同僚に取られてしまつてヘルプばかりで、肩身のせまい思いをするより、と思いついてマダムに使ってもらうことにしました。『バビロン』はあるビルの地下にあるせま苦しいお店で女給は私を入れて八名、しかも常に一二名は出入りがあつて固定していかない様子です。ここは指名なしのお着き順で後はマダムの裁量次第ですからマダムの権力は絶大でした。幸い私は特別可愛いがってもらいしかも前のお店のあけみをよしてここでは本名の絹子を名乗っていました。私が私の前の名を知っている女給もいてその人の宣伝も加わり、いつの間にかお店の中心になっていました。そのため私に来るまでお店で羽振をきかせていた明子さんや道代女史とつい対立する様になりました。また同じ盛り場内のストリップ劇場の支配人の住田という客は全くおぞけを震う程きらいでした。彼は附近のキヤバレーへアトラクションの踊り子

たちの口入れもやっていて、この一帯の顔役です。しこの経営者から監督を任されている以前からマダムと関係があるらしく云わば事実上のマスターでした。マダムはいつも私を差向け様としますが、いつか彼が私の腰に手を廻した時ちよつと肩をしかめたのが見つかるのを涙の出るほどつまんでねじられた事があります。それ以来、私は彼がはいつて来るのを見るとすぐお手洗いに立つ振りをして更衣室へ逃げ込むのですが、ある時、マダムに見つかつて「わがままね」とひどく叱られました。彼はいつも私が逃げ出すのを見て、「あの女は俺のものだから誰も手を出すな」と他の女給さん達に冗談まじりに云っていると聞いて身震いしました。

このお店に来て二カ月余り、もう秋もすっかり深くなって朝夕はかなり冷え込む頃でした。出勤途中お店の手前でボーイの中島に呼び止められ、近くのお好み焼屋で明子さんと三人顔を合えました。中島はまだ二十を一つか二つ越したばかりですが、大人も及ばない程ズル賢く、かげではチュー公とかドブチューと呼ばれている憎まれ者ですが、明子さんや道代女史には不思議に可愛がられ、利用されていた様です。

明子さんの話というのは中島の友達と同じキヤバレーのボーイと私達四人が組んでヒロ

ポンを作る相談でした。女二人が資本を出し合い、男達二人が製造販売すべてをやると云うのです。中島とその友達が西ノ宮附近の知り合いのあるお店のバーテンから原末を仕入れ、友達の家の屋根裏で製造し、近辺の遊廓でなじみの女を通じて売りさばくという計画です。取締り当局の知らない安全なルートで例え仕入先や販売元が挙げられても、こちらの二人まで波及しないし、また万一ボーイ達が捕っても私達女二人は無関係だった事にしよう云うわけです。費用は最初蒸溜器やアルコールランプ等の機具一式を三万円で買えば、あとは原末五百円分で約八百本製造出来アンプルやレットル料を入れても千円で一万円になって帰ってくるし、素人でも一晩で五十本や百本は軽く出来るとのことです。

私はこれまで新聞などで少しはヒロポンの知識を持っていましたが、その密造者や患者を知りませんから、遠い世界のことの様に思っていましたのに、現実には自分の問題になると毎月余分に数千円のお金があるという魅力に取りつかれてしまいました。妹の結婚の費用を準備せねばなりませんし、それに従弟が近々にお見合いをするらしく、若し結婚するととなると当然私達一家は叔父の家を出なければなりません。いずれにしても先立つものはお金でした。中島がその友達に紹介しよう云うのを、お互いに顔を知らない方が後の

ためによくはないかとフト考えて断った後、私は明子さんと一万五千円ずつ分担する事に決めました。私は手持ちの五千円のほかマダムに泣きついて一万円を借りる事が出来しました。マダムは減多に女給にお金を貸す事はなかったし、また貸してもせいぜい二三千円どまりだったのでそれから全く私には破格の取扱いだったのです。

これで毎月別途収入があるとひそかに喜んだのも束の間、友達の家で製造中を家族に見付かって怪しまれ、仕方なく中島の情婦のパチンコ店の女店員の下宿先に持ち込む破目になりました。その頃、連日新聞にヒロポン検査の記事が載り出し、私自身が何か追われている様な不安を感じていました。そのうち中島は、女店員の下宿で製造中を同じパチンコ店の男が遊びに来て、あわててかくしたが及ばずその後脅迫されて困まると心配そうでした。

私は大変なことをはじめてしまったと、今更のように後悔し出しました。私達は時々額を集めて協議しましたが、別に好い智慧が出るわけではありません。私は毎日々々、こんな心配をするのに、つくづく嫌気がさし、いま器具類を打ちちやれば例えその店員が密告しても証拠が残らないから大丈夫だし、これで手を引いてしまいたいと考えました。明子さんや中島にもう私の出したお金は返らなく

ともよいから器具は、そちらで勝手に処分して呉れる様頼みました。二人はまだ続けたい素振りでしたが渋々納得した様です。果して器具を捨ててすぐ止めたか、まだ続けていたかは、もう私に関係のない事でした。

アパートに帰って「欲につられて馬鹿な事をしてしまった」と後悔のホゾを噛んでいる時、慌だしく中島がやって来て例のパチンコ屋の男が器具を持ち帰って、それを証拠に密告してやると脅迫するので一万円ほど都合出来ないうか云い出しました。

私も顔色が変わりましたが、もうこれ以上いくらなんでもマダムには借りられないし、光夫さんとはあれ切りずっと別れている状態でしたから手段はありませんでした。中島は一刻を争う様子で部屋の中を見廻していましたが、入口にあった二足のハイヒールを取り上げ「これもって行っていいだろう」と有無を云わさず持ち去りました。あきらめ早い私は靴を持って行かれる際にも強いて取り返そうという気持は不思議に起らなかったのです。でも、あすから履いて行く靴のないのに困りました。夏はいた中ヒールの布製の白靴は履きつぶす積りだったので、すっかりホコリをかぶり足首をとめるバンドの穴が殆んど切れていました。もう冬も近いと云うのに昨夜修繕した白靴をはいてヒモを足首に巻いた時には堪らないみじめな気持ちに襲われました。

中島たちは最初からヒロポンなど製造する気はなかったか、また例え計画はあっても私からお金を預っただけで器具など買わなかったのではないかしらという疑いの念も起りましたがすっかり元氣のない明子さんを見ると果してどうであったのか、わからなくなってしまいます。

その後しばらくして、中島はもう一人のお店のボーイと共謀してお店の品物を持ち出して売っていたことが発覚してクビにされました。随分以前からウイスキーやビールを横流していたらしくまだお店の中に仲間がいる様子でした。一番怪しい道代女子はお店をよしてある商人の二号さんになっていました。その頃から私に対するマダムの態度が急にきびしくなり出しました。マダムは私が中島や明子さんとヒロポンのことで一時的に接近したため、中島の品物の横領事件に私も関係していると誤解している様子です。私の方こそもとも肌合わない二人の甘言に乗って大損害を蒙ってしまったのですが、誰に事情を打ち明ける事



も出来ないのが、何としてもはがゆい思いでした。マダムから借りたお金も返そう／＼と思いながら新しく買った靴や以前からのスーツの月賦、母への送金に追われてまだ少しも返済していなかったのです。それどころか、自分の食事で節約している状態で、つい、マダムの好意に甘えすぎていたのです。

「あんたを、見損っていたらしいわ」とことごとくに辛く当られました。これまでやさしい人だと思っていたマダムが急にこわくなってきました。

ある夜、お客を送り出して再び階段を下りた際、扉の向う側から「どうでした、明ちゃん、白状して？」というマダムの声に、「いや、あいつではないらしい、今夜絹子をしめ上げて見よう」と住田さんが答えていました。私のことだとわかったと、ちよつと立停つて耳を立てました。またお店で商品の仕入数と売上が合わないの、明子さんや私がボーイ達をそのかして不正をしていると疑って

いるのです。

バーテンやマダムやボーイが共謀しない限り女給の身でそんな器用な事が出来ないのはマダム自身がよく知っている筈です。そう云えばマダムも最近小料理店を開いた前のなじみの人に買いでいるとの噂ですから、マダムこそ一番怪しいのです。故意にお店の不振を住田のお気に入り明子さんや私のせいにしているとしか思えません。

マダムの意地悪い企てに気がつき、そのままお店を飛び出しました。明子さんの今夜のお化粧が乗らない寝不足の顔がまざまざと浮んで来るのです。

その夜おそくお店で一番おとなしい芳子さんの下宿を訪ねて泊めてもらいました。少しの身廻り品以外何一つない六畳の室で一つ蒲団に恐縮しながら小さくなって寝ました。品行方正な芳子さんはきつとお店でも一番収入が少なかつたに違いありません。

眠れないまま、あすはボーイの中島の家に行つて彼が私のことでデマを飛ばしているのとちめる積りで、また住田から責められた時の証人にしようと決心しました。

ね翌朝、この日が私の最悪の日になろうとはのもちろん神でない身の知る由もなく、たず雇廻つてやつと道の悪い狭い露路にバラックの様な彼の家を見付けました。お母さんが日といとかで大勢の妹や弟たちが薄暗い中にご

くしています。やつと黒い畳の上に上らせてもらつて、お店の人たちの噂をしているうちに、すっかりやけっぱちになっていふてぶてしい彼の態度を感じました。それのみか彼は早くも私がこんな所までやつて来たのだからと、私の立場がお店でなくなっているのを察したらしく、隙があれば私を腕づくで取つて抑えようとする気配さえありました。確かこの近所に下宿のある明子さんを訪ねるため彼に案内を求めることによって彼の氣勢をはぐらかすことが出来ました。

低いくぐりをはいつた家の、土間を通り抜けた奥の別棟になつてゐる部屋に、もう昼前だというのにまだ彼は蒲団の中でした。

「この間、住田さん、何か言つた？」と聞いたとたん、いまままで愉快に笑つていた明子さんの顔が急にひきつる様にゆがみ、何かこみ上げてくる感情を抑えている様子でしたが、キツと顔を上げ「あんたのお蔭でひどい目に会つたわ」と睨みつけられ「ええっ」と私もびっくりしました。何も彼女のこと住田に喋つた覚えはなく、きつと住田がカマをかけたのでしようが、弁解のいとまもなく「とほけないですよ！」という声と共に目をつり上げた明子さんが、私に飛びかかつて来ました。無意識で張つた私の手が彼女の頬を打ちましたが、次の瞬間、体ばかり大きくて力のない私はガッシリした明子さんの体当りに突きと

ばされ、胸の上にドウと馬乗りになられました。「何をするのよ！」と私も死にもの狂いで両手を相手の胸につっぱり身体を弓なりにそらせて、はね返そうとふんばりましたが、相手の体を少し持ち上げただけで、胴をしっかりはさまれて寝返りも出来ません。腰を左右にねじつて両足をはげしく蹴り上げましたがスカートが腰の上までたぐれ上りガーターが切れて片方の靴下が膝下までずり下つただけでした。先程帰つた筈の中島がいつの間にか戻つて来て明子さんに加勢し裾の方に廻つてはね廻る私の両足を押え様としています。明子さんはつっぱつた私の片腕をつかみ、ぎりぎりねじ始めました。痛みには堪らず私の体は弧を描いてうつ伏せになりました。

「ママさんも、あんたに住田さんを取られておこつてたわよ、ずいぶんお尻が軽いのね、いかが、少しはこたえて？」もかく私のお尻に明子さんの爪が立ちました。

上半身を蒲団でまかれた時は蒲団むしに窒息するかと思う恐怖で大声を立てました。四肢をふんばり上から蒲団を押えている重みを押し上げやつと息つく隙間を見出したもののスカートのまくれ上つたお尻を中島の汗ばんだ手でぶたれているのに気付いきやらしさと屈辱で気も狂いそうでした。

明子の嘲笑と中島の淫らな視線に追われ、

〔ローカル・レポート〕 (中部日本新聞2月21日付夕刊)

アベック裸にし暴行 山田弘提供

岐阜金華山 五人組の三名を逮捕

【岐阜発】二十一日午後四時三十分ごろ岐阜公園内三重の塔付近丸山で岐阜県可児郡兼山町宮町米軍キャンプ職員福井昭成君(二三)と岐阜市加納栄町A子さん(一九)が話合っていたところ突然五人組の若いチンピラふうの男が現われやにわに刃渡り十五センチぐらいの短刀を突きつけて脅し、二人を全裸にさせたらうえ福井君の金剛時計、A子さんの南京虫時計と現金二千円を強奪した。さらに皮バンドでなぐりつけ福井君を木に縛りつけたうえA子さんに「いこうとをきかぬと男を殺すぞ」と脅し同様皮バンドでなぐりつけたうえ暴行、さらに衣類を捨て逃走せんとした。A子さんは救いを求めに下山し公園千疊敷付近に休んでいた岐阜市下茶屋町競輪選手小川琢磨さん(二七)同杉山町下村明さん(二四)同湊町タバコ商栗本昭二さん(三一)一宮市梓入町棚橋敏男さん(二九)に救いを求めた。

小川さんらは山から下りてくる五人連れの男を発見、格闘の末自称名古屋市中村区新富町無職宮田光明(二〇)を取押えるところに岐阜中署に急報、同署では全市内に非常線を張り金華山一帯を二十名で山狩り、同六時四十分市内長良南町付近で自称名古屋市中村区松西町一無職中野勝彦(二一)同市中村区佐古前町無職山本政彦(二二)同市中村区佐古前町無職の自供により名古屋市中村区塩池町無職前科二犯寺島一政(二一)同町無職通称守某(二〇)を強盗暴行容疑で指名手配した。

なおA子さんは顔面と下腹部をバンドでなぐられて全治二週間の傷を負い県大病院で手当を受けた。彼ら五名は名古屋市中村区を根城とする不良チンピラグループの一味で主犯は富田でこの日計画的に岐阜を訪れたものらしい。

小川琢磨さん談 千疊敷茶店前で友人と話中突然山から若い女が悲鳴をあげて救いを求めて来たので、ちょうど付近を通りかかった五人組を発見、格闘のすえ一人を取押えました。

△提供者註△ありふれた社会面の記事ですが、アベックの男女を全裸にして縛った上皮バンドでなぐったという点が面白いので切抜いてみました。

乱れに乱れた身なりや髪を気にしながら家を出ましたが、胸の中がにえ返えるほどのくやしさを抑えるすべとてなく、泣くまいとしても、ひくひくひきつる唇からこみ上げてくる嗚咽が洩れました。

つかれ切った心身を休めるただ一つの所だと思ったアパートにはマダムと住田が牙をといで私の帰りを待っていました。「どこにかくれていたの？」トゲを含んだマダムの声に抗弁する元氣も失せて泣くことだけが私に許された、ただ一つの救いでした。

その夜、私は住田がいつも劇場の踊り子を連れて行くと云われるK簡易旅館に連れられました。私が逃げ出すと思ったのか、彼が入浴中、おかみらしい人がずうっと私を見張っていました。私が壁に向ってそつとコンパクトを出してのぞいていると湯から上った彼が後から腰を蹴ってうながしました。

私はもう彼の尻につながら一匹の馬にすぎませんでした。これからは何時でも彼の好むときに引き出され鞭を当てられる馬でした。

(未完)

×

×

×



体 験 告 白

私のキタ・セクシユアリス

山 本 節 夫

(はじめに)

森鷗外の作品の一つであるキタ・ヤクシユアリス(ラテン語でキタは生命・生活、セクシユアリスは性的、性慾のという意味)の名前を拝借して、ここに一人の三十男の性の体験記録を綴ってみたい。

それはサド的なものとマゾ的なものの交錯から、長ずるに従って遂にマゾヒズムの圧倒的優位に帰し、ただ美しく、たくましい女性に虐げられることのみを祈願する、憐れな中年男子の、まずしい記録である。

私にとって、またがる、馬乗りになる、という言葉は禁句である。辞典によれば、跨るとは、両脚を開いて物の上に乗る、ことであり、馬乗りとは、馬に跨る如く人又は物に乗る、こととある。この行為はいずれも私にとっては、無上の快感を与え、又その快感を強く想像させるのである。之は何故だろうか。

私なりの解釈は次の通りである。跨る、という事は、征

服の表象ではないか。子供達の動作を見てみよう。強いものが弱いものを征服する普通の仕草は、弱い者を組み敷き、押えつけて馬乗りになることではないか。

聞く所によれば、猿の社会でも、強い猿は、服従を誓わせ、自己の優越を他に誇示する為に、弱い猿の上に馬乗りになるそうで、学術用語では之を、馬乗り動作と表現している。

むずかしい事は諸兄弟姉から御教示頂きたいのだが、こういう本能的、原始的な行動と、例えば、乗馬とはどういう関係にあるのだろうか。殊に関心の深いのは女性の乗馬である。淑やかな、はじらいを含んだ美しい乙女があの大きな生き物の背中に悠然と跨って、その腹を脚でしめつけ、尻を鞭うち、拍車で蹴り上げ、自己の意志の下に服従させるといふあの行動は、果して何を意味するのであるか。馬という動物が、元来人に乗られる為の存在であるという事が、僅かにその行為を正常とさせている様である。馬に乗ることを考え



れば、大きな犬の背中でも、羊や山羊の背中でも、或は人間の背でも長椅子の上でも馬乗りになって差支えないではないか。しかし仮に美しい令嬢が、大きなシエパードの背中に馬乗りになっている姿を見たら、人は之を正常なものとは考えないであろう。男を馬扱いにして乗り廻す女性は、ナオミを引合いに出さなくても変態の部類に入れられるであろう。その辺のけじめが私にはよく判らないのである。とにかく全ての男女が、「跨る」或は馬乗りになることによって、私の様に鋭敏な快感を味い、且つ連想されるものなのかどうか。私はそれを知りたい。

更に、今度は世の男性に聞きたいのだが、綺麗な女性に奉仕したい、その人の脚の間にもぐりこんで、馬にされていじめられたいと思う事は無いであろうか。

例えば手近かに、「映画の友」十二月号をとってみよう。

「秋晴れのロデオ大会」という記事でナタリー・ウッドの颯爽たるロデオ姿が写っている。ぴったりに乗馬ズボン半長靴姿の彼女は、悠然と馬に跨っている。そして見出しには「こんなキュートなロデオ選手なら、お馬になりたいです」と書いてある。この様に女性の馬になりたいという記事は、特に映画雑誌などによく見掛けるが、私は之を読む女性の胸中にどういふ反応があるのか、それが知りたいのである。

以上の様な疑問が解ければ、私という人間が、普通の人と果して大きく違っているのかどうかも判然とするであろう。

一、芽生え

トルストイの「幼年時代」では、一、二才の頃の記憶が記されている。凡夫の身では、もとよりそこ迄はさかのぼれない。まだ字の読めない時代だからせいぜい六、七才の頃であ

ろうか。幼児雑誌の連載マンガを読んで貰った中で、子供がいじめられている記事があった。酒屋か炭屋の小僧である。前垂れに長靴をはいて、小さい子を仰向けに転がして馬乗りになり降参させていた。私は幾度もそこを読んでもらった事を憶えている。

小学校二、三年の頃、友達二三人と一緒に妹とその女友達を相手にしてよく遊んだ。そして何の機会か、男の子達は一々女の子をつかまえて畳の上に押えつけて馬乗りになった。バタバタもがく奴をぐっと押えながら男の子達は顔を見合せて得意気に笑い合ったことであった。

そんな時代の或る日、私は三年生、K子は一年生、二人切りで遊んでいたが、その中私は例によってK子の上に乗りかかり、お腹の上に跨ってしまった。K子のもがきが拍車をかけた為か、私は尻をズリ上げてとうとう顔の上に馬乗りになってしまった。K子は時々顔を動かすだけでおとなしく私の尻の下に敷かれていた。私も何ともいえない快感を味いながら、長い時間K子のやわらかい顔を太ももに挟んでいた。突然私の身体から力が抜けた。その当時、それが何を意味するか私には判らなかった。何となく私はK子の首から下りると今度は自分が仰向けになって、彼女を胸の上に跨らせた。彼女はためらいもなくそうした。

「男の子ってどうしてすぐこうやってツブすの」

そういうしながら、私の真似をして顔の上に跨って来た。私は夢見心持でさせるままにしていた。

K子は、二三軒さきの退職官吏の娘であった。兄三人の一人娘で気性は荒っぽい方だった。顔立ちには特に整った方ではないが、丸顔で、若干斜視気味の所が心を惹いた。大柄で足



はすらりと長かった。そのK子の馬になって毎日を過す日々は、この頃から始まった。オママゴトで私はいつもK子の家の馬であった。夜具のカイ巻きを引きずり出すとそれを着て御買物や訪問の際の乗りものとして奉仕した。K子は調子にのって「逆さ乗り」と称して、仁田四郎もどきに、私の頭の上に逆に乗ることもあった。

毎日の馬ごっこの合い間に、私は部屋の真中に例のカイ巻き姿で四這いになり、女の子を一人々々跨らせて、騎手の名前を言い当てた。K子だけは必ず当った。それは彼女が跨り馴れていて、ゆっくりと腰を下ろすからであった。馴れない他の子は、はずかしさもあって力がなかったり、或は慌ててドシンと勢よく跨ったからである。

こんな頃、私は女の子のスカートの中を知りたいと思った。キタ・セクシユアリスの中では女の子を縁側から飛ばせて、それを下から見上げる描写がある。私はK子の足許にジャレつく仕草を利用して脚の間に這入り込み、カイ巻きの襟の間から見上げた。すんなり伸びた太ももの白さの奥に黒いパンツがある丈だった。又椅子に腰掛けている彼女の前に廻って開いた脚に対して同じ事を試みた。その時は流石に彼女は本能的にスカートの前を合わせた。

跨ることの快感と、跨られる事の快感を同時に覚えてしまった小学三年生の男の子。しかも学校は優等生であった丈に反省の苛責は強く、こんなことから私の二重人格、内弁慶、大人びた子供……という一連の性格が発端したのである。

私は暗い子供になった。学校では内気な、無口な子供であった。他の男の子達は無邪気にたわむれていた。休み時間ともなれば取組みが始まった。強い子は弱い子を股にはさみ

つけて泣かした。馬にして這わせ、地面に転がして跨り、首をしめた。その中の一人の男の子を私は憧れた。柔い髪の毛に目黒勝ちの涼しい瞳をした美しい顔立ちのその子は力も強かった。弱い子をみるとその子は飛びかかっていった。相手の頭を押えつけると、ぐっと自分の腰の辺りまで引き下してその頭を自分の股の間に押し込むのである。相手は四這いに近い恰好で征服者に挟まれている。そして降参させると馬にして乗り廻すのである。私はその子にいじめられ、股にはさまれ馬にされたいと願った。その子は一年下級であった。しかし夜、床の中では、その子は上級生として私に君臨し、あらゆる暴虐を加えることを空想した。

家では相変わらず、K子を背中に乗せて遊んだ。私はK子が果してこういった遊びを喜んでいいのか否かを知りたかった。

「うん、いい気持ちよ、だけど足が下についちやうなものの。ほんとお馬だったらもっといいでしょうね。」

私は一寸淋しかった。

「また乗ってね。」

「うん、乗ったげる。」

他愛ない会話であった。四年生の時、私は転宅した。そしてK子とはその後数年会うことは無かった。

具体的な対象を失った私のその後は、専ら雑誌の乱読と空想力の展開であった。私が近頃の眼鏡をかける様になったのは小学校の五年の時であった。毎日学校から帰ると二階の勉強部屋に上りこんで、腹這いになって雑誌を手当り次第よみふけた。

少年倶楽部・少年世界・日本少年・譚海等がそれであつ



た。大概の号には一篇位、組み敷いて馬乗りになる場面があり、前髪の少年が大男の腹の上に跨って刀を擬して首を切らんとする所、少女が足も露わに裸馬に跨って行く所等それぞれの場面は、挿し画と共に私の脳裡から離れない。

「野育ちの私ですもの。馬位は乗りこなせますわ。」そんなことを言いながら少女は馬に乗った。「棒の小源太」は悪者の少年の胸の上に跨り、殺す寸前に可愛そうになって生命を許してやった。女学生小説にも面白いのがあった。御転婆な女学生が母親代りに炊事をする。女中の才竹の予言に反して御飯はうまくたけた。女学生は賭に勝った。母親の面前で彼女は才竹に「手をついてあやまれ」と云う。才竹は四這いになって御嬢様に手をついてあやまる。女学生はその背中にすかさず馬乗りになって、「さあどうだ。もうあんな生意氣言わないか。」

腕白少年もの。二人の少年は姉さん達が風呂に入っている時にホースで水を掛ける。後で二人は女達に捕まる。抵抗するが組み敷かれ姉さん達は夫々の獲ものに跨って御互に勝つきを挙げる。

大人の本を盗み読みし出したのは六年生頃からである。文芸倶楽部という本があった。若い女が一人の中国人（当時は支那人）にかしずかれている。靴下をはかせる時、女は肌に触れては不可ないという。男は太もものにキスしてしまう。「奴隷め、汚い。」といって女は立ち上る。男は女の前に四這いになる。女はひらりと背中に跨ってハイシハイシと部屋の中を乗り廻す。しかし、女は恋人のことを思い泛べつたのしまない……。田中比左良画伯の挿画が美しかった。講談雑誌という軟い記事万載の本があった。その中に「恋は醜男が好

き」という小説があった。醜いがたくましいマドロスに結局は心を惹かれた女は、愛人の優さ男を殺して終う。仰向けに倒された男の胸の上に、太ももをむき出して馬乗りになった美しい女が、剃刀で男の首を切る場面は凄かった。私は座布団を折ったのに跨りながら、その挿画を前に置いて自らその場面を真似て楽しんだ。

思えば当時はエロ・グロ華やかな時代であった。新聞の漫画にも随分煽情的なものがあった。「男やもめのガンさん」という連載もの。その中で当時の有閑階級生活に対する諷刺を扱ったもの。サロンでの肩車競技。半裸体の女達が男の肩に跨って鬼ごっこをする。「今日の私のお馬はどなた？」

「お嬢様、今日は是非私の首にお乗り下さい。」そして競技が始まる。やせた男の首には太った女。太った男の首にはやせた女。そして前かがみになった男達を脚でしめつけ鞭打ちながら女達は馬を走らせる。最後に馬はみんな潰れてしまう。

東郷青児の色彩漫画。海中に水着の美人が立っている。男がそこに近づいて行くと丈がたたなくなる。みると女は大きなひげ面男の肩車に跨っていたのである。独特のスタイルの美人が型のいい足をピッタリと男の首にからませて見下している姿態は美しかった。

「天高く馬肥ゆる秋」美人が馬に跨ったが、馬が肥りすぎて「股が裂けそうだ」という。下で男が四這いになって「どうぞこちらにお乗り下さい」という。「よし、お前を代りに馬にしてつかわす」女は人間馬に跨り代える。

漫画全集の中の一冊に、近代日本文芸名作集があり、そのトップには、男を馬にして跨り手拭を手綱にしてハイシドウ



ドウとやっている面があった。今にして思えば、之が痴人の愛の一場面であり、岡本一平画伯の同じ画は本文の中にも展開されていた。最後にナオミが譲治の背中に馬乗りになって征服する場面は思わず胸が高まった。「サア之でいいか」と男の様な口調でいきました。「うん、いい」之から何でもいうことを聞くか」から始つて「よし、じゃあ馬でなく人間扱いしてあげる。可愛そうだから」に終る一連の会話はとうとう暗記までした。そして子供心にも、「馬扱い」にするというのはどういう事なのかと、あれこれ妄想を逞しくしたのであった。

高峰秀子がまだ子役であつた頃、男の子に紛して大人を馬にして跨つたスチールがあつた。長靴をはいてしやがんで、犬を可愛がつているオカッパ姿も可愛かつた。渋谷正代の写真物語り。洋服屋が間違えて軍服を造つて来てしまう。軍帽軍衣をつけてパンツだけの下半身に長靴を素足にはいた美しい乙女は、四這いになって許しを乞う洋服屋の背中に馬乗りに跨つて拳骨を振り上げる。

こんな場面のいくつかをいろいろに想像しながら、私は人気がない個室の鍵をしめて、夜具や座布団をうず高く積み上げて、馬の代りにして跨り、馬乗りと、同時に馬にさせられた時の快感を交互に思い浮べながら独りで悪魔の喜びを楽しんでいたのである。

二、サドとマゾの混合

中学に入つても私は優等生であつた。級中では模範生徒として皆から評価され、それだけに家庭に入つての自分の行動が万一にも人目に知られる事は恐しかった。有閑階級に属していた私の家庭では両親は夫々の社交で忙しく家に居ること

は少く、私は常に女中達と暮らしていた。そこで中学生時代の五カ年間は専ら女中達との交渉であつた。

さきに述べた様に、私は「馬乗り動作」に関するあらゆるものに心を強く惹かれた。しかし実地に之を行つたのは小学校の三、四年時代にすぎず、その後は同僚が気軽くたわむれているのを指を加えてみているだけであつた。

柔道が正課として課されていた。仲間はずれそれぞれ楽しく組み合い、馬乗りになったり、押えつけ合つたりしていた。しかし私は恥かしくて之が出来なかつた。人前で物や人に跨ることなどは思いも寄らない所であつた。そればかりでなく、人前で「跨る」という言葉さえ口に出せなかつた。そして他人がその様な事をいい、又は実行すると、独りで興奮していたのである。

こんなチグハグな心情が、私の「馬乗り動作」の興味を、当時のいわゆる奴隷階級である女中達に向けたのである。女中は二人いた。一人は年若でキヌといった。頭も良くハキハキして居り顔立ちもよかつた。千葉の漁師の娘であつた。もう一人はキヨウといって少し脳が足らなかつた。東北の農村生れで鈍重な、顔もまづい女であつた。

私が肉体的にも成長をして来た或る日、キヌは裾をからげて二階の私の部屋の前の縁側を拭き掃除していた。はち切れる様な成熟した女の腰や足の動きが私を刺戟した。その時の私の行動は自分でもよく判らない。とにかく私は立上ると、四這いになって仕事をしているキヌの背中にドシンと馬乗りになり跨ってしまったのである。一人前の女の背中を始めて股の間に挟んだ時の感激を味うと同時に、キヌがどういふ風に反抗するかが心配だった。云いつけられたら大変だという気持



がひらめいた。しかしキヌは従順であつた。跨られたままで手も休めず、それでも「お坊ちやま、許して。」と哀願するだけである。私はすっかり安心して、暫く跨ってから許してやった。水が堰を切った様な勢で、その後私はキヌに無難作に跨ってはいじめる様になった。ところでキヌはよく子供の頃の話をして聞かせた。気の荒い漁師町の生活、そこでは男の子達は手荒く女をいじめた。いう事を聞かぬと半殺しになる迄責めるといふ。しかし女も負けてはいない。男と組み合つて「土伏せる」こともあるといふ。私はこの小股の切れ上つた娘にいじめられなくなった。そこでこの「土伏せる」といふ方言を具体的にやってみると命令した。キヌは最初はためらっていたが、やがて「よし」といふと私にとび掛つてきた。

私が後にひっくり返るとキヌは着物の前をはだけて私の胸の辺りに馬乗りに跨つて首を締めにかかった。私は遠い昔、K子にそうされた事を憶出した。私はわざとものがいてはね返そうとした。キヌも段々本氣になつて、お尻をぐんぐんズリ上げて来てとうとう私の首の上に脚を開いて跨つてしまった。抜ける様に白い太ももでびったりと私の顔をはさむと、一寸キレ長の大きな目で睨みつけながら

「さあどうだ。降参か。いつも人を馬にしていじめるから今日は仇をとつてやる。どうだ参ったか。」

私は得も云われぬ感情に酔いながら、嘗ての日の様に全身の力が抜けてしまった。

「降参」

私はキヌの尻の下で許しを乞うた。

「もう私を馬にしないか。」

「しない。」

「よし、じゃあ生命だけは許してやる。」

そういつてぐっと一ひねり締めつけてからキヌはやっと私を股の間から離れた。「キヌは強いでしょう。驚いた？」顔を赤らめながら着物の前をつくろう彼女の面ざしは引きしまつた美しさであつた。

「土伏せる」って随分乱暴なんだね。」と聞くと、キヌは笑いながら

「本当は顔の上に乗っかちやうんです。よく男の子をいまの様に泣かしてやっつけたっけ」と手を髪の上にやっけて居ずまいを直していた。

こんなことがあつてからキヌに対して私は奴隸の地位に逆転してしまつた。私が二階で勉強しているとキヌは後から私の肩に乘しかかつて来て小声で「馬になれ」といふ様になつた。私が畳の上に這うとキヌは上手に着物の裾をたくし上げ意気揚々と打ち跨つて「ハイシハイシ走れよ小馬」と歌いながら六畳の部屋の中をぐるぐる歩かせた。キヌは十七才、私は十五才であつた。

キヌが残っている。この白痴に対しては遠慮は不用であつた。キヌに始めて跨つた日から私はキヌも征服した。手前は荒っぽかつた。

「キヌ、馬になれ！」

キヌは抵抗した。私はキヌの首を締め上げた。アレーと叫んで彼女は私の足許にくづ折れる。そいつに跨ればいいのである。暫く乗り廻すとフーフーといつて動かなくなる。私はバテた牝馬の首に跨り直して全身の重みをかける。キヌは首を下げようとする。

「やい首を上げる」



まげのタブをつかんで首を上げさせながら私はいつ迄も馬乗りになるのであった。

キヌは女中部屋でベタンと坐りながら髪をゆっていた。その横の台所で私はキヨウを馬にして跨っていた。キヨウはとうとう潰れてしまった。私はキヨウを仰向けにすると首の上に跨った。發育した少年が猿又一つの姿で若い娘の顔の上に跨る光景を眺めたらどんなであろう。キヨウは之にはただ観念の眼をつぶるだけだった。キヌは横目でみながら

「お坊ちやま、弱い者いじめはいい加減になさい。あとでキヌがいじめてあげるから。」

そしてキヨウを許した私は今度は同じ事をキヌから実行されたのである。

この様な行動なり、心情は学問上は何と判断されるのだろうか。いじめられたいと同時に、人目のつかない所では、目下の弱い者を極端にいじめてやりたいというこの気持の錯綜は一体何であろうか。断つて置くがこの様な交渉の間にも肉体的なものは皆無であった。以上の様に、現実の対象を得た事もあって中学校時代には幼い頃の様に雑誌類から来る刺激は少なくなった。之に代って具体的な特定人が、想像の世界に這入って来る様になったのである。例えば三年生頃から見始めた宝塚歌劇のスターがそれである。

可憐な女性が男装して男よりも男らしく振舞う姿は胸をえぐるものがあつた。鶴マキ子という新人が居た。小姓役がよく似合つた。長い足を黒い靴下でつつみ、腰はふくらしたパンツ姿で剣を挿し、ガウンを着た様子は丁度美少年の様であつた。あの様な美しい少年が、物陰で同僚や女の子をいじめたとすれば……とその場面を頭に描くのであつた。時に馬

にも跨ろう、その馬になりたいと思つた。

時代は漸く軍国主義に移りつつあつた。そしてエロ・グロ・ナンセンスの風潮はだんだん消えていった。想像の種は従つて過去の記憶に頼ることが多くなつた。小学校の頃、毎朝友達の家を迎えに行つた。そこに女学生の姉がいた、彼女は玄關の式台の所で仕度をしている事が多かつた、両脚を思い切り大胆に拡げて黒い絹の靴下をはいていた。私はその間にもぐり込みた衝動に駆られたものである、そんなことが生々しく思い出された。

平凡社のアラビヤン・ナイトの全訳をみたのもこの頃である。アラビヤの女性にはサヂストが多い様であり方々に力強い女性の描写があつた。始めの発端の辺りに、砂漠で騎士と美女が相撲をとる所がある。美女は騎士を投げ飛ばし、その胸の上に跨つて降参させた。一番記憶にあるのは、「百廿三夜」の話。薄暗い街角で、男は老婆から手紙を読む事を頼まれる。明りを求めて男は戸口に近よる、突然男は老婆に背中をつきとばされて家の中に転がり込む。そこには腕をまくり上げた逞しい女が待っていて、男を投げ飛ばすと胸の上にとっかり跨つて……あとは伏字がつづく。結局男は女の捕虜となるが、やがて男の心變りを怒つた女は、女奴隸四人に男の手足を押えさせ、自分はその胸の上に馬乗りになつて氣絶する迄責め、最後に男を「宮刑」にしてしまう。六百夜以降のところでは、「バソラーのハッサンの冒険」では、美しい姫が侍女と水浴する場面がある。姫は侍女達をいじめて、馬に上り乗つたり、水の中につけたりする。

性に目覚める頃である。異性の肉体に興味を覚えたのも自然であろう。しかし、私の興味の中心は、馬の背中や、男の



顔の上に馬乗りに跨った時の女性の身体的な変化であった。どんな事になりどんな気持であるのか。男としての自分のケースからも推量してあれやこれやと思いをめぐらした事であった。

中学校の図書室で偶然見出した本の中に「蒙古探検記」というのがあり、その中の一章は「涙をのんで娼婦の股をくぐる」とあった。蒙古人に変装した日本人が見破られそうになる。女は蒙古人なら風習に従って私の股倉をくぐれという。男は止むを得ずぐり出す。尻の下に首が来た時女は腰を下ろしてびったり挟み込みいつ迄も快感に酔っている云々の記事。この快感が知りたかった。

同級生に美しい少年がいた。柔道も強かった。「乱取り」になると相手を転がして首の上に跨って押え込んだりしていた。そんな「技」は正式にはないのだが、本能的な征服慾を満足していたのであろう。私はその相手になって組敷かれたいと念じたけれども、優等生はとかく敬遠され疎じられ、又内気な私には之を積極的に打開する勇氣もなかった。

そこで対象はキヌであった。一方でキヨウには勉強を教えてやると称して台所で問題に解答させて置いて、私はキヌと女中部屋で泥棒ごっこをやる。私はキヌの蒲団の中で寝ていると、着物の裾をまくり上げ、長靴をはいて覆面姿のキヌが木刀を腰にさして強盗に入ってくる。私の腹の上にデンと跨ると「やい生命が惜しけりや金を出せ。」と刀を首の辺りにあてる。

「生命ばかりはお助け。」といいながら私は枕の下から金を出して渡す。

「何だ、之っぽっち。もっと出せ、出さねえとこうだぞ」

キヌはずいとい身を前にずらすと例の首のりの形で私の顔を両股ではさみ込む。

「金庫に案内しろ。」

私は馬にされ、キヌは私の背中に悠々と跨って部屋を二、三回まわる。やがて金庫(?)の前に来ると、キヌは背中から下り、逃げない様に私の首の玉を尻の下に押えつけ、太ももではさみつけながら金を引き出す。目的が達せられると「野郎、往生しやがれ」と私の首を切り落す。こんな手順で一幕が終るのである。

金庫の前の演出はアミューズの「クオレ」の中に出て来る「月次講話」の一つからヒントを得た。之が終ると、今度はキヨウである。彼女は調理台に両手をついて鉛筆をなめている。問題は予想通り出来ていない。身体を折り曲げているキヨウの背中に馬跳びの要領よろしくひらりと跨ると、「書いたものをみせる」

私は哀れな馬に跨ったまま解答を調べる。零点である。仕置きをしなければならぬ。私はキヨウの頭の上に尻を下ろす。調理台の上にキヨウは顔を押しつけられる。

「あやまれ」

女の髪の匂が妙に鼻をつく。ムラムラと衝動が起る。そして又「お馬のけいこ」が一しきりつづく。キヌはもう寝ているらしい。夜中の十二時頃、仰向けにされたキヨウは、汗の顔をやっとお坊ちやまの尻の下から解放される。

こんな隠れたイタツラをしながら、この見せかけの温和しい、女のような模範生は、ニキビ一つも出ないまま、無事に高等学校に入学したのである。そしてイタツラはいいつけられることもなく、三人以外の誰も知らないままに過ぎた。

続いて三、内省期

四、結婚後 を記してみたい。

続・飛行服姿の女腹切

藤 山 秀 緒

女 飛 行 士

「うゝむ……ウ、——ッ、——。」

切なさそうな息遣い。見れば一人の飛行士が俯伏せに倒れて苦しんでいます。GIたちが人垣を作って気遣わしげに見守っています。が、なぜか誰一人として助け起こそうともしません。しかも、もう夜だというのに誰一人立去ろうともしません。それどころか、映画撮影の照明が、こうこうと飛行士の姿を照らし出しています。

驚くことには、この手負いの飛行士は女なのです。しかも日本人。時は昭和二十年の戦争末期、処は比島の奥地です。果してこの女は何者でしょうか。そして何のために苦悶するのでしょうか。

決死のナース

女飛行士の名は葉山露子といふ、実は従軍

看護婦なのです。

比島の処々方々に孤立した日本軍の、あちこちに傷病兵がふえ、薬も看護婦も不足して来たため、日本軍では、勇敢な看護婦を募って落下傘をつけさせ、孤立した日本軍の陣地へ降下させることを考えたのでした。

露子は真ッ先に志願しました。空軍基地では、そうした勇ましい看護婦たちに、降下の訓練がつけられるのでした。

彼女たちは、女ながらも飛行服に身を固め落下傘を負って飛行中のドアから地上へと舞い下りるのです。

落下傘がひらいた瞬間、体が空中にとまり股間を通して上体を支える太いベルトが、グツと体にくいこむと、彼女は不思議な悩ましさにおそわれ思わず

「ア、ア……」

と声をあげるのがついででした。もとより空

中ですから誰も彼女の呻きを聞く者はありません。

左に赤十字の腕章、肩からベルトで薬品のバッグを吊り、飛行帽、チリよけ眼鏡、長靴など完全武装の飛行服姿に身を固めた彼女は男装美の極致ともいえるほど、気高い美しさをたぐえていました。

飛 行 服 姿

いよいよ出発の日が来ました。無事に行きつけたとしても、玉砕して果てなければならぬかもしれないかもしれません。一行は全部で十名。

この十名を各々二名づつ、五つの部隊へ降下させることになりました。

凛々しい飛行服姿の十名は、司令官から感謝と激励の言葉をうけ、健気にもニッコリ笑って機上の人となります。

露子は二十七歳で、一番年長でもありません。たから、とりわけて健気に振舞い、まさかの時の用意に短刀もしのばせていました。この短刀が、後になって役に立つとは、まことに悲しい結果でございました。

機上の人となった十名は、互に手を取りあって無事をいのり、別れを惜しみます。

飛行服姿で、長靴、ズボンなどをがばがばさせながら、抱き合って口づけをする者もありました。男装した女の同性愛に身もたえずる姿。しかも落下傘を装備した完全武装の飛

行服姿、悩ましくも華やかな別離の一ときです。

血染の落下傘

やがて、目的地の上空に達しました。輸送指揮官は、彼女たちを一人々々点呼して装備をしらべ、いよいよ扉をひらきます。

飛行服姿の彼女たちは、一人々々決心したように唇をかんで戸口に立ち、風圧にたえて下を覗きます。敵弾が、そこかしこに炸裂して無気味なひびきが機をふるわせます。

あゝ、いよいよ降下です！

「ごきげんよう！」

彼女たちは、ためらう様子もなく次々に機をはなれて行きます。

九人の降下を見届け、露子も飛行服の身をおどらせて空中に泳ぎ出しました。

いさましい十名の女性は、各々落下傘を開いて下降をつづけます。

しかし、敵弾は情容赦もなく彼女たちの四辺にふりそそぎます。

その一弾は、無念、前田三千代の下腹を貫きました。

「あ、あゝっ！」

三千代は、宙吊りの姿で、下腹を抑えて、体をよぢっています。飛行服の両肢を揉みあわせ、のたうち廻ります。

三千代について第二の犠牲者は二十一歳

の松田秀子でした。彼女は股間を撃たれ、飛行服のスボン、長靴を朱に染め、歯をくいしばって悶え苦しんでいます。

露子は、はるかにこの有様を見て思わず眼をとうじてしまいました。

突然対空砲火がやみます。米兵たちが赤字の標識に気がついたのです。

静かに降下する十個の落下傘。しかし運のわるいことには、風の方向が変わったのか、落下傘は敵陣めがけておりて行くのです。

捕われ人

「もうだめだ……」

十人の健気な看護婦たちは、空中で、いちやく自決の用意にかゝりました。目の前に味方の陣地をのぞみながら、あらぬ方へと流れて行く落下傘。

「さ、残念……」

無念の涙をのんで十名は互に手を握って別れを惜しみ、用意のピストルを思い／＼の処へあてがって死にいとむのです。

銃声が天空にひびき、つゞいて

「ウ、ーッ！」

悲壮な呻きが美しい唇から次々に洩れ、飛行服から鮮血が噴き出し、落下傘のベルトをつかんでしばらくは凄惨な断末魔の苦悶がつかく――。

そして地上に着いた時には、看護婦たち

は、深傷のために息もたえ／＼になっていました。

三千代は下腹を撃たれ、もうこれまでと心臓を断って死んで行きました。股間をうたれた秀子は、一発目で腹を撃ち、苦痛を泳えて銃口を口にふくみ、後頭部を貫いて死んでいました。

露子も、胸をうち、地上に達したときは仮死状態でした。米兵たちは、彼女らの携えている薬で手当をしましたが、結局生残ったのは露子一人でした。

露子が意識を恢復したのは、それから何時間かの後でした。彼女は死に遅れた残念さに涙も出ず、自決を申出るのでした。

しかし米軍の将校は、彼女を鄭重に扱い、どうか人類愛の見地に立って、米軍傷病兵の看護をしてくれ、と頼むのでした。

彼女は、人間愛のため。と云われて、死を思いとどまり、同じ人間として、傷病兵の看護につくすことを決心します。

裏切者

傷の癒えた露子は、献身的に米兵たちを看護し、治療しました。そして何人かの米兵は彼女のお蔭で一命をとりとめていました。

いまは彼女も敵味方の意識をはなれて、博愛の精神に生きるのです。

やがて夢の間に二ヶ月がたちました。そし

て彼女の運命の日がやって来ました。

それは日本の敗戦でした。

喜びにわきかえる米軍の陣地の中に、たゞ一人じつと物想にしづむ露子。露子の胸には

「裏切者」としての自分の姿が、打消しても

打消しても彷彿として去らないのです。

「わたしの使命は終わった。——死のう。そう

だ。女乍らも切腹して……。」

祖国への申訳には、女ながらも腹を切つて

と、露子は心にきめると、将校の許を訪ね、

その志を打明け、どうぞ心静かに赦してくれ

るように頼みます。

将校は、彼女の愛国心に感じ入り、いまは

その死をとめず、最高の礼儀をつくして彼女

を送ることを約束します。嬉しげに顔を赫ら

める露子の姿は美しくも凛々しかった。

将校は、此の旨を全部隊に布告し、最期の

場所を、彼女が着陸したあたりと決め、自決に

は最高の礼を以て立会うことを申渡します。

彼女は私室へ帰って、はじめてさめざめと

泣きました。

「懐しいお父様お母様……私はお国への申し

わけ……女乍らも切腹して……。ごきげんよ

う……。」

口に出して別れの言葉を何度も……繰返し

持って来た懐剣を腹にあてがって、衣服の上

から右へ引廻す稽古をはじめたのでした。

「こう切って、こう突いて……。」

昔の武士の腹の切り方を、本で読んだこと

のある彼女は、それを思い出しながら、勇ま

しく自ら刃に伏す誇らしさを次第にスラック

スの汗ばむのを感じていました。

壮 烈

翌日は、いよいよ彼女の自決の日です。

切腹は夕方行われ、その夜のうちに埋葬さ

れる手筈になっています。午後七時。

彼女は美しく化粧して、思い出ふかい飛行

服を着ます。着陸を目前にして散って行った

九人のナースにおくれじと自刃する彼女にと

っては、これこそこの上もない死装束なので

す。胸の処には、彼女の血痕と銃弾に貫かれ

た穴があいています。

慣れた手つきで、する／＼と着込むと、べ



ルトをしめ、手首の尾錠もしっかりと留めて今度は革の半長靴を穿き、飛行帽をかぶります。あゝなんという凛々しさ。

彼女は手鏡に自分の姿をうつして乱れの無いことをたしかめ、最後の装備、落下傘の包を身につけはじめます。縦横に彼女のふくやかな肉体をしめつける太いベルト。彼女は、包を負うと、体にまつわりついた幾本かのベルトをきりりと締め直します。厚手の飛行服を通して各々のベルトが淡い緊縛感を若い露子の肉体に脈打たせ、股間を通して締めつけたベルトが、ゆたかな腰の線をうきぼりすれば、腋の下を通るベルトは、乳房のかけを落とし、ウエストをしめつけるベルトは、心持ち上向き加減になって、ベルトの下から股間まで、ゆるやかにふくらんだ下腹の厚みをきわ立たせて居ます。

彼女は何通かの遺書を書き、髪を切って一通づつ封筒に納めました。

もうこれで死を待つばかりです。苦しかろう。いゝえ、私も大和撫子のはしくれ、切腹して死ぬのがせめてもの申訳なのだ。苦しんで、苦しみにぬいて、意識のあるかぎり、力のつくかぎり、のたうち悶えるのだ。

あゝ二十七年の生涯の中で、私の体に突立てられるものは、この短刀だけだった。短いしあわせ。せめてこの短刀なりとも、わたしは肉体の中に喰入らせて、思いのかぎり抉り

立てるのだ。あゝこの緊縛感。この飛行服の重量感。昔の女武者の鎧姿にも似た悩ましい飛行服姿。彼女は、「ア、ア、……」と呻き膝について喘ぎはじめます。

飛行服のズボン姿で、両膝をきっちりと揃え、膝がしらで立ち上りながら、腰をしごいてベッドにのめりかけます。スプリングがぎしきし、彼女はなおもうっとりと物想いにふけるのでした。

死の座へ

時刻がせまると、G Iが扉をノックしました。彼女は、すでに端然と椅子に腰をかけて心をしずめています。そして彼女の希望で運ばせた末期の水をのみ、書類に署名します。彼女はG Iに握手をもとめ、これまでの厚遇に心から感謝します。そして室内を見廻し、見苦しいものゝないことを見きわめると、静かに扉の外に立出るのでした。

外は夕やみに包まれ、自決の場所のあたりに煌々と照明の輝くのが見えます。

キリ、と身につけた飛行服の男装が悲壮な美しさで夜のしじまの中に浮上っています。

彼女は胸を張り、勇ましく庭に下り立ちます。自刃の場所は、はるか林の向うです。要処々に衛兵が立ち、彼女を見送ります。彼女は一人々と固い握手をかわしながら別れを惜しみ、少年航空兵を思わせるきりりと

た態度で、今日の晴の死装束、飛行帽、飛行服に長靴、そして落下傘の包を背負って、最期の場所へと歩んで行きます。

米兵は整列して、この美しい天使に別れを惜しみます。

彼女も軍人らしく屹と敬礼して、ニッコリ笑み、死なねばならぬわけ、そして女乍らもハラキリで死ぬことを説明します。

米兵たちは彼女の未来に幸あれといのり「さようなら」

と叫びます。彼女の両眼に涙があふれて来ます。しばしは言葉もなく、やがて、「さようなら……」

と云って、涙を払い、死の席へ膝をつきます。飛行帽、飛行服、長靴、そしてふくやかな肢体を縦横に引き締めている太いベルト。完全武装の飛行服姿の露子は、ニースカメラのライトをうけて男装美のなやましさに輝くばかりです。

彼女は落着いて飛行服の前を寛げ、懐剣を白布で巻き、息をしづめます。

もうこれまで、と決心した彼女は、長靴、ズボン姿の不自由な両肢を組んで正坐し、

「天皇陛下万才！」

と唱い終るや、白刃をひらめかせて左の脇腹を、ぐっ！ と一突き。

「ウ、ッー」

みるみるうちに彼女の顔は青ざめ、上体は

はげしくふるえ腰を浮かせて苦痛を泳える壮烈さ。

「ウ……ウウッ……ッ……」

きりきりと一文字に引廻す凄惨さ、がばがばと血汐が溢れ、苦痛にゆがむ露子の顔が、ライトにくつきりと浮かんでいます。

「うゝむ、うゝむ、うゝむ……ッ」

グ、ッ！ と二、三度体をよちって押泳えた呻きに齒をくいしばった露子は、短刀を右腹迄充分に引附けます。そして、

腰をうかせ、上体をかゝめた彼女は左膝を立て、短刀に両手をかけて、のしかゝるような姿勢になり、ハッ、ハッと息をはづませ乍ら、短刀を引抜こうとします。

「ア、ア、む、むうっ——ッ……」

べっとり血汐を吸った短刀が、飛行服の割れ目から一仄したと見たのも束の間、露子は気丈にも短刀を鳩尾に押しあて、二、三度大きく嵐いだかと思うと、ぐっと突込みます。

「む、む、む——ウーッ！」

泳え／＼ながらも遂にたまりかねてか、腹から絞り出すように彼女は壮烈な呻きをあげ腰をしごき肩をふるわせて苦しみ悶えます。

血染の飛行服

米兵の間に拍手がおこりました。あまりの壮烈さに感動したのでありましょう。

彼女は、ハッと顔をあげました。あゝその

顔の蒼白んだ物凄さ。そして悲壮な美しさ。

「むうッ——ううむッ——ク、ク、ク……」

のしかゝるように上体がよるめき、そして両手につかんだ短刀のつかがしらが切なくふるえ、正十文字の女腹切は、いまそのクライマックスを迎えようとして居るのです。

「ク、ク、ク、ク——ッ……」

これでもか、これでもか、とても云いたげに彼女は自らの肉体に鞭打っています。

ニユースカメラマンが彼女の前後左右から接近して、彼女の最期の苦悶を細大もろさず撮影して行きます。煌々と輝くライト、アイモの響き、そして彼女の泳え／＼た呻き。なんとという劇的な雰囲気でしょう。

彼女は、自分の死んで行く姿が、映画になつてのこのことに、看護婦として、医者としての喜びを感じているようです。彼女はカメラを意識し、つとめて上体をおこし、表情をうつしやすいうちに心がけているのです。

ちりちりと切り下す短刀。唇をかんで呻き

を泳える健気な露子。そして、流石の彼女も次第に興奮してか、悶える肩、腰、ズボン姿の両肢までが悩ましくのたうちはじめるのでした。

彼女は脂汗をうかべ、ウーム、と烈しく呻いて一気に下腹部まで切り裂きます。

「う、う、う……」

深傷の苦痛。作法通りの十文字腹をしとげて、誇らしさの中にも、刻々せまる断末魔の苦しみ。

彼女が、悩ましく呻き、のたうち、頬を引きつらせれば、カメラは、高く低く、遠く近く非情なまでの執拗さで、此の死の苦しみをとらえて行きます。

やがて飛行服姿の露子は、うううううと息をつめながら、短刀を抜き取り、両手を持ち添えて、飛行服の立エリの奥ふかく脈打っている脛動脈をかき切ろうと最後の努力をつづけるのでした。

彼女は両ヒザで立上り、固く凝って飛行服

〔切腹通信〕

『切腹』の短歌

会津波羅木利会一同

会員の歌をおひろめ致します。(下手を

自慢の歌ばかりですが)

冬空に鐘の音さえて新玉の年を迎えて一

文字腹 隆雄 二十八歳

を突上げて燃える乳房を抱きかゝえるように短刀を両手に捧げ、飛行服のエリをかきわけて首筋へ刃をあてがっています。

しかし飛行帽のベルトが邪魔になって急所へ届きません。彼女は、ブルブルふるえる右手に短刀をゆだね、左手で飛行帽のアゴのベルトをはずします。

「ア、ア、ッ、ウ、ーッ……」

悩ましくも潔い露子の呻き。ノドをかき切ったのです。

「あ、あ、あゝゝゝ……」

ノドへ突立てた刃を、のけぞるようにしよにして抉り立てる壮烈さ。立エリの中から、夜目にも鮮かな血汐の虹。

「うゝゝつ！」

がぼと前々のめれば、飛行帽は、はずれて黒髪が切なく乱れかゝります。再び起こる拍手の嵐。

大地に打ちふした露子は、ズボン姿の両肢をふんばり、あられもない姿で悶えています。ウーツ、ウーツ、と、転び苦しんだ彼女はやがて四肢をふるわせ、そしてがっくりとなります。飛行服は鮮血にまみれ、頸動脈に突立った短刀は、両手にしつかと握られたまゝ、凄惨な自決のあとを物語っています。

米兵たちは、その姿のまゝ、彼女を埋葬しました。そして碑を建てました。

『日本の勇敢な女戦士 こゝにねむる』と。

濡紙を断つ切味の刃もて今こそ切らん一文字腹 精一郎 二十五歳

名工の錬えし刃をじっと見つ静かに想う一文字腹 満寿男 四十二歳

相想う心の果の極みにて共に果てなん一文字腹心 雅尙 三十五歳

豊かにまろき白妙の我が腹をみつ一文字腹 道子 二十三歳

白妙の腹かきひろげじっと見る思いぞ遂げん一文字腹 同

懐剣の刃握って待つ耳へ血しぶきの飛ぶ除夜の鐘の音 久子 二十七歳（病院にて作る）

行く年に別れを告ぐる鐘の音を三つ数えて一文字腹 喜美江 二十一歳

本年はどうか新企画の元に益々発展されん事を祈ります。

「懐剣の刃握って……」を歌った久子さん（二十七歳）は、除夜の鐘の音と共に懐剣を以て切腹した本年初の切腹体験者ですが切口の長さ二十七センチ、深さ二センチへ突いたところは一センチ位で、右へ行くに従って深く切り、右脇腹で深さ二センチ（臍下、約四センチのところを真一文字に切り、切り終って失神、間もなく家人に見えられて入院治療中です。切口の大きい割には出血は少なく、懐剣の切味が良かったせ

いか、切る時は余り痛くなかったと云っていますが、二十七センチ切ったのは会員中初めてのことで、余りに見事な切腹なので、お知らせして置きます。何れ本人が退院致しましたら、体験談を書いてもらいます。本人は某商事会社に勤めている、身長五尺二寸、体重十三貫、美貌でおとなしい人ですが、十五、六歳位から切腹に異常な魅力を感じ、二、三年前から切腹しようとその時機をうかがい、昨年の七月頃、一度自宅の浴場で決行しようとして果さず、二度目の決行で遂に悲願を達した訳です。（新聞には出ませんでした。）

ともあれ、日本人の切腹熱は戦後の今日でも尚相当なものです。今日、ラジオ、テレビ、映画芝居、ストリップから喜劇、漫画に至るまで、切腹場面を取扱わないものは一つだにありません。流行歌手のチェミまでが、ラジオで「切腹」と云う言葉を発しています。それも人から云われされたのでは無く自分から云ったのですが、実に真に迫った声でした。日本人だけが何故このように切腹に魅力を持ち切腹したがるのか。何か日本民族の血の中に切腹を好む因子がある様に思われます。私は今度新しい見地から日本人の切腹を考察し、解明を与えた小論文を書きたいと思って居ります。



緊縛映画雑感

—思い出の緊縛映画より—

楓 月 太 郎

奇クファンには緊縛時代劇映画に興味を持っていたらっしゃる、三十代以上の方も多いと思われそうですので、今日は古い名画から特に選んでお話ししてゆきましょう。

私が映画の責め場面に興味を持ち始めたのは確か十二、三才の頃だったと記憶します。小学校から帰って来るといきなり鞭を投げすて、近所の映画館のウィンドに飾られた武家娘、振袖姿、腰元姿の時代劇の縛りスチールを観に行くのが、何よりも楽しみだったので。その写真を眺めては一人で心の中で喜んでいたので。子供心ながら「あゝ何時かはきつと映画館に入って実際にこのスチールを自分の手でウィンドにはって見たいナア」と心の中で誓っていました。

それから十数年——。

生長した私が興行界に足を踏み入れていた

事はいふ迄ありません。私の一生の念願だった緊縛映画のスチールを自分の手ではれる様になって初めてスチールを手にした時の嬉しさと感激は生涯忘れられない思い出です。その頃、たしか昭和十二、三年頃だったでしょう。——今と違って映画会社が数多くあり時代劇の全盛時代とも云えたでしょう。

松竹、日活、P・C・L（後の東宝）新興大都（日活、三社合併して後の大映）極東、全勝キネマ、南旺映画、東京発声プロダクション、等の各映画会社がしのぎをけづる勢いであつたのです。

極東キネマは短篇時代劇専門の映画会社であり、上映時間僅か三十分ないし四十分程度の今の東映時代劇に更に沢山の剣戟が入ると想像して下さればわかると思います。理屈抜きのチャンバラ映画製作会社で大人も子供も

楽しめる映画が比較的多かったように思います。全勝キネマと同じく配役紹介のタイトルが消えたと思ったら、いきなり冒頭からチャンバラで、実際今から考えれば多分に紙芝居的な時代劇だったのです。

極東映画で縛られ役、ナンバー・ワン女優は小浜美代子、森野洋子（大都から転社）の二人でしょう。高垣眸原作の「まぼろし城」「荒海の虹」「怪傑虎」は何れも小浜美代子の素晴らしい緊縛場面があつてファンを喜ばしたものです。とにかく前後篇二部作が流行して、お姫様が誘拐されたり、責められたり、殺されそうになると、前篇の終りになるので毎週映画館へ足を運ばされたものです。

此の「まぼろし城」は、後年になって日活で再映画化され、最近でも東映で上映されています。私は三本とも観ましたが、極東キネ

マの「まぼろし城」が一番原作に忠実であり内容も面白く、雲井龍之介の木暮月之介が一番似合っていました。今考えると、こんな小さな映画会社が、日活、東映作品より立派な出来栄の映画を作ったのが嬉しい。

森野洋子は極東映画で、そうとう縛られ役を演じた様に思います。特に印象に残っているのは、中野伝次郎主演の「流星鉄仮面」で芸者の森野洋子と今一人の娘と二人で敵方に捕われてムシロの上に縛られて引据すえられ、鉄仮面の居所を白状せよと、竹割で責め叩かれるシーンは実際みもので、最近では観られない責めの描写でした。中野伝次郎の鉄仮面が馬で助けにくるのですが、馬で飛んでくるのと、竹割れで叩かれる場面をかわるがわるスクリーンに出しますので、ハラハラとさせられ、子供心ながら、この責めの描写をみて胸を躍らしていたものです。身体を、
 ピシ／　ピシ／　と叩く着物ずれの音／　打たれる度に苦悶する顔。身体をよじ曲げてこらえる苦しさ／　そして前に崩れさる姿／　あゝ／　何んと形容したらよいでしょうか／　此の素晴らしいシーンを――

此の映画題名を真似して？　後になって東映が宮城千賀子、大友柳太朗主演で撮ったのが「怪傑鉄仮面」と云う映画であった。此の映画では美女が白装束姿で生様になって磔の刑にされるシーンがあったのも、何かのめぐ

り合わせかも知れません。この話は後の機会の稿に譲って省略します。

全勝キネマでは縛られ女優のピカ一として（宮川敏子）を挙げることが出来ます。「怪幻蝙蝠魔」前、後篇「木村長門守」何れも松本栄三郎主演で緊縛責映画でありました。前者は今で云えば右門捕物帖に似て同心一与力が殺人鬼蝙蝠魔を追って捕えるまでの物語で、復讐、殺人、美女誘拐といった趣向が織りなし、そうとうな当りをとって、「続怪幻蝙蝠魔」「復讐蝙蝠魔」と銘うって何部にも分られて作られた程、大好評を博したものです。後者は「木村長門守」の宮川敏子の姫が捕われ縛られて庭先で竹割れで叩かれ責められる描写の長いシーンで、実際竹で叩かれる様子が手に取る様にハッキリ撮影されて実に観物でした。松竹映画で時代劇の花を咲かしていたのが北見礼子唯一人で、このスター程縛られた女優も少くないでしょう。

私の頭から今日まで、いまだに忘れられないのは、高田浩吉、北見礼子主演の大仏次郎原作「緋牡丹伝奇」前後篇です。物語は殿同心与力数名をつらねて馬で遠乗りして立止ったのが、牡丹屋敷で牡丹の花をみてまわっている内に殿の姿が消えさり、殿のお気に入りの一与力の姿をくらまし高田浩吉唯一人、不気味な牡丹屋敷を探索している時、やにわに大勢の黒覆面の武士が刃を抜いて斬りかゝっ

てくるのです。此処でカメラが牡丹の花の美しさを移動撮影して牡丹の花に謎をふくませ様とする意図が含まれていました。スリラーもどきの探偵時代劇で殿の息女武家娘（北見礼子）をめぐる謎から謎へと……、事件が発端して行きます。そして善悪入乱れてのおさまりのチャンバラ映画だったので、此の映画程、大半と云って過言でない程、北見礼子がさらわれて、助けられたと思うと又誘拐されて捕われ、責められるのです。

そして私はいつとはなく北見礼子の美貌の虜になってしまいました。忘れようとして忘れられない此の映画の武家の娘の衣装、今日でも北見礼子のスカーフで一生私の胸から離れられないでしょう。

此の伝奇物が好評だったので後年の坂東好太郎、北見礼子（二役）主演で撮ったのが読売新聞連載土師清二原作の「破魔弓伝奇」前後篇であります。此処でも北見礼子の腰元が猿轡で縛られて舟でかどわかされて行くコマもありましたが、ほんの一カットだけでしたので大いに期待していただけに落胆しました。

原作では責めの描写が詳しく書き述べてありました。後手に縛って手の指の間の中にきせるを入れてねじ曲げる責めのシーンが――そんな素敵な場面をカットするとは誠に残念に思いました。大仏次郎原作坂東好太郎、北

見礼子主演の「美女桜」にも北見礼子は依然と縛られています。此の頃の松竹時代劇は実にいゝものばかりで今日の松竹時代劇作品とは雲泥の差でありました。後になって暫らくスクリーンから姿を消していた彼女が最近東映に入社して「怪傑黒頭巾マヴナの瞳」に出演して早速人妻役で柱に縛られてムチで責めらるシーンを観た時の私の嬉しさ／＼北見礼子の緊縛場面は二度と見られないと思っていただけにその喜びも大きかったです。彼女の健在を知り、真先に縛られたスチールをウインドにはった私でした。

日活映画でよく縛られた女優陣では、花井蘭子、深水藤子、大倉千代子、市川春代、橘公子でしょう。林不忘原作「丹下左膳日光の巻」でファースト・シーンを一寸紹介しましょう。暴風の夜、稲妻が光り雨と風の激しい音／＼ドタンドタンと木片の音／＼突然黒川弥太郎の柳生源三郎は、毒を飲まされて口から真赤な血しおが流れている——物語はそこから始まって行きます。——

劇薬を飲まされ、のたうちまわって許婚の名を絶叫する柳生源三郎、「荻野／＼ 荻乃」その許嫁荻乃（花井蘭子）はどうでしょう。

道場の柱に猿轡で縛られて奥方の沢村貞子に胸に短刀を突きつけられて源三郎の声をきいて、もたえる姿の美しかった事、天下一品といった過言でないでしょう。皆さん、ど

うですか、きっと思い出して下さった事でしょう。此の中の丹下左膳の中に責められる描写がたくさんあった事も見逃せない所でした深水藤子、原節子の責められる場面も印象に残っています。ラストに星玲子の奥方の生犠とされる場面など日活映画空前の豪華キヤストでした。「大菩薩峠」（入江たか子）の浜路が机龍之介（大河内伝次郎）に誘拐されて水車小屋の猿轡緊縛の場面も仲々よきものでした。後になって東映で映画化して三浦光子の浜路で再上映されましたが、入江たか子にはとうてい及ばなかったと思います。日活の大菩薩峠の中で深水藤子の巡礼お松が腰元に上り、色魔の神尾主膳（山本礼三郎）に裸の踊りを所望されるシーンがありましたので、せめて半裸にされると思い楽しみにしていたのですが、（此の頃、風紀上悪いと検閲でカットされ、とてもがっかりしました。今なら着物とか帯を解くシーンを写すんですが）長襦袢一枚の深水藤子が逃げ廻るところはその頃では珍らしいお色気場面だったのです。

今でしたら湯文字姿の半裸で踊らされる場面も出来るんですが。日活の「山彦呪文」月形龍之介、深水藤子主演でも竹割れで責め叩かれる場面がありました。山彦の秘密を白状しろと拷問される（深水藤子）シーン。その場面が消えると今度は無残にも橋の下に吊り責めの凄惨な場面。今だから橋の下に吊り責

めなんて恐らくないと思います。

（先月号に大倉千代子と書きましたが資料みましたら深水藤子だったので訂正します。）

同じく月形龍之介、大倉千代子主演。吉川英治原作「無明有明」前後篇にも、大倉千代子がたくさん縛られたり、さらわれたりします。二作品とも伝奇映画で謎を解いて行く大衆向時代劇でした。

電気責めと云えば、大都映画のハヤブサ、ヒデト監督主演の「無敵乱闘王」三部作にあった事を記憶します。ラストシーンに佐久間妙子の令嬢がギヤング団に捕わり電気椅子にコードで縛られて頭の上に丸い輪の様な物をのせられてギヤング団にスイッチを入れられるシーンがあつて恐らく今日の現在まで電気椅子の責めの描写はないと思う。頭の上に乗せられた丸い輪にはたくさんコードが出ていて身体全体電流が流れる様になっておりました。危し／＼ 令嬢の命／＼ この場面を何回も撮ってファンの人達をハラ／＼させたものでした。無声映画であつた事も懐かしい。邦画でこの頃無声映画は大都映画唯一つであつた様に思える。大都映画で特筆すべきものは琴糸路の「毒草」に凄惨な責めの描写があつた事は忘れられない思い出の映画であります。今日はだいたい昭和十二、三年頃の思い出の緊縛映画をひろってみました。

（以下次号）



マゾヒズム見たり

聞いたりためしたり

(4)

春 木 俊 野

東京新聞社発行の『週刊東京』一月十九日号にグラビヤ頁で、香川県の富士紡績工場の女子工員で組織されている拳法部の有様が出ている。題して「織姫拳法」だが、これらの女性が大の男をやつてたりする場面を想像すると一寸楽しい。

此の織姫拳法で思出したのだが、面白い話がある。たゞ、いささか古く、又、(3)の時に話した事と少し似通った点があつて申訳けないのだが、御容赦願つて——。

それは昭和二十五年の二月、凄く寒い夜の事、明子さんは当時二十二歳の明るい女性だった。生来の御転婆な性格から、護身術のためとばかり此の空手を習い始めた。然し織姫拳法にみる様な真の奥儀を掴む程には、映画恋愛と忙しくて、或る程度の型を会得したのみでやめてしまった。然し弟を相手にドタン

ボタンと遊び半分にやっては、弟の手を逆にねじあげたり、投げとばして降参させたりしていたが——。

その夜、友人達とのつきあいで遊びが遅くなり、十一時過ぎに家に向つて歩いていった。明子さんの家はS区の高級な住宅街にあつたので、夜は各家とも大きな門を閉してしまふと、街灯がにぶく点るのみで暗い事おびただしく、淋しい街となつていた。少しでも早く家に着きたいと速歩で歩いていった明子さんがハッと立ちすくんだのは、もう家を間近かにしての暗い場所だった。

「もし——」

と背後から男の声に呼びとめられたのだ。身体中をこわばらせて振返つた明子さんは「あ——」

と、悲鳴にも似た声をあげて身体をかわし

た。——と云うのは、何時どこから尾けて来たのか、一人の男が大手をひろげて明子さんに抱きついて来たのだ。男の手をぐぐりぬけた明子さんが、瞬間、護身術として習つた、いわゆるやわらの術が反射的に動いて、男の左腕を掴むと手首を握つてぐいと逆手にねじあげてしまった。そして明子さんは只もう夢中で、ぐいぐい後手にねじあげてしまったので、男はもがき乍らも膝を地面について前かぐみになり、やがて俯伏せに地面に這いつくばってしまった。明子さんは逃げても追いかけられると思つたので、怖さにぶるぶるふるえ乍ら、男の左手を背に高くねじりあげたまゝ、男の背中に馬乗りに跨つてしまった。男は二十七、八歳の革ジャンパーを着たバラバラ髪で、

「ちく生、ちく生」

と、もがくので、明子さんは悠々と跨っている姿は立派だが、寒いためばかりでなく唇は真青になって、男をはね返させない様、腕も折れるかとばかりねじあげていた。そして明子さんは、ワア／＼大声で泣き始めてしまったのである。それから一時間、やっとパトリールの巡査が此の組合ったまゝの二人をみつめて、勿論男は其の場で逮捕された。しかし寒風吹きまくる夜半、外で一時間以上も腕をねじられたまゝ、地面に這いつくばわされた男の身体は、すっかり冷えきってしまった。腕は全然感覚がない程になっていた。明子さんの身体も又、すっかり硬ばってしまった。迎えに来てくれた両親に、娘の夜遊びを叱られ乍ら帰って行った。

私が十六歳の頃、家の裏に或る女学院の寄宿舎があった。二階建の木造の建物だったがたしか桜花寮と云ったと思う。

此処には十四、五歳から十七、八歳の女学生が一部屋に三、四人位ずついて、二階は上級生、下は下級生が入っていた。夏の夜など私の家の二階から、階下の部屋の彼女達の姿態が、明るい電灯のおかげでよく見えたもので、一寸楽しい事も多々あった。まさか覗く様にして見たわけでないが、相手が気のつか

なかっただけの事である。

が、はからずも頬笑ましく又、少年の胸をときめかす様な光景にぶつかつたのである。その部屋は二年生か三年生位の生徒の部屋と思われたが、二人の少女が畳の上で、上になり下になりして組打をはじめたのだ。はじめは喧嘩かと思つたが、キヤア／＼笑い乍ら組みあっている。やがて一人が上になって、もう一人の背中に馬のりに跨ってしまった。そして両手で相手の首筋をぎゆう／＼抑えつけた。組み敷かれた方は両足をばた／＼させていたが、それがスカートのはだけて太腿まであらわし、もがいていたがはね返せない。馬乗りになった方は勝ち誇つた様に悠々と跨っていたが、やがて休戦協定が出来たのか、勝つた少女は負けた少女の頸をまたいで立上つた。そして降伏条件があつたとみえて、負けた方は、その場に起き上つて四ツ這いになった。すると勝つた方は、その少女を馬にして跨ると、部屋中をぐる／＼と這い廻らせるのだ。そして尤も印象的だったのは、馬になった少女の両耳の処から、長くおさげに結つた髪束を手綱にして握ると、右に左に引いていた事だ。私もあの少女の馬になりたいとよく考えたが、街や家の近所で此の少女とあつても、彼女はツンとすましていた。

戦災で焼け出されて私達は郷里へ一寸帰つた事がある。敗戦の折、郷里でも又、市のた

め焼け出されてバラックのアパートらしい処へ移つた頃の事だ。

隣りは子供のいない中年夫婦が住んでいた。隣りと云つても薄いベニヤ板一枚で仕切つたものが壁だから、隣りの話はつゝぬけと云う粗末なものだった。始めて此処へ移つた頃、急に隣で夫婦喧嘩がはじまってすさまじい熱戦となつた。どちらも負けず劣らず大声でわめくのだ。私達はびく／＼してしまつたが、盛んに夫が妻を殴っている様だった。……が様子がおかしい。その後いつのまにか喧嘩はおさまっていたが、あとで此の家の主人と逢つたら、左眼が紫色にはれあがつて、大体顔全体がむくんだ様になっている。その後何回となく此の夫婦は喧嘩をしたが、最後は決して主人は妻からてひどく打ちやくされている様だった。やせ型で背の高い四十歳位の主人に、三十六、七歳のむっちりよく肥つた奥さんの此の夫婦は対照的で、又、あたりは、からない喧嘩もすごかったが、仲のいいのも又、有名だった。喧嘩でおしまひの方になると、ラッ／＼と云ううめき声と、ガツ／＼と撲る音だけで、ドタバタ騒ぎの聞えなくなつた光景こそ、おそろくみものだと思つたが、残念乍ら一度も見ることが出来なかつた。

此のアパートには、いろ／＼な人が住んでいた。大体、戦災、引揚者ばかりと云うのは

当然だが未亡人、パン／＼等も可成りいた。私の部屋の隣りの隣り、いわゆるよく喧嘩をする夫婦の隣室にいたのが、大連から引揚げたと云う未亡人だった。六歳位の女の子が一人いて、かつぎ屋をやっていたが、その頃は余り綺麗な人とも思っていなかった。年令は三十二、三歳位であつたろうか。それが美容師の免状をもっていた事から、街の復興と共に女性の美容も急速に盛んになり、美容院がものすごく繁昌をしたので此の未亡人も雇われていたが、収入も次第に多くなりパトロンもついて、一軒店をもたされるまでになつてしまつた。そうなつた時には、それ程と思つていなかった此の未亡人が、すっかりあかぬけして容貌も又、化粧の故か他人の様に美人になり、服装もよく身体も肉感的で、忽ちアパート内の女王みたいになつてしまつた。私も魅力的だと思つて、いつもみていたし、又よく話もしたが、マゾ的な気持も始終動いていた。然しそれを口にする事は出来なかつたが、或る朝、私は起きぬけにトイレに行つた。トイレは共同で、これもバラックのひどいものだった。溜桶は大きく掘つた穴で、その上に小屋を建て、幾つかに仕切つてあるものだが、雨が降つたりすると水がたまつた、汚い話で失礼だが、用便等の場合ボチャンとはね上つてくるので、真中に一本太い丸太を中間に通してある。便がその丸太に落ちて、

やがて下の溜桶に落ちると云う風に改造したので、此のはねかえりはなくなつた。が、その代り一寸覗けば自分のは勿論、他人のものもその丸太をみればすぐ見る事が出来ると云う事になつてしまつた。その朝、私がトイレに行つた、此の未亡人が、数あるトイレの一室？ から出て来たのだ。私達はお互に笑つて挨拶したが、彼女が消えると私は何の躊躇もなく今、彼女が出て来たトイレに入つた。私はよく彼女のネクタールを口にする事を、いや口にするとうより飲まされる事を空想したり、虐められる事を空想していたから、すぐ下を覗いた。そこにはたつた今、彼女が用を足したものが黄金色に然も湯気をたて、いるのだ。一寸手を伸ばせば触れるのだが、現実になるとやはりその勇気が出なかつた。

○

その後、東京で『肉体の門』が流行つて、それに似たものが郷里の劇場で上演された事があつた。此の時、はからずも私と彼女が一緒になつて、満員の観衆の中で尤もいゝ席に並んで、坐つてみられる好機があつた。

女と女が組撃つすさまじい格闘、女が女を鞭打つ凄惨なリンチ、息づまる様な迫力ある演劇。然もその時は映画は『お産の映画』いささか恍惚となつたが、此の彼女、サディズム的な此の演劇が余程気に入つたらしく、よく私と此の事について話をした。然し私が男

のマゾヒズムについて話すと「嫌ねえ」と云われてしまつた。勿論、私がマゾだとは云わなかつたが今、考えればもう一押しで、彼女は私の欲望を充ててくれたのかもしれない。女性性好む事も一応「嫌ねえ」と云う事が判つたのは、それからの事だつたから。

○

之は朝鮮での話。まだ日本に統治されていた戦争中の事だ。

京城の郊外よりもう少し離れた或る処に、黄と云うやもめ暮しの男がいた。年は四十になるのだが、前に死んだ妻が忘れられず独りで過していたが、或る朝、一寸した事から近所のやはり同年輩の男と喧嘩してしまつた。彼は腕力は強かつたので散々その男をなぐりつけ、果は庭先で彼の小便を頭からあびせかけた。それと云うのは朝鮮の習癖で、冬は温泉の中でぬく／＼と寝るので夜、小用等はわざ／＼外に出ず、家におまるを置いていてその中に用を足し、朝それを往來に捨てるのである。支那でも此の風習があるらしく、占領した日本軍が之を御飯を入れるおひつと間違えたとう逸話がある。その容器が立派になればなる程、大金持と云うのだ。此の黄さん、これを相手の男にあびせてしまつたのである。

その日はそれで済んだがおさまらないのは相手の男とその家族、家族と云つても妻と十

八歳になる年頃の娘の二人で、勝気な女房の応援でその日の夜半、三人は夜陰に乗じて黄さん宅を襲ったのである。寝込みを襲われた黄さん、起き上る間もあらばこそ、しっかと相手の男と娘に抑えつけられて身動きの出来



先便に些か触れておきました昨年未、アヴァン座所演の「魔窟X荘」(「異人屋敷の裸女」続篇)の舞台は、同封のプログラムとほぼ同一でした。これでもお判りになろうと思いますが、ロープの締めも緩く、足首の辺りは縛りという点から考えて問題になりませんし、且つ、女優(美空マリ)の演技、拙劣のため「見せ場」の価値は半減していました。それに比べ、二月十八日まで浅草ロック座で上演しておりました「大陸暴行列車」(サブタイトル「内股の烙印38の女」)の舞台で

ない処を、男の女房が自分達三人の小水ばかりでなく黄金そのものを持込んで来て、口の中におしこんでは、大きなお尻でぎゅうぐゅうおさえつけてしまった。黄さん、三日位、食事も出来ないと言(日本の村)の交番に届け

たが、臭い此の喧嘩は引き分けとなった。面白いのは此の女房、ちょうどメンスの時だったと云うが、朝鮮ではメンスの女の手を、あの女は馬に乗っていると云うが、これは本当に乗った話。

最近の話題と通信

近 藤

一

は、サディストを演じる佐藤久雄、ヒロインの中島千恵子が、ともに呼吸の合った演技を見せていました。これについては、或は本田由郎氏から御連絡があったとも思いますが、細見の中島を髪をつかんで引倒し、伊達巻できっちりした後手に縛り上げた様子は「縮図」で観た乙羽信子のポーズのようでした。手首も相当に高く背中まで止めてあり、敗戦当時、匪賊に犯され、その数を烙印に残した内股に夫に扮した佐藤からローソク責を受け、更に巾広の革バンドで叩かれて、しかも呻きなが

らも責苦を甘受する中島の姿態には、溢れるような魅力がありました。病的な夫は、妻の内股を町の人々の前に露出させ、妻は町中の嘲りを受け、拳句は妹の結婚話が破談となり夫は女中に手をつけてしまうのです。妹から責められ塩酸で烙印を消そうとするシーンもあります。発煙硫酸でしょうか、頻りに白煙を発する液体を前に涙する中島の舞台にはスリルを感じました。父は心労から亡くなり妹は姉を憎んで逃げ、夫は有金をさらって女中と出ていったあと、酒をあおる所で幕とな

るのです。

現在上演中の「変態殺人犯」には縛りや拷問はありません。しかし、オンリー同志（小松龍子、錦松子）の掴み合いや、ロバート中尉（玉島精一）にカミソリで腿を切られる小松が「もともと」と呻めくシーンがあります。まずし、ラストは旗六郎が千代（上田恵子）を絞殺して樽詰にし、君江（高砂けい子）を荒縄で二巻して締め殺し、更に小松の脇腹を刺した上に這いまわる小松を扼殺して裸にする「見せ場」があります。

実演の方は映画と異り眼の前で動く実物の人間が魅力で、俳優にはお気の毒ですが、でさるだけリアルなアクションを望みたいと思います。

歌舞伎の方では、過日、「中将姫」のテレビ放送があったようですし、二十二日には、「梅雨小袖昔八丈」のラジオ放送がありましたから、いずれ諸賢から御感想が発表されることを楽しみに待っております。

東劇ロードショウの「ノートルダムのせむし男」を今朝、思い切って観に行きました。

ジーナ・ロロブリシーダ扮するエスメラルダに魅了された形ですが、もう少し、彼女を手荒に扱ってくれたらと、些かドラノワ監督を憾んでいます。私が心から気に入ったシーン三景は、先ずエスメラルダに関する魔女裁判で、彼女が拷問にかけられる処です。巾広の

ベルトで両腕ごと胸の隆起の下を締めつけられ、右脚を締具で締められるのですが、上体を倒れないようにベルトについた鎖で吊り上げます。彼女の絶叫。吊り上げの鎖に力がはいり、ベルトがぐっと彼女の体に喰い込みます。背面からのカットで腰部から下は写りませんが、素晴らしいシーンでした。彼女はすぐに虚偽の自白をしてしまうので、折角、拷問用のベッドまで用意しながら鞭打ちすら無いのは物足りない気持です。手首は自由ですが彼女のアクセサリが金色の鎖で、それを両手に巻いているため、ベルトをかけられて手首を重ねていると無惨な美があります。

第二は刑場へ引かれる白衣の彼女をカシモドがさらって逃げ、自室のベッドの上に寝かせて縛しめを解くシーンで、失神しているエスメラルダは手首を前手に緊縛され、首に絞縄をかけられたままです。手首の縄は小刀で切り、前のカットでは肩にゆるくかけられただけの絞縄がかなり締まっているので、カシモドは一旦縄の輪を広くしてから首からはずすのです。

第三はエスメラルダが引かれて行くシーンで、矢に射抜かれて息絶えた彼女は、死刑宣告を受けた女として、死んだ後までも刑を執行されます。白衣の身を仰向けにされ、首にかかった縄で引きずられて行く彼女の四肢の跡が、砂上に残されて行くのです。この時に

は、私の前に席を取っていた女学生の団体から頻りに溜息がもれ、「ああ、可哀そう」という声もきかれました。今年中には、ジャンヌ・ド・アークの「聖ジョン」も公開されるようですが、前作のバーグマンに比してどうでしょうか。監督にはロッセリーニ以上の拷問シーンを期待したい処です。また「ノートルダム」の旧作のモーリンオハラを是非見たいものと思います。

（二月二十八日、毎日新聞、朝刊）

本物の火あぶりを撮影

ロンドン西郊シエパートンのある映画スタジオで、バーナード・ショー原作のジャン・ダーク映画の題名「聖ジョン」撮影中、思いがけない事故が起きた。有名な火あぶりの場面で効果のために使っていた熱ガスが、突然ボーッと燃え上ってヒロインを演ずる女優（ジーナ・シーバーク）の衣装に火がついたからだ。あわてて消防夫がかけつけて彼女の衣装の火をもみ消し、ことなきを得たが、このためジーナさんは身体に火傷した。（キーストン）

写真では、女優が既に鎖から解き放されたのかどうか不鮮明ですが、とにかく珍しい事故と云えるでしょう。

（おわり）



擦り責に関するノート

甲 斐 仁 参

擦感覚を刺激する拷問は、傷痕を残さないし又単なる責めと違って、色気もあるので、本誌を始め今迄に相当取り上げられて居て、仲々興味深い記事も見られる。しかし身体の何処に加えられるかで、今日発表出来兼ねるものも相当にあるので、比較的無難なものを挙げる事にする。先ず一時書店の店頭を賑わした、新書判書籍の中から拾って見よう。

一、舟橋聖一著「情婦の手帖」コバルト新書

これは、本誌昭和廿八年十二月号に、「現代文芸に現れた責め」に詳述されているので省略するが、『椅子に縛られたまま、卑猥な言葉が浴せられ、肉のやわらかい部分を、太

い筆の尻で、摩擦されているうちに……。』と刑事に拷問される場面や、腋の下に首を入られて『いくらくすぐりたい』といったも許してくれなかった。』等々の描写がある

二、林房雄著「女読むべからず冬の夜話」河出新書

第四話、「変装物語」の終りには、以下の文が載せられている。

『この上は、最後の決定を身体検査にまかせるよりほかはありませぬ。二人の医者二人の産婆が呼ばれて、裁判官立合いの上検査が行われましたが、前回と同様、庵主白蓮を始

め三人の尼は、まぎれもない女であると診断されました。

白蓮尼は勝ち誇って、天秀を嘲笑しましたが、天秀は裁判官に向い、

「最後の証拠調べをお許し願いたい。この実験に失敗したら、私は公衆の面前で鞭打たれ流罪絞刑に処せられても異議は申し立てませぬ。」

と誓ってその許可を得、部下に命じて、白蓮尼を全裸にして椅子にしばりつけ、尼の桃の上に豚の油をたっぷり塗りました。何事が起るのかと立会の役人達は固唾を飲んでおります。

天秀は更に部下に命じて、一匹の老犬を連

れて来させて、白蓮尼の前に置きました。犬は油の匂いに誘われ、夢中になって左の桃をなめはじめました。白蓮尼は静かに経文をとなえ、平然としておりましたが、やがて顔面は紅潮し、また蒼白となり、再び紅潮したかと思うと、鼻の頭にむずがゆそうな皺をよせて大きなクサメを致しました。その途端に危犬が悲鳴をあげて逃げ出しました。

桃の中から恐ろしい角のようなものが突き出て来、犬の鼻面をしたたか叩いたからでございませう。……」(百三十六頁)

三、次に雑誌の中から、二、三、拾って見る事にする。先ず「講談クラブ」昭和卅年九月号から山田風太郎作、天皇と美女と暗殺から

『明治八年春。――』

信じられないことだが、広沢の愛妾は、まだ牢獄にもだえていた。……

――憎悪にもえたった眼で、安藤中警視はおかねを見すえていた。この女のからだにまた傷をつけることは、少々うるさい。しかし断じてそれと同様の効果をあげねばならぬ。

……

「よし、やってみい」と、彼は命令した。

背に両腕をしぼりあげられたおかねは、うしろからひとりの巡査にしっかりと抱きかかえられていたが、命令とともに、別の四、五

人が、おかねのなめらかなあごの下、両わきばら、足のうらなどを、コチヨ、コチヨ、コチヨコチヨ、とくすぐり出した。

「あッはーッ、あッはーッ」

おかねは、たちまちからだをくねらせ、そんな奇妙な叫びをあげはじめた。巡査たちはバタバタはねくりかえる足をおさえこんで、いよいよ熱中してくすぐりつづける。

「イッヒ、イッヒ、イッヒ、ヒ、イッヒヒッヒッヒッヒッ」

女はのたうちまわった。もはや笑い声ではなかった。からだじゅう、あぶら汗をながす蒼白な皮膚に、吐きたらした舌だけが真っ赤だった。「それ！」と警官はますますくすぐりたてる。

「ヒッッ、ヒッッ」はては、瀕死のけものの吼え声のような悲鳴にかわった。

「白状するか、お前の姦通しおった男の名を――」

「ヒッッ、申します、申します。イッヒ、イッヒ、ほんとに妙なお話なんですけど、イッヒもうこれよりほかに思いあたるひとがないわイッヒヒッヒッ……」

×

×

×

四、昭和二十七年二月号「愛情生活」には数個所の擦り責の記事が見られる。「鞭の下赤き女の恋」には次の記事がある。

「しぶとい奴だ！牛尾のアジトを云え」割れ竹で、打たれつづけて、彼女はヒヒ……と唸き返しながらも、頑強にくちをつぐんで床にぶっ倒れていた。

不幸中のさいわいか、春子は牛尾からもらった紙きれを公園へくる途中、破りすてている。口さえわらねば、一ト月にいちど遭う牛尾との逢引場所もわからない。

その春子の頑強な、ダンマリ戦術に、二人の刑事はますます怒りで昂奮していた。とくに背の低い、青ぐろい顔をした島田という刑事は、さっきからやたらに春子を割り竹で殴りつけた。春子は、うしろ手にしぼられたまま、唇をかんで、ぐっとこらえている。

「まだ、云わぬかッ！」

大声でどなりつけると、春子を抱きあげ、オーバーやセーターを取り払った。そしてズロース一枚の裸にさせると、すみの椅子へすわらせた。革おびで椅子にしぼりつけると、

「この上は、こっちも、からだで云わせるぞ」

ニヤリと背の低い刑事は、あざけると、割り箸を持ってきて、グイと春子の顔を片腕に抱きこみ、顔をうわむける。彼女は、きりりと歯をくいしばった。断髪はみだれ、ブラジヤーの乳房がゆれ上った。

「ふん、いいからだしてるネ。お前は！」笑いながら、背の低い島田刑事は、ブラジヤーの切れ地をグイとちぎりすて、乳をみて

「まだ、処女やな！」

二本の割箸で摺みあげながら、ニヤリと薄気味悪くわらいだした。その箸を、こんどは春子のくちへ押し込み、押しあけて、

「おい、例の奴を持ってきてくれ」そばで、蔑を吹かしてみていた長身の刑事は、アルミの大きなコップに塩水を入れてきて、彼女のくちへ流し込んだ。

「あつ、うわッ！」

思わず、叫び返した彼女ののどをつたわって、塩水がゾクゾクと流しこまれる。それを幾杯もく流しこんだ。……

………(中略)………

彼女はやがて、ブルブルと身ぶるいが出そうなほど、小便をもよおしそうになった。だが、歯をくいしばって、この恥辱にこらえていると、

「まだ、いいませんか！」

ドアを排して、山下が入ってきた。

「云わぬ。山下、君はこの女に惚れているらしいね。それじゃ、惚れた女の面白い所、みせてやる！」

背の低い刑事は、そういうと彼女のズロースをおろし、筆をもってきて、………(編集部に削除)………をのぞき込みながら筆の毛のサキを運んでいった。

………(中略)………

「あア、畜生！畜生！」

はいせつをこらえる苦痛の上に、女として耐えがたい振舞いに、彼女は身もだえ、泣き出した。そして、どつとゆわえつけられた椅子もろとも、床にぶっ仆れて動かなくなった。しかし春子の唇には花の処女を投げうって、かちえた、恋と主義に殉じる女のようなこびにひたっているような、ほおえみさえもらして、だんだんその肌は冷たくむくろと化しつつあった。………(尿が膀胱に充滿した際、強い衝撃が加えられると、膀胱が破裂し、死亡する事があるそうである。——筆者註)

× × ×

五、前記雑誌の「続肌に血ぬられた図絵」から。

「……夕食も終り、就寝時間が過ぎた頃、独房の重い鉄扉が、ギイと無気味な音をたて、開くと、相変らず無表情な顔をした看守が、調べだ、と手招きする。

薄暗い灯の下をくぐって廊下へ出ると、非常階段の下に木崎がぬつと突立っている。

「あら、旦那、また今夜もお相伴させられるんですか」

とお仙は皮肉ったが、木崎は無言で、上れというように非常階段を指さした。

狭い鉄骨の非常階段は、螺旋型に、内部から外部にはみ出て、壁伝いに三階の屋上へ通じている。外気に触れると、お仙の白い肌が

すーッと鳥肌立った。木崎はうしろから、帯のないだらりと垂れ下ったお仙の着物の上から、腰のくびれに右手をあてがい、ぐいぐいと押し上げた。

「そんなに押さなくても、上りますよ」

これからどんなことをされるのか、それはわからない。しかし、はっきりした証言をするまでは、手を変え、品をかえて、殺戮にひたしい拷問が加えられることは覚悟しなければなるまい。

屋上へ上ると、粉雪をふくんだ空つ風が、びゆんと裾をめくった。着物も長襦袢も、そして腰巻までが、さつと裾をはらって、腰に捲き上った。雪を踏みしめた二つの肢が、羞いも忘れて、やっと上体を支えているような烈風だった。留置場へ入るときは、女でも、紐と名のつくものは一切剝奪される。縊死その他の方法での自殺行為を怖れるからだ。だから、いまのお仙も、着物をまとっているとは云え、それは名のみで、殆ど裸にひとしい無防備状態だった。

「そこへ坐れ！」

叱咤するように木崎が、うしろから、どんと尻を小突いた。お仙は、ふふんと、鼻先で笑って、雪の上に、べたりと坐りこんだ。

夜であり、誰も外に見ていないという条件が幾分にもお仙の女心を救ってくれた。

だが生憎、裾に奪られた裾のおかげで、素

肌の尻が、ぺたりと雪に密着してしまった。冷い！全身のわずかなぬくもりが、一瞬に凍えてしまうほどの冷さだった。

「いい肌をしているじゃないか」

木崎の節だらけな指が、弄ぶように、お仙の裕を割った。子供を生んだことのない、二十七の成熟しきった乳房が、ぶるぶると戦った。

「いやらしいこと、しないで下さいよ！」

「いやらしい？ ふん、世迷い言を云うな。」

博奕打ちの妾のくせに——さんざ男と、えげつない事をして、今夜はお前には何にも聞かない。その身体に聞こうじやないか。真綿のように、やわらかそうない肌をしているじやないか。新公が云っていたよ。姐御の肌は続肌と云って、男達をとろかしてしまいうんです、とな。そうかねこれが続肌と云うのかね」

木崎は手にした筆の穂先で、撫であげるように胸の谷間をさすった。

（あゝ、これが責めなのだ！拷問なのだ！）

お仙の肌に戦慄が走った。嘗て血ぬられた肌に、こんどは、冷厳と、くすぐりの責めが下されようとしている。

悲鳴をあげたり、座を解けば、木崎の靴が全身に噛みついてくることは、いまゝでの経験ではつきりわかっていた。

足蹴にされたら、それは負けることだ。責めに耐え、拷問の手を断念させることは相手を負かすことだ。

負けてなるものか！ どんなことをされたって——死の底に突落されても——。

お仙は眼をつむり、肌を刺す寒気と、無気味にうごめく穂先の感触を、たゞじっと耐えていた。胸も、太腿も露わに剥きだしとなり点々と血を滲ませている創口が、しゅーんと音をたてゝ凍りつくようだった。

「吐かなければ、明日の朝まで、こうして雪達磨になっっているんだぜ！」

いらだった木崎の言葉が、お仙には光風のようにきこえた。……

×

×

上記の外、昭和廿六年十月号「りべらる」

〔女装通信〕

貴誌二月号に私の通信文をのせていただき、早速同好の方からお便りがありました。その折の写真同封にておめにかけます。又、私は女装用のかつら衣裳等を数組所持しておりますから、女装をしたくても用具の無い方、女装の男の責めに興味をお持ちの方はお便りを下さいませ。（同好の方が何人か集り次第、女装マニクラブ（仮称）を作るつもりです。（東京、森本信一）へ掲載の写真は送付された十一枚の中の一枚です。編集部）



の「太平洋戦争残虐記録」その他にも類似の話が載せられて居るが、今日発表出来兼ねる描写が多く、啓明社版、「ジュステイヌ」『ソドムの百二十日』等にも興味深い部分があるが、前戯を強制的に行ったものであり、こゝでは省略せざるを得ない。

子供の遊びにも見られる「擦り」も程度を越して行われれば、悶絶する程苦しい拷問となり、それはたとえ外見上、女主人に対する男奴隷のそれであっても、女の意志を無視して強制的に、執拗に施されれば、死に勝る責苦とも成り得るのであろう。

（おわり）

ある夢想家の手帖から

第百九 奴隷貿易

アフリカの黒人というと、どうしても米国南部や西印度に輸入された黒奴達のことと連想が及ぶ。厳密には南阿黒人とは種族が違うのだが。

奴隷貿易史に深入りするのは手帖の本旨でない。然し、白人による黒人の虐待にマゾ的興奮を感じる人は私ばかりではない筈だ（本誌上、川野京輔氏に「ベンガルの黄昏」「奴隷加虐」の文があったことを思い出す。これらはむしろサド的興味から書かれていた様に記憶するが）。そういう人達の為に、本項では米誌ライフ一九五六年十月一日号（海外版）から、ロバート・ウオレスによる絵入の説明を紹介して見よう。黒人分離政策に因む連載物の第一回の一部である。

巻頭グラビア中の口絵を見て下さい。

上の絵はもっと細長い絵の左三分の一を削ったものだが、「米国

沼

正

三

奴隷商人の許に向う一繋ぎの船荷達」と題して、次の様な説明文が附けられている。「西アフリカの内陸諸王国から連れ出された奴隷達は、繋ぎ荷コップルと称ばれる陸上護送部隊をなして、海岸の貿易場まで連れて行かれるのだった。十八世紀末において黄金海岸ゴールド・コーストにおける英国奴隷貿易場の最大なものが、この絵の右方に示される岬浜城キャプ・トワート・スカルであった。年間一万人に上る奴隷達が砂浜の上に建ったこの荒涼たる城塞で取引されたのだが、その多くは、ここに示される様な、一二〇哩奥地のアシャンティ王国から売られたものだった。女や温順な男は頸に綱を廻される丈で逃げられなくされるが、強い、反抗的な男は、碌々歩けぬほどに緊縛される。ある者共は重い木の棒で頸と頸とを連結され、ある者共は脚と脚とを輓する材木で拘束される。約九十日かゝった長い旅行中の奴隷の消耗率は六〇パーセントに達した。落伍した奴、鞭撻に堪え切れぬほど弱い奴は、繋ぎ荷の列から切り離されて、捨て殺しになった。左方の女のように（ここでは省いた部分）泥を沢山喰って自殺する者もあった。隊列の番人達は、奴隷を売りに出した王や酋長に備われたものだが、奴隷達と部族を

同じくすることも少くなかったに拘らず、殆んど慈悲を示さなかった。

岬浜城では、帆船を沖に碇泊させた米國奴隸商人達が、王や酋長の代理人と取引をし、買った奴隸に浜辺で烙印を押した（絵の右方、小屋の向うの焚火のところ）。十八歳から三十五歳までの健康な男女の一人の代価はラム酒一五〇ガロン位で、換算して約九〇弗に相当した。船荷を一杯に仕込めば、貿易商達は西印度諸島に向けて出帆し、ここで、奴隸の全部又は一部を売って、糖蜜を仕入れる。次いで、残った奴隸を処分する為に多分米國南部沿岸の港に一休みした後、彼等の故郷なるニュー・イングランドの港に帰って来る。そしてここで糖蜜を蒸溜してラム酒を作り出す。ラム酒を積んだら、再び奴隸船はアフリカに向い、かくして三角形航海を繰返したのである。この三角形貿易は、一七二〇年から一八〇八年に至るまでアメリカ海外商業の基本要素の一つだったもので、莫大な富を急速に築き上げた。帆船一隻は四千弗しかしないのに、三角形を一周すると四万弗の利益が与げられたのである。

次に下の絵の説明に移ろう。原色版の原図の様に、薄暗い船艙でうごめく黒い肉体や、黒人の流す赤い血の色やが鮮明でないのは残念だが、仕方がない。「西印度行き奴隸船上の生活」と題して、次の様な文章がある。「独立戦争（一七七六年）後、約二百隻の米國船が奴隸貿易に従事していた。その多くはニュー・イングランドから出た。ロード島のニューポート港で一五〇隻所屬していた。それらは単檣又は複檣の小帆船で、乗組員十ないし十二名、九〇呎位しか長さがなかった。然し甲板と甲板の間の狭い場所（絵を見よ）を利用して、平均二百五十人の奴隸を運搬し得たし、大型の船なら五百人も積んだ。奴隸達は普通一日の中十六時間は甲板間の場所にぎゅうぎゅう詰めされ、逐次一列に手足に枷される。女子は男子と別にされてる。明り取り兼換気用の舷窓は小さいのが十二あるが、一

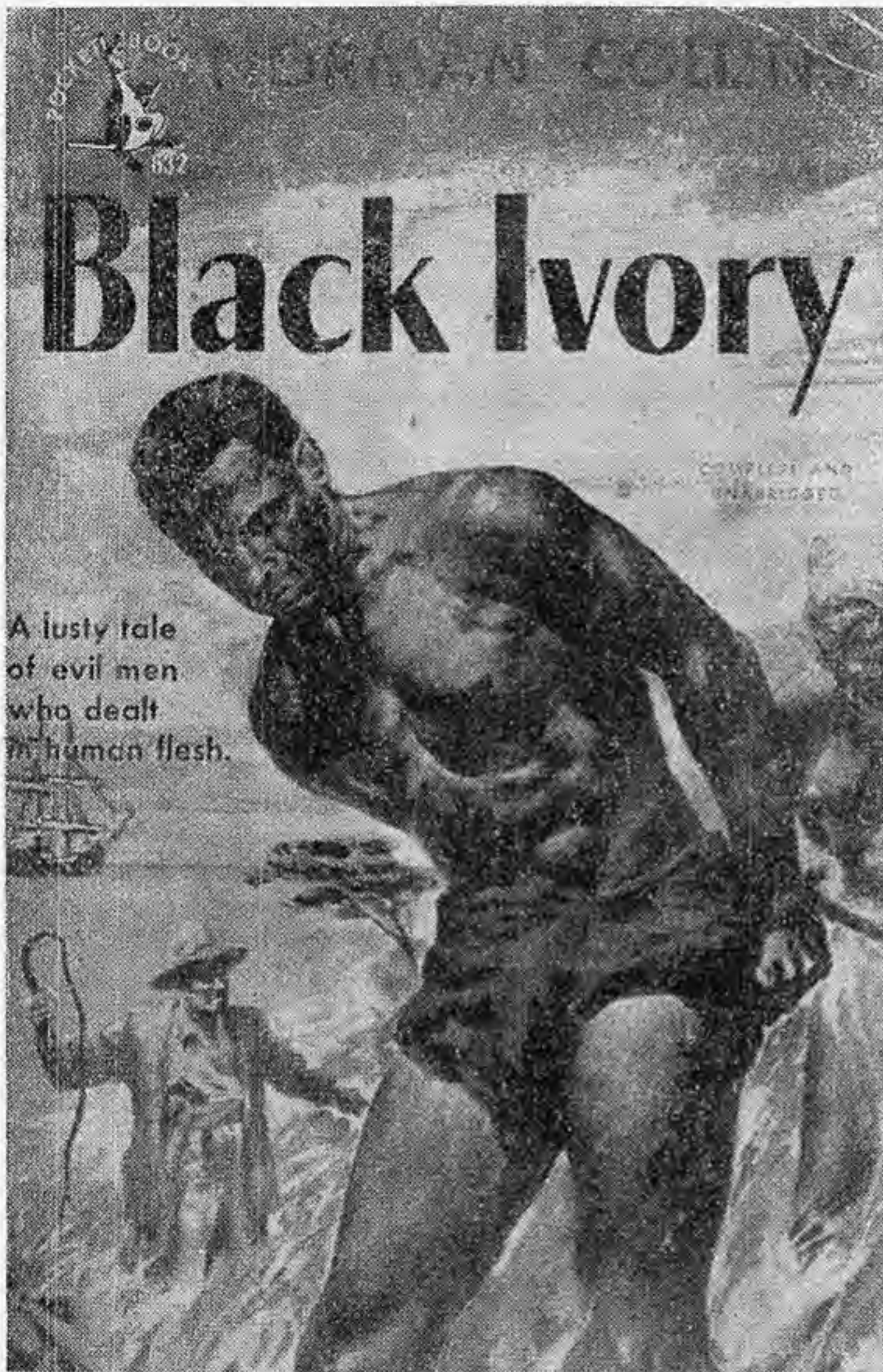
寸でも荒天（しげ）そうだと閉じられるので、内部の熱と悪臭は恐ろしいものになる。奴隸一人に割当てられる平均空間は巾一六吋（四〇糎）長さ五呎半だった。

奴隸が病気で死んだのでは、保険会社が損害を賠償してくれないので、船主も船長も、奴隸の死亡率を引下げることに努力を払った。然し、船体をいぶし、奴隸置場を酢で拭き、その飲み水を石灰で消毒するなどしたに拘らず、赤痢、痘瘡、一般衰弱で水中に投げ込まれた奴隸が少くなかった。又叛乱による損失もあった。（奴隸船の叛乱については、メリメの「タマゴ」その他読者御承知のこととが多かるうから、以下省略し、絵の説明文だけを訳しておく。説明は絵の左から右に移る。）「黄金海岸から西印度諸島に向う奴隸船上、上部甲板の上では奴隸達が、健康状態を維持するため鞭の下に運動させられている。その下の高さ三呎しかない甲板と甲板の間の場所にいる連中は自分の番が来るのを待っている。自殺防止は念入りに行われているが、左方の奴隸の様に網の隙目から海に飛び込む奴も出る。右の方に見えるのは餓死しようとして物を食わぬ奴等だ。これを防止するには焼けている石炭を唇に当て、のみに似た「開口具」を使って口を開かせ、馬の飼料にする豆を潰した食料をじょうごで注ぎ入れて食わせてやれば良いということが発見された。」

原本ではこのあとに奴隸市場でのせり売の絵が続く、説明文があり、更に次の号では私刑で焼き殺された黒人の写真が示され、又南部白人の黒人観が具体例で述べられる、といった工合で、この一連の黒人分離問題特集は、甚だ興味ある資料に富むことを附言しておく。

第百十 「黒い象牙」

黒人奴隸達が奴隸商人からどのような家畜的待遇を受けたかについて、いくら語っても尽きないものがあるが、ここでは、前項の



記述を補う意味で、ノーマン・コリンズの「黒い象牙」Black Ivory (アフリカ物産としての黒人の高価な商品性を象牙にたとえたのだ) から、少々引いておくことにしよう。ポケット・ブックにあり、入手は容易である。(挿絵は表紙)。

白人少年が偶然奴隷船に乗り合せ、奴隷貿易の次第をつぶさに見聞する。後にこのことで罪に問われ、死刑の宣告を受けようとする最後の瞬間、この貿易の黒幕だった貴族の化けの皮が剥れ、助かるという話だが、一番面白いのは、奴隷売買の場面である。

例えば、黒人を集めて入れてある仮屋に船長が見にゆくところ。

仮屋といっても建物の名に値するものでない。肩の高さに柱を建てそれに藁を葺いて長く屋根の様にしたもの。二列並び、その間に畑の排水溝と違いのない浅い溝がずっと堀られている。骨と皮ばかりの黒人達がこの低い藁屋根の下に坐っており、この溝から水を呑んでいる。全くの家畜扱いである。事実この仮屋の中は、手入の悪い牛舎が冬臭う様に臭うのだった。

船長は、家畜市場で檻を見廻る農夫と同じ様な態度で商品を検分する。彼はヒッコリーの木のステッキを持ってる。「このステッキを持ってるわけが初めて分った。これは、彼がこの人間獣達のそばに

寄って、一匹一匹突っついて見る為の棒なのだ。家畜商人はステッキで急所々々を突つく丈で必要なことを皆知るものである。スウィング船長がステッキの石突でグイと突つく時のやり方から見れば、彼は恐らく、突つかれる身体が感覚を覚えていっていることを忘れていたものだ……」

麻生和夫氏は昨年十月号の私宛の文で白人によって肉附を調べられる有色人家畜の姿を空想しておられるが、ここでコリンズの描く船長の検査ぶりは、氏の空想をさえ超えるものがあるようだ(コリンズは実在の資料に基いているのである)。肩の高さよりない屋根というのだから、その下では坐るか這うかしかできない。そんな所で裸で、下水溝みたいなものから水を呑んで、その前に立つ立派な服の遅ましい白人のステッキの先で肉を

突つかれる——考えた丈でゾツとして来るほどのマゾ的昂奮を私などは感じる。

次にもう一つ、船中で奴隷に与えられる食料についての前項のウオレスの文は簡単過ぎるので、この部分を補充しよう。

「彼等は、帰路に就くに当り、半分腐ったとうもろこしを幾袋も積み込んだ。これが人間家畜の飼料になるのだ。半分腐った？ 然り、既に醗酵していた。私の父だったら、豚にだってこんなものを食わせる危険を冒しはしない程、悪臭のする飼料だった。」これがかゆにしたものを奴隷に与えるのが少年の役目になる。「私はそれを注ぎながら、その間中はき氣をもよおした。どんなものか想像して呉れ給え。これを奴隷に与えるやり方も内容に劣らずひどいものだ。細長いかいば桶で蓋がなく、樋のようになったものの一方から注ぐと、丁度豚にやる残飯見たいに、段々流れてゆくのだ。だが餓死しかけた一群の畜生共の世話をしてやらねばならぬ身には、食器のことなどかまっていることはできないのだ。私が湯気の立っている雑巾バケツ(※)を下げ船艙まで行くや否や、畜生共は餌を欲しがってのどを鳴らし始める。然り、文字通りのどを鳴らす(whine)のである。……」

※註 雑巾バケツと訳したのは stop pail である。stop は台所や寝室から出る汚れ水で、pail は桶である。ここで汚水桶に飼料を入れて運んでいるのは、飼料専用の容器として使っているのではなく、家庭で豚に食べ残しをやる時に、台所から洗い流しと一緒にバケツに入れてゆくのと同様の使用法で、つまり白人船員には汚水桶として使用されているものが、黒人にとっては飼料桶になっているのである。そして、普通なら、寝室に置かれても、毎朝顔を洗ったあとの水を受ける位のものだが、狭い奴隷船の内部で、容器類もできる丈儉約されたことを考えると、この stop pail が夜分は白人船員の寝室内で chamber pot として使用されたと

考えても少しも不自然はない。勿論内容物は捨ててだが、かゆを入れる前に果して洗ったかどうか怪しいものである。

読みながら、残飯の入ったバケツを下げて豚小屋に近づく時豚がブーブー喜ぶ浅ましい姿が彷彿として来る。書いている少年(手記の体裁になっている)は、黒人に同情的立場をとっているのだけども、そこが白人の限界というもので、やはりこの連中を動物視しているから、至るところで人間家畜としての叙述が出て来るのが、私等にはこたえられないところだ。

こういう人間豚共の中に、たまに人間らしく、飢に堪えて自殺しようとするものが出た時、前項の下絵の右方にある強制飲食用開口具が豚を強制肥育する見たいに使用されたわけだが、大多数はむしろ、本項の右の描写のように、かいば桶に流し込まれる腐ったかゆを喜んで吸っていたのである。

この本は、機会を得れば更に詳細に紹介するかも知れぬが、ここでは、この位にしておく。

第百十一 今でも黒奴は売られている

こういう奴隷貿易は過去のことだと多くの諸君は考えておられるであろう。だがそうでない。成程帆船による三角形航海は疾うになくなったが、アフリカ黒人が商品として売られることは、この当時から絶間なく続いているのである。

手帖でも度々取り上げた、フックスとキントの共著『女天下』(本文はキント)の第十四章は「奴隷制」を扱っている。この本は第一次欧州大戦の直前に出た本で、資料はそれ以前になるが、第十四章では今世紀初頭におけるアメリカ黒人の奴隷状態が何頁にも渡って出ている。モロッコの都市マラケシュの大奴隷市は毎週三回宛規則正しく開かれていること、親子、兄妹の切り売りがいくらかも見られること、ベルギー領コンゴでは司政官の恣意が法律の代りになり、

大した罪もない黒人達に前代未聞の惨刑が科されていること、アンゴラあたりでは、道端の木に奴隷に売られていく途中の黒人を縛しめるのに用いた手枷足枷の古いのがぶらさがったり、市場に向けて行進中病気になって斧で殺された黒人の死骸がころがっていたりするものが珍らしくないこと、アンゴラの農場で働かされる黒人労働者は事実上奴隷であること、家内労働も、主人の思いのままに売買し取り扱える完全な所有物たる奴隷達によって遂行されていること、夜になると河馬鞭(「ヤプー」)の第七章一の註スジャンボクと同じで仕込まれる新入奴隷の悲鳴が耳を劈くこと、奴隷取引が余り盛なので「ユーベルト・ピナル」將軍が語っている様に、アンゴラでは家畜飼育と同じ様に、市場用奴隷飼育が行われている。モサメデス在のある婦人はある飼育場を経営していた。他の飼育場で馬や牛に仔を産ませ繁殖させる様に、この飼育場で彼女は奴隷を大規模に繁殖させていた。こと、スーダンや赤道アフリカでは奴隷狩が行われ、獲物は一部がサハラを越えてモロッコへ、一部はトルコ領北アフリカへと送られていること……等々巨細に述べられている。

右の中特に飼育場を経営していた婦人の記事には、ドキリとさせられる。アンゴラはポルトガル領だから、南欧型のカルメンのような美人が想像できるが、そんな美人によって奴隷飼育場が作られたというのが素晴らしい。奴隷狩が人間野獣視の極致とすれば、奴隷飼育は人間家畜視の極致である。前者は一応人間として育ったものの人間性を否定するのだが、後者では初めから人間性の否定された家畜として生れさせるのだ。しかも市場用である。数の多いほど良い。恐らく種附の頑強な男奴隷一人に数十人の女奴隷の割合で、ひっきりなしに番わせ、女の腹を膨ませ続けるのだらうが、白人女性に鞭で強制されつつ、クロ／＼を演ずる連中ほど家畜的な存在が又とあらうか。次々に生れて来て這い始める子供達を、この女主人はどんなに扱っただらうか。その中の一人が可愛いとて仔犬と同じ

様な愛玩動物にすることもあったらう。彼は仲間から羨まれたであらう……。思わず脱線してしまった。本筋に戻るが、とにかく、この様に、二十世紀になっても黒人奴隷売買は依然存在していた。大戦後国際連盟では、これを人道上の問題であるとして採り上げ、一九二六年即時禁止が決議された。

そこで黒人奴隷商達は、皆地下に潜ってしまった(前記した二十世紀初頭の状態すべてが公然だったのではないが)。やり方が陰険になつて来た。然し依然として存続しているのである。それが一九五六年ジュネーブ国連経済社会理事会において問題にされた。

そういうレッキとした事実と知らねば小説的虚構としか思えない様な方法で、年々、沢山の黒人がアフリカからアラビアに輸入されて奴隷商達の懷を肥しているのである。

奴隷商の一味として人浚いを業とする輩はナチス残党のドイツ人が多いそう。手帖第七十九項でも指摘したような極端な人種差別観を教えられたナチスの若者達が良心の苛責なしにこれに従事するのは不思議でない。

比較的穏かなやり方では、人浚いは回教の宣教師に化ける。御存じのように回教徒は一生に一度はメッカ、メジナの聖地を巡礼すべきものとされているので、これを利用して、偽物の宣教師達が、中央アフリカの回教徒部落を歴訪し、聖地巡礼団を募る。トラックで連れて行ってやるという甘言に欺かれた善男善女が相当数集まるとこの真黒な一団を載せたトラックはエジプト領スーダンから紅海沿岸に出る。対岸はアラビア半島。聖地近しと喜ぶ黒人達は一夜海を渡ってアラビアの寒村に「荷揚」される。と、何たることぞ、土地の官憲は忽ち彼等を「不法入国」の廉で正当に逮捕してしまう。

すべては筋書の中だ。メッカやジッタあたりの男が彼等抑留者の身元保証人となつて、官憲の手から、合法的にこの黒人達の身柄を引き渡される。中央アフリカからアラビア半島まで、こうした見事

な奴隷街道スレイブ・ロードが通じているのだ。

かくして奴隷商人の手に落ちた黒人達は三ヶ月間奴隷としての訓練を受ける。沈黙と服従、この二つを仕込まれるのだそうだ。自分から口をきかぬこと、命ぜられたら、そのとおりにすること、マゾヒスト好みのするところだが、もっと私達を驚かせ、喜ばせるのは、その訓練に当るのはアルメニアの女性だ、と報告されていることである。アルメニアは現在ソ連圏の南端、トルコとの国境になる所だが、コーカサス地方に属し、アリアン族の原種がここから発生したという説もある位、古来から美男美女の多いので有名な所である。(谷崎潤一郎の「魔術師」に、理想的な超凡の美貌を叙して「強て比較を求めたら、彼れの人相や骨相は、世界中での美人の産地と云われているカウカサスの種属に近い所があるかも知れません」とあるアルメニア人はこのカウカサスの種属に属するのである。)このアルメニアの美女が黒人達の女訓練師になっているという事実は、忘れられぬところだ。こうして三ヶ月の訓練を終えると、奴隷市場に出される。十五歳以上より十五歳以下が高価で、十五歳未満の女子は邦価三十六万円位、同じ男子だと十五万円位だということである。回教徒は一夫多妻が法律で認められているから、女奴隷で美貌の者は、今でもアラビアン・ナイトの時代と同様の取引対象になる訳なのだ。

ジュネーヴで報告されたところでは、こうしてアフリカから売られる黒人の数は年間実に三万人に及ぶと云う。公然たる奴隷貿易の時代ではない、非法法の密貿易商品だということを考えれば、この数字は驚くべきものと云わねばなるまい。

然し、三万人の全部がこの方法で集められるのではない。昔ながらの奴隷狩も行われる。地下に潜ったといっても文明に遠い暗黒大

陸の中では、この程度の公然性があるのだ。J・シヤンヌブル及びJ・フランス両氏の文(知性誌特集「現代の謎」に所収)の中には、一九五四年に南モロッコのイグジ丘陵(少し詳しい地図を見るとサハラ砂漠の東端、回帰線の北に Tadj Desert と出ている。丘陵地帯もある。)で実見したところが述べられてある。先ずタマリンド(熱帯産の常緑喬木)で柵を結び、そこから近辺の部落を奇襲し狩り立てた黒人達を柵の内に追い込む。野獣を狩るのと同じ奴隷狩なのだ。男は去勢して、男女間の悶着を防ぎ、同時に温順化により叛乱の危険を防止する。柵の中に百人(百匹というのが本当かも知れぬ)位集められると、熱鉄で烙印を押し、三、四人宛鎖に繋いで目的地に送り出す。サハラ中央チベステイ山脈を越えて、スーダンの方へ連れてゆかれる。こうしたやり方で集められる黒人も、スペイン領、フランス領アフリカ各地に相当あるらしい。フランス政府の現地官憲が、かかる奴隷獵人に氣脈を通じて取締に手心を加えていることが、議会などでも問題になっているという。

「女天下」の文と比べるとモロッコからスーダンへと方向が反対になっている点に注目されるが、半世紀後の現在も、依然としてサハラを横断する奴隷の隊列(即ち前々項にいわゆる繋ぎ荷^{コップル})が存在している事実には変りはない。まことに驚くべきことといわねばならぬ。

〔註〕『手帖』(第百九 奴隷貿易)の項の参考として筆者沼正三氏から提供された資料を本号の口絵として掲載してありますから、御参照下さい。 八編集部

切 腹 随 想

中 康 弘 通 氏 に 寄 せ て

須 藤 律 夫

切腹の研究家として夙に奇ク誌上を飾り、毎回その正鵠を得た発表に秘かに私淑していた私は、最近突然のお便りを戴いた。実のところ氏の研究発表が誌上に途絶えてから一沫の淋しさを感じ、それが卸って拍車となつて、私は殊更に関心を深めるようになるのだつた。お手紙によれば、多病にて執筆は困難との事、私は氏の御病氣の速かなる恢復と、再び誌上に御研究発表の日の到来を、切に待望している。

×

×

×

何時だつたかの奇クに、氏の研究発表の一環として「腹切松」と言うのがあつた。所は三浦半島、油壺の方ではなかつたらうか。先年私は恰度同方面に向いたので時間を割き心当りを調べて歩いたのだが詳かでなく、尤もそれは時間不足が原因だったかも知れないのだが。何れにせよ油壺は三浦一族滅亡の地であり、当時土地の観光案内には次の様な史実の一端が記されて居り、私は何等かの関連があるのではないかと思う。

◎油壺湾 三浦一族滅亡の哀史によつて名付けられたと言われ、新井城落城によつて一族郎党この入江に身を投じた。老松の梢越しに見える油の流したような静かな入江。

◎新井城跡 引橋を大手とし、橋を引いて外敵を防ぐ油壺一帯の本丸で、居館と自然の

要害、この結合は本邦城廓史上珍らしい。三浦十一代の城主、三浦導寸の時、小田原の北条早雲に攻められ籠城三年にして落城、導寸は

打つ者も打たる者も瓦塊よ

砕けて後は元の土くれ。

又その子荒次郎は

君が代は千代に八千代によしやよし

現の中の夢のたわむれ。

と辞世を残し、切腹して果てたという。

◎三浦導寸父子の墓 天明二年七月建立、小網代湾に面する松林の丘の上にあり、村井弦齋、『桜の御所』は、武勇稀なる荒武者と小桜姫の悲恋物語——とある。

切腹と地名、事物の結びつく話は時折見聞する事であるが、奥州三春地方には次のような伝説が残されている。

◎三春の猫騒動、腹切り梅の由来

奥州三春城は秋田俊季が正保二年五万三千石で、常陸から移城、以後二百二十余年の長きにわたり、明治の初めまで城主となつていた。このように城主の変遷八回、碌高も五万石から三万石の間を浮き沈みする小大名だけに内争いも激しかったようで、三春猫騒動、腹切り梅の由来がある。秋田家二代輝季の時、正室と愛妾小夜との間にそれ／＼一子づつも上げた事から跡目相統争いが表面化し



三浦半島油壺湾を望む（筆者撮影のもの本文参照）

た。この時、城代家老荒木某が小夜と相通ずる仲となつて居り、嫡子を毒殺。お守り役頭慈野多兵衛はこれを恨み、悪人荒木と小夜をなき者にせんと計ったが果さず、遂に紫雲寺境内で切腹を仰せつかった。多兵衛は腹を切

ろうとする時、日頃我が子のように愛しんでいた愛猫「タマ」を呼びよせて『汝、精（心）あらば七度生れ変つて我が仇を討て』と語り乍ら、胸から流れる血を猫の口に含ませつつ息絶えた。時に師走の四日。以来「タマ」は多兵衛の志をくみ、四のつく日は、夜な夜な悪家老と小夜の枕辺に現われては悩ました。為めに荒木は狂死、小夜は殿の寵愛を一瞬にして失い、淋しく座敷牢で死んだと云う。

以上は、昭和三十年十一月十三日号週刊読売「日本の城」からの抄録であるが、之では一寸、多兵衛の切腹と腹切梅との関連が詳かでない。然し、筆者は同じ伝説を、曾って何かの本で通読した事があり、その時の記憶によれば——多兵衛は愈々切腹となるや、紫雲寺境内の梅の根方に切腹の座をこしらえ、古式通り臍下一寸を右から左に美事に掻き切り、鮮血のほとばしる傷口から臓腑をつかみ出すと、それを愛猫に喰べさせた——とあった。因に三春の名の起りは、梅、桃、桜が初春の訪れと共に、一時に咲き競うによると云われている。

切腹の型で女は化粧をし——

昔の川柳に、こんなのがあった。洋髪全盛の現代では一寸ピンと来ない恨みがあるが、之は明治から大正の初期にかけて、所謂日本髪全盛時代、婦人は皆双肌抜きとなり、両の乳房もあらわに、恰度切腹の恰好でお化粧をしたものである。切腹の種類？とでも云おうか、その形態にも様々あり、普通の一文字の切腹から、豪勇を以って鳴る十文字腹、せわしない派手な立腹、又形式的な扇子腹、（扇子を腹切刀に見立て、三宝から取り上げた瞬間介錯人が刀を振り下す）かと思うと落ちて悠々と、切腹の醍醐味（嗜虐味）を味うかのようなすだれ腹（臍窩の上通り下通りを、三筋、四筋と一文字に切り割いて行く）等々、又情理的には所謂「詰腹」を初めとして、商腹（あきない腹）、隠腹、恨み腹など多岐に涉っている。就中十文字腹は古来数多くの実例があり、筆者も勇壮なものとのみ考えていたが、最近或る本を読んだところ、それには之が「恨み腹」であると出ていた。然しこの事に就いては何れ稿を改めて書く事にして、今日は次に掲げる抜萃の中から、宜しく読者の御判断に委ね度いと思う。

（週刊朝日、三十一年二月十九日号、立野信之著「明治大帝」二十八回より抜萃）

前文略——。それを見た河上弥市は突然、

『諸君、われらの命運も、すでにきわまった

！』と、大声で呼ばわった。『これ以上斬りこんで、百姓ばらの竹槍に死するよりも、一同じさぎよく自決して果てよう……拙者は身に薄手を負ったが、義を同じくし、死を同じくする喜びに、願わくば一人／＼諸君の介錯を致そう……諸君、いかがでござるか？』それはもとより望むところ……では河上殿、介錯をお願いいたす！』長野熊之進が声に応ずると共に、はやくも岩上に恰好な場所をみつめて端坐し、双肌ぬぎとなって刀を脾腹に突きたて、『百姓ども……武士のはらわたをようつくみろ！』とわめくなり、腹一文字にえぐった『長野殿……見事ござる……』河上は背後に廻って、大刀を振りおろした。長野の首級は、鮮血のほとばしりとともに、首の皮膚を一寸ばかり残して、がくりと落ちた。残る人々も、それぞれ岩上に思い／＼の場所を選んで端坐し、『河上殿、介錯をお願いいたす……』『お願い申す……』と次々と割腹自殺をとげた。河上は一人／＼古実をつくして、丁寧に介錯した。——あとで検視すると、河上が介錯した十二人のうち一人だけ首と胴が離れていただけで、あとはみな古実通りに、首の皮膚を一寸ばかり残してあった、という。一番最後になった戸原卯橋は（中略）『では河上殿……お願い申す』と脇差を腹に突きたてた。河上は背に廻って、介



錯した。それがすむと、河上は双肌ぬいで白無垢の片袖を引裂き、やはり辞世の歌を血書した。（中略）書き終ると河上弥市は声をあげて朗々と読みあげた。それから、腹十文字に掻き切り、突立って、その刀の切先を口にくわえた。と思うと、高さ三丈ばかりの岩の上から真逆様にとび落ちた。河上の身体が地

面に墜ちたとき、口にふくんだ大刀の切先は後部をつきぬけていた。山伏岩を取巻いていた農民どもは、先刻から十二人の切腹とその介錯とを次々と見せられた上に、いま年若い隊長河上弥市の壮烈な自決を目撃して思わず『——ほうッ！』と溜息をつき、『——見事だ！』と、喝采のどよめきを上げた。（後略）

原文のまま)

又(週刊読売三十一年九月三十日号。中山義秀著「戦国秘巻」第六回より抄録すると)

前略——これまで待っていた死出の旅路、

覚悟の上で肌は清めてある。今はのきわに戯れ言を片身に残してまいる故、硯、料紙をいだされい。酒、肴も忘れまいぞ」二人は注文

の品々を、同心等に命じた。後、頼重にむかつて云った。「酒は仕度してあるが、道場なれば肴はござらぬ」「これはしたり、肴がないとな。しからば、武田方では肴がのうて何で腹を切るのじゃ」「肴がなければ腹が召されぬと云わるるか」頼重は右手の拳を握って、腹を切る恰好を二人に示し乍ら、

「まさか、このごし丈で腹は切れまい。我方では脇差の事を、切腹の肴と申す。其方達が見るように、我は無腰じや」飯田と丸山は頼重にそう云われてあつと恐れ入り

「なるほどこれは不調法を仕りました。さつそく肴の仕度を致させます」彼等は虚をつかれて、にわかに態度をあらためた。頼重から太刀も脇差も取り上げておいて、腹を切れとは大きな失態である(中略)

「草は枯れても、根は残る、残った根から、新たな芽をふこう」彼はそれを最後の希望にして、自分の短い生涯を今宵葬ろうとする。その悲しみと怒りが、彼の切腹に爆発した。頼重は、末期の酒を、こころよく飲みほすと

脇差をとって腹にたて横十文字に切りさき、三刀めに両手をもって右の乳下に突きたて、茶碗大の肉塊を抉りとり、そのまま仰向けにどんと倒れ、しばらく苦悶して息が絶えた。血腥い事に馴れきっている飯田や丸山も、その凄絶さに思わず面をそむけたほどである。(後略原文のまま)

× × ×

切腹に用いる刀は、正規には所謂「九寸五分」と称する小脇差(筆者註、鐔なしにして柄をつけ、切先五分ばかり出して杉厚紙二枚を逆に巻き、ひだをひとつ付けて、こよりで三ヶ所くくっておく)であるが、その時々状況によっては色々と変り、刀剣類を除いて日本剃刀を初め、西洋剃刀、ナイフ、切り出し、果物ナイフ、安全剃刀の替刃等、又珍らしい例では硝子の破片、裁断用の鉄などがあつた。以上の中、裁断用の鉄に就いては筆者も人伝てに聞いた事であり詳かではないが、昭和の初年、東京目黒区内の出来事で、或る婦人が裁断用の鉄の片刃を、自分の臍の穴に刺し込み、その儘布地を切り割くように割腹して絶命したとか、又果物ナイフによる切腹に就いては、曾っての二、二、六事件に加盟した河野寿元陸軍航空兵大尉の自決に就いて、日本週報三月号に、次のような詳細な記事が載っている。(前文略)

「私は武人として立派に切腹して死に度いと

思います。だが、拳銃も軍刀もいまの私の手許にはないのです。せめて短刀でもと思いましたが、それありません。あるのが間違いかも知れませんが。しかし幸いにも、見舞いに戴いた果物が沢山あります。ですから、果物ナイフがあつたとしても、なんら不思議はないと思います。誰にもご迷惑をかけることもありません。……どうか果物ナイフを……」

(中略)死んで行く身が、刃物の種類にまで心をつかい、いささかでも累を他に及ぼすまいとする心根に、押えていた悲しみが堰を切ったのか、姉のうつ伏した面に涙が光って流れた。そつと面を上げた弟は、

「私は武士の作法にしたがつて、立派に割腹して死ぬ覚悟です。しかし負傷のため右手の力が充分ありません。若し腹を切り損じていましたら、どうかお許し下さい。(中略)

入院以来河野に附添っていた病室付の女中がいた。この日は朝からなにか予感があつたらしく、終始、河野の身邊にあつて離れなかつた。三時すぎだった。女中がトイレットに立った隙に、河野は白衣を素早く軍服に着替えて、縁側から病室を脱け出た。病棟の横手の低い垣根を越えて、左手の山林に入った。(中略)その松の根元に端坐した河野は、遙かに東方を拝し、最後の黙禱を捧げた。午後三時半頃であつた。上着を脱いだ河野は、用意の果物ナイフを持って、武士の作法にのつと



灰色のノート

(II)

—ある浣腸マニアの日記—

矢崎 竜 一

り、下腹部を真一文字に割り切り、返す刃で頸動脈を突いた。一刀、二刀、さらに数刀を加えた。鮮血が拳を染めて軍袴にしたたり落ちた。その血に掩いかぶさるように、やがて河野はガックリと前に崩れ折れた。(中略)

再びガーゼを面にかけて、義兄は静かに掛蒲団をはいだ。外科医らしく、手際よく咽喉部の傷口をあらためた。すくなくとも五、六回

は突いたのであろうジグザグの傷口が無惨である。さらに白い下着を排して、腹部を開いた。下腹部に薄く真一文字に見事な切創がまざまざしい。ジツと見詰めた義兄の口から『よくやった』と一言が、感極まったように洩れた。『立派に武士らしく切腹して死にます』と約束した弟は、約束通り立派に死んでくれた。武士の最後を確かに見届けた満足さ

に、二人はあらためて合掌を捧げた。(後略
原文のまま)

× × ×
以上で一応この稿を終るが、十文字腹が、恨み腹であること、又腹切刀を「肴」と云う事等に就いて、筆者は更に研究して見度いと思う。

—完—

△水母はすきとおった天鵝絨のようなその花卉をそなえて海の葵色の蘭のようではないかV
(ブルースト)

七月九日

ヴェニスに死んだタッチオ少年のそれよりもまた感情の混乱のうちに老教授のもとを去っていった美少年ローラントのロマンよりもVを想う俺の心を戦しく打つのは、マルセル・ブルーストが叙述する「ソドムとゴモラ」のなかのある美しい一片なのだ。

△白い枕の上に渦を巻いたあの髪を見るだけで、その夜、若しもこの若者がやかましい両親の家を脱け出すとすれば、それは彼の意志如何にかかわらず、女を求めに行くのであるということとはわかるのだ。彼の情婦が彼を

罰しよう、とじこめようと、翌日この半女性 L'homme-femme は、恰も朝顔が鶴嘴か熊手のあるところへ蔓をのばすように、どこかの男と一緒に手段を見出してしまおう。この男の顔の中に普通の男性に見られないようなわれわれを動かす繊細も美しさや、優美さや、親切さの中の自然さなどを感じ嘆しながら、何故我々はこの若者がボクサーなどを求めると知って悲しむのであろうか？これは同一の現実の二つの異った様相なのに……。

何故ならこれは自然の無意識的な見事な努力、すなわち性の自己認識をあらわしているのだから。性の欺瞞にもかかわらず、社会の或るはじめの謬りが彼から遠くに置いたものの方へ脱け出るための告白されぬ試みがあらわれるのだV（失われた時を求めて）

七月十日

△灰色のノートV

白い、まっ白い水仙のような微笑

Uの想い出 I

Uは浣腸の好きな少年だった……。

×

△夜、西銀座のLに行く。Uと遊ぶV

俺のポケットの手帖にこう記された「ホモ」の酒場Lの二階の夜は、それが例え「さ

わやかな」と云われる初夏の季節であっても通りに面した二階の、窓という窓にはパール・ブルー色のブラインドがおろされ、殊更暗くした室内には紫煙の渦と押し殺したような囁声に充ちていた。

ここで俺はTに美少年Uを紹介されたのだ

トイレ傍の^{わき}小部屋

二坪程のこの小さな遊び場は客席からの延長として、俺たちの特殊な友情の交換をする場所なのだ。夏の西日の熱気がいつまでも残っている蒸し暑い部屋。そしてここを利用する多くの若い男たちの体臭と汗のにおいに融けたオ・デ・コロンの香が壁から、カーテンから粗末なベッドから発散する部屋。そこには微かにトイレからの臭気が漂っていることさえあった。ウイスキーの酔いにまかせて初めて俺がU少年との inter femora にふけたのはこの部屋なのだ。

×

ある晩、Uはコバルト色の小さなポストンを持って来た。俺の une introduction penis in anum の後で、彼は俺に浣腸を要求した。「僕のボスクを開けて」

Uは彼のバッグを指さした。中には 30CC のガラスの浣腸器とアメリカ製の Fleet^{フリート}・^{エネマ} enema が用意されていた。

白灰色のポリエチレンのフリート・エネマ

の薬瓶は、瓶の蓋をはずして、長い嘴管のついたもう一つの蓋につけかえると、それがそのまま150CC入りの簡便な浣腸器に早変わりするものだった。俺は愉快になってUの尻へ薬瓶の空にしてやった。

それから屢々彼との inter femora の前後に浣腸が繰り返された。時には俺やTもUの被治者にされたりした。Uはその夜の気分によってどちらの器具を使用するかを決めたりしたものだった

七月十二日

D'autres anoérotomanes exécutent des jeux excitants avec l'irrigateur et se sentent comme ranimés après une selle abondante; ils conviennent que la défécation est la plus grande jouissance de leur vie.

シテエケルのこの一節は俺に思わず赤面させた。これ程はつきりと、浣腸マニアの性格を掴んだ表現を俺は今まで知らなかった。

浣腸器 Irrigateur など、シテエケルは言う

n'est bien souvent qu'un objet destiné à provoquer la volupté. Pour e'homme comme pour la femme, il sert, sous le manteau de l'hygiène, à déterminer des excitations mécaniques. Des individus nombreux considèrent l'irrigateur comme un

objet d'AMOUR : il ne me paraît donc pas
surprenant de voir cet instrument jouer
chez les onanist et chez les fétichistes un
rôle de premier plan. (「自慰と同性愛」P
.88)

七月十三日

Uの想い出 II

ある夜、Lへ行く前に立ち寄った喫茶店で
ウィスキー入りの紅茶をのみながら、Uは俺
にこんなことを言った。

「僕はね、龍ちゃんには何時だって受動的な
ペデラスティだね。けど、僕はそれで満足な
んだ。これが僕の運命かも知れないや」

Vはその時、今まで誰にも話したことな
いという彼の短い一生のごく初めの頃のこと
を聞かしてくれた。それは彼の永久に未完の
小さな物語のプロローグを。

一人っ子の僕は、死んだママにとっても可
愛いがられていたんだ。きれいなママだった
……。でもね、僕のママの想い出には、全然
恥かしいことなだけれど浣腸がついている
んだ。僕の小さいときからママにはずいぶん
腸されているんだ。今でもよく憶えているが
ママは僕が朝目を覚すと、便器をもって来て
僕のベッドの下に置いて、よいこは沢山うん
ちをするのね、と云って部屋を出て行くんだ。

よい子の僕はママの姿が見えなくなるとベッ
ドからおりて、この真白いきれいな便器にま
たがって思いどおりの調子をつけて楽しく排
泄する。そして、その中に盛り上った自分の
大便を、なにか僕の立派に創り上げた芸術品
でも眺めるように観賞したものだった。きた
ない話で、ごめんね。だが僕のよい子も大き
くなって来ると段々それが馬鹿らしく思えて
来ちゃったんだ。あの快的な調子をゆっくり
と楽しんでみたいと僕はいつまでもお腹の中
に溜めておいて、すぐにはママを喜ばせない
ように、そしてなるべくママに悪い子になっ
てやろうと決めた。

冬のある寒い朝、僕はいつものようにベッ
ドの温みからぬけ出すのが億劫でたまんなか
ったの。ママが再び僕の部屋に入ってきたの
で僕は「へえい、もうすんだよ、ママ」と言
ってやった。その日のママは、ちよつとかが
んで僕の便器の蓋を取ると、こわい顔してに
らむんだ。

「アキラ、はやく起きて、便器にかかりなさ
い。坊やは」と云っても、僕もう小学校に行
っていたんだ。どうして何時もママにうそを
つくの」

僕は知らん顔をしていた。ママは僕がいつ
までたっても起き出そうとしないで本当に怒
っちゃった。

「アキラはすっかり悪い子になったのね。じ

やあいいわ。ゆっくり寝んでおいで。浣腸し
てあげるから」

布団をうしろからママにまくられた時、僕
はいやがって暴れ廻った。僕がいくらおこっ
てもわめいてもママは絶対に許して呉れなか
った。僕は泣きながらママに浣腸されちゃっ
たんだ。次の日朝からは、僕は毎朝ママに浣
腸をされるようになった。浣腸器がお尻に挿
されることとおなかが浣腸で痛くされるのが
僕にはとつてもいやでいやで堪えなかつた。
その頃の僕はママに両脚をしっかりとつかま
えられて強制されたものだが、だんだん慣れて
来ると、僕は朝の浣腸が妙に待ち遠しいよう
になって来たんだ。それは毎朝僕を訪れる美
しい恋人を待つ楽しい期待で、僕は目を覚す
と庭の植込の明るい緑を眺めるのだった。

浣腸器を持ったママが部屋に入ってきたと
僕は急いでベッドに腹ばいになる。そして枕
に顔を当てて両手をだらんと敷布団の外へた
らしているんだ。僕を静かに愛撫するママの
横顔はまるで仏様のような柔和な微笑がただ
よっていた。だが、僕のお尻を揺るママの
指にきゅつと力が入ると、もう僕は浣腸され
てるんだ。

ママはきつと僕は浣腸するのがたのしくて
たのしくてしよがなかったんだね。その時の
僕は浣腸が好きになったのかママが好きなの

かすっかり解らなくなっていたんだ。けど、赤いゴム球のついたスポイトをママに使われると、僕はこの浣腸が嫌いになった。スポイトってやつはね、僕の浣腸が済むと、やれやれと言ったように、ゴム球の中へもどって来る空気がシユウ、シユウといやな音を立てるんだ。

「僕の浣腸の思い出は、結局はママの美しい顔につながっているんだと、僕は信じている。僕はあの死んだママが堪らなくなって来ることがあるんだ。ママがなつかしい。これが僕の本当の気持ちだ。龍ちゃんには僕のこの気持ちをよく解って欲しいんだ。」

ウイスキーのせいで興奮したのかUはここまで話ると、卓子^{テーブル}につつ伏してしまった。そして「僕は女になりたいよ。女になりたい」とくり返えしつぶやくUの肩が微かにふるえていた。

その夜は雨が降っていた。

UはダスターコートでLにあらわれた。コートをぬいで俺のところへやって来るUは、黄色いポロシャツにデニムのズボンをはいていた。そして彼のゴムの半長がぬれて、灯に黒く光っていた。

七月十四日

パリ祭。

パリの裏町。場末の酒場で安酒をおおって今夜も又暗い人生を過している倒錯の若者たちも居ることだろう。

△浣腸器なしには生きられぬ男V

これは広場恐怖症のアダム君の場合だ。

彼は摂護腺^{アン・プロステタ} La prostate のマッサージによって彼の肛門^{アン・ノロ・マネ}性慾の本能を一時的に満足させていた。アダム君は街や広場に対して恐怖感をもっていたが、この恐怖とは、実は彼の同性愛への慾望の表現を意味した。彼が街において感ずる不安は謂わば同性愛本能に対する安心なのだ。彼はいつも油をぬったガラス棒を挿入する習慣を持っていた。それを行った時に高昂するほどに彼の異性愛の経過において、彼のオルガズムは印されなかった。彼は浣腸器なしには生きてはいられなかった。じりじりする不安に辛くなって来ると、彼は自分で自分に浣腸をかけた。そして浣腸後に彼はいつも心地よい弛緩と平静さを取りもどすのだった。(シテエケルの観察例No.18)

七月二十日都会。それはあらゆる悪と偽善の交錯している灰色の世界だ。倒錯の濁りきった生活と憂鬱^{メランコリー}な人生を俺はこの芥々^{シニ}した大都会の一隅で送っている。まるで larvée のように。

俺は俺の煤に汚れきった怠惰な精神と肉体

とをこの七月の陽にさらして無意味に汗まみれになっているのだ。そのやるせなさ、辛さは俺はウイスキーの酔にまぎらわしているのだ。俺はウイスキーのグラスの中に海を見た。海が恋しい。青い海が。

あのぎらぎらと輝く七月の太陽の下で俺は浣腸やソドムのすべてを忘れ真夏の焼けつく海浜を全裸でかけ廻りたい。その後で広い冷たい海に飛び込んでいって、俺は彼女のふところ^{ところ}にじっと抱かれてみたい。

俺は海へ行こう。(未完)

僕はこのノートの第三章においてTのいる某海岸の風景(灰色のノートIを参照)とたまたまその地の山寺で読んだ天海蔵叢山本の稚児灌頂について紹介し、最後の第四章において若い僕たち浣腸マニアの蠱く倒錯の姿をもう一度ふりかえって見たいと思っております。

しかし僕のこの生きものの日記は、現在の僕の構想を筋書どおりに運んでくれるかどうか疑問です。同好のマニア諸兄弟の温い友情を期待して。

矢崎龍一

x x x x

△ 創 作 ▽

L T 商 会

佐 川 増 夫

(一) プロローグ

一仕事の検査が終って、やっと上陸した時には、もう日がくれて港町にはネオンが輝きを増していた。

独身の私には、久しぶりの上陸ではあったが、迎えに来る者もなし、待つ人も居ないアパートに急いで帰った所で仕方がない。南京町で夕食でもと、身の廻りを入れたトランク一つをぶらさげて、いやに生暖い風の中をゆつくりと足を運んだ。この事が私の生活を大きく変える糸口になろうなどとは夢にも思わ

ずに。
ふと通り過ぎの男が立止って私の顔を見詰めている。私も一瞬立ち止り、どこかで見たような奴、と思ったが一寸、思い出せない、行き過ぎようとする声かけられた。

「失礼ですが、佐川さんじゃありませんか」
「ええ、私は佐川ですが」

「あゝ、矢張り佐川君か、僕田口です。ほれ高校の時松田先生のクラスで一緒だった。」

そうそう、そう云われて見れば、たしかに田口だ。田口とは高校時代の三年間と一緒に過した仲だったが、特に親しくしていたわけでもないの、見それていたわけだった。

「しばらくだったナ、何年ぶりかな、ま、そこらで一杯飲みながらゆつくりと話そうや」というわけで、とつつきの中華料理店の二階に上った。

クラスメートのうわさやら、先生の悪口やら、一しきり話はずんだ後で、田口が改めて尋ねた。

「君はたしか医大へ行ったんだっけね」

「うん、まあどうやら医者様になったんだ

けれど、色々嫌な事件があつてね、今はS汽船の船医をやっているんだ。医者というよりは、船乗りと云った方が、いいくらいのもんだよ。」

「ふうん、そうか、それで、いやに日焼して真黒い顔をしてるってわけだな。しかし、どう？ 船医って面白いかい。」

「うん、まあ始めのうちは面白かったな。もとく船は好きだったし、香港、シンガポール、コロンボ、ボンベイ、といった工合に、東南アジアが主だったが、どこへ行っても珍らしくってね、それに航海中だって、何しろ厳丈な船乗りばかりじゃ、病気になる奴なんかいないし、暇にまかせて勝手なことをしていたよ。ま、一寸した天国さ、しかし、どうもなんだな、近頃は少々飽きて退屈して来たって所が本音かな。それはそうと、君は今何

をやっているんだ」

「ふふふ、当ててごらん？」

「そうだなあ、サラリーマンでは無さそうだし、商売をやっているようにも見えないが、君経済出だろう、何かなあ」

「ふふふ、一寸ばかり変った商売なんだ。何んて云うかな、特殊高級玩具製造販売貿易業とでも云ったらいかな、ふふふ、その支配人って云う形なんだ。どう、君、船乗りが飽きたなら、僕の所で少し手伝ってくれないか、一寸面白い商売だぜ。」

「医者が玩具屋へ行っても、仕方がないじゃないか」

「ところが、どうしてどうして、そのお医者様が必要なんだよ」

「社員の健康管理かい。いやだよ、そんなの性に合わないよ。船乗りの方がましだな」

「そんなんじゃないんだ。社員だって、ほんの二、三十人しか居ないし、そのためにわざわざ」

「医者を頼むほどのことはないさ、君に診てもらいたいのは玩具の方だよ、こいつは一寸普通の医者じゃ工合が悪いんでね。」

「おい、ふざけるなよ、玩具なんぞ俺が見たって始まらないじゃないか。機械か屋デザインナの縄張りだろう」

「その玩具が生きているとしたら」

「何に？ 生きている。何だい、玩具ってのは動物か、それじゃ獣医の方が専門だよ」

「獣医じゃ一寸可哀そうなんだ。何しろ高級特殊玩具だからな」

田口はニヤリと意味あり気に笑って見せた「ここじや詳しい話は出来ないけれど、まず船医よりは面白い仕事だことは確かなんだ、給料も奮発するから一つ手伝ってもらえないかなあ」

もともと風来坊で変り者の私だし、好奇心も強かったから、田口の云う特殊高級玩具が何を意味するか臆気ながらわからぬではなかったが、手伝ってもよいような事をほめかした。

田口はひどく喜んで、私のアパートの所書を控え、明日、私の所へ彼の商品カタログを参考資料として送るから、それを見て、はっきりとした態度を決めてくれるようにと云った。私が彼の住所を聞くと、いや、明日アパートに電話するから、とか何んとか云って言葉尻を濁して了った。

田口と別れて、その夜おそくアパートに帰った私は、今、会って来た田口の学生時代やら、高級特殊玩具のことやらが頭を去らず、中々眠れなかった。揺れる船のベッドに慣れた私には、かえって動かない岡のベッドでは眠りにくくなってしまうたのかも知れない。

(二) カタログ ①

目が覚めた時には、もう日は高く登っている

た。やれやれ、今日も一日をどうして過そうかと思案していると、呼ベルが鳴って管理人が紙包を持ってきた。表には「速達小包」と朱印が押してある。はてナ、天涯孤独の俺に小包が来るとは、と考えながら包を解くと、新書判、百頁位の本が出てきた。

『総合カタログ、第三十八輯 L・T商会発行』としてある。

ああ、ゆうべ田口が送ると云っていた、特殊高級玩具のカタログらしい。綺麗な色刷りの表紙は別になんの変哲もないが、一度、頁をめくって見ると、全裸で縛り上げられている女体の写真、しかも、その内の何枚かは、まばゆいばかりの天然色の写真が、キッチリと頁を埋めて居るではないか。私はねぼけ眼が一瞬に醒めてしまった。

様々な型に縛られた女達、その女達が特殊高級玩具そのものなのだ。日本の女ばかりではない。青い目の女、金髪の女、の写真もある。中には、どこかで見たことがあるような、そうだ、行方不明を伝えられていた、ヨーロッパのあの有名な肉体女優そっくりの女も、その豊かな肉体に縄をまとっている。

私は田口の商売が、私の想像をはるかに上廻ったものであったので、少々どきもを抜かれ、ぼんやりとして了った。私は水を一杯飲んで気を落ち着けてから、再びカタログを、始めから丁寧に見て行った。

『毎度御引立を頂き有りがとう御座居ます。今月の最新目録をお届け致します。今回はしばらく振りにフランスを中心としたヨーロッパ産の優秀品が大量に入荷致しました。その上国産品にもこれに劣らぬ優れた品物が仕上り、皆様のお越しをお待ち致して居ります。又、格安おつとめ品の中にも、これはと云う掘出し物が沢山御座居ます、売切れになります。せぬ中、お早目にお出かけ下さいますよう御案内申し上げます。支配人、田口和助』

国産特級品の部と銘打ったページが後にづいている。

先ず、日本髪を結った美しい娘が全裸で後手にきびしく縛られ、横坐りになり、うつむき加減の顔を正面に向けている姿がカラー写真に綺麗に捉えられている。その下の欄には、商品番号やら、年令、身長、体重、調教度、それに、価格及び簡単な説明が書いてある。たとえば、こんな具合に

『四一九二四八、十九才、五尺二寸、十三貫調教度Ⅱ、八五万円、旧華族の出、まだ発育し切っていない部分も有りますが、これからのお手入れ次第で、極めて優雅な花を咲かすこと請合です。どちらかと云えば時代風のマスコです。日本趣味の方にはまたとない品と思います。』

次の頁には、見事に張った乳房のついた胸

を、誇らし気にそらせ、仰向けに椅子に縛られている写真、桃色の肌が黄色い縄をはね返さんばかりに緊張している。

『四一九二四九、二十四才、五尺三寸五分、十五貫、調教度Ⅱ、八十万、東京某劇場で人氣の的となっていたAです。この豊かな乳房があなたの鞭を待ちこがれて居ます』

次の頁には小柄な女が蝦蟇めと云うのか、あぐらをかいたように足を組んで縛られ、その足に乳房もつくばかりに体を折り曲げられている。無理に上げさせられたらしい顔がいかに苦しそう。

『四一九二五〇、二十七才、五尺一寸、十二貫、調教度Ⅴ、七〇万円、先元的なマゾヒスト、どんな苦痛にも耐えます。その上完全調教済みですので初心者、御婦人、或はマニアの方に最適の品で御座居ます。』

あと二二三枚、カラー写真の国産特選品の部があつて、次に国産中級品の部が続く。この部では、品物である女達は、柱に立ったまま皆一定の型で縛られている。写真も普通の白黒で、三十万円クラス、二十万円クラス、十万円クラス、と安くなるにつれて大きさも小さく、一頁に二人、三人と一緒に載せられている。皆、同じような形でその裸体をさらしているのではあるけれど、よく見ると一人一人が個性と云うか、違った持味をにじみ出させているのは、幾ら商品とは云え人間である

面白さであろうか。国産中級品が十頁余り続くと、再びカラー写真が四、五枚現れた。

『輸入特級品の部』

お待ちかねの、ヨーロッパ産の逸品がやつと入荷致しました。どれもこれも優れたものばかりですが、中でも特に、五一一四二五は皆様よう御存知のヨーロッパ随一といわれた肉体女優B嬢です。これらの逸品が、このようなお値段で手に入られる機会は再びありませんでしょう。早い者勝ちです。至急御来店下さい。』

ベッドの上に大の字型に革のバンドのようなもので仰向けに縛られているこの女は、どうも、本物のBであるらしい。どうやって手に入れたのだろうか、私は田口の力が恐ろしくなってきた。

『五一一四二五、二十二才、五尺四寸、十五貫二百、調教度Ⅰ、三二〇万円、調教が殆んどしてありませんので、成るべく熟練者の方にお譲りしたいものです。』

次は見るからに柔らかそうな、ふわっとした餅肌の娘で、日本風に腰を折って坐らされている太腿に細引がしっかりとからみ付いている。

『五一一四二六、二十一才、五尺二寸、十四貫、調教度Ⅱ、百四十万、本場のマドモアゼル、柔軟な肢体は、調教次第でアクロバットの様にも使えるようになります。』

目の黒いスペイン系らしい女が、Y字型に磔にされている。胸から、腹、腰、腿にかけて、ベツタリと赤い刺青。

『五―一四二七、十七才、五尺二寸五分、十四貫、調教度Ⅲ、九十万、スペイン生れの早熟娘です。刺青趣味を、お持ちの方々には絶好の贈物では』

特級品は、たしかに顔も肉体も素晴らしいのが揃っている。しかし、輸入高級品と銘打った、次のページも仲々美しい女が居る。アメリカ、フランス、イタリア、ドイツ、北欧、ロシア、それにインド、中国まで、殆んど世界中の人種の女が、その肉体を競うかのように網羅されている。

『格安奉仕品の部』

荷ずれ品、交換下取品、中古品などを、極くお安くサーヴィス申し上げます。あっと驚かれるような掘出物も沢山御座居ます。

尚、御不用品の処分、御交換を御希望の方には、高価にてお引取致します。』

手枷、足枷をはめられた女達が三十人程、積み重ねられたように固まって写っている写真がそえてある。一人一人に番号が打っておりその番号に対応して値段が書いてある。

五万円、三万円、一万円、中には五千円ばかりというのものもある。病気でもしているのだろうか、やつれた顔が痛々しい。

(三) カタログ②

特殊高級玩具、すなわち女体のカタログに引き続き、その玩具を用いるのに必要な色々のアクセサリーの広告が写真や絵入りで何頁かを占めている。

『L・T商会特製アクセサリーの御案内』

◎拘束用具

手枷、足枷

A型、鉄製クロームメッキ仕上げ、チエイン三尺付き、堅牢で使い易い実用品

B型 銀製彫刻入りの美術的高級品

C型 中世風に鐘の付いた鉄製、巾広くが

つちりとした特製品、足枷には五〇ポンドの鉄球付き

D型、木製、江戸風の樺厚板製、南京錠の



ついた古めかしいもの

E型、革製、牛革にビロードで裏打ちをした、しなやかでよく締る品

首枷

木製で、両手も一緒に固定出来ます。

箝口具

A型、透明なナイロン製で、押しひしがれた唇の型が透き通って見えます。

B型、鉄の心棒の入ったスポンジ球を口腔にはめ込んで、舌の動きを完全に止めます。

その上、鼻孔には特殊な低音笛を挿入しますので、絶体確実しかも危険がありません。

胸枷

乳房を任意の型に整え、両手を前でも後にも好きな高さできちんと固定出来ます。革製、プラスチック製、各種サイズ取揃えて御座居ます。

尚、拘束用具五点セットを割引サービス致して居ります。その他、鎖、ロープ、滑車などは、豊富に用意して御座居ます。

特殊旅行用靴

外見は普通の旅行用靴と変わりませんが、内部の特殊構造により、裸女一人を楽に折りたたんで納めることが出来ます。要領よく配置せられたベルトにより緊縛は完全ですから動く心配は全くなく、しかも附属の箝口具の御使用により、発声も確実に防ぎます。又、要所にはフォームラバーを貼ってありますの

で、長時間、且つ手荒な御使用にも、品物を痛めることなく安心して御使用願えます。

◎折檻用品

鞭

スポンジ製、ゴム製、革製、竹製、種々の長さのものが有ります。ギザギザ付、鉚り付、吸盤付きなどの特殊型もあります。

刺青セット

針、ホールダー、墨、朱、を綺麗なケースに納めたものです。使用説明書付き

毛皮

擦り責め、擦り責めに、是非優美な毛皮を御使用下さい。ウサギからクマ、ヒヨウに至るまで各種、その外ナイロン製毛皮も御座居ります。

バイブレーター

拇指頭大のプラスチック製導子が、モーターの動きで、毎分二〇〇〇回の震動を与えます。この特製品は、どこに使用されても、危険なく、且つ非常な効果があります。

エレクトロシヨック

簡単な装置で手軽に苦痛を与えることが出来ます。しかも、身体に対して、なんの痕跡も残さないのが特徴です。

アイロン

特別に女体専用で作成したもので、その特殊な型と、自由に調節出来る温度により快適な遊戯を楽しめます。

刺戟クリーム

クリームに或種の高貴薬品を配合したものでこれをすり込むことにより、一種特異的な苦痛を与えることが出来ます。

木馬

非常に効きのよいギザギザ付きで、固定用バンド、及び分銅が附属して居ります。

十字架

十字型、X字型、Y字型、いずれも組立て式の堅牢な品、どなたにでも、道具いらずに簡単に組立てることが出来ます。

緊縛台

L・T商会苦心の作品で、十六の変ったポーズに縛って楽しむことが出来ます。この外、御注文によりまして、種々お好みの品を調製致します。

又、これらの道具を合理的に配置し、使用に便利で気分がよい、モデル・ルームが御座居りますので一度御高覧願います。尚、遊戯室の設計、施行もお引受致します。

◎囚衣

裸体以上の魅力を作るL・T商会特製の新型既製囚衣を着せて蠟爽とお責め下さい。

A型、江戸時代に用いられたものと同じ型

B型 ナイロンの布地にゴムをふんだんに入れて、ピッタリと少しのたるみもなく肌を締めつけます。要所／＼に付いているリボンをつんで頂けばアクセサリを兼ねて、手足

の自由を奪います。

C型、両手、両足から、首、頭まですっぽりとくるみ、御希望の部分だけを露出させることの出来る黒ビロード製、毛皮付きの可愛らしいぬいぐるみです。

D型

フォーム・ラバー製のスエーターです。これを一枚着せて置けば、どんなに強く縛っても、又どんなに強く鞭打っても身体に傷をつける心配はいささかもありません。

その外、あなたのデザインによる御誂え服もお引け受け致します。』

私は毒気を抜かれたようにポカンとした気持で尚も先のページを繰っていた。

最後には出版物の広告が並んでいる。

『出版部だより

新刊書

◎初級調教八週間、B6 三二〇頁

写真と絵をふんだんに使って解説した初心者向の解り易い教則本です。

◎縄の選び方と使い方 B6 百十頁

早く、美しく、確りと、ゆるまぬように縛るには、どんな縄を用い、どう縛ればよいかを説明した実用的指導書です。

◎猿轡新研究 B6 四百頁

猿轡を、美学的、文学的、物理的、医学的更に心理学的と、あらゆる方面から研究した猿轡に関する決定版です。

◎拘束具、責具の使い方 A5 九十頁

L・T商会発売の各種責具、拘束具の種々な使い方、変った使い方を図解したものです。

近刊予告

◎一九五七年判スタイルブック A5 二百頁

百頁、昨年度の代表的スタイルのハイライト及び、本年の流行を支配する斬新奇抜な折檻ニューモード三〇種を天然色写真解説付で発表する豪華判です。

◎苦痛と快感の限界 B6 二七〇頁

苦痛と快感の医学的、心理学的な限界点を探り、合理的な折檻法を見出す鍵を与える専門的な研究書です。

以下、続々刊行予定です。』

この奇妙なカタログを読み終るのを待ってでも居たかのように、階下から管理人の声が私を呼んだ。

「佐川さん、電話ですよーっ」

あわててベッドを抜け出し、スリッパを引っかけて、電話口に出た私の耳に、田口の声がいそがしそうに飛び込んで来た。

「よう佐川君かい。きのうはどうも、で、カタログ見たろう」

「今見ていた所だ。」

「決心はついたろうね、船会社の方は、僕がもう辞表を出しといてやったよ」

「何に俺の辞表をかッ？」

「そうさ、君の辞表だよ。君は物ぐさだから

代りにやってやったんだ、今日の三時に昨日の料理屋へ来てくれよ。いいね、じゃ又」

ガチャンと電話は切れてしまった。勝手に私の勤先に辞表を出して、自分の所に勤めさす事にして、澄している彼にはあきれ返ったと云うより、むしろ感心して文句も云えなかった。しかし、ま、よからう、高級特殊玩具も面白そうだし、風来坊の私には、何にもわづらわしい係累もないのだから。

電話を切って、自分の部屋に戻ると、始めて空腹に気がついた。もう昼近かった。服を着ると、昼飯を喰べに街へ出た。明るい町には春の先がさんさんと降り注いでいる。

私は何んだか夢の中に居るのか、そうでなかったら、田口にかつがれているような気がしてきた。

しかし、私のポケットには例のカタログが四角張って納っている。

私はそうっとカタログを開き、すぐに又とじた。

(未完)

〔次号予告〕

次号では、創作「L・T商会」は愈々佳境に入り、一、田口支配人の多忙。二、商品陳列を掲載いたします。どうか御期待下さい。

キクに寄す 公開状



佐々木ツトム

北原純子様の御病氣

(一)

北原純子様、其の後御元氣ですか？ 昨今の御体のお具合は如何でございます？ 毎号貴女の御作を拝読して居ます私は、三月号のキクに「悪魔の勝利を夢見る男」という奇妙な

告白文を載せていただいた世にも不思議な青年であります。斯様な御便りを差上げるのは如何かと存じましたが、何かは知らぬ或る種の強い力が私をかり立てペンを走らせて居るのでございます。私は時々不思議な夢を見、

悪魔の勝利を幻想し奇怪な陶醉に恍惚となる一種の倒錯性心理の持主ですが、だからと申しても純子様には何等の害心も持たせぬものですから其の点は是非／＼御安心下さい。

害心どころが、私は或る事情の為、純子様の御健康を希って居ます。そして純子様に或る種の情熱をいだいて居るのでございます。その事情やその情熱の内容については詳しくのべる事をはばかる程はすかしいものです。そして此れは未だどんな書物にもなかったものです。私の此の長い／＼手紙の最後までお読みになっても、その事情やその情熱の実体は純子様にはおわかりにならないかも知れません。お判りにならない方が純子様の為にも幸福かも知れません。しかし、その事よりも私は純子様に対して或る疑問もいだいて居るのです。こんな事を申し上げると純子様はお腹立ちになるかも知れませんが、その点は同じキク礼讀者のよしきをもつて平に御容赦の程をお願いしておきます。まず最初に私はあなたの御実体についての疑問を明らかにしておきましょう。

北原純子！

北原純子！

純子様、あなたは、その御優美な何ともいえない耳ざわりのよい御芳名の示すような女性の方でしょうか？

切腹物語で毎号キクを飾り、その方面のフ

アンの方達を興奮のルツボにたたきこんでいた藤山秀緒氏が実は女性であったと知って、私はハッとしたのです。そういえば思い当たる節が多々ございます。あの執拗なまでのこれでもか、これでもか、という凄気にみちた描写や、女性のうめきにも似た苦悶の活写は、どうしても女性的体臭にみち／＼したものでした。切腹という血なまぐさい中に漂う甘美な女性の同性愛的フンイキ！ああ、あれは女性でなくては描けぬ世界ではありませんか。

それと同じように、いや、それとは又逆に優美清麗なお名前、北原純子様が、実は女性ではなく男性のペンネームではないとは誰が断言出来ましょう。私の此のような疑問をもち始めたのには、もちろん訳があります。それはごく最近なのですが、あなたの作品『花と朔風』をじっくり拝読して見たのです。読めば読む程、私はそこに男性の体臭を感じました。

それも普通の男性ではありません。男性の姿形であり乍ら、心は女性的要素の多い俗に云う変性男子！それが純子様、あなたの正体であります！と、にらんだ私の直感、眼力に狂いがありますか？

外れましたら、ごめん下さい。もし北原様がまことの女性の方であったなら、ここまでお読みになって思わずプツとお笑いになった事でしよう。そう思うと私は穴があれば入り

たく苦笑がこみ上げて来るのを感じます。又反対に私の病的な邪推が案外適中して居たとしたら純子様の御顔の色はサツと青ざめ——等と想像すると私の胸は妖しくふるえます。私は自分の空想好きにいささか困って居ります。時には自分の空想に圧倒されて青ざめてしまう事もあるのです。どうぞお笑い下さい。でも私に、そんな空想をたくましくさせる程、あなたの作品はすばらしいのでございます。不思議な妖気につつまれて、その妖気が私を圧倒するのです。こんな事を申し上げると口から、いいえ筆から出まかせの文字のたわむれのように、純子様はお思いになるかも知れませんが、決してそうではありません。たとえば、三月号の『花と朔風』の最終行の所を一すここに抜き出して見ます。

ヒロミはその堅い胸に縋りついても縋りついても、尚物足りない程切なかった。健はその背を優しく撫でながら、古机の隅に目をやるとついと手を延して何かを掬い取るようにして。

「ヒロミ、あーんとしてごらん」

ヒロミが媚びた目で微笑みながら、口を開るとけ、健はその口へ掌を押しつけた。

「ウツ」と云う間もなかった。乾いた細い枯草の茎の様なものが、モリモリと舌の上を動きまわった。

クモ！と感じた時、ヒロミは口を閉じら

れてしまった。（中略）舌がちくりといたんだ。

——あッ嚙んだ！——

ヒロミは健の胸に顔を埋めた。（下略）

——何という新鮮な悦虐シーンでありましょう。私の胸は妖しくかきむしられる思いです。これが女性の筆か？もし女性とすれば北原様とは如何なる方か？

私の胸は波立つばかり。

いいえ、これは恋情ではありません。普通の男性なら、こんな時、胸が波立ち情熱にふるえる——といえば、その方にはげしいあこがれと思慕をよせている告白文と見る事が出来ます。ところが私の場合は、まるでちがうのです。私がすぐれた女性の文章をよんで感嘆し、その女性に恋情をいだいてもだえるようなそんななまやさしい情熱のもち主なら、こんなレターを公開するには及ばなかったのです。

私はこのレターを純子様にお見せしたいと同時に多くのキクファン諸兄諸姉様にも、ごらんを願ってきびしい御批判を仰ぎたいのです。私のような奇怪な情熱の持主が又と此の世にありましようか？悪魔の勝利を夢見て怪奇な快楽に耽ける私は、表面は女にも見まほしき弱々しい青年であり乍ら、その心情は鬼神もさくべき獐猛比類なき悪の魂が地獄の微笑をうかべているのではないかと、私は

時々自分の妖しい心の動きにふるえ上っているのです。私の心の秘密を知らないまわりの人々も、私の一風変わった生活態度に好奇の目を向け、又は変性男子扱いにして居ます。それについて私の秘密の一端をうちあけますと私は女性に接すると——全く自分でもわけのわからない、すさまじいいらだたしさなやましさに圧倒されるのです。それは屈辱感と敗北感とにみちみちています。そのくせ何かやわらかい泥沼に足をつこんだ時のような妙な快感がどっと私におそいかかります。いえ肉体的にも精神的にも、その両方にです。そしてそのなやましさに私は失神します。いいえ、そう思っただけで、氣を失うのです。それ程弱い感じ易い神経の持主なのです。

私にとって女性には恐怖的存在です。そのくせ、なつかしくてたまらないのです。が私は失神するのはいやです。はずかしいのです。その上苦痛を伴います。私はそれで結婚をさしひかえています。もちろん私は女性と只のおつき合いなら、そんなバカ／＼しい目に合わなくてもすみます。

こんな妙な男性は、さすがのキクに登場しませんでしたね。

氣が弱いと自から云って居られる東一郎様も、まさか私程ではありませんまい。私は東様よりもっと／＼氣弱な憶病者のくせに、その心の奥底には悪魔がひそんで居るのです。

(二)

純子様、あなたは、ここまでお読みになって、このお便り(公開状)が決して世にありふれたものでない事をおみとめになりましたでしょう。ひよっとすると此れから先をお読みになる勇氣がおありにならないかも知れません。

もしそうお感じになりましたら創作を読む氣持でごらんになって下さい。これは決して創作等ではないのですけれども。

近頃では女性の地位が向上するにつれて、女性はますます／＼たくましくなり、ますます／＼自信を深め、精神的にも肉体的にも男性を徐々に圧倒しつつあります。男性がその女性と妥協する道は、女性に屈服し母性的愛情にすがるか、彼女の征服慾のドレイとなって仕えるか、彼女の進歩の道を追って居ます。男性はまご／＼していると退化の道を辿りつつあります。私が女性に対して恐怖の念をいだくのは当然でしょう。しかし、その恐怖が、私にとって女性を嫌悪する原因にならず、不思議な情熱をかき立てる原因になっています。純子様が、此の恐るべき女性の方が、それとも私にとって、もっとも安易な氣安さをおぼえる変性男子の方が、今の所どちらでもよく又どちらであるかはつきり分らないのです。

私が純子様がやはり女性であるかも知れないと考える理由も案外深いのです。それはあなたの絵です。あなたはキク旧刊号にも絵をおよせになつていられました。絵の事は皆目わからない私ですが、あの優美な絵を見て居ると、私はそこに女性の匂いを感じました。

ああ、北原様とは、いかなる方なのであらう。

毎号キクを手にするごとに北原様の事が私の心を重くし、その想念が私の胸に重苦しくのしかかって来ます。北原様がキクから消えたら、どんなにサバ／＼するであらう、と考えて、その又すぐあとから、北原様がキクから消えたらと考え始めるとたまらない悲愁にうたれます。それは北原様が御病身だからです。そういう事がないとは云えませんがね。

(三)

北原様の御病氣！

それはどのような御病氣なのでしょう。御病氣故に、あのようにすばらしい作品が生れるのでしょうか。そうだとすると、あなたの御病氣はあなたにとって、プラスの面も多い事になりますね。

ああ病氣！ それは何という不思議なものでしょう。

病める人！

ああ、それはまことに宇宙の神秘です。誰もそんな風に病氣を感じている人はありませんけれど、病氣こそ人間に不思議な力を

あたえるのです。それは健康体の人の夢にも知らない、魔法のような神通力を病氣は病人にあたえる事があります。病氣は人類を支配し、社会を動かす大きな原動力となる事があります。輝かしい文化の花を妖しく咲かせるものは病氣です。

こんな事を申し上げるとまるで狂気の沙汰かと思われそうですが、世間の凡人どもは目が前方にくっついていてる為に深い／＼内部の神秘に気がつきません。私はもっと見えない所を見ています。無学の私ではありますが、私は世間の人がうっかりして居る所をじっと見つめて居るのです。何しろ悪魔の勝利を夢を見る青年ですから。

世界中で一番すぐれた才能の持主が肉体的には一番劣って居たりする例が多いという事を考えて見て下さい。たとえば日本では、先年亡くなった永井博士です。又不具であったり、時々病氣になやまされたり畸形であったりして何か肉体的にけっかんのある人々が、かえってその為に健康な人をしのぐすばらしい社会の推進力をなっている例がとても多いのです。

尾崎紅葉は胃癌です。夏目先生は胃潰瘍になやまされ、石川啄木は肺結核でした。しかも彼等の名は不朽です。ベートベンも耳がほとんどであったといえます。だが、それなのに不出世の音楽家とは全く不可能を可能にした

魔力的偉業ではありませんか？ 常識ではとても考えられない魔法です。耳の不自由な人間が音楽家とは！ これが病氣の魔力でなくて何でしょう。

アレキサンダー大王は世界歴史上空前の侵略者だそうですが、その彼の行蹟の善悪はともかく、世界を震撼させた事は事実です。その彼が畸形的なまでの小男であったとは誰が想像できましょう。

日本では水呑百姓の伴から位人臣を極めた豊臣秀吉がこれ又肉体的には畸形なまでの小男で、しかも顔面はましろの如き異相であったとつたえられます。平家を檀之浦で討ち亡した源義経はこれ又常人に比してきわめて醜貌の持主であったとききます。諸葛孔明は死んで生ける仲達を走らしたとか、武田信玄も自分が死ぬ事によって上杉謙信に生きる張合を失わし、間もなく死の国にさそいこんで居ます。シカマは最も偉大な天才はもっとも弱い体をもって居るとさえ申しました。

ああ、その一見弱々しく見ええる肉体からほとぼり出る精氣は驚天動地！雲を呼び風を起し、雨を降らして地上に常に波瀾をまき起すのです。その波瀾が文化を発達させ社会の原動力となっています。これは病氣の力です。

又天才の中には一生独身で終ったものが多く、結婚しても無子孫なものが多かったよう

です。ペーコンは「もっとも高尚な仕事は子供のいない人間から生じた。彼等はその肉体を後世に伝える事が出来なかったかわりに、その心の姿をあらわそうとつとめた。こうして後世子孫の為になるようなすばらしい仕事は子孫のない人々からもっとも多く生れた」と申しました。

キタングラブが後の世までのこるすばらしい文献誌である事は疑をさしはさむ余地はありません。貴重な人間の真実をとりあつて、これ程忠実な、これ程誠実さを示した本は古今稀でありましょう。或る面では不完全で、不健康であるにもかかわらず、その中にただよう妖氣！そして魂の中に光り輝く宝石のような美しさ！不健康な中からにじみ出るすさまじい迫力！ほとぼり出る情熱！そして青春の哀歎！

こんな不思議な本が今まであったのでしょうか？世の中には実話ものや探偵ものは多いのです。だが、それらは健康な常識的立場に立って客観的に見ているもので、キクのように、その真只中に、おどろこんで親しくまじわりマニアをこんなにも喜ばしている本とはまるで趣を異にしています。

キクの魅力が人間の病的な所にある事是否定出来ないでしょう。だから一部の常識人はキクを否定します。が、そういう彼等は病的なものの尊さ、存在価値を知らないのです。

人間誰しも病的でないものはないのに！

キクの存在は今の世よりむしろ後の世において一層その価値が高くみとめられる種類のものです。そのすばらしいキクの中で北原純子様も、きわめて、めずらしい異色ある作家として其の名をキク史上に長くとどまるべき方ですが、その異色作品が純子様の御病弱故に、うみ出されたのかも知れないと思いつつ又は、純子様がご健康になればすぐにもキクをはなれ去って行かれる方かも知れないと思いつつも私は純子様を健康にして上げたい！そう思わずに居られませんか！いいえ愛情や善悪からではないのです。

私の利己的気持からそう思うのです。

(四)

北原純子様が変性男性でなく本当に女性の方であると仮定して此のお便りをしたためています。北原純子様が正真正銘の女性であるならば、それはいかなる方でありましょう。

あなたが世にも美しい女性か、それとも案外平凡な女性であるか、或は又みにくい畸形の天女であるか私は知る由もありません。が私の空想に出て来る純子様は、青白い肌の持主です。一見醜く感じますが、近くによって来ると何かこういう妖しい魅力がにじみ出ていて、すてがたい風情のある二十六七才の女性。

江戸川乱歩の陰獣という作品の中に小山田

静子なる不思議な女性が登場しますが、純子様はあのような女性のような気がします。

あれよりもう少し不健康でそれで居乍らあれよりずっと強い感じのする女性です。そして非常に勝気で負けず嫌いの反面、何かにおぼれてしまう一面をもっている。

これが私の幻の中に出て来る純子様です。見た所スラリとして細っそりした身体つきであり乍ら、乳房や太ももや腰等は案外たくましく女性らしさがみなぎっている。声は中音と語尾に力がない。スーッと消えて行く感じ——万年床のしきっぱなしの部屋！そこは四畳半か六畳の間、南の窓の障子戸に春の陽があたっていて明るいはず乍ら妙に暗い感じの女部屋。

そこに寝間着姿の女性が寝たり起きたり——時には机に向ってペンを走らせ、時には書架に向って筆を動かして、時々コンコンと力ないセキをして居る……

ごめんなさい、純子様。

あなたが、あんなにすぐれた作品を発表するものだから、それが私にこんな空想をさせるのです。そして私はあなたに奇妙な情熱をいだいて苦しんでいます。

「貴男は先程から不思議な情熱だとか、誰もきいた事もない願望だとか、ひとりで悩んだり、いきんだりしていられるけれど、それは一体なに？」

純子様はこうおたずねになるのでしょうか？

私がこれをうちあけるには非常な勇氣がいるのです。ですから、その前に別の事から申上げて行かなくてはなりません。

私は体が弱かった為に、自分の思う半分も何事も出来ませんでした。物質的には割にめぐまれた境遇にあり乍ら、上の学校にも行けず家業も弟にゆずってしまいました。

その為に私は一頃、「体さえ丈夫であつたらなあ」と考えるようになったのです。それには又先輩やまわりの人や又多くの郷土の名士達が「先ず体をこしらえなさい」と健康第一主義をとなえました。新聞も雑誌も、そんな広告を至る所にのせています。之では病人でなくても健康になりさえすれば人目は完全だと思ひこんでしまいます。

今になって私は「健康であれば」主義に疑問を感じています。世の中には生れつき健康な人とそうでない人がある事是否定出来ません。しかし、生活の完成の為に、実際その人が健康であるか病弱であるかという事よりも、その人の自分の体に対する態度の方がむしろ大切なのではないのでしょうか？ あけてもくれても自分の病気の事ばかり心配し、消化不良だといってはくよくよししたり、セキが出るといつては心配したり、顔色や体重を気にかけたりして居る連中は、こと健康に関する限り、幼児の域から一步も進歩して居ない

事を物語るものです。世間には強大な筋肉から成立った肉体が健康の象徴であり完全なる人間であるかのように思つて居る人が案外多いのですが、どんなに健康を誇る人々でも其の筋肉の発達程度の点だけではかの蚤一匹にさえかないません。蚤は自分の体重の何十倍かのものを運び、自分の体の何十倍の高さをとぶことが出来る程筋肉が発達してはいますがしかしそれだからといって蚤が完全な動物の例としてとり上げられた話はめったにありません。

私達のまわりを見廻しても健康体で強い体力をもった人々は、比較的社会の下積仕事を余儀なくされ、報われる処が所ないのに比較的弱い体の持主が、社会機構の重要面にたずさわり指導的立場にあつて強い体力の人を使用している実状です。

すぐれた人々の体のどこかに欠点があつたり病気があつたりする例はきわめて多いけれど、彼等はこれらの苦痛を超越し、これ等の欠点を補い、長所をのばして社会の為につくそうとしています。人間社会の発達には美人投票のコンクールに当選したり、体力章のレコードの上に決してきずかれるものではなく、むしろ肉体的なハンディ・キャップにもかかわらず、孜孜として社会に奉仕する事を怠らぬ人々の努力の上にきずかれて行くということとを忘れてはなりません。青年と体力につい

て現在一般に行われている過大評価に対して不満をいだくもの、あに私一人でありましようか？

「健全なる精神は健全なる身体に宿る」というギリシヤの諺はあくまで好ましい理想ですが、実際の世の中の人々を見ますに必ずしもそうでない事が発見されます。たとえば精神病院を訪れてみますと、完全に精神が狂つて居るにもかかわらず、その肉体は驚くべき栄養にめぐまれ、はちきれんばかりに健康そうな患者が多いです。又、常習兇悪犯罪者は、あんなに頑丈なぶつてもたたいても死にそうもない程のすぐれた健康体の持主であり乍らその精神は決して健全ではありません。

健全なる精神は健全なる体に宿る。だから体さえ丈夫であれば、こういう考えは根本的にまちがっているのです。

でも純子様、

私は是非／＼あなたを健康にしたい！ はち切れるばかりの健康体には！

それは前にも申し上げたように私の全く利己的な気持からです。純子様の健康体をこんなにも希う私の気持。それが愛情でもないとする一体何か？これはまことに奇異な思いを純子様にもキクの読者にもいだかせるでしょう。又此の点が、此の公開状の決してありふれたものでない事を示すものです。

純子様は健康にならねば私の秘願が成就出

来ないので。

だん／＼私の秘望の全貌のあきらかになつて来ましたが私はこれ以上、今この場で私の恐るべき願望をあばく勇氣はありません。

(四)

「純子様を健康にして上げたい！」

「こう私は先程から申上げて居ますが、すると皆様は殊に純子様フアンの諸兄諸姉は、『そんな事は君ばかりじゃない、我々だって純子さんを健康にして上げたいのだ。』とおっしゃるでしょう。ではうかがいます

「あなたは純子様を健康にして上げる力をおもちでしょうか？」と、

「馬鹿を云うな、医者ではあるまいし！」とおっしゃるでしょう。

「君はどうなのだ？ 君は医者か？」

ともおたずねになるでしょう。私は医者ではありません。けれども、私は純子様を健康にして上げる方法を知っています。めずらしい秘法があるのです。

秘法？

今どきバカな！ 水素爆弾が発明され、オネストジョンがとび出し月世界探検も夢物語でなくなった二十世紀の文明の世に、秘法だなんて馬鹿／＼しい。

まあ、そうおっしゃらないで下さい。

私の秘法は非科学的なものではありませんし、又迷信でもありません。でも科学で説明

そうです恐るべき奇蹟です。

純子様

秘法があるなんて——。

ない事がお判りになると存じます。

私の秘法というのは「呪文」の力を利用す

「呪文ですって？　いよくお伽話じみて来た！」

○

めたではありせんか！

とうとう事を考えて下さい。

にはなれっことなってしまう、その刺激の

エリスも云つて居るように、夫婦の愛情というものは、その都度、夫の方からの情熱的な求愛を以て始められるべきものにはちがいないでしょう。しかし求愛の言葉には限りがあります。同時にマンネリズムに陥り易いのです。その為に多くの夫婦達は最初の中はともかく、やがておそかれ早かれ言語による心理的前戯はぬきにしてしまふ事になります。うものがとりわけこの心理的前戯を必要としているからなのです。しかし、その心理的前戯即ち愛の言葉には限りがあり、マンネリズムに陥り易いとすればどうしたらよいか？

そこなのです。その時、私のいわゆる秘法の「呪文」が絶大な威力を発揮するのですよ。此の時に用いる呪文は、「オーム式くりかえし法」とでも名づけましょう。

「ね、愛して居る？ あたしをほんとうに愛している？」

「こんなに愛しているじゃないか！」

「って何度も何度もよ！」

次は、夫の方から

つて！

「好きよ、好きよ、好きよ、とっても好きよ！」

「ああ、もっと／＼何んべんも／＼云ってごらん！」

言葉と云うものは、とりわけ愛の言葉というものは魔法使に似ています。「ことだま」という言葉がある位です。ことだまとは言葉の霊です。魔法のような力をもつ愛情の言葉いや昔から云い伝えられて居るどんな魔法の呪文でも、すべて三度以上の同じ言葉のくりかえしから成立って居ます。此の同じ言葉のくりかえしと云う事が呪文の特徴なのです。なんだ！ つまらないと云う事なかれ！ まずためしてごらんさい。

妻が好きよ、好きよ、好きよと云う言葉をくりかえしている中に、彼女はやがてこの言葉の魔術に自分で引つかかって行きます。それは自己催眠的な作用を必ず彼女の精神の上にもたらします。しかも、それと同時に、彼女の低い云いようもなく力のこもった同じ言葉のくりかえしは、彼の肉体と精神の上に必ず魔力をふるわずにはおきません。

此の自己催眠術を、あなたの御病氣の上に利用するのです。これが私の秘法の片鱗なのです。そしてもちろん、私は此のような秘法のみで病気を全快出来るものとは考えていません。秘法ともう一つ、私はある方法を用います。それには北原様の詳しい御病状を知ら

ねばならないのです。その上で私は北原様に私式の療法の詳細を説明致します。私も病身でしたが、今では病身とは云い得ないまでの健康体になって居ます。さてそういう風にして私は北原様を健康体にして上げたい。

いや、是非健康体になっていただきたい。そして私の夢を実現したい。これが私が北原様にいただく秘願の正体です。

此処までお読みになっても、私の夢の正体や秘願の実体がお判りにならないかも知れませんね。私はそれを明らかさまに打明ける勇気のないのを悲しみます。だって大ていの女性には、私のあられもない願望をさると次のように云うのです。

A子「まあ呆れた！ 佐々木さんて、そんな方だったの！」

B子「悪魔の勝利を夢見る男って、そういう意味だったの、いやらしいわ」

C子「絶交よ！」

D子「あなたの気持、わからないでもないわ、でもそれは、女性を侮辱する事じやないの、あなたは女性にうらみでもあるの？」

ああ、誰一人私の秘願を理解してくれるものはいないのです。

私は女性をむちうってたのしむ単純なサジズムの持主ではありません。女性の足もとにひれ伏しドレイになって生甲斐を感じるマゾヒストでもありません。又女性の下着を愛好

する南様のような男性でもないのです。私はかつてキクの旧刊号をにぎわした土俵四股平氏に似た青年です。でもあの方とは又まるでちがった面が多いのです。

こういえば私の情熱の正体がやや明らかになりましたね！ そうです。そこへもう一つ空想をたくましゅうして、そしてその結果、形づくられたものが私の野望なのです。それが、悪魔の勝利を夢見て陶醉する私の秘願なのです。

キクの純子様ファンは数多いでしょう。そしていろんなレターがキクに載せられています。でも私のようなこんな奇妙な公開状は未だ他に一度も見つけないのです。純子様もおそらく始めてではないでしょうか。私の非望を成就して下さいと下さるまいと、あなたのご自由ですが、どうぞ御健康にだけはなって下さいね。それには是非御病状を誌上に御公開下さい。

私は利己的で大変我ままな青年ですが、自分がたとえ純子様のご病気をなおす力があつたとて、それを恩に着せて非望を遂げようとまで悪心は持ち得ません。私はその点非常に気の弱い好人物なのです。私は人にだまされても背負投をくわされても、不思議に腹の立たない男なのです。そんな時、私はとても善人です。ですから純子様もお気に召したらご返事願います。

私は女であるというお話

△佐々木ツトム様へ▽

北原純子

私への公開状を頂戴して、またびっくりしてしまいました。それに此のお返事は仲々難しいので上手なお答えが出来ませんが、お返事を申し上げない事には私が男性であるなどというトンデモないお疑いをはらす事が出来ませんので、難しい此のエッセイに頭をひねりながら、私についてお話し申し上げる事に致します。

その前に先ず、三月号で貴方の告白記事を拝見致しました。此れは私が挿画をさせて頂きましたので、殊に印象に残って居ります。お悩みの様子がよく判って、胸を打たれるお話でした。でも、その貴方が、病氣は宇宙の神秘であるとか、社会の原動力であるとか、そのような天邪鬼な事を仰言っては可笑しい

と思います。第一健康な人が怒り出してしまいます。健康な智慧は健康な身体から生れる場合の方が、ずっと多いのだと私は思いますよ。ベートーヴエンやドストエフスキーの場合は存じませんが、少なくとも私の場合は、病身であるから絵を描くのではなくて、絵は健康な時から好きでしたし、今でも病身でなかったら、もう少し健康な良い絵が描けるだろうにと、自分の薄才は棚にあげて、とても残念に思っています。

貴方は御自分の事を「悪魔の勝利を夢見る男」だと、強調なさっていますけれど、私だってそうで、恐らくみんな人間は、誰だって多かれ少なかれそんな気持ちも心の中の何処かに持っているのではないのでしょうか？ 人間

は誰でも、自分一人で居る時や、空想の世界に居る時は、仲々手におえない悪魔なのではないのでしょうか？ だから昔の婦道記などに出て来るような女性達は、一人で居る時も障子に穴を開けて置いて、絶えず誰かに見られている心算になって、姿も心も正しくしたのだと云われて居ります。

で、此んな事には私は賛成ではございませんから、一人で居る時は放恣にもなりたいたいし、バカらしい想像もして見たいと考えますけれど、唯、そんな人に云えない一人切りの考えを突詰る事はたまらないと思います。もっと気楽に「悪魔を夢見る事も楽しく」「ヒミツな空想も楽しく」胸の温るものでありたいと存じます。

「ボクだけは、人と違っている」などと、お山の大将みたいに力み返っていらっしやると終いに神経衰弱になってしまいましたよ。それとも、此れは佐々木様の一寸した表現の綾でしょうか？

冒頭から大変失礼なお返事を申し上げてお許し下さい。生意気な奴である。とお怒りになりません様に。

本当の私は生意気ではなくて、勝気なんかでは勿論なくて、ひどくのんびりして居ります。負けず嫌いとか、男まさりと云われた事はございませんし、事実自分よりも強そうな人や、頭の良さそうな人が現れると、忽ち心

細くなつて、自分から勝手に負けてしまうのです。人から悪く云われると自信がなくなつて死にたくなつて（一寸大ゲサかな？）反対に少し褒められると嬉しくて有頂天になります。お調子乗りで、バカなんじゃないかと疑つて居ります。その証拠には、くだらない事でも直ぐ可笑しくなる性分で、笑い出すと仲々止らなくて、人がそんな事などどつくに忘れる頃までゲラゲラと笑っているのです、耳ざわりだと云つて怒られます。

佐々木様が私の事を色々勝手に想像なさるので、一寸驚いてしまいました。

私はどんな女かと一番判り易く申上げると、「花と朔風」の中に出て来る、チヤ子と道子とを合せたのが私だという事になります。花と朔風の（如何にも迷作で題からして変なのでお褒めを頂いたりしますと全く困ってしまうのですが）チヤ子と道子は、私なら其の場合此う云うだろう。こうするに違いないと、自分を探りながら書いた積りでした。

此の機会に私の事を少しでも解つて頂ければ幸せですが、何をお話したらよろしいのか判りませんので、私が進学の為に上京した冬のお話でも致しましょう。私は十八歳のお正月の二日に、入試の事が心配になつて上京したのです。其の日私は、もし女子美術に入学出来たら、

通称従兄（私の祖父の弟の息子）の下宿先へ預けられるため、祖父からの手紙を持つて上野へ着いたのです。祖父の手紙には、「純子の事は厳重に監督して貰わないと、母親のようになられては困るから、精々厳しく頼む」

等と書いてありました。

従兄は転入学までして日比谷高校を出て、東大に入った位なので頭は良かったのです。それに子供の頃からカトリック信者で、非常

リ、ゴに当り散らす

十代の

い、うさの
おもてころオ



に戒律的な生活態度を持っていましたから、祖父のお氣に入りで、私は何でも従兄の云う通りにしないといけない事になつて居りました。従兄に連れられて下宿に着くと、学生服にオーバーを着た青年が玄関に腰を下して従兄を待っていました。その人は永井弘君（仮名）と云つて駒場の教養学部にいる学生で、つい二時間程前に、従兄と其の他数人の学生達とで、山から降りて来たばかりだと云う事でした。（天狗みたいですが）日光へ行つて

居たのです。従兄は長身ですが華奢で余り丈夫ではなかったので山岳部へ入つたりした事はありませんが、山は写真を撮る為によく行きました。スポーツはテニスをやる位のものですが、自転車位は乗れる？

従兄と永井君は、久しぶりで上京した此の親愛なる妹を放りっぱなしで、従兄の部屋で山の写真を焼きつけるのに大忙しなのです。私は幾ら下宿の人に歓待されても落着けないので、思い切つて偵察に出かけました。

従兄はその頃、私の事を「偵察機」とか「マタハリ」などと呼んでいました。私が立ち聞きの癖があつたものですから。時々だしぬけに、私を掴めて「今日何回やった？」と訊きました。

「何の事ですかあ？」

と白っぽくすると、

「三回やっただろう。顔に書いてあるぞ。よし、三つ殴らせて貰うよ」

と云い終らないうちに、私の手首を掴んでシッペと云うのを喰わせました。とても痛いのです。手の甲を打つ時も腕を打つ時もありました。シッペは厭なので私は段々敏捷くなって、

「今日は何回だ」と訊かれると、

「それは誤解だ」

と洒落飛ばして置いて逃げました。従兄は何処までも追いかけて来ました。私は逃げながら、早く捕まりたい様な気もしていたものでした。

その偵察のベテランが従兄の部屋の襖を開けて顔を入れようとしたら、部屋の中は赤電球を付けて、フィルムや印画紙を足の踏み場もない位散らかした真中で、焼き付けはそっち除けて二人が話しているのです。私が物を云う間も与えず、立って来た従兄は、襖をピタッと閉めたので思い切り拇指を挟みました。滑りの良い襖でその痛い事と云ったらありません。

従兄は「ごめんよ」と云ったなりで、再び永井君と話し始めたのです。その話と云うのが、

「雪が汚れていたら美しく写らなかった」

とか、

「スロープが迫ってなかったから拙い」

とか、うまくない話ばかりしているのですが、従兄の写真技術なんかはソモソ、うまくないのでギロンの余地はないのです。

永井君は話の間に必ず、

「それでもって、ネ」

と云う言葉を使います。

「それでもって、ネ。あの時転んじやって、何とかさんはそれでもって、ネ。ボクはそれでもって、あゝとか此うとか」

という工合なのです。そのうちに話し合いも終って永井君は帰るので、従兄は私に部屋の掃除を命令して置いて、永井君を送りがてら祖父への手紙を出しに行くのですが、お茶の間で下宿の小母さんに捕って、

「永井さん雪やけしやはったね。健さんは一寸も焼けはらへんね。ほんま白いわあ」

とお国の言葉で褒められて嬉しがって笑っているんです。それを聞いていると私はとうとう涙が湧いて来てしまったので、フィルムを片附けたり、お水の中の印画紙を濯いだり、作業をやりながら涙も拭いたり……誓って云いますが？ 此れは恋とは違う気持だと今も考えて居ります。

大体此の永井君という人は逢わない時から虫の好かない人でしたが、此の時始めて逢って見て、何だ此んな人か、と思いました。

美しくも何ともない平凡な容貌の青年でしたが身体も顔も小さい女性的な人でした。

夏休みに信州からくれた従兄の手紙に、八月一杯は京都へ帰れない、と断り書きがしてあって、お終りの方に、

「……………永井がランプに火を入れて持って来てくれた。彼の事を皆が山のランプさんと呼ぶのは此の為ではないけどね。永井はボクの机の花を見て、何だと訊くので、月見草だと云うと、案外下品な花ですね、云った。永井は龍胆も知らなかったのだそう。永井みたいな抒情的な奴が、一寸意外だと思った。此れから二人で風呂へ入りに行く。」

と書いてありました。（古い原文を今写しました）従兄は永井君と「あれなのだ」と、此の時ハツと思いついたのです。そんな従兄の気持が何故理解出来たかと云うと、従兄はそれよりも大分前に学校休暇で帰って来た時、「禁色」其の他男色の著書を五、六冊置いて行きましたので、私は全部読んで居りました。それを読んだ時の私は、まるで従兄が墮落してしまっただ様な気がして身体が寒くなりました。私も従兄も両親が早く亡くなってしまうって、祖父の手で二人一緒に育ちましたので従兄は兄と同じ親しい人でしたが、祖父は男尊女卑の躰をしまったので、従兄は少年時代から女の子なんか問題にしていなかったらしくて、余り遊んで貰ったり親しくした思

い出はありません。でも私は従兄を尊敬して居ました。それだけに仲々怖い人でもあるのですが、私の勉強を見てくれるのにも、とても厳しくて、物理などは殊に私には苦手です。でモソ／＼していると、

「此んな事が判らないとはぬけてやがる。それでお前進学出来るのか」



と私を叩いて叱ります。それからもう小言の連続で、判らないのを無理に、

「もう一度訊くが、○から○の状態へ移るのに六十分の時間がかかっているとすると、Bの熱量は幾らなんだ。俺が何度も説明したのに何を聞いていた」

と次から次から責め立てます。

「判るまで本から目を離すな。徹夜してでもやれ」とか、従兄にして見ると、そんな時の私は世界一の低能児に見えて情ないのだそうですが、私は益々頭が混乱して終わります。お終いには私の頭を打たないと納まりません。掌がかするようにサツと払うのですが、それがとてもスピードがあつて痛いのです。何とかして打たれないで済みたいと思つて一生懸命考えているうちに涙がこみ上げてしまふのですが、私が泣くと従兄は可哀想になると見えて、ノートを取り上げて、

「貸して見る。もう一度だけ説明する。もう一度だけだぞ」と散々恩に被せます。

私は徹頭徹尾、神妙にして居る事にきめていますので、従兄は私のそういう態度に満足して、

「お前は頭の悪いのが玉に疵だ。判

つてるか。自分でも判つてゐるな。よし、それならよし」

と、やつと機嫌が良くなって、ていねいに教えてくれるのですが、そうなる迄が怖くて何時もビク／＼でした。何でもが此の調子で口で云うのも人並以上で、手も早い性分なので難しい人なのですが、離れていると妙に懐しい敬愛なる従兄なのです。だから私は永井君に限らず、従兄を横取りする様な人は憎いと思ひました。

ところで、お話の続きですが、従兄は永井君と出たまま一向に帰って来ないのです。

私は考え込んでゐる間に、永井君に御馳走するために置いてあつたお皿のリンゴをナイフがグリ／＼くり抜いてしまいました。私は気が付いて苦笑しました。リンゴをくり抜く事はやめて、「男に生れていたかつた」と考えました。男装したいとか男みたいに振舞いたいのではなくて、自分が永井君だったらよかったのになと思つたのだったか（ハッキリ覚えていませんが）或いは永井君のように、「それでもつて、ボクラ」なんて甘えた様な声を出して見たかつたのかも知れません。

私が一生懸命考え込んでゐると、下宿の小母さんの外孫でチンちゃん（慎ちゃん）という初対面の幼児がやって来ました。子供なんて楽しいもので直ぐ十年の知己の如くになります。彼氏は私を覗き込んで、

「ジongo食べたいわ、ボクラ」

って云うんです。私は胸がドッキンとしました。ボクラです。

「ちんちゃん。それでもってボクラって云ってごらんさい」

チンちゃんはモジ／＼していて、口の中でゴチヨ／＼云って、「ボクラ」だけ大きな声で云いました。永井君のボクラとチンちゃんのボクラは大分感じが違いました。チンちゃんは確かに清潔でした。顔は穢いけど。

私は訳もなく楽しくなつて、チンちゃんとリンゴを食べる事になりました。

「それには先ず、君は手が穢いから洗つて来給え！ それでもってネ、ボクラ」

「ちよれでもってボクラ」

と、二人で変る声をハリ上げていると、頭をコツンと打たれたのでハツとして振返ったら、従兄が入って来ていました。

ゴテ／＼と書いているうちにお話の目的を忘れてしまいました。詰り以上のお話の中に、私のチャ予的性格と、道予的性格は入っていると思うのです。でも私は八十パーセント道予的性格で、此れは何時も離れる事なく私の中に生きて居ります。

そのような私ですから、貴方も仰言るように、精神的にも肉体的にも男性を圧迫しつつある、近代の女のあり方を喜んでは居りません。女性が向上する事を否定する気持はあり

ませんが、自分だけはそうなりたいと思わないのです。もし結婚した時の事を考えて見ましても、旦那さまというスポンサー？ からお前は一人前だ男以上だ。と経済的にも愛情的にも割カンで付き合われたら、淋しくなつちやうと思うんです。だって私が考えるのに、経済の面では男の人に依存していながら地位は対等に並べられたいなんて何だか少し虫が良すぎるような気がするのです。男女同権を唱えたかったら女も生活力を持つ事ですが、私は男女同権でない方がいいから生活力も持ちたくない。

それは、洗濯する事だつて子供を育てる事だつて、男の人がお金を作る事以上に大きな働きであるかも知れませんが、男の人が外で働く事は生きて行く為の手段で、女が家で、旦那さまや子供の為を我を忘れて尽す事は、仕事ではなくて愛情の部類に入ると思うのです。男の人だつて、自分の奥さんがビジネスで洋服にアイロンを掛けたり着物を縫ったりしてくれているのだと考えると、バカらしくて仿けないだろうと思うのです。でもそれは男の人に食べさせて貰うからその代償として奉仕するとか愛情を捧げるとかいう打算的な話では勿論ありません。男の人に隷属して静かに愛している方が、女は美しいような気がしますし、それが女の本質であると思うのです。旦那さまと肩を並べてギロンする女より

も、旦那さまの後で控え目に話す女の方が好ましい。

あれ！ 話が脱線しちゃったかな？ 私という女は此ういう封建的な風俗の事を何時も考えて居ります。

江戸川乱歩氏の「陰獣」は読んで居りませんが、私は絶対に御想像のような不可思議な女ではございません。年令は御想像より少し若くて、昭和八年八月生れです。私の母は日本画家（絵は下手で、恋愛の為に絶えずトラブルを起しては、一生を棒に振り、私が六歳の秋亡くなりました）だから私は見よう見真似で子供の頃から絵を描きました。私は陽に当る事が少いので色は白い方ですが、容貌は、さあ、困りました。自分では云えませんが、なるべく美しく想像して頂く方が嬉しうございます。私はチビで六等身ですけど、アンバランスではない積りですが、声は私のところへ絵が好きで年中やつて来る中学生が、「コノミヤリヨウ子みたいな声や。ほんまによう似とる」

と申しますが、名を聞きませんので、余程駆け出しの女優さんに違いありません。言葉は標準語です。長く一つ土地で育った事がありませぬので。万年床の敷っ放しではなくて、朝は起きて掃除をしないと気持が悪いので、必ず朝は上げて敷き直します。貴方が御想像になる程重態ではなくて、良い映画があ

つたら内証で観て来たいなあ、
と考える位元気なのですが、病人のくせに出歩くと叱られますので謹慎して居るのです。

以上の説明で私が男でない事だけはお判り頂けたと存じます。でない、女が男と間違えられたり、男が女に化けていたりしますとヤヤコシくて、戸籍係からお目玉を喰ってしましますのですね。

「花と朔風」が男の体臭がするなんて、ホントですかあ？あれは従兄がモデルで、従兄なら多分結婚すると、カクの如き横暴なるハズバンドになるのではないかと想像したからですが、従兄はソドムではありませんので念の為。同性愛に興味があるのは私の方で、矢崎龍一氏のお作

品も好きなのです。私は女の同性愛は興味なしです。自分が女だから、男性役の女性なんというのは気持が悪いのです。強いて云えば宝塚の春日野八千代さんが好きですが、身近にはありません。反対に、男性に愛される美少年なら自分もなりたいたいと思う。何の事はないんです。自分が男の人に愛されているような気がするからです。でも私が男性同性愛に



物凄く興味を持つようになりしたのは従兄のせいです。

従兄が東大の学部を卒えると、胸が悪くなって信州へ転地しました。その後間もなく私も病気になるって信州へ行きましたので、再び従兄と暮らす事になったのですが、その時東大の法科を出た山川さんという先輩でお友達が居ました。山川さんは司法官の試験を受ける

ので勉強するのに静かなところが良くて、信州へ来ていたので、八ッ岳の裾の方の久里庵と云う僧庵みたいな変なお寺の離れを借りていました。作家の三島由紀夫氏と同窓の人です。此の人が、三島氏から寄贈されたという「禁色」や「仮面の告白」を従兄にくれた人だったのです。山川さんは私と従兄の療養している白林荘という別荘（従兄の友人の別荘です）へ一日に二度も三度も遊びに来る時がありました。白林荘には家族の人は住んでいなくて別荘番の夫婦が住んでいるだけなので、気味が悪い程静かで、夜など別荘番のお婆さんはゼンソクの気があって早く寝込んでしまうのですが、お婆さんの部屋からセキの聞えない時は、死んでるのではないのかと不安になる位ひっそりしていました。白樺の林の中にあるので土地の人が白林荘と呼んでいるらしいのですが、本当の名は月見荘と云うのです。

東京から友人がお見舞いに来てくれる以外には誰も来ませんので、山川さんが遊びに来ると、従兄は喜んでいました。

山川さんは山賊みたいなひげの濃い大男のくせに声は小さくて囁くみたいでした。その上無口で何時も黙って掬い上げるような上目遣いで、お喋りをする従兄をジッと見ていて、時々一大発見のように力を入れて、「健さんって何だかノクターンな味のする人

だな」とか、

「あんたは童貞だろう」とか云って従兄を面喰わせました。それかと思うと急に手を延して、

「健さんの耳は凄く白いね、ドラ、一寸」

と従兄の耳に触ったりしました。私が用事で席を外そうとすると、

「妹さんは気が動き過ぎてイヤだなア」

などと変に気を廻して云いました。私は段々気味が悪くなって、山川さんの訪れる声があると、冷たい手でスーッと背中を撫でられた様な気がする程になりましたが、終いには従兄も迷惑がって、山川さんが訪れると、

「熱発してるから逢わないって断れ」

と云うようになりました。でもそんな従兄でも、山川さんが尋ねて来ると、急に髪を梳ったりしたのですから案外判りません。

そのうちに山川さんは司法官の試験にパスして名古屋の養成所だかへ行って終いました。が、一度従兄宛にレコードを五枚も送って来て、その中のお手紙に、

「夜がやって来ると、十六番目の窓に灯が、ともる」

という変な詩を書いて来ました。

山川さんの事はそれっ切りでしたが、私はそれ以来最も男性的な性格の従兄が同性から女の人のように抱き締められたり、愛撫されたりしたら、一体どんな顔をするのかなと、

想像すると、胸の奥の方がフアン／＼としてぶっ倒れそうな甘い感情が湧きました。

私が男の人の同性愛に惹かれる気持は相当深いもので、本を読んでも、美しい少年や男性的な青年が登場すると、此れは同性愛かも知れないと、夢中になって読みます。でも違っている場合が多いのでガッカリ致します。

私は自分の旦那さまがソドムだったとしたら、嫉妬なんて起さないで、旦那さまと愛人のためにラブレターの配達をしたり、冷やかしたりして一生懸命提灯もちをするかも知れないと思うんです。そして旦那さまが愛人のところへ行って帰らないような夜は………さあ困りました。此れはいけません。

此んな話を謹厳なる我が兄上が聞いたなら、どうでしょう。

「お前なんか死刑だ！」

と云うに違いありません。

そろそろ私のお返事もお終いに近くなりましてので、貴方のお知らせ下さいました療法の事を一言お礼申上げて置きます。それは神靈術のようなものでございましょう。

でも病氣はやはり神秘だの精神力だけでは力が薄いように考えるのですけどね。

此れは私が病氣の体験者として、医学に頼る事が一番安心だと思つたのです。

呪文なんて一寸怖いみたいです。では最後に――。

ふんどし幻想

私のふんどし⑤

松原三千代

私は自分のふんどし姿には、もちろん愛着と自信を持っています。けれども一方で、それ以上に男の人のふんどし姿に、たまらない魅力を感じます。若いたくましい二十代の男の人がキリリとしたふんどしの美しさ、これ以上の美というものは私には考えられません。

六尺ふんどしとか水泳ふんどし、それも思いきり地の薄いもので前が二重にならぬよう、それで力一ぱいしめ上げるのです。お

尻の割目には見るからに気持よく喰い込んできて、両足を揃えて立つとお尻に挟まれて、ふんどしは見えなくなってしまう。前から見るときはその反対に、薄いふんどしが今にも破けるほど盛り上っている。その見事な曲線美。私は飽かず眺める。こんなに美しいものだったのか、これこそ男性美であり、同時にふんどしというものの美しさであり、その魅力だったのか。私のふんどし姿、女のふんどし姿なんて肝心

貴方の御性癖は大分に複雑怪奇のようにお見受け致しますが、私にはよく判りません。でもそれだつて想像なら楽しいのですけれど、現実には女性を侮辱されたり傷つけられたりするのでは、怖くなつてしまいますので、私は逃げます。

でも縛られたり押えつけられたりするのなら、モーレツに興味ありますけれど、打たれたり蹴られたりするのには、まるで暴風に吹き飛ばされたみたい殺伐たる感じがしますが、踏まれたり押さえつけられたりするのには、何か温いものに包まれたような官能的な陶醉があるからです。リンチだの拷問なんかは愛情が除外されていますから、機械に挟まれたように残酷なだけです。

それに、如何に大好きな人に責められるのであつても、責められ放しだったら淋しくて耐えられないと思います。苦しい目をしただけ後で愛されるのでなければね。

幾ら踏みにじられても、その後で、「こんなに悲になつて、痛かったらう？」

なんて言う甘美なアトラクションもあるのですしたら、

「誰かなりたい人は手をあげて……」

「はあい！あたくし、北原純子です」

というような工合にね。

では、お返事は以上でお許し下さいませ。

のポイントが抜けた頼りないものなんだわ——と深い溜息さえ出るのです。けれど、それなればこそ、男のふんどしの美と着后感とを求めて、私は今日も赤い六尺ふんどしをキリキリとしめるのでしょうか。このしびれるほどのふんどしの着用感——

私は女性のふんどし姿は、男の人のふんどし姿には、かなわないと思う反面、自分のふんどし姿を一人でも多くの人に、特に男の人たちに見てもらいたくて仕方がないので。今までにも、思いがけない拍子に見られてしまつたり、時にはそれとなく目につくように気も使つて来ました。ふんどしは必ず毎日とりかえて、何時でも見られる用意だけはしているのです。

私はこんな場面を想像してみることがあります。私は三角ふんどしを着用して男の人の首か顔の上に馬乗りになつて、お尻でぐーっと押えつけ男の人の頬や唇や臉など柔らかい所をこすつてみたら、どんな気持ちだろうと考へてみるわけです。そうすれば男の人の目の前に私のふんどし姿を見せられることになるのですが、誰か相手をしていただける人があるでしょうか。

私は自分の長い経験から、下ばきとして

ふんどしが最も美しく快適で便利なものと思つています。十年にもなる遍歴と選択の末に、ふんどしの素晴らしい着用感を発見し皆さまでご使用をおすすめしているわけですが、女のふんどし着用ということについてこんなことを考えています。それは女学生時代のことです。一年生の頃には、どこ

の学校でも生理のお手当として丁字帯の作り方と着用法を教えますが、その時いつそのこと三角ふんどしにしてしまつたら、どうだろうと思います。生理時はもちろんのこと体操やリズムダンスなどのスポーツ着は、すべてこの三角ふんどし着用ということにし、その他普段着としても、キリッと心身ともにひきしまることでもあり、万一の際の身を護るにも、ズロースやパンティよりは遙かに好適ではありませんか。

女の先生はじめ若い女生徒たちが、赤いブルーの短いピッチリした三角ふんどしを甲斐々々しくして伸びくちと校庭一ぱいに飛び回る光景は、きつと美しく爽快なものだろうと想像されます。ふんどしはもはや男の『下帯』ではありません。ふんどしが女性のものになつてきた以上、私たちはこれを、私たち特有のセンスを以て現在の豊富な布地を自由自在に用いて、見事な下着とし、アクセサリーとして、新しい現代風俗を創り出して行きましょう。(未完)

未来幻想
マゾ小説

家畜人ヤプー

(第六回)

沼 正 三

第十二章迄の梗概

日本青年瀬部麟一郎は婚約中の独乙令嬢クララと共に、墜落した円盤の中で美女ポーリーンを救けた。彼女は二千年後の宇宙帝国イースの貴族で、シリウス圏にある本国星から地球別荘に来て、時間遊歩に出たところだったのだ。

麟一郎は怪しい人犬に咬まれて麻痺を起した。クララは彼を救うため、彼と共に二千年後の世界にやって来た。然し地球別荘に来る迄の間に段々分つて来たイース文化が次第に彼女を酔わせている様だ。イースは白人の楽園、黒人は奴隷化され、更にその下にヤプーなる家畜人があつて生きた道具として白人に仕えている。そして彼等はどうやら日本人の後裔らしいのである。

ポーリーンの妹ドリス、兄セシル、彼の義弟ウィリアム。ウィリアムはクララを別荘内の彼女の私室に案内して呉れた。一方麟一郎は皮膚強化処置を施された上、地階の獣医科手術室内で緩解薬を注射して貰った所だ。

第十三章 水晶宮の上階と地階で

一 靴具ヤプー

クララは自動椅子に乗って寢室に入って行った。衣裳箆箆の前で左の足台を踏んだ。F1号が訊いた。

「お召替は……部屋着になさいますか？」

「そうね、それに室内穿に穿き代えたいわ」

と、箆箆の横から、奇妙な生体家具が現れた。身長は三分の一縮小型で、頭部と両腕丈が尋常の大きさだから、手長の頭でっかちだが、変っているのは冠っている帽子(?)の頂上が平らになって、その上に一足の室内穿が揃えて載せてあるのである。それに頭髪が異常に長く、左右に分けて編んだ黒い太い髪束が左右とも五〇程位に伸びており、その先に刷子が結び付けてある——と見えるが、実は、その束ねた頭髪の一本一本を握部の無数の小孔から通し、その裏の面で切り揃えて、刷子に作りあげてあるのだ、つまりこのヤプーの髪は、生きながら刷子そのものの一部分になつてゐるのである。

二うまでもなく、これは靴具ヤブーである、贅沢な貴族は、戴靴奴、捧靴奴、磨靴奴など皆別々に取り揃えるがここは別荘だしするので、各種兼用の多能具を備えつけたものであろう。

クララの椅子の前に跪き、下顎を床に接触する迄下げると、頭上の室内穿が丁度クララに穿き良い高さに位置した。ひどく長い両手を伸してその姿勢を変えずに上手に彼女の靴を脱がせるので、クララは、片足宛、頭を踏む様にして、室内穿を突かけた。帽子と思つたのは周辺の枠だけで靴底がじかに頭頂に触れるのだと分つた。靴具ヤブーは脱がせた靴を頭に載せると出て来た場所に戻ってゆく。そこに坐り、今度クララがこの靴を使う時までに頭髪の靴刷子を使ってこれを磨き上げ、靴底矮人を取換えておくのである。

穿物を代えた僅かの間に、F1号は着更の用意を整えて待っている。三揃のスーツを脱がせてくれる。驚いたことには、下着まで脱がせようとするのだ。一寸吃驚したが、イースの風習を知らぬという気持がひそんでいる為、強いて止めず、やらせてみる方が風習が分つて良い様な気もする。もっとも昨日までのクララだったら、黒人にもせよ、若い男に手伝わせて下着を脱ぐことなどとても羞恥心が許さなかつたろうが、今はその点では何も恥しさを感じないので、させてみる気にもなったのである。いつか彼女はイース人らしい黒奴観を身につけて来ているのだ。

下着をよく代えるのは、イース人の身嗜みである。殊に女性は下着を汚し易いから、できるだけ度々取り代えるのがオシャレとされている。黒奴の従者に手伝わせるのはその場合当然のことだ。女主の肉体に劣情を催す様な不届な黒奴には恐ろしい処罰が待っているから、別に去勢した奴を使う必要はない。黒奴は我慢する義務があるのである。

裸になって、新しい下着をつけ、細身ズボンとジャンパー風のコ

ートを着た。来客用に各種寸法の衣服が用意されている中から、クララの身体に合った寸法のセットをF1号が選り出したのである。新しい服のうつりを見る鏡は、円盤の中のと違って四面鏡だった。彼女は化粧台に坐った。先に矮人の章で説明した鏡台附矮人達に手伝わせながら、F1号が髪や顔を作ってくれた。元来、従者は単に主人の手の代用品であるだけで、化粧など特殊技能には専門の黒奴がいるので、そう断つたが、急いでいるクララは構わず彼にさせたのだ。彼は感激して、仕事をやりとげた。

室内にはまだ色々の家具がある。天蓋附寝台があり、その奥の衝立で向うが隠れている。それに好奇心を駆られたので、クララは寝台を詳しく見なかったが、さもないければ、円盤内で見たのとは型の異なる舌人形と轆轤首型単能肉便器とが寝台の下に入っているのに気附いたことだったろう。

衝立の裏には浴槽があり、その横に僂僂型単能肉便器が据えてある。st1とは形が違うが、腰掛便器の形だから、すぐ分る。一昨日から便通がなかったのが、先程のソーマが効いたのか便意を催して来ている所だったので、使ってみる気になった。

来客用で専用器でないから生体彫画などの個人的趣味は省いてあるが、単能具にふさわしい体型。よく発達した馬蹄肉瘤の内底に後頭部を接して仰向けた大きな顔がある。唇の裂目も大きい。胡坐して開いた両膝頭が扁平になって、使用者がそこに両足を載せる様になっている。

跨ってみると、肉瘤の暖かい感触は、今迄使っていた水洗便所の冷たい腰掛よりずっと気持が良かった。

尻の下に口を開けている人間(?)の顔があることは、もはや少しも羞恥心を起さなかった。傍に立っているF1号の方は多少気にかかったが、先刻裸まで見せたあとだ。その為排泄できぬほどに



羞恥を感じるといふ訳ではなかった。「黒奴なんて、人間じゃない、半人間よ」といったボーリーンの言葉が思い出された。円盤内のあ

の論争……

と、連想は、又もや麟一郎のことに帰るのだった。

——麟は一体ヤブーなのかしら？

いや、彼がヤブーかどうかは、既に問題外かも知れない。確かなことは、自分の愛情が最早彼の方に向いて居ないことだった。黄色い肌のあの小男は自分の婚約者たるに価しない。こんな自明な事が何故今迄分らなかったのか不思議な位だった。円筒内の一時間がクララを開眼させていた。彼女は彼との関係を綺麗に清算したいと思った。

然し、円盤内で「二人は離れまい」と誓ったことも彼女は忘れてはいなかった。その言葉の手前、自分の方から彼に「別れよう」と云うことには憚りを感じた。何とか彼の方からそう云い出して呉れないものか。——それは彼がこのイース世界でどんなに扱われるかにかかっている。本当にヤブーかどうかは知らないが、現に白人達は皆彼をヤブーと見て疑っていないこと丈は事実なのだ。彼にはここは住み難い世界、そう悟って二十世紀球面に帰る気になってくれれば良い。勿論妾は一緒に帰る気はない。いやなこと。然し円筒船を手配して貰う位は妾から頼んでやれる。もともと麟一郎の麻痺を療しに来た妾、元の身体にもどした彼を二十世紀の世界に帰らせてやれば、それ以上の責任はない筈妾はその上でこの素晴らしい未来世界をできる

文享楽しよう。滞在できる文滞在して、帰らねばならなくなったら帰るとしても、もう麟と一緒にいる気はしない。妾の相手はやはり白人でなければ……あのウィリアムのような……

黙想しつつゆっくり生理要求を済ませた彼女は、美青年の顔を頭に思い浮べ、急いで立ち上った。——そうだ。ウィリアムが隣室で待ちくたびれているだろう。

孔鉦^{キール・ボタシ}が閉じた。下を見ると、食器を清拭したばかりの口が舌なめずりをしている。

——妾の今迄食べたものはイース人とは違うから、こいつ、味が変だといって驚いてるかも知れない。それとも何を食べても、便になれば同じかしら、妾が昨日食べたのは……

とりとめもないことを考えながら、化粧机に寄って、一寸顔を直す、クララは再び先程の応接室に自動椅子を駆って行った。

「お待ちとおさま、ウィリアム」

二 麟一郎大暴れ

丁度クララが肉便器に跨って、麟一郎との関係をあれこれ思い廻らしていた頃、獣医科手術室の寝台に横っていた麟一郎は俄に五体が恢復して来たのを感じた。

獣医が注射針をブルブルと震わしたことが却って幸して薬の廻りを促進した為、注射後十分余りで、毒が緩解してしまったのである。

半身を起して、導尿管^{カテーテル}を抜き去った。何時間ぶりかで自分の身体が動かせる。

「クララ、癒った。動けるぞ！」

喜びに溢れて、麟一郎は叫んだ。

「あっ、ヤブーが……」

十四分三十秒にタイムスイッチをかけて安心していたジムは、突

然の大声と共にヤブーが寝台から、むわんと起き上ったのを見て、仰天してしまった。予定より五分も早い。

先刻、ポーリーン丈来て、クララが来なかったのに、不安を感じていた麟一郎は、一刻も早く、恋人に出逢って無事を確かめたかった。然し、不案内なこの宏壮な屋敷内、一人では捜せない。それに第一、素裸じや困る。円盤の中へ素裸で入ったのが今度の苦難の原因だったんだ。先ず着る物を手に入れて……

獣医に向って頼もうとしたが、英語も話す方は一向不得手な麟一郎、咄嗟の際とて、言葉が出て来ない。進み寄りつつ、

「着物……着物……」

とだけ云って、獣医の着ている手術着を引張って見せようとしたところ、動揺している際とて、何か危害でも加えようとするのだと誤解したか、いきなりその手を振り払って助けを求めた。

「来てくれ。ヤブーが乱暴する……」

奥の控室から二人の船員が馳せ着けた。

麟一郎は、自分は乱暴するのではない。着物を求めているんだということを伝えようとしたが、耳を貸そうともせず、いきなり手錠を持ち出して、彼の手を押え、枷を掛けようとする。冗談じやないと手を引込めた彼は、喧嘩せずに、こちらの希望を分らせたいたの一念から、腹の虫を抑えつつ、一人の顔に笑いかけながら、何とか言葉を捜そうとした。その時、もう一人の方が

「強情者、おとなしくせんか！」

云うなり、拳骨で頬を打ちつけた。

ヤブーは服従本能の旺盛な動物と云われ、普通の生ヤブーが人間半人間に反抗するなどということは決してない。然し未調教の土着ヤブーは別物で、撲ったりすれば怒ることは、当然である。それを知らぬではなかったが、若奥様が手枷をつけさせなかった位のおと

なしそうな小男、暴れたって何程のことがあるう。ぐずぐずして、中若奥様がお見えになってこんな所御覧になっては大変、早く取り抑えてしまわねば、といった考えから、手荒い処置に出たのだ。

麟一郎は憤怒に自制力を失った。円筒船の船艙で、この二人から言語に絶する焦熱地獄の拷問を受けたことは、忘れようとしたって忘れられるものでない。恨重なる奴等だが、クララに逢いたいばかりに下手に出てゐるのだ。それを何事ぞ、手錠だの打擲だの、理不尽千万……

「ナニオッ」

怒鳴ると、今撲った8番に掴みかかった。小兵ながら、高校時代から学生柔道界に知られた猛者、華麗な投業で鳴らした柔道五段の麟一郎である。大きな黒い図体が地響立てて床に落ちた。途端に13番が後方から襲いかかる。危うく身をかわして、腰車、鮮かに決った。二人共受身を知らないから、骨を痛めて起き上れない所を当身で気絶させた。

獣医の黒い顔から血の気が引いた。この狂暴な土着ヤブーの前に只一人立つ恐怖……背後では看護婦も慄えている。

麟一郎は男の方に詰めよった。相手は後退りしながら、

「ラ、乱暴ハヨセ」

意外にも日本語である。円筒内でも日本語を耳にしたことを思い出した。そうだ、ここでは日本語が通じるのだな……

「何カ着ル物ガ欲シイ」

「着ル物、オ前ガ？」 ジムはドス青くなった顔に素頓狂な表情を浮べた。二十世紀世界の獣医も、犬が洋服を欲しがったらこんな顔をするだろう。「ソナナ物、アルモンカ」

「ナニッ」 思わず語気を荒げたが、思い直して、頼んだ。「ソナナコト云ワズニ、頼ミマス、ドウゾ……」

三 愛の告白

自動椅子に乗って応接間に戻ったクララはウィリアムの横に侍立する従者M9号が両手に一抱えほどある宇宙船の模型を持っているのを認めた。雑誌でよく見たロケット船だ。

「クララ、矮人決斗では僕の選んだ奴は負けましたけど、勝ったら引出物にしようと思っていたこの置物は、あの勝負を離れて、やはり貴女に贈物したいと思って、今持って来させた所です。受けて下さいますか？」

「まあ、嬉しい。喜んで頂戴しますわ。立派な宇宙船の模型だね」

「宇宙船としては一番旧式なロケット船ですがね。宝船と云って、枕許に置くと幸福が来るといふんです。福の神を象った七匹の矮人が集められているんですよ……」

帆掛舟が原始的なロケット式宇宙船になった丈で、七福神の個々は同じである。唯服装はやはり新しいものに変っているし、船長が弁財天女なのも、イース世界の女権制を反映している。もっとも七福神そのものを知らないクララには、変化は心に留らぬ。唯上蓋を外して中の七矮人の長頭や布袋腹の畸形を珍らしがる丈だ。

「本当に面白い収集品ね。じゃ早速飾らせよう」

従者に命じて寝室に運ばせ寝台の枕許の台上に飾らせた。これがあとで彼女の生命を救うことになったのである。

「お前達暫く外して呉れ」

ウィリアムは、F1号、M9号の二人共、廊下に出した。精気パイクをくゆらせつつ、「下郎は口さがないもの、余計なことを聞かれて、後で舌を抜かせなきやならんのも面倒ですからね。御用があれば僕におっしゃって下さい」

と弁解するように云って、坐り直すと、

「ところで、クララ、貴女はイースの人じやないんでしょう？」

ズバリと云った。

クララは、ハッとしたが、もうこれ以上嘘を云っても、ボロを出す丈と観念して、

「その通りよ。妾は二十世紀球面の者なの。そう分ったら、氷河号に乗せて貰えないからって、婦^{ミセス}ジャンセンと相談して、お芝居をしたの。随分一生懸命やつたんだけど、やっぱり分ったかしら……」

「僕が変だと思ったのは、決斗前の審判の訓辞を貴女がセシルに訳して貰った時ですよ。彼は気が附かなかった様ですが、家畜語^{ヤブー}の知識は記憶喪失と云う丈じや、なくなる筈がないんです。我々は片言もしやべれない間に家畜語は自由になるんですから、言語障害とも思えない。とにかく普通の言葉が喋れて、家畜語は喋れないというのは、どう考えても納得行かないですよ。そう思って見てるとどうもおかしい。例えばムサシに唾をやるのに指先に唾をつけてやったでしょう、ドリスも一寸変に思った様だけど、普通には上を向けさせておいて顔に唾を吐きかけてやるんです。貴女のはどうも前に経験ある人の記憶復活とは思えないふしがある。……まあ、それやこれやから推理したんですが、僕だけ氣附いたというのは、やはり恋する者の^{インスピレーション}靈感でしょうかな」

上手に恋愛の告白をされて、クララの白哲の頬がポツと赤くなつた。相手はアポロのような美青年、自分とて憎らず思っているのだ。

「どうでしょう、もし、お差支えなかったら、貴女が何故そんな冒險をなさったのか、お聞かせ願えませんか？」

「ええ、お話ししましょう、すっかり」

クララは、一切の事情をぶちまけた。最早新しい求愛者に対し、何事も包み隠さない方が得策だと思つたし、又、自分の氣持として

も、すべてを打ち明けたかった。麟一郎との関係、彼の麻痺、それを救う為の冒險行……婚約関係にあったと聞いて、ウィリアムは大息して、

「あのヤブーとねエ、二十世紀って野蛮な時代だったんだなあ」

「このこと他の方にも打ち明けた方が良いかしら。欺してるようでは、記憶喪失で押し通した方が面倒がないでしょう」

「いや、黙ってる方が良いです。女王陛下から帰化の裁可がある迄は、記憶喪失で押し通した方が面倒がないでしょう」

「帰化の裁可って？」

「え？ 貴女はその為にあべルデーンに行くんでしょう？」

「いえ、婦^{ミセス}ジャンセンはただ麟の麻痺を癒すことの交換条件として女王陛下に拝謁する様について云つただけだったわ」

「じや、貴女にも真の目的を云わなかったんだ。彼女^{あのひと}は仲々策士ですからね。勿論貴女を帰化させるつもりだったんですよ」

「帰化できますの」

「陛下の御説があればね」

「帰化出来るものなら、是非したいわ」

「陛下は勿論御裁可なさるでしょう。ポーリーン婦^{さん}は、それを見込んでんです。然しどうして貴女に迄隠したのか、おかしいな」

「そういえば思い当るわ」クララは、麟一郎の麻痺が緩解し次第二十世紀球面に引き返したい位で、アべルデーン行きを洩々承諾した時の心境を想起して云つた。「妾はその時にはこちらに長くいる氣持なんかちつともなかったの。麟のことだけで……」

「成程、そういうもんですかね。ヤブーに対してそんな氣持になるってこと丈はどうしても理解できませんがねエ。ま、とにかく、貴女のお氣持が正常に戻って来て良ござんした。勇を鼓してこの球面に來られた甲斐がありましたよ。」

「ええ、氷河号で貴方にお逢いしてから段々気持が変って来たの」
クララの方も巧みに愛情を表現した。

「二十世紀に帰りたいと……」

「……思わないわ、もう。妾にはどうせ一人も身寄りの者が居ないの、両親共戦争で……」

「野蛮な時代でしたわ、全く」

話題を弾ませながら、睦しく語り合う美男美女の四つの足が蹲った肉足台の背中に乗っている。

四 皮膚反応痛

ブルマチック・ペイン

獣医ジムを部屋の片隅に追い詰めた麟一郎は、埒の明かぬ押問答を重ねていたが、この時突然、勢よく後の扉のあく気配がして、
「どうしたの、これは、一体？」

と爽やかな声が聞えて来た。ポーリーンの声だ。麟一郎は救われた思いで振り返った。彼女なら、話も分り、クララにも逢わせて呉れるだろう……

彼女は一人だった。実は、黒奴舎を視察しながら、彼女は腕送話器をクララに渡したのを後悔した。あの時は、地階ですぐヤブーを受け取れるつもりで、ほんの一寸の間だから構わないと思ったのだが、こうして地下街に在る間に色々命令したいことが頭に浮ぶ。いつも思ったことをすぐ腕送話器で命令しつけている彼女には、腕送話器なしの不便さが堪えられない。とうとう従者A3号に彼女の私室から別の腕送話器を取って来る様命じて、使いにだし、自分は、そろそろ十五分になるので手術室に戻って来たところだったのである。

麟一郎が振り返った一瞬の隙を捕えて、ジムは卓上の空フラスコの頸を握るなり、麟一郎の頭目掛けて振り下した。臆病な彼も、今女主人の現れたのを見て、彼女に危難の及ぶことを恐れ、渾身の勇

を振って反撃に出たのだ。黒奴は忠節を尽すのを本分としている。然し、麟一郎の方が素速かった。颯と交して空振させた腕を掴んで身を沈めると、

「エーイ」

見事な背負投である。丁度ポーリーンの立つ床の前にジムの長身が長々と伸びた。フラスコが転った。

ポーリーンは一瞥して事態を悟った。

——失敗った。手錠を掛けさせておくんだった。タロを連れて来れば良かった。腕送話器を片時だって身から放したことがないのに今日に限って嵌めてないなんて、おまけにA3号まで……何て生憎な……けれど、それにしても、このヤブーの素晴らしさは！大の男三人をノシテしまった腕力、それも僅かの間に……決斗士にしたら大したもの、仔種をとりたいわ……

イース女性には雄々しい心を備えている。こんな場面に遭遇してもポーリーンは、そんな感想を懐く丈の余裕を持っていた。

——然し、とにかく、このヤブーを取り鎮めなければ……

麟一郎は、ポーリーンの前に来ると、前を掌で隠しながら、云った。

「クララニ逢イタインデス」

「ウン、逢ワセヨウ」

ポーリーンの日本語は女言葉としてこのニュアンスのない云い廻しだったが、それは、家畜語としてヤブーに命令することに使用する丈で、女言葉として話したことがないからである。

「ソレニ何カ着ル物ヲ願イシマス」

乱暴者という印象を持たれたに違いないひけ目を感じ、少しでもそれを柔げようと、麟一郎は丁寧な言い方をした。

「着ル物？」

ポーリーンは思わず問い返したが、鋭い頭脳に忽ち真実を直感した。

「—そうか、このヤブーはまだ自分の身体に加えられた皮膚強化処置の意味を知らないんだわ。よし、これを利用して、こいつを取り抑えることにしよう。」

ポーリーンは隅の看護婦を目にとめて、

「お前、服を全部脱いでヤブーにおやり」

「はい、若奥様」

命令は絶対、人前で裸になるのは、ヤブーでない以上異例のことだが、N5号は不審の色一つ見せず（※）、すぐ服を脱ぎ捨てて、真黒の肌の全身を露出した。靴も脱いだ。

（※註。主人（白人）の命令を受けて、その理由を反問することは、黒奴にとっては犯罪を構成する。黒奴同志でこれをあげつらうこともいけない。独り心中にこれを思索することは処罰の対象にはなっていないが、道徳的には非常に悪いこととされている。要するに黒奴やヤブーの知性は命令の効率的遂行に注がれるべきで、命令そのものへの反省や懷疑は許されぬのである。

—女の服か

然し、不満はなかった。贅沢は云うまいと思った。飢えた者は食を選ばない。長い間の裸に彼はすっかり謙虚になっていた。実際はタウヌス山腹の溪流で泳いでから、まだ四半日も経っていないのだが、気持の上では何ヶ月も着る物なしで居たように感じた。身を纏うに足るならどんな服でも良い、いやこの服なら、半袖半ズボンの黒奴男用のよりましな位だ。

服はピッタリ肌に吸い着いた。手首足首まで四肢が包まれ、サーカス芸人の肉衣裳タイツのよう。靴はひどくきつそうなので、あきらめた。裸足でも仕方がない。まあ、とにかく、これでクララの所にゆ

き、彼女の前に立つ、準備はできた。

ポーリーンは、奇妙な薄笑を浮べて、黒奴女の服を着込んだヤブーを眺めた。もう占めたものだ。あと三分もすれば七転八倒の苦しみが始まる。……そろそろA3号も帰ってくる筈だし……

「後始末は頼んだよ」裸になったまゝ、慄えて立っているN5号に言い捨て、麟一郎に向って命令した。「ツイテコイ」

もう見向きもせず、部屋を出てゆく。麟一郎は黒奴女に一礼すると、すぐ後を追った。もし彼を捕縛しようとする連中が現れたらすぐポーリーンを人質に取れる様、彼女の背後にびったりついてゆく。並んで見ると、彼女の体格の良さに今更驚く、彼女の肩にも屈かぬ自分である。

ポーリーンはゆっくり歩いて行った。廊下には人影がない。彼女の来臨はもう地階中に知れ渡っているので、この通路は通行禁止になったに等しく、誰も出て来ないのだ。

エレベーターの手前迄来た時、突然麟一郎が、悲鳴を上げて跳び上った。

「あ、痛ッ、痛ッ、助ケテクレ——」

と全身をかきむしる様な恰好で、床の上を転げ廻る。

莞爾と振り向いたポーリーンの眼が、冷然とその姿を追う。智慧の仇らきでこの狂暴なヤブーの暴力を征服した喜びが輝いている。

麟一郎の表皮細胞デルマトロームに含まれるデルマトロームと、服地中のデルマトコンとが、皮膚反応デルマトローム・リアクションを起し、末梢神経に激烈な疼痛を与え

る。服地の当った部分一面に針で間断なく刺戟されるに似て、言語に絶する苦しみ、これを皮膚反応痛デルマトローム・ペインという。大体一時間位続くと止るがその時には皮膚は完全に剝離し服地と一枚になってしまっているのだ（※）。

（※註。ヤブー皮の生剝いきはぎには二つの方法がある。剝がした皮膚に用

のある場合にはコサンギニンを利用し、白血球を増加させて皮膚と肉とを淋巴液で次第に遊離させる。そしてブヨブヨと水腫れした状態のまゝ、なめし液に漬ける。「生なめし」といって、これによって新陳代謝を受けながらなめされて、作り出されるヤブー皮革は最も美麗で強靱である。唯この方法は肉体の方も変質させてしまう。そこで、食用ヤブーの場合には皮膚反応を利用して剥ぐのだ。皮は捨てて、肉を使うからである。

参考。「食用ヤブーも皮膚強化処置がしてあるので、皮は食べられません。そこで調理前に服型布巾で一時間全身を包みますと、皮は全部布巾に附着して取れてしまい赤身になります。赤身でも保存室で飼えば一週間は生きています。剥ぐ時の皮膚反応痛で分泌された苦痛素は二、三日で消えますから、餌に注意して少くも三日間は赤身の儘生かしておき、それから調理すれば、美味しく戴けます。……」(「畜人料理のこつ」から)

窯の中が焦熱地獄なら、これは刀葉林地獄とでも云おうか、服地を引剥そうとしても離れればこそ、唯転げ廻るばかり。

この時従者が帰って来た。ポーリオンは送話器を腕に着用しながら、彼に命じて、手術室から手錠足錠を持って来させ、とても抵抗所でない麟一郎の両手両足に鎖錠させた。

「よし、じゃ、こいつの服を切り裂いて剥がしてお終い」

服の背中に切り目を作って、そこからペリペリ引き剥がす。まだそれほど反応が進行していないから、強い絆創膏程度の附着力で、剥がして終えば皮膚には影響は残らない。服地が取り去られると嘘の様に激痛は去った。

「二度と服を着る気は起すまい」

再び素裸に剥かれた麟一郎を足許に見下しながら、ポーリオンは独りごちた。

原因の凡てが服にあったことを悟った麟一郎は、今こそ船艙内で入棺前に聞かされた「着物ノ要ヲネエ肉体ニナル」との謎の様な言葉の真意を理解した。——そうだったのか。あの高熱棺は俺の肉を変質させる窯だったのか。俺は着物の着られない身体になってしまった。どうすれば良いのだ、俺は……

ポーリオンが笑いながら云った。

「サ、約束通り、オ前ノ主人ニ逢ワセルヨ」

後手錠の鎖尻をA3号に取られ、両踝を結ぶたった三〇纏しかない足錠の鎖に歩きなやみつ、彼は彼女に続いてエレベーターの人となった。絶望が真暗く心を満していた。今はクララの暖かい言葉への期待だけが心の支柱だった。

五 鞭うつ爲に飼う家畜

ウィリアムは、新しい一服を吸いつけながら、ふと思い出した様に訊いた。

「あのヤブー、リンって云うんですか、奴をどうするおつもりですか？」

「そうねえ、妾……」

先刻考えたように、送還して貰うのが一番得策だろうと、口に出しかかったが、

「どうです？ 何に使います？」

再度のウィリアムの問。何に使います？ という表現には、彼女をドキリとさせ、口を噤ませてしまう様なものがあつた。

「……………」

「成程、いきなりそう訊いても無理かも知れませんが」煙を吐きながらひとり背いて、「貴女はまだヤブーの用途全部を御存じないんだから……でも、じき分るようになりますよ、新しい生ヤブーを手

に入れた時の『さあ、何に使おうか、何を作ろうか』という私達の楽しみが。……それに奴はまだ土着ヤブー、いや旧ヤブーだから、洗脳手術を施す間に大分楽しめる訳ですね」

「洗脳……聞いたことのある言葉だわ」

「つまり土着ヤブーから生ヤブーを作り出すのに、仲々手間がかかるわけです。愉快な手間がね」

「何だかよく分らないわ」

「ヤブーは服従本能の旺盛な動物だと誰でも云います。ところが実際は」ウィリアムは更に本格的に説明を始めた。「ヤブーを生れたまゝ手を加えずに放っておくと自由意志を持つ個体に成長して終わります。そこで、生ヤブーとして生産される奴等は、普通生後一週間内に、意志去勢といって、生育後自由意志を発達させる様な大脳局部を剔出して、服従本能だけが残る様に手術されるのです。ヤブーの持つ優秀な知性を十分に利用する為にはそれが一番良いのですね。然しこの手術は年取ってからではできません。そこでその場合には条件反射によって脳神経節の当該局部回路を閉鎖させ、局部剔出による意志去勢と同じ目的を達成するのですが、この過程で、生育後の無駄な知識経験に基くヤブーには有害な物の考え方が一掃されてしまうので、これを洗脳と呼ぶのです」

「では麟——も」

もう瀬部氏と云い直そうとして口をこらせもしなかった。

「ええ、リンの場合は勿論洗脳しなければなりません。時間がかかる代り、貴女に絶大な愉樂を与える時間です」

「妾がその仕事をするわけ？」

「ええ。もっとも訓練局に預ければ仕事は早い事です。ですから、貴女が奴をすぐ愛玩ヤブーにして手許におきたいとか、早速肉便器にして使いたいとか——（クララは、先程寢室の奥で使ったあと見た

肉便器の舌なめずりの様子をふと思い出した。——おっしやるんでしたら、訓練局の技師の手に掛けるのも良いのですが、お急ぎでなければ、是非御自分でなさることですね。面白い手術です」

「でも妾はメスなど一度も持ったことないわ」

「いや、メスじゃないのです。メスの代りに鞭を揮って施す手術です」

「え？」

「クララ、ヤブーには自由意志を認めないこの世界に、ヤブン諸島五千万の土着ヤブーが人間意識を持つことを許されて生存しているのは何故だと思えます？表面的には生ヤブーの補給源ということになっていますが、土着ヤブーなしにだって、生ヤブーはいくらでも仔を作りますから、補給には事欠きません。実際は、奴等の存在意義は」パイプの灰を肉瘻壺に落しながら、「私達貴族に洗脳手術の愉樂を与える材料たるにあると云えるのです。この地球まで捕獲に来るのが遠すぎる星の人々の為には、市場でわざわざ土着ヤブーが売られている位です。商標は『貴方の鞭のお愉しみに』と云うんですよ。分るでしょう、鞭で土着ヤブーの自由意志を叩き剥し、服従本能を露出させて、一匹前の生ヤブーに仕立て上げる迄の調教が、私達貴族にとって、愉快な精神的娛樂だと云うことが」恐ろしい内容ウィリアムは平然と語り続けるのだった。「つまり、生ヤブーでなく、わざわざ土着ヤブーを飼う理由はと云えば、自分で洗脳したいから、ということです。土着ヤブーは鞭つ為に飼う家畜なんですよ」

「まあ」

「あなたのリンは唯の土着ヤブーでなく、旧ヤブーだから、一層洗脳し甲斐があると思えますね」

彼女が麟一郎を飼ヤブーとして今後飼育することを当然のことと

した話し振りである。彼女は、先程考えた麟一郎送還の案を相談しよう、と、改めて

「妾が考えているのは……」

と切り出したが、その時扉にノックの音が聞え、どこからか声が聞えて来た。

沼正三だより

(一) アフリカ関係ではガーナの独立とか朝日新聞連載のアフリカ一周写真紀行とか、新しい材料もあるのですが、それが本文に取り入れられていないのは、手帖の稿は数カ月分宛纏めて送っているの、ここ二三号は昨年末の起稿に係る分だから、と御諒承下さい。

(二) 相馬原射殺事件で米人が日本人を大扱いたしたことなど初め、雑報欄で取り上げたい記事も多いのですが、多忙で余裕がありません。残念ですが、四月号九六・七頁麻生氏の雑誌通信を見て、心強くなりました。殊に週間朝日のスチュワデスの足の写真は、私も取り外し保存した一人で、この感覚を持たれる麻生保氏になら、雑報欄のバトンを喜んでお渡ししたいと思います。氏にその雅懐と余暇とのあることを望みます。如何でしょう？

(三) 一読者の立場から申しますが、真木氏の四月号一七二頁黄色オラミ休載宣言は、全

「F1号でございます……御話中でございますが、只今、若奥様と御見えになりました」

「お入りなさい」

クララの声にに応じて、扉が開き、ポーリーンが入って来た。後に続くのは素裸の麟一郎と彼を繋いだ鎖の端を握る黒奴従者である。

くがっかりです。雑誌開封、目次一閱、「載ってない……」という裏切られた様な失望を、これで二月、三月、四月と三回味った末休載、「ヤブーの終る迄」と来た。ヤブーの作者として、それでは、と龍頭蛇尾に終らせるわけにも行かない。読者の私と作者の私との喧嘩です。全くひどい。同傾向のもので頁を取り過ぎるというのなら、ヤブーへの割当分をオラミに譲ることを編集部に任せても良いのです。是非少し宛でも続けて下さい。忙がしいのは誰でも同じですよ。真木さん。

(四) 前に「潰滅の前夜」頌を書いていますが、改めて「晦冥の悲歌」頌は書きませんが、前篇以上に興味を持って読んでいます。前篇では、六太が責の主体でしたが、今度は白哲(?)の美女リーレが主役になっているのが、家畜化という点を離れても、マゾを刺戟するのでしよう。読者としてはこれ程惹きつけられる私も、作者としては腐っています。四月号の女体輓畜の条り、「やられた!」と思いました。私のは軌条はないのですが、ヤ

ブー十匹を二列に車体の床に嵌めて、二十本の脚で車体を支えさせ上半身をそのまま乗客の腰掛に提供し、回転軸ではないが、洋裁に使う点輪(柄先に歯車を附けたもの)が拍車代りに背中を走る様アクセルに連動された乗物を考案し、外から見るとヤブーの脚が並ぶので「むかで輿」と命名することにしてみました。然し、遙かに練達した筆ですから私が書くより良かったと思っています。氏の構想は付度を許しませんが、唯、無用な愛国心から相木と多穂子に成功させることなく、伶子の運命こそ真に日本の明日を示す、前夜であるとして作の基調を一貫される様祈ります。尚、男を責めるのはお嫌いかも知れませんが、貴作を愛読するマゾ派も多いのですから、御愛嬌に相木をすぐ殺さず、大いに凌辱して欲しいもの、これは望蜀の言辞かな？

(五) 四月号一七五頁古賀信司氏が二月号のヤブーを分り難いと言われるのは尤もです。申訳ありません。殊に辞典の部分は、私のお

いつ、コンプレックスの産物、本来精神病理の対象にもなり得る様な所で、一般人に共感し難いのは覚悟しています。この号では人間便器のことばかりになってしまいました、第一部（一行が地球を離れる迄）丈でも完結すれば、全体中で占める部分はそれほど大きくならない筈です。勿論、普通の小説に比べれば排泄の記述は頻繁に見えましたが、多

少は勘弁して下さい。私に云わせれば、他の小説が排泄のことを顧慮しなさ過ぎるので、例えば、（四月号一二〇頁リーレの私室の女体家具など排泄は一体どうするのだろうかなんて考えますね）。――便器の条り以外では、それほど分り難い所はないつもりですが……。説明が多く描写が少いのは、初稿をガリバー旅行記やユートピア（トーマス・モ

ア）などの様な記述で発想したものに小説的潤色を加えているためですが、紙幅短縮の意味もあり、力量不足の結果でもあります。御愛読を感謝します。又御批評を御寄せ下さい。

（ウ）三月号一七六頁横山幹生氏がソドムの百二十日の訳文を要求しておられますが、公刊は到底不能と思います。右は御答え迄。

〔切 腹 通 信〕

／＼中 康 弘 通

貴誌毎々御恵送に預りありがたく拝受いたしました。四月号で藤山氏のはいつもの同巧ですが、法谷氏の刀の切味を腹で試すという行き方は、幸田露伴の作品に刀工が刀は切れるかと問われて、腹を丁と叩き、切れ是を、二つにならむ、と叫ぶというのに似ています、それを女にあてたところに面白さがあります。次号では愛人も腹を切ることになるのでしょうか面白と思います。「家畜人ヤブー」にも腹切が出て来ますが、是は切腹のマゾヒズムな一面を見せた扱い方で興深く拝見しました。

此のところ実録が低調で惜しいことです。やはり読者層が限定されますので提供者が少いのは致し方ありますまい。兵頭氏の通信、此の情熱には感心します。

三月号の読者通信欄で福岡の千原桐男氏が書かれた下関の少女、西日本新聞でたしかめましたのでお知らせします。あと、朝日の人妻は月日不明ゆえ探索不能でした。下関の少女は当時、毎日夕刊で、税を苦に少女ハラを切る、とあったもの、数年を経てやっと確認したわけで、全く貴誌のおかげです。

十八娘 出刃で切腹

タンスの差押え苦にして

〔下関〕二十六日午前二時ごろ、下関市竹崎町二丁目無職立野アヤノさん（五六）の長女節子さん（一八）が自宅階下二畳の間で出刃庖丁で腹部を切り畳を朱に染めて苦悶しているのを家人が発見、市内加賀山病院にかつぎこんだが生命危篤、家人が発見したとき節子さんは「殺して下さい」と叫び、どうしてこんなことをしたかと、たずねたところ「何もわかりません」とかすかに答へ原因など不明である。伯母の長谷川モトエさん（五八）は「この前の月曜日に税務署員にタンスなど差押えられた

が、これを苦にしていたもようです。」と語った。

（昭和25年12月27日付、西日本新聞所載）

女体切腹構成

案図譜

中康弘通氏案

北原純子女史画

キヤビネ版印画紙密着焼付

八枚一組千円（送共）

時代物

現代物

- （一）女武者の最期（四）女剣劇の腹切
 - （二）腰元の自害 （六）女剣士の切腹
 - （三）遊女の自決 （七）オフィスガール
 - （四）武家の姉妹 （八）農家の娘
- （詳細解説は本誌、九月号、並に十月号にあり）

責 画 師 の 話

本^{ほん}田^だ由^{よし}郎^お



(一)

「ええ、私ですか？ そうなんです。これでも昔は江戸で、ちよっとは名の通った画師だったんですよ。」

乞食姿の男は、こんな調子で話し出した。

「江戸で私は喜多川の流れをくみ、由英と名乗っていました。特に責画を描いては、その名を無惨画師由英といわれ、責画を好む一部の人の間では随分と騒がれたものです。」

遠い昔を想い出す様な面差した。

「あの当時、こんなこともありましたっけ。」

責画を描くのに、どうしても責られる女……

：なんというんですか、画の手本が必要だったのです。この手本を探し出すには色々苦労しました。私の思い通りの姿の人がなかなかいないのです。帯に短かし襷に長しで、私の注文通りの人が仲々ありません。ですから、仕方なく手本なしで責画を描いたものです。見る人を見ると、その様な画が不自然だったのでしょう。迫力がない、実感がない、きれいごとすぎる等と言われました。私がこんな評判に気を腐らしているとき、私の前に現われたのがお初でした。年は十九だと自分から

言っていました。顔立は面長できちんと整っていて、色白は七難かくすと言いますが十人並以上の美しさです。黒い瞳、美しく結った髪、私が胸に描いていた通りの姿です。はやる気持を押さえて、私のことを、どうして知ったのかと聞いてみました。すると驚くじやありませんか、お初がこんなことをいゝ出さんですよ。

「私は、お師匠さんの描いた画を或る人から見せて頂きました。その画を見せて貰った日から、一度でもよいから、あの画の中の女の人達の様に、責められてみたいと思うようになりまして。それで今日、この様に恥を忍んでお伺いしたのです。」

お初は、自分から私の手本になりきたのです。明日から私の家に来てくれる様に話しました。」

(二)

「その翌日、約束の時間かっきり、お初は訪ねてきました。」

「ねえ——お初さん、貴女は私がどんな画を描いているか知っていますね。貴女から進んでこの役を買ってくれたんだから、こんなことはいふ必要はないと思うが、実をいうと、私が今までの描いていた画は、手本なしだったんだ。いわば、頭の中ででっち上げた代物だ。しかし今は違う、お前さんの様な立派な

手本が得られたんだ。思い切り腕を振って、迫力が無い、実感が無いといわれない様に素晴らしい画を描きますぞ。』

私は幸次郎という、今では弟子の様に成っている男に手伝わせて、赤い扱帯でお初の身体を大切なこわれ物でも扱うように、叮嚀に高手小手に縛り上げました。この時、痛ましい様に十分気をつけたのは勿論です。縄尻を柱にくくりつけ、横坐りに坐らせました。その後、幸次郎が、弓の折れたのを持って立ちました。私は、この姿を紙の上に筆で走らせました。こんな画を描くつもりではありませんでした。最初から裸にして縛ったり、痛い目に合わせたり、たいたいたりして、大切な手本に逃げだされては困ると思ったからです。でも、二回目の時は着物を脱いで貰い紅の長襦袢一枚にして細引で後手に高手小手に縛り上げました。三回目、四回目、と回を重ねるに従って、今までの時より更に一層きびしく縛り上げました。五回目のときです。お初の肩先を弓の折れたので本当に幸次郎に打たせました。苦痛をこらえて身もたえするたび、長襦袢の裾が乱れて捲れ上り、白い足首が見えます。私は幸次郎から弓のムチを奪い取ると、更に両膝頭までもさらけ出しました。そのとき、

『あれー』

と、お初は羞かしげに顔を真紅に染めてい

ました。帰る時に

『お初さん、今日は苦しかったろう。これにこりずに、この次も来てくんないかい。』

『えー』

お初は、小さな声であいまいな返事を残して帰ってゆきました。お初が帰ってしまうと、私は今日あんなひどい責め方をしたので、もう二度と手本になつてくれないのじやないかと、不安になってきました。しかしこの不安も直ぐ消えてしまいました。お初が再び来てくれたからです。六回目、七回目と私のお初を責める手は、もうその頃では、手本よりも責めることを楽しむかのようになり、その度に深めてゆきました。或る時は湯文字一枚で裏の松の木に吊し上げ、鞭でたたいたり水を浴びせたり、或は、海老責めにしたりしました。雪責め、水責め等、考えつくあらゆる責めを、私と幸次郎とでお初に加えました。余りひどく責めた時にはお初は、失神することさえありました。この頃、私に結婚の話が持ち上りました。相手の女は、近所の八百屋の娘で今様お七とまで町中の若い衆に騒がれている、小町娘のお光という十七になったばかりの初心娘です。この話が、いよいよ本ぎまりになったかと思うと、急にお初は私の家に来なくなつてしまったのです。しばらくした或る日、使の者がお初の手紙を持ってきました。その手紙を読んでみて私は驚きました。お初

は私を愛していたというのです。初めての日、私がお初をいたわったのは、大切な手本に逃出されては、大変だと思ったからでしたが、そうとは知らないお初は、私が愛しているため、いたわったものと思ひ違ひしていた様です。私と幸次郎が、どの様に責めたてても苦しみにたえて、失神してまで私の手本になつてくれたのも、私を愛していたからだったのです。愛している人には命までもと思ひ、私の手本になつてくれたのです。だから、その私がお光と結婚するという話を聞いて、お初にとっては裏切られた様な気持だったのだでしょう。私の激しい責めを、今日の日まで歯を喰いしばって堪えたのも水の泡になつてしまったのです。そのうち自堕落に身を持ち崩して旅役者の群に落ち、今では旅から旅に廻って歩いているとのことでした。』

(三)

『私とお光は晴れて夫婦になりました。私達夫婦は十三も年が異なり、お光は十七、私は三十でした。私達の結婚には、裏に深い訳があったのです。私はお光の父親に三十両という大金を貸してあったのですが、それを返せないのでお光を嫁に貰って借金を棒引きにしたのです。借金のかたに私の嫁になつたお光は、只美しいだけで血の流れていない人形の様でした。その頃、偶然の機会から私は幸次

郎とお光の仲が怪しいのに気づきました。私は或る日、用足しに出る様に見せかけ裏木戸からしのび込み、時を見はからって部屋へ入ると、幸次郎とお光が密会の最中でした。現場を押えられた二人は、何の言訳も出来ません。

『二つに重ねて四つにする所だが、言訳出来るなら言ってみろ。』

と私は、逃げ廻るお光の弱腰を思い切り強く蹴り上げました。お光はその場にどっと倒れました。私はお光を後手に縛り上げ、着物の襟に手をかけてぐいと胸元を捻げました。白い生物を思わせる様な乳房が息づいています。そばの机の上から絵筆をとると、乳房の間を筆先でくすぐりました。お光は余りの擦ったさに、全身から汗を流し両足を蹴って裾を乱して、うううと堪えています。幸次郎は見るに見かねたのでしよう。私に謝りましたが私は許しません。ぐったりとしたお光の髪の毛を掴んで引き起しました。

『幸次郎、お光の身体を鞭でたたいてみる』
私はお光の着物をぐっと下に下げ、肩口を殆んど露出させました。

『それだけはお許し下さい。』

幸次郎は私に泣いて頼みました。

『幸次郎、女房と自分の愛弟子が密通しているとは思わなかったよ。お前に裏切られた俺の氣持が解る訳がない。ぐずぐずせずにお光

を鞭で打って見ろ。』

幸次郎は、自分の愛人を自分の手で鞭打つことは、自分が鞭を受ける以上の苦しさだったでしょう。只呆然と立っているばかりです。
『さあ、早く鞭で打て。』

私は幸次郎をせかせかせます。幸次郎は苦痛にゆがんだ眼差しで、愛人の肌に鞭を振り下しました。お光は苦痛に身をよじり蛇の様に全

身をくねらせて、額には脂汗さえ浮かべています。さすが幸次郎もそれ以上、お光を打つことは出来ませんでした。

『おい、もっとお光を責めないか。』

私のきびしい声で、仕方なく再びお光の身体に鞭を振るいましたが、わずか数回で鞭を投げ出してしまいました。
『もっと責めろ。』



幸次郎にこういふと、血相を変えて室を飛び出していきました。姦夫が逃げたなら、今度は自分で女を責めてやろうと思っただけで、突然薪割を手にした幸次郎が飛び込んできて私に打ちかかってきました。長年、私を師と仰いで来た幸次郎も、気の乱れのために私に向って薪割りを振り上げたのでしよう。しかし、若い時少しばかり剣術を習っていた私は、体をひらいて、よろめく幸次郎の手から薪割りをもぎ取ると、幸次郎の頭上目がけて打ち込みました。狙いは狂わず幸次郎の頭を真二つに割り、幸次郎は血汐を吹き上げ声も立てず息絶えてしまいました。そばで見えていたお光は、私のことを悪魔、けだものだとののしりました。そうでしょう。自分の情夫の幸次郎が目の前で私の手で打ち殺ろされてしまったのですから。

『私はお前の言う通りけもので、その上悪魔さ。幸次郎はこのように殺してしまった。お前も生きたまゝで私から許されるとは思っていないだろうな。幸次郎は一と思いに息の根を止めてしまったが、お光、お前は違う。私はお前が憎くて憎くて仕方がない。だから一と思いに殺さずに、なぶり殺しにして、この世の地獄を味わせてやるんだ。』

お光の着くずれた着物の襟を掴み、庭に引きずり下して松の木の根元に連れてゆきました。そこで、お光の後手に縛った扱帯を解き

別の細引で両手を頭上で交叉させて縛り、細引の余りを太い枝に通して力一杯引き寄せた。お光の身体は、地面をずるずる引きずられて泥だらけになりましたが、私はなおも引き寄せたので、お光は松の枝に完全に宙吊りになってしまいました。裾が乱れて太股までも見えて、膝頭は血と泥で痛々しい程です。

私は松の根元に薪木を山のように積み上げました。そして油をかけ火を放ちました。炎はお光の体を赤一色に染め上げました。姦通したとはいっても、一度は女房にしたことのある女です。生きながら炎で焼け死ぬ姿を見かね、画室に飛び込んでしまいました。少したつて気が静まってから、見る気もなく窓を見ますと、障子にお光の影が映っていました。炎に焼かれる熱さに堪えかねて身をよじらせています。その度に影が大きくなったり、また小さくなったりして映りました。

その中に髪を結った元結が切れて、黒髪がぼさりと落ちました。この時、私は夢中で紙と筆を手で庭に出ました。松の根元に走り寄り薪木を炎の中に投げ入れました。火の手はどんどん強まります。お光は自由になる足をばたつかせ苦しみます。私は、お光のそんな姿を手本に夢中になって画を描き続けたのです。

(四)

「えーお光ですか、私が画を描き終えない中にこの世の人でなくなっていました。私自身お光を焼殺してしまったのです。姦夫姦婦とはいえ、人、二人までも殺してしまつては江戸にいる訳にはまいりません。とる物もとあえず有金を懐に、その夜の中に江戸を脱しました。千住に着いた時、夜も白々と明け始めました。戸田の渡場から荒川を渡り、日光街道に出て草加を過ぎ春日部へ来たのは日暮近くでした。ここで宿をとれば何事もなかったのですが、少しでも遠く江戸から離れたいと思つて、杉戸まで足を伸すことにしました。これがいけなかつたのです。ほれ、この私の右手を見て下さい。春日部と杉戸の間の土手の上で、浪人者に肩の付け根から一刀のもとにばさりと切られてしまい、その上、有金全部を奪われてしまったのです。命だけ助つたのが幸か不幸か、今日までどうにか生きながらえて来ました。因果なことですが、二人の人間を殺した罰の酬でしょうか。手の無くなった画師などは、どうすることも出来ません。とうとう人の情にすぎる乞食に成り下つてしまいました。二度と江戸の土を踏むまいと思つていましたが、この年になると江戸がむしように恋しくなり、この後そう長くない命のある間、江戸へいつて見たいと思つています。」

そういうと、片手のない乞食男は江戸目指して淋しげに歩いていった。(終)

加 虐 送 別 会

青 葉 楨 一

一

思えば、それ迄マゾヒストだった私が、サジストに入替る転機となったのは、私の奉職する中学校に起った強盗事件だった。

九月中旬の日曜日。学校へ忘れものをしたのを思い出し、朝八時少し前に家を出た。

小使室を覗くと、宿直の為の朝食は用意されていたが、当の堀川先生の姿は見えず、小使の爺さんが所在無げに長い煙管をスパク／＼やっている。

「——小父さん。堀川先生は未だ起きないの？」

「——お早ようございます。へえ、未だお寝みのようで——今日は日曜ですから、お起し／＼なくとも思いました……」

「そうだな——ア、一寸職員室へ入れて貰

うよ。昨日忘れものをしたんでネ」

「へえ／＼、どうぞ。玄関も職員室も開けてございますから——」

「うん。——日直の先生も未だかい？」

「え、九時頃にはお見えでしょう」

「今八時半か——。じゃ……」

職員室へ這入った私は、先刻から何となく宿直室の方が気になっていた。

私は、堀川先生には前から特別な好意を持っていた。堀川敬吉は、肉の締った肩巾の広い男で、唇や頬の線の酷しいのに反して、その眼は如何にも人懐っこく澄んでいる。年齢は三十五か六になる筈だった。

私の手は机の抽出を開け乍ら、頭の中では堀川先生の寝姿を想像していた。暫くの躊躇の後、私は登音を忍ばせると、高くなる動悸を押えて宿直室近へ寄っていった。

見ると扉が二種ばかり開きかゝっている。

(オヤ、起きたのかナ……)

と少しがっかりして、

「——堀川先生……」

と声をかけたが返事が無い。

その時になって、私ははじめてヘンだと感じたのである。

顫える手で扉の把手を握って引くと、途端に私はギョツとしてその場へ立慄んだ。部屋の真中あたりに、堀川先生は何とも云えない惨めな恰好で荷物のように転がされている。着ているものは猿股まで剥がれ、手足を縛られ、その上、口には猿轡をかまされているのだ。それを見た刹那、私は激しいシヨックに撃たれた。続いて旋風のように巻き起った惑乱に、クラ／＼として危うく倒れそうになった。

（誰が——誰が彼を此んな目に遭わしたのだ……！）

妬ましきと口惜しきで、私の頭はガン／＼鳴った。

堀川先生の顔は苦痛と羞恥に泣き出しそうに見えるが、それは彼の陶酔を一層深める為の演出であるのを、私は容易に見抜く事が出来た。

（昨夜の宿直が、もし私だったら……）

そう思うと身悶えしたいようだった。

常識的に行動すれば、私は一刻も早く彼の縛しめを解き、猿轡をはずしてやらねばならない。併し、彼がそれを欲していない事は、私には解り過ぎる位よく解るのである。

私は大波のような心の動揺に、ジツと身を委せたまま、殆ど瞬きさえしないで、堀川先物の姿を瞞めていた。

そうする中に、私の何処かに棲息していたサジズムが、そろ／＼頭を上げて来た。

突然、時計が九時を打ち出した。

私はハッと我を取戻した。他の人に此の有様を見られたくなかった。私は急に慌て出して、堀川先生の縄を解きにかゝった。

「——有難う……」

彼は末だ夢から醒めきらぬように、うっとりとした顔つきでそう云った。

「何うしたんです。一体——？ 驚きましたよ。扉を開けると此の有様ですもの」

私は裏返しになった猿股を拾うと、それを直して穿かしてやり乍ら、

「でも、お怪我がなくてよかったですよ」

「うん……。強盗なんだ。君、強盗なんだよ——。いきなり僕を振伏せて縛ろうとするんだ。僕はね、僕は、『縛られるのは仕方がないが、裸にするだけは勘弁してくれ——』

って、拝むように頼んだんだよ。勿論、奴は僕を裸にする気なんかなかったのさ。けれども、僕がそう云ったもんだから、面白がつて裸にしようとした。此方の思うツボさ。僕が抵抗して、『赦してくれ——』と泣声を出す、奴はいよ／＼興にのつて、とう／＼猿股まで剥ぎとって了った。——君。君に、その時の僕の気持が解るかしら……？」

堀川先生は、其処迄一気に喋って来て、熱っぽい視線を私の顔にそゝいだ。

「——でも、青葉君。偶然にも君が来てくれてよかったよ。もし他の人だったら、僕は恥を掻かなきアならなかった……」

私は複雑な気持で、只微笑してみせた。

「——泥棒には金を三千円ばかりと時計を呉れてやった——余り安い代償でもないけれど

——。ア、そう云えば、職員室はやられてる事だろう。君、気がつかなかったかい？ 這入ったんだらう。職員室へ——」

「えゝでは、よく調べてみましょう」

私は廊下を急ぎ足でとって返し乍ら、

（君でよかった——他の人じゃア——）と云った堀川先生の言葉を、頭の中で繰返し反芻していた。

二

強盗事件があつてから一ヶ月近く経った。

午後少し前で、私は空き時間だった。高く晴れた秋空を窓越しに眺め乍ら、ゆっくりと用を足していると、不意に背後から肩を抱くように擁えられた。だが振り返って見る必要は無かった。堀川先生は、頬ずりするように顔を寄せて、

「——ねエ、今夜、僕が宿直なんだ。それで、君に頼みがあるんだけど……ネエ、きいてくれるネ——」

「えゝ、そりやア——僕に出来ることだったら……」

私は、胸が締めつけられるようになるのを感じながら手を洗った。

「有難う。——今度、君は強盗になって、宿直室へ忍び込むんだ——それから先は……君のいゝと思うようにやってくれ給え。ねエ、解るだろ……」

「えゝ——。判りました。やってみます」

誰か人の来る気配に、堀川先生はツト身を離すと、さり気ないふうで大股に立去っていた。

少し遅れて私は席へ戻ったが、もう仕事が

手につかず、煙草を二三本続けさまに喫った。堀川先生は、焦茶色の上衣の背を此方に向けて何か調べものでもしているらしい。

私はつと息苦しさを覚えて外へ出ると、スリッパのまゝ池の端へいつてしやがんだ。

今から何時間か後に自分のしようとしてい

る事を考えると、妙に氣持が焦立って来る。

私は青く澄んだ水底をじつと覗めていた。すると、逞しい男の裸体が、断末魔のように藻掻き乍ら浮き上って来る——。ハツとして息を吞むと、それは勿ち消えて紅い尾をひるがえして金魚の影がスイとかすめた。

あの朝の、不思議な嫉妬と同時に湧き起った得態の知れない感情が、悪寒のように身内を慄わせた。

夜になる迄の時間が、私には長いようでもあり、短いようでもあった。

宿直室に近い昇降口の所まで来ると、戸を開ける前にポケットへ用意して来た黒っぽい風呂敷を取出して顔の下半分を覆った。何も芝居がかったことをするわけではなく、堀川先生に顔を見られるのが、どうにも氣恥しく思えたからである。

此の事の為に、錠はチャンと外してあったので、本物の強盗のような苦勞はいらなかったが、宿直室へ着く間、私の心は一種のシレンマに苦しめられ続けた。

堀川先生は、何も知らず熟睡しているよう

に、両眼を固く閉じた顔を薄い布団から出して電燈に曝している。枕許に立ってそれを見下している中に、私の血の中には、真黒な残虐が、次第に速度を増して流れ出し始めた。私は自分の瞳が、サジストらしく氷のような光を帯びて来たのを知った。甘美な狂暴がもう私をじつとさせてはおかなかった。

布団を引剥ぎ、掴みかゝってシャツを撈りとり、逃げようとするのを押えつけて、ズボン下と猿股を脱がせ、ロープで手足を固く縛って了う迄、私は殆ど夢中だった。「痛い——痛い——」と云う彼の悲鳴が、私の激情を一層煽り、自分で自分が氣違いになるのではないかと思った。

裸に剥がれ、手足の自由を奪われた堀川先生は、羞恥と屈辱にわなゝき乍ら、私の足許に転っている。それを見ると、私の身内には勝利の快感がゾク／＼と湧き上って来た。

その時、私の耳許に妖しく響いてきたものは——悪魔の囁き——私の口辺にはシワ／＼と残酷な笑いが滲み出して来た。顔を隠した布切は何時か落ちて了っていたが、私にはもうそんなものは必要でなくなっていた。

私は、堀川先生の足の縄だけを脱してやると髪の毛を掴み、ヨロ／＼する罪人のように引立てゝ廊下へ出た。彼は何度か倒れ、その度に私は腰を蹴上げた。

暗い廊下を二十米程引廻して、生徒便所の

水道の蛇口の下へ坐らせると、身動き出来ないようにしつかりと括りつけた。

十月半ばの深夜では、裸でコンクリートの上に坐っただけでも可成りの冷たさだろう。堀川先生の身体は小刻みにブル／＼顫えている。私はニヤリとして、ソロ／＼とカランの栓を廻した。ツ、ーと水が白い線を引いて、彼の頭から肩へ伝わる。反射的に彼の皮膚はピクツと痙り、悲鳴が口をついて出た。忽ち全開された蛇口から勢よく出る水に叩かれ、彼は、

(アッ、アッ——アッ——)

と喘ぎ、身をよじる。

私は、もの生れたときからのサジストであったかのように、彼の苦痛と屈辱をゆつくりと悦しみ乍ら、煙草に火を点けると深く吸い込むのだった。

三

突然堀川先生の転任が決ったのは、二学期の学期末試験が、もうそろ／＼始まろうとする頃だった。私は、少なからず愕きもし落胆もしたが、併し新しい勤め先は同じ県内だったし、逢おうと思えば何時でも逢える近さにあった。

「——折角君という理解者が出来たのに、もう別れなければならぬなんて……」

「別れるなんて——そんな云い方はよして下

さい。何時だって逢えるじやありませんか。すぐ近くなんですよ……」

堀川先生と私は寄り添うようにして、春には間のある日没近い土手を、川伝いに上流の方へ歩いていった。

「——君、逢いに来てくれるかい？」

「行きますとも！来るなって云ったって押しかけて行きますよ。僕はもう貴方無しじや生きられないんですから……」

「慎一君……！」

「……！」

夕映えの最後の光が、川の水を血のように染めていた。

「——寒くない……？」

やがて身を起した彼が、やさしく云った。

「ウ、ン——一寸も……」

私は甘えるように云って

更に彼の掌を固く握りしめた。陽が沈むと、四辺は急速に暗くなり始めた。

「——サア、ボチ／＼帰ろうか——」

「え、——」



と立上りかけて、私は忘れていたことを思い出した。

「ア、そう／＼。ネエ、先生の送別会を土曜日の放課後やりますから。僕の主催で——」

「君の主催——？」

「え、生徒も出席させます。先生のクラスの——。素晴らしいプランをたてたんですよ。楽しみにしていて下さい」

そう云う中にも当日の光景が臉に浮び、私は込上げて来る嬉しさに思わず声を上ずらせた。

やがてその土曜日。私は残しておいた堀川先生担任クラスの男生徒五十名余りを、講堂へ引卒していった。それから腰掛の位置を換えるべく指図して、真中へ床を広くあけた。そして、四方を取囲んだ腰掛へ生徒を着席させると、堀川先生を迎えにたった。

職員室の方へ廊下を曲ろうとすると、此方へ歩いて来る堀川先生と危うくぶつかりそうになった。

「ア、もう来られる処でし

たか——？」

「イヤ、いま便所へ行こうと思って——もう準備が出来たのかい？」

「え、——先生、一寸便所は辛抱出来ません

か？」

「ウン、一寸位ならね——でも、そんなに急ぐのかい？」

「エ、エ、そんなんです——ネ、後生ですから、少しだけ辛抱して下さい——」

私はもう有無を云わせないように、彼の手を握むとドン／＼会場へ引張っていった。

一渡り生徒をグルリ見廻してから、その次に、不安と期待に緊張させている堀川先生の顔をチラリと眺めると、私はおもむろに口を開いた。

「——さて、諸君も知るように、今回、堀川敬吉先生は突然転校される事になり、此の三学期をもってお別れしなければならなくなりました。そこで今日は、一年間、先生と共に学び共に生活した、二年A組の諸君に集って貰い、何か有意義な会を持ちたいと考えたのです。エ、——で、色々案を練ってみました。が、結局堀川先生に話を、それとも生きた話をして戴く事になりました。——諸君は昔の軍隊という所を知らない——極端な階級意識で固まっていた軍人と云う人種が、天皇の名において如何なる暴虐を振ったか——。(その辺迄来ると私は少なからずウンザリして来た。実際そんな前置きなどは何うでもよかったのだから)——堀川先生は具さにその経験を嘗めて来られた方です。エ、前置きは此の位にして——先生。此方へ……」

私は亢奮を押えて、堀川先生を生徒の取りまく中程へ招いた。生徒達は少年らしい好奇心を顔に漲らせて、ジット二人の教師を注視している。

「エ、此の室に寒暖計は無いが、今の気温は大体五六度位だろう——併しもっと寒い、霧下何度何十度と云う極寒でも、それが上官の命令なら、真ッ裸にもならなければならぬ——何んな場合でも上官の命令は絶対なのです——」

と云つて、私は堀川先生の顔を伺うように見た。すると、彼はすぐ後をとつて、

「そうだ。奴隷にも増したヒドイ屈辱にも、第三者から見れば、滑稽でフキ出さずにはいられないような辱しめ、実は本人にとってはその方が数倍の苦痛なのだ、それにもジツと耐え忍ばねばならない——全く馬鹿々々しい事だった。併し亦重大な事でもあるのです——」

「重大」と云う言葉は私には面白かった。それには更に複雑な意味が含まれているからである。

「——では先生。今も大分寒いようですが、此の寒さで裸にされるのが何んなものか——それから始めて戴きましようか——」

私のその言葉に、生徒達の間には微かなざわめきが起つたようだった。

「え、僕が裸にされるのかい——？」

「そうですとも。今日は生きた話なんですか——」

「併し……」

そういう躊躇も彼の真意でない事は、私にはよく解るのだ。

「何うだね。諸君——？」

私の声に生徒達の中から拍手が起つた。彼等は併し、半分は冗談だと思つてに違いない。クス／＼という笑声も聞える。

「オヤ／＼、ヒドイ事になったもんだな。とう／＼裸にさせられるのか——」

と泣き笑ひみたいな表情をしてみせると、堀川先生は観念したように服を脱ぎ始めた。

(あんなこと云つて、本当に裸になるのだからか——?)

とでも思っているのか、生徒達は半信半疑の面持で彼の挙動を見守っている。

彼は今ズボンを脱つて、靴下を脱いだ。それからネクタイを解き、ワイシャツを脱る。

生徒の様子を伺つてみると、中には気の毒そうにしている顔もあるし、又面白がつているような顔もあった。

堀川先生は、ラクダのシャツとズボン下を脱いだので、メリヤスの肌着と猿股だけになった。長い毛脛が寒そうだ。次いで肌着を脱ぎ捨てると、蒼白い皮膚のサツと鳥肌立つのが判るようだった。此の寒気にとすると、見ている方が顫えて来る。

私は、脱いである彼のズボンからスル／＼とベルトを抜いた。

「——大抵の場合、裸になっただけでは済まない——そうでしたか——」

そう云い了らぬ中に、私の手にはベルトが唸った。「アッ——！」と声を上げた途端に、よろめくはずみで彼は仰向けにひっくり返った。三つ四つと容赦無く鞭打は続き、パシッパシッと肉の鳴る音と共に、堀川先生は悲鳴を上げて転がり廻った。私は多少手加減をして打っていたが、彼の背や腿には、薄くみず脹れが浮いて来た。

私は鞭を振り乍ら、ある事の起るのを待っていた。彼は先刻から尿意を覚えていた筈である。而も此の寒気に裸でいるのだから、鞭打ちの苦痛の他に、激しい尿意とも戦っているに違いないのだ。

(此れでもか——！)

少し焦って来た私は、力まかせに固肉の臀を打下した。「ヒイッ——」と叫んで、跳ねるように仰向けになった途端、彼はアッと思ふまに尿を潰出させて了った。

彼の姿は、何と滑稽にも惨憺たる有様であった事か。フキ出したい程可笑しくせに、併し誰も笑う者は無かった。私は漸く鞭を振る手を休めた。堀川先生は、尿の溜った床の上にグッタリと仰向けになったまゝ、死んだように瞼を閉じている。

本誌旧号の在庫案内

復刊第1号	(30年10月号)	二百円	(送16)
復刊第2号	(30年11月号)	二百円	(送16)
復刊第3号	(31年4月号)	二百円	(送8)
復刊第4号	(31年5月号)	二百円	(送8)
復刊第5号	(31年6月号)	二百円	(送8)
復刊第9号	(31年7月号)	二百円	(送8)
復刊第7号	(31年8月号)	二百円	(送8)
復刊第8号	(31年9月号)	二百円	(送8)
復刊第9号	(31年10月号)	二百円	(送8)
復刊第10号	(31年12月号)	二百円	(送8)
復刊第11号	(32年1月号)	二百円	(送8)

「退場——！」

私の声に、生徒は夢から醒めたように立上り、無言でゾロ／＼と室を出て行った。

「ア、村越。皆を下校させてよし——」

最後の一人が出て了うと、私は暫くの間、堀川敬吉を見下していたが、やがて静かに膝をついて、彼を抱き起した。彼は薄く眼を開いて私を見ると、ニッコリと笑った。

「——何うでした……？」

そう耳許へ囁やくと、彼は満足げに肯いて「——僕は、今日程、恥かしい思いをした事はない……又、今日程嬉しい思いをした事もないよ……。みんな君のおかげだ……」

私は無言のまゝ燃える瞳を堀川先生に注い

復刊第12号 (32年2月号) 二百円 (送8)
 復刊第13号 (32年3月号) 二百円 (送8)
 復刊第14号 (32年4月号) 二百円 (送8)
 ○以上の通り復刊号は各月号共若干保有しておりますから御入用の方はお申込下さるようお待ちします。三冊以上まとめてお申込の節は送料は当方にて負担いたします。
 ○休刊前の旧号は29年8月号と9月号、各一部百円 (送12) 29年10月特大号から30年5月特大月号まで、各一部百四十円 (送16) 少しばかり在庫しておりますから、御入用の方はお早い目にお申込願います。右以外は売切ですから悪しからず。

でいた。

絵画のアイデア募集

本誌の口絵(写真を含めて)並に代理部の分譲写真、或は「画帖」「写真帖」などのアイデアを広く読者の皆さまから募集いたします。内容はどんなものでも結構です。採用の分には、原画、若くは引伸写真、画帖、アルバムを贈呈の外、優秀なるプランは本誌に掲載の上、編集用のフォトを贈呈いたします。出来るだけ詳細なる説明及び出来れば略面の添布をお願いします。(困難なときは略画はなくとも差支えありません。)

編集部V

浣腸器具考

本田 一 夫

浣腸がたんなる医療の方法ばかりでなく、その趣味性と結びついていることは、もはや多くの告白や記録によって明らかにされました。それが単独(男または女)でなされるか、又はある人が他人(同性または異性)に対しておこなうか、最後に二人(同性または異性同志)が同時あるいは交互におこなうかは、各人の趣味によることでありましよう。ここ

では、そのいずれの場合にも適用できる器具と技巧を、できるだけドライに説明しましう。むろん、それにしても筆者の好みと知識および体験の限界によって支配されることはやむをえません。

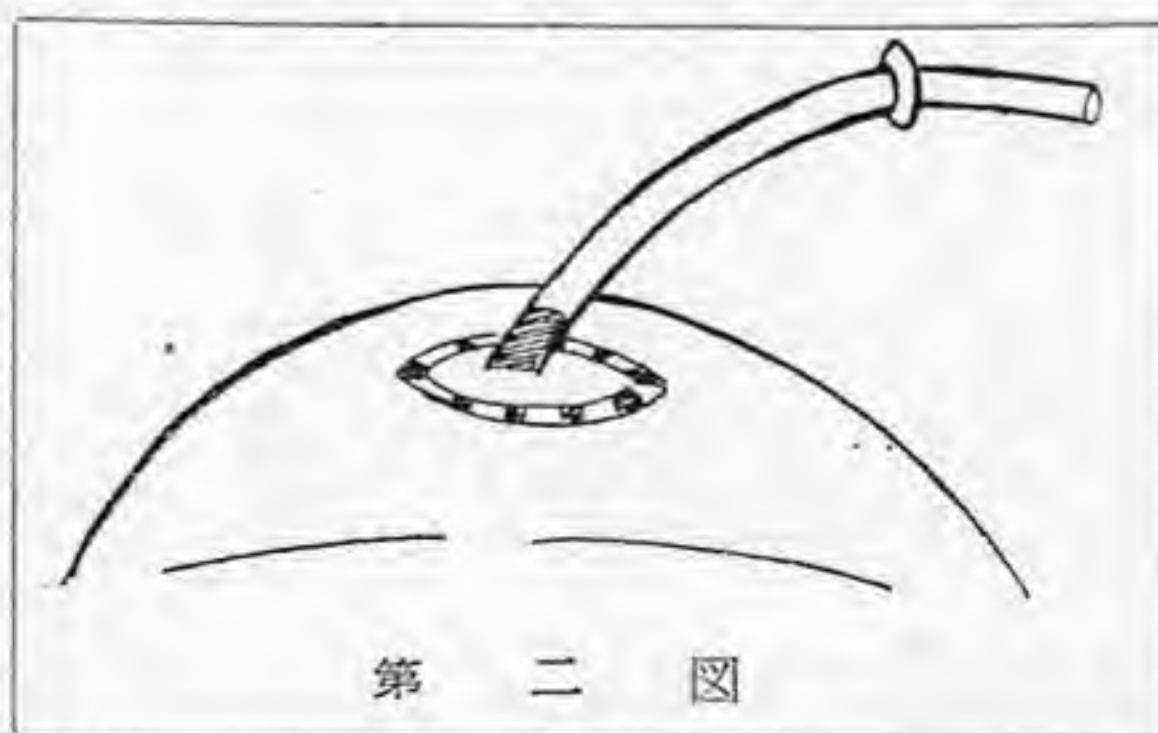
一、空気浣腸

本誌の羽村京子さんや北河内七二子さんの報告で有名になり、その他にもかなりの実験された方があると思われます。これは医学の分野では「直腸バルーン法」といいます。さて、その方法ですが、これは要するに直腸内へ空気を注入することのできる器具なら何でもいいわけです。簡単には、



第一 図

ゴム管を用いて直接に口から息を吹きこむ方法で、その次にはエネマ・シリンジ(これについては後述します)がバスケット・ボール用の金属製ハンドポンプを用いる方法です。しかし、いちばん、誰にも手にいれやすいのは、やはりビーチボール、空気枕、浮袋、バレーボール用ブラッター(チューブ)などの、いわゆる「空気入ゴム玩具」と総称される品です。この種のゴム製品(さいきんはビニール製品が進出してきましましたが、やはりゴムのほうが強力感や肉感性の点ですぐれています)の空気を吹込む部分は、大別すると二種類あります。ビーチボール(又はフートボールとも呼ばれる)は長さ五、六センチのゴム管が付いていて、その先端を口にあてがって息を吹込んでふくらます式が大部分です。浮袋や空気枕は金属製の栓になっている



第二 図

のが普通ですが、さいきんはゴム管つきの浮袋も出来ています。

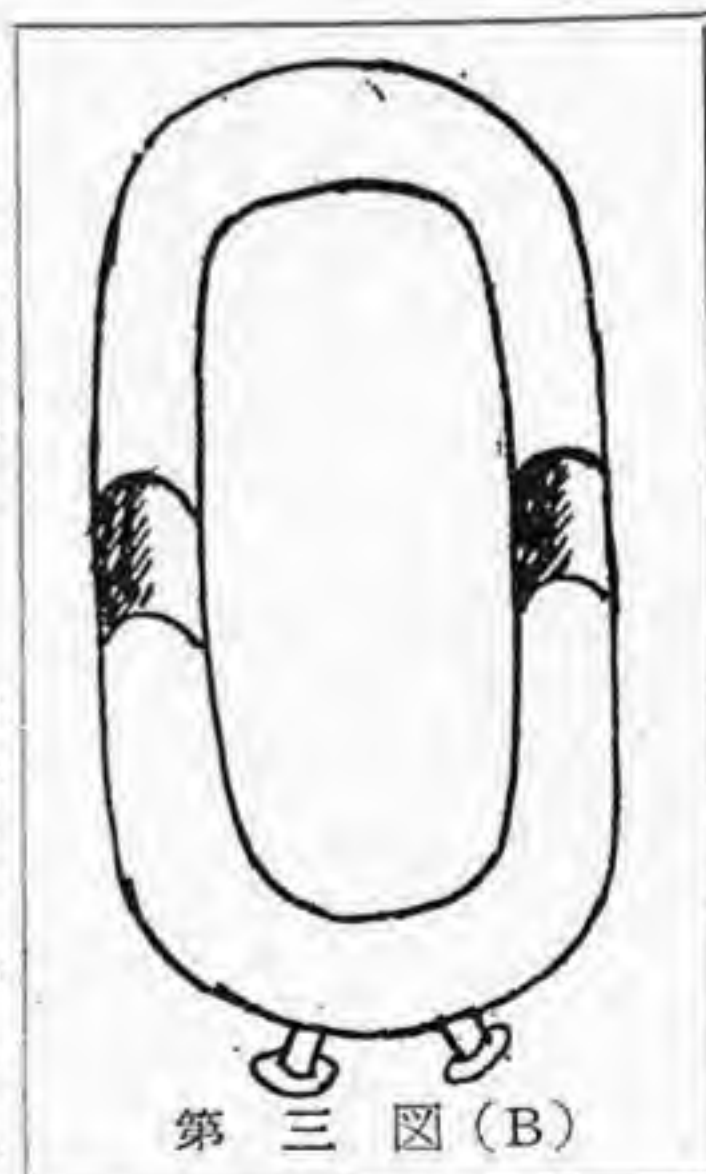
ところで、これらのゴム製品を充分にふくらましてから、こんどはそれの中に充滿している空気を直腸に注入するには、さきの空気吹込み用の部分をそのまま使用しなければなりません。ビーチボールにはやや厚肉のゴム管を付けたものと、薄いゴムシートを巻いて作ったやわらかいゴム管のものとあり、後者はグニヤグニヤしていて、余りこの目的に使用するのには感心できません。しかし、どちらの種類のゴム管でも容易に、しかも衛生的に利用できる方法があります。

図を参照すれば、すぐお分りになるでしょう。薬局かデパートの薬品部で「スポイト」を求めます(第一図)。じつは、これ自体が浣腸器なのですが、この点については後で述べます。ともかく、いまはこのうちのエポナイト製の嘴管だけが必要なのです。この部分は容易にゴム球からはずせます。まず、ボールをふくらますときは、ふつうにゴム管に口をあてて息を吹きこみ、いっぱいにくらんだら

手早やくエポナイ嘴管をゴム管のさきにはめこみ使用するわけです。(第二図)ボールには、黄色のもの、三色のもの、あります。好きなものを選んで下さい。大きさはどちらも六吋くらいから十二吋までが普通ですが、海水浴のシーズンになると十三吋以上、二十吋ぐらゐまでのビーチボールも出廻ります。

次に浮袋や空気枕を利用

する場合ですが、これらはふつう、金属製の栓がついているので、そのままでは空気浣腸に使えません。まず、その金属栓にぴったりはめこむことのできる太さのゴム管を求めます。長さは随意ですが、寝そべって使うには一メートルぐらいあった方が便利です。そして第三図のように、他の前端に、さきほどと同じ嘴管をはめて用います。金属栓はがんらい唇に当てると痛

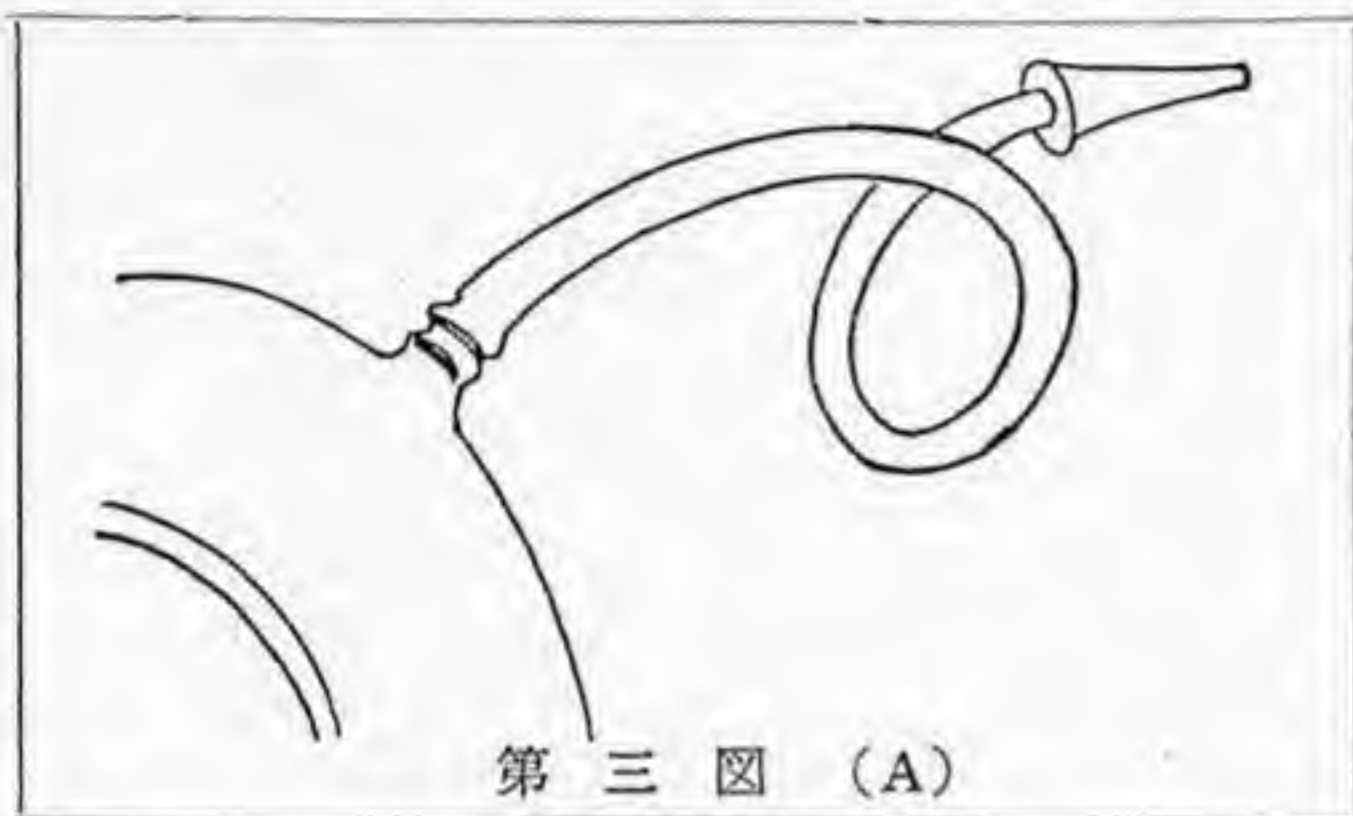


第三図 (B)

(嘴管だけはずしておく) から息を吹込みます。途中で休みたいときは、ゴム管の中ほどを指でおさえれば逆流しません。また、使用中は、栓をまわして空気の放出(注入)速度を自由に加減できます。

そのほか、浮袋の大型のもの、ことにボールの形をしたものには、栓を二箇つけたものがあります。(第三-B図) がんらいはアベックで息を吹込むようにしたのですが、こ

く、そのうえ息を吹込む途中で休むと逆流して不便なものです。したが、このようにすると、いろんな便利があります。ふくらますときは、金属栓を全開にしておき、新設のゴム管のさき



第三図 (A)

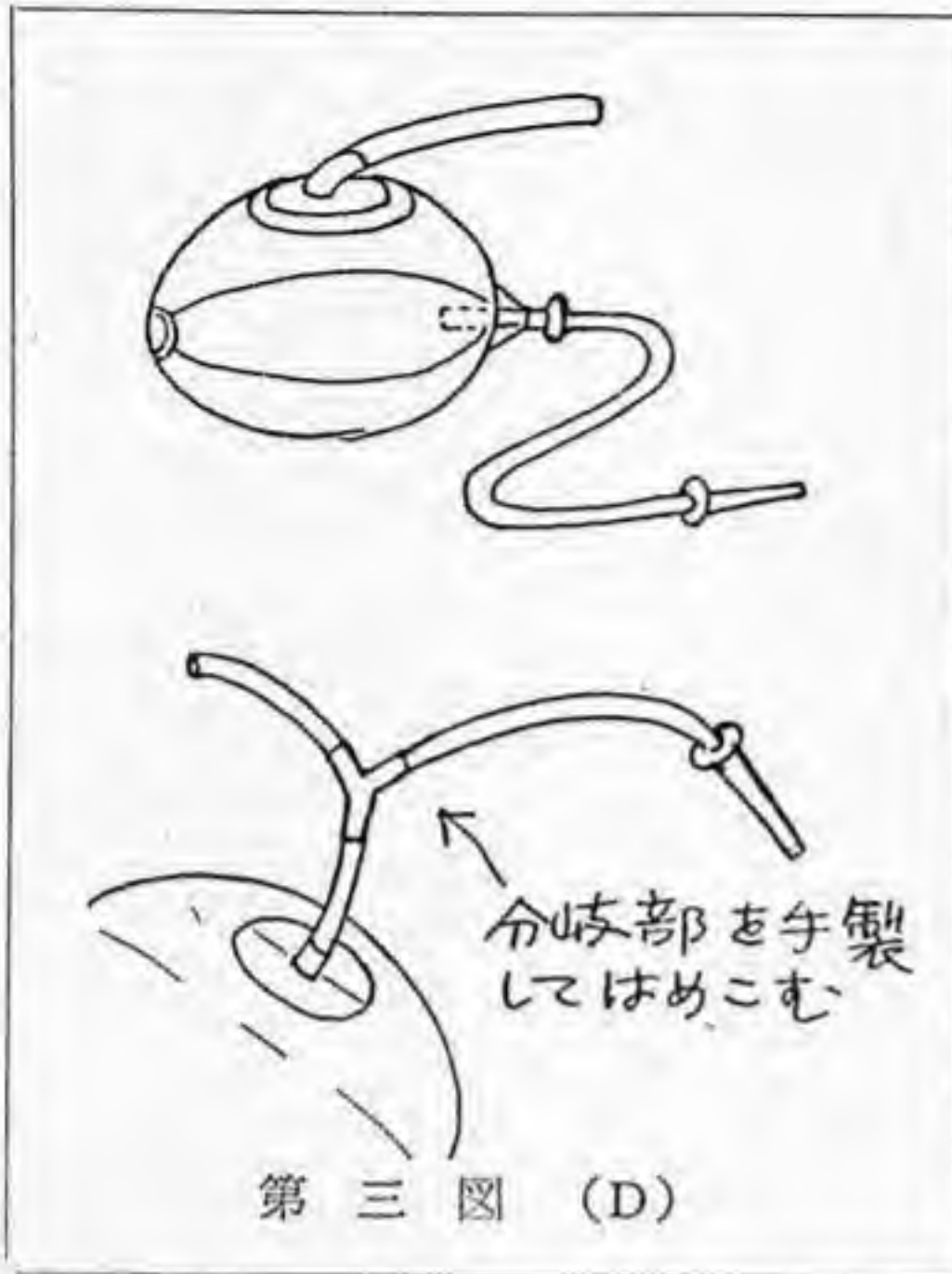


第三図 (C)

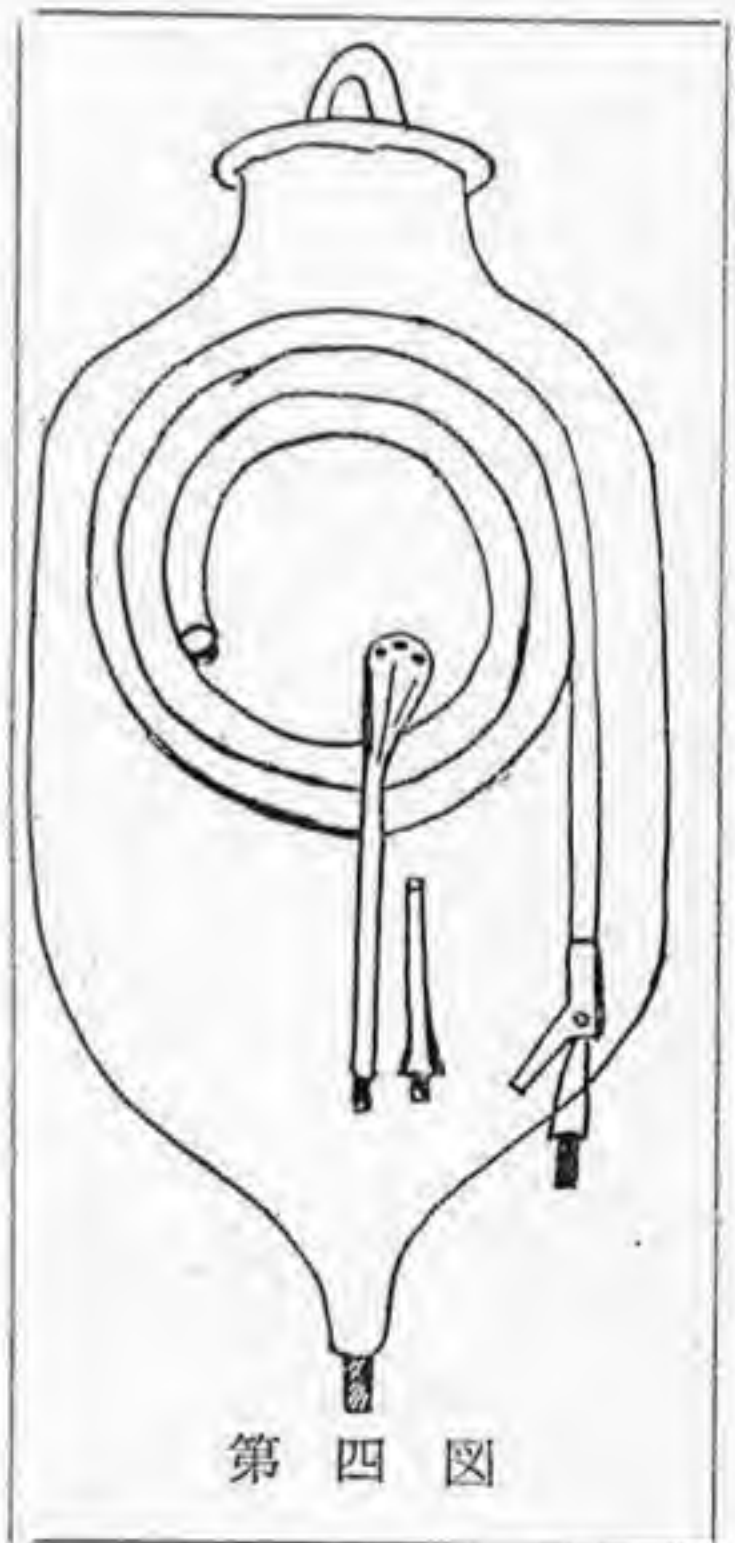
の一方に短い管をはめ、他方に長い管（その先に嘴管）をはめると、連続的な注入を行なえます。つまり、浮袋の中の空気が減ってきたら、短い管から息を吹きこんで補充するのです。このばあい、口でふくらます代りに、ハンドポンプか足踏み式フイゴを連結しておいてもよいのです。ビーチボールでも、管を二本はじめから設けておけば、この目的に便利です。器用な方なら加工することもできます。

二、液体浣腸

浣腸フアンの報告を見ますと、イチジク印浣腸とガラス製ピストン式。（注射器に類似



第三図 (D)



第四図

の)の愛用者が多く、ガラス製イルリガトールがこれに次ぎ、少数の方がエネマ・シリンジを利用しておられようです。これがいけな

いというわけではありませんが、最後のエネマシリンジを除いて、もはや欧米では用いられていないようです。

浣腸ばかりでなく、女性の膣洗滌にも、すべてゴム製品が用いられて、危険なガラスは追放されてしまいました。（序ですが、十八世紀の銅版画で見ると、貴婦人が侍女に浣腸をしてもらっている場面では例外なくガラス製ピストンが用いられています。）

そこでアメリカのデパートの通信販売用のカタログから、二、三の例を引きましょう。

第四図はホット・ウォーター・

具には、かならず膣洗滌用の太い嘴管と、浣腸用の細い嘴管とが付属しています。この傾向は他の種類の洗滌器も見られます。

第五図と

第六図は、バルブ・シ

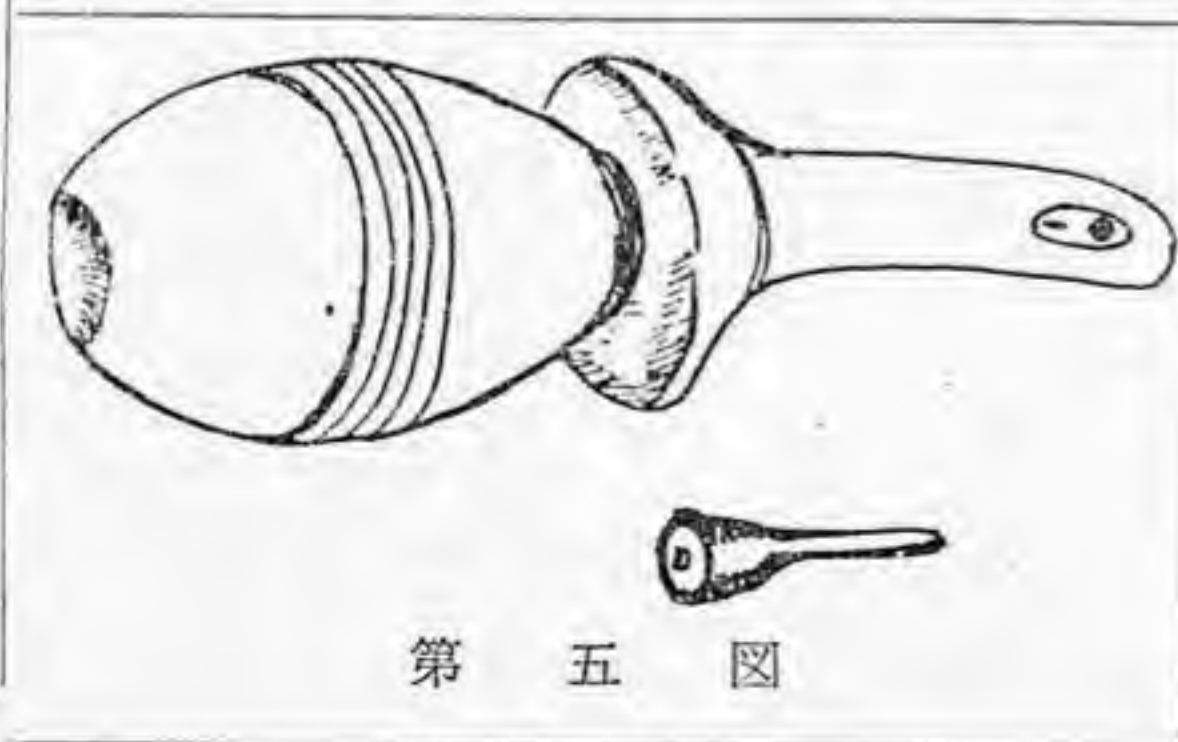
リンジの一例で、わが

国ではスポ

イド式洗滌器、婦人衛

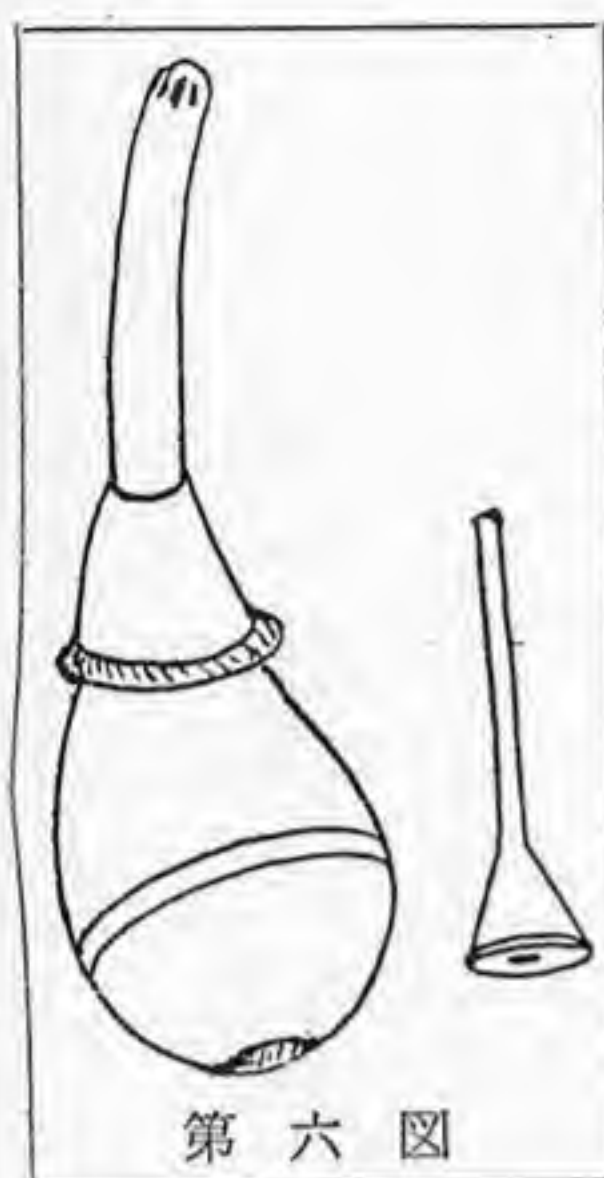
生器、子宮洗滌器など

と呼ばれる器具で



第五図

ボトルと称する型でわが国でイルリガトールと称されるものに当ります。これはトイレや浴室に据えつけておく大型から、折たたみのできる携帯用まで各種ありますが、どれもゴム製です。要するに水枕にゴム管と嘴管を連結したもので



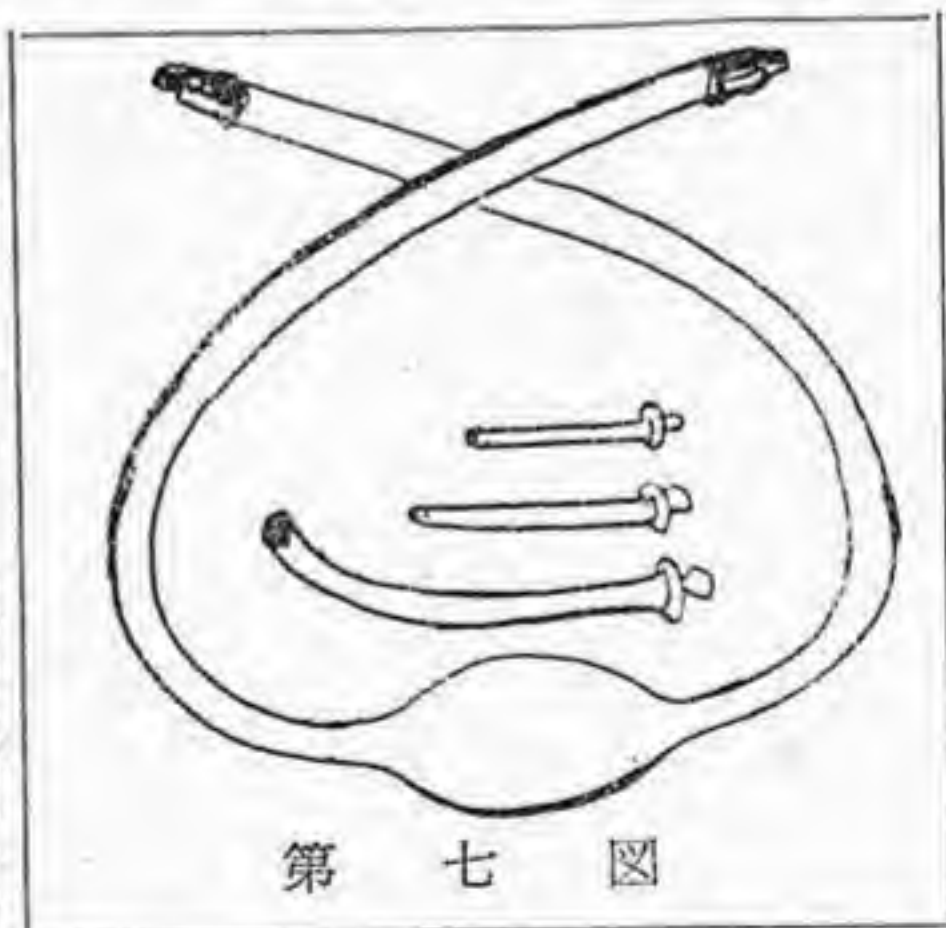
第六図

す。第五図のものは嘴管が柔軟性のある白色ゴム製、第六図のものは硬質エポナイト製で、いずれもすばらしく太いものです。ところで御覧のように、どちらも細い嘴管が付属して、浣腸の際はこれをはめ込むわけです。何しろゴム球が大きいですから多量の液を入れることができます。第七図はわが国でエネマ・シリンジと称しているものですが、膣洗滌用、大人の浣腸用、子供の浣腸用と三本の嘴管が付属しています。

わが国では、このように前後兼用の洗滌器は販売されていません。浣腸にスポイトを用いるなら、空気浣腸の項で述べた細い嘴管つきのスポイト（アメリカではこれをはっきり「浣腸用スポイト」——レクタール・エネマシリンジ——と呼んでいます）を利用するのが普通です。イチジク印やピストンにくらべれば、これでも嘴管が長いので深部に挿入できます。

しかし、A感覚を満喫するには、もっと太

いものを用いなければいけません。乳棒やその他の品物を利用するより、いっそ膣洗滌用の大型スポイト（第五、六図）を利用すればいいわけです。わが国では法律で洗滌スポイトの太さが制限されていて、アメリカ製のような大型はありませんが、その範囲内になり太い嘴管つきのが市販されています。それに膣洗滌スポイトを浣腸に用いてはならぬという法律はありません。



第七図

RECTUMを清浄にするために浣腸をするばあいは、大いエネマシリンジを用いるようです。理由は右に述べた通りです。

そのほかA感覚を満足させるための器具として、パイプレーターと洗滌器嘴管とを連結したもの、デパートで売っているゴム製の刀などがありますが、ここでは省略します。

△編集部より▽

本稿に挿入しましたカットは筆者の送られた略図に寄りました。尚、文中、約十数行に亘り削除しましたことを、お断りしておきます。

最後にエネマ・シリンジは、また別な存在理由があります。前述のように、スポイトによる場合、液を反覆使用できないので、多量の液を注入したいときは、幾度も抜いては、ゴム球に液を充填しなければなりません。ところが、エネマ・シリンジを用いれば、連続的に多量の液が注入できます。従って急速に RECTUM、下部を徹底的に洗滌することがができます。

じつは、浣腸は ANAL COITUS と密接な関係があります。これまで浣腸ファンの方々がなぜこの点に触れられなかったのか、ふしぎに思っている一人なのです。お

そらく、未亡人や性的に不満な女性がスポイトによる膣洗滌を行うのは、いわゆる代償行為なのです。同様に、浣腸は ANAL COITUS の代償行為である場合が多いでしょう。しかし、ここでのいうのはその意味でなく、すでに受動的立場を實踐している人（多くは少年ですが、外国では女性も多い）がその行為の直前に

続・潰滅の前夜

△「潰滅の前夜」(私は悪いことをしません)は本誌31年7月号並に8

月号に、「続・潰滅の前夜」(晦冥の悲歌)は32年3月号に、「同じく」

(惑乱の犠牲者)は32年4月号に掲載

土 路 草 一
滝 れ い 子・画

一、(新しい潜入者)

野口雨情の詩で有名な、城ヶ島に見える三浦半島の三崎町。ささやかながら、平和そのもののような、そして観光客にそこはかとなく心の奥底にしみるような情緒を与えてくれる漁師の町。

深夜、その町中をヘッド・ライトを低光に切り替えたYY運送のトラックが砂塵を捲きあげて通って行った。町を出はずれると、もう人家もまばらで、外海の白い波濤が寒々と晩秋の岸辺を洗っている。

漁火を遠く離れて、黒一色の海面を見渡せる松林の一角で車は停った。もう午前一時をとくに過ぎているだろう。人影とてなく、雨模様の空はどんより深く垂れ下り、視界は極めて不良である。松林の中へバックで車体を引込み、外海に前輪を向ける。途端にバラバラと荷物台の後部から三人の逞ましい若者が跳び下りると、前後

左右の見張りに走って行った。

ヘッド・ライトが明滅を繰り返した。漆黒の海面に幾度かその光芒が流れては消えた。午前一時四十五分きっかり。見よ、海面が大きく割れる。夜目にも白々と波頭が砕けて、巨鯨にも似た艦艇の輪郭が明らかに浮上してくる。あッ、潜水艦だ、近くで眼を凝らした者があったとしたら、その横腹に白く、Y.257と記されてある文字を読みとることが出来たろう。紛うかたないY国の潜水艦だ。完全にその姿を海上に現出すると、急速に、主艙口が^{メインハッチ}開き、低いがきびきびした艦長の命令が響く。

「銃砲手配置につけ」「上陸用意」

上甲板のゴムボートが引出され、音もなく水面に浮んだ。日本潜入のY国挺身員達が無言のまま整然と乗りこみ、続いて頑丈なトラソクと膨れ上った手提鞆が放り入れられる。

「元気でやれよ」

艦長の励ましの声を後に、漕手は力一杯櫂を撓らせた。砂浜ではトラックから積下した細長い木箱が数個、渚の岩蔭でボートの到着を待っている。若い挺身員達がひらりと身軽に白砂へ第一步を印すると同時にその木箱は手早く積込まれる。

「命令が急だったので輸送準備が間に合わず、十匹だけだが、次回は数を揃えるからと伝えてくれ」

トラックの指揮官は、漕手に伝言を依頼して、直ちにボートを海面へ押出す。ゴムボートに積み込まれた木箱の中には、哀れな日本娘がまるで荷物のように積み込まれているのだ。潮騒の中をボートは密かに母艦へ向ってピッチをあげた。

清楚な日本の乙女達は、自分達の行末も知らず、麻酔を施された知覚のない体を箱詰で運ばれていったのだった。

潜入者を乗せたトラックはチラチラと淡い灯の洩れる漁師の町を、何事もなかったように通り抜けていった。

二、(代議士の娘)

「殿村伝吉」達筆に書き流してある表札を見上げると、緑川百合子は一寸身ずまいを正してから門外の敷砂利を踏んだ。

「御免下さい」

玄関で訪うとすぐ女中が出て来た。

「緑川洋装店の緑川で御座いますか、可奈子お嬢様はいらっしゃいますでしょうか？」

「はい。お待ち兼ねで御座います。どうぞ」

応接間へ通されて、ソファアに腰を下すと、鋭い一瞥を四隅へ配る。

自進黨保守派の中堅勢力として今、売出している代議士らしく、簡素ながら、品のよい新しい調度が揃えてあって総裁の筆になる扁額だけが、殊更古風めいて眼をひくのだった。

「先生、わざわざ御足労頂いて本当に相済みませんでした」

可奈子は跳ねるように、リズムカルに応接間へ入ってくると甘ったるい声で、ぺこりと頭を下げた。若々しい弾力のあるふれた身体をスポーティな白い丸首セーターで包み、円らかな瞳を親しそうに動かし、口辺が綻びて、真白な歯並が濡れる。モダンで明るいビューティ・ガールである。

「いゝえ、商売ですもの、一向に。」

立上って鄭重な挨拶を返す緑川百合子へ

「御商売ならば何処へなりともお出かけ？ ふゝゝ。」

と眦を緩めて、コケットリーに笑みを含む。

「えゝ、お店さえ繁昌するのでしたら何処へなりともお邪魔させて頂きますわ。」

百合子もつい、つりこまれて、言葉を崩す。

「ドライね、先生って、でも私、気に入っちゃったわ。」

「あら、そんなに気にいられて、どうでしょう。」

「ううん。」と笑ってる瞳で否定して

「路子さんに先生のこと紹介して貰ったんだけど、どんな方かと思っていたの。」

「及第ですか？」

「えゝ、半分は、後の半分は洋服作って貰ってから……。」

「あらあら、お嬢さまには参りましたわ。」

可奈子は弾みをつけて、横坐りの椅子から立上ると、片手を腰部へ当てがい、片手を頭上に差上げ、気取ってポーズをとると

「さあ、先生、私に一番よく似合うスタイルを教えてください。」

「さて、そうおっしゃられると、困りましたねえ。」

可奈子の影のない大らかさに圧倒されて、百合子は言葉をにこした。

「この耀き充てる、十九の春を、如何にすれば、美しく仕立てるこ

とが出来るか？ 先生、御遠慮なく御鑑賞下さって。」
可奈子は台詞でも言うように取消ました声で云ってから、にっと笑った。

「まあ、じゃあ、お言葉通りゆっくり鑑賞させて戴きましようか。」
横から背後へ廻る。途端にY国人の美眸は獲物を狙う鋭い眼に交って、妖しく冴える。心に期待が渦巻いて、「上物だわ」と呟く。
もう一つの頭脳は、可奈子の裸身が痛打を受けて無惨にくねっている姿態をまぎ／＼と描き出す。

「いかが？ 先生！」

無邪気な声が飛んでくる。

「えゝ、そうですわね？」

慌てゝ、熱っぽくなった眼差を戻して、心の仮面を被り直す。

「お嬢様のようなお方は、スポーティなものがいゝと思いますわ。
ツープイスにして、前立とポケットにトリミングをあしらひ、ジャケットの前裾を思いきりカットした、デザインなんか、如何でしょうか？」

「トリミングでアクセントすると云う訳ね。」

「えゝ、个性的でお似合だと思ひますが。」

「色は？」

「丁度、手もとに、茶がかった濃いグレイの霜降ウールがあるので、これです。」

百合子は鞆から、サンプル生地を出すテーブルの上に展げた。

「ふうん、少し渋過ぎないかなあ？」

首を傾げる可奈子に

「服がスポーティですから、色は落着いた方が引きたつんですのよ。」

「そう、では先生にお任せしてよ。お願いするわ。」

可奈子は乱暴にソファへ軀を投げた。パネが若い肉体を快く揺す

る。百合子は、その全身に嗜虐の瞳を注ぎながら、可奈子を立上らせるのと、ときめきを押えつつ、メージャーで叮嚀に寸法を計った。

三、(諜報員の罠)

玄関迄見送って、可奈子が応接間へ戻ってくると、相木研一が百合子の持った湯呑茶碗から指紋を採集していた。

「うまくいったらしいわね。」

「えゝ、どうやら。」

可奈子はさつきとは打って交って、真剣な表情で云った。

此処で、ちよつと説明しておこう。可奈子は殿村伝吉の娘ではない。いや、可奈子と云う娘は実在するのだが、百合子に会った可奈子は殿村の娘ではない。諜報部員から選出された美人エキスパートの一人であった。

資源幹旋会を訪ねて後、多穂子に、密かに調べさせた、緑川洋装店の得意先を、研一と都田は足まめに訪ね廻ってみた。処が、驚くべきことに、その中から十数人の行方不明者を発見したのである。搜索願を出してあるのも一、二件あったが、他は本人の筆になる葉書やら電報が時折配達されていて、心配はしていたが健在を信じて搜索願等と云う外聞を憚る手段に訴えることはしていなかった。

研一は、その葉書を見せて貰ったが、一様に「今××に居る。事情があつて当分帰れないが元氣です。親不孝をお許し下さい」と事情の内容も記してない簡単な文面で、筆跡が心もち震え乱れているのが特徴だった。

事情と云うのを家族に訊しても、殆どが心当りを持っていなかった。しかし、今までは、研一の第六感の範囲を一步も出なかった推理が、確信となつて次第に凝固してきた。

其処で彼は、一つの罠を仕掛けることを考えた。總裁の覚えもめでたい少壮で党の外務委員長を兼ねている有力議員の娘。それも美



人の誉れ高い女性を囹にしたら？——。研一はそれ程、世間に顔を知られていない深窓の令嬢と、選り勝ぐった美人諜報員を入れ替えて、服の注文に事寄せ、代議士邸で百合子と引合せてみたのである。

研一が投げた巧妙な罠であったのだ。

「あの人、スパイかしら？ 肌合いが何だか違うような気がするんだけど。」

「君の直感かい？」

「ええ、女性としてのね。冷いことは冷い人らしいけど……。」

「日本の女を誘拐していることは確かだ。併し、それ以外のことは

まだ十分解らない。人身売買だけだったらY国との連がりはない筈だ。或は、スパイ・シンジケートの一人かも知れないよ。」

スパイ組合^{シンジケート}。東洋に於けるスパイの根拠地は戦前の上海から戦後は東京に移っている。その末端で躍っているのは大半、日本人である。左の手先、右の走狗、入り交って忙と蠢めいているのが実情である。ラストボロフ氏（元ソ連代表部二等書記官、昭和二十九年東京から姿を消し、アメリカに亡命した）も云っているように、一九五〇年、ソ連のスパイは日本人だけで約五百名に達した。此数はMVDの防諜機関が募った「内部通報者」を含んでいない。内部通報者は潜在的な

スパイのプールとみなされその規模は八千人以上と言われている。

それに加えて、二重スパイがある。注文次第ではA国にもB国にも適当な資料情報を売りつける、スパイシンジケート組合も作られている。

「でも、一応の拘引は出来ても、情報犯

処刑の改正法案は今期議會を通つたばかりでしょう。」

「そう、来年の六月から実施だ。が、スパイには私刑と密輸がつきものだ。出入国管理法違反、貿易統制法違反、外国為替管理法違反、先ずそんな手で引掛けて拘留を延すという方法もあるにはあるが……。」

二人の話し合は続く。

第一の網は張られた。情報部諜報員相川研一とY国日本挺身員に依る戦いは既に開始されたのである。

四、(家畜の争闘)

御法川伶子と女優和歌緒鮎子は、腹部の革ベルトに、大きなイヤリングを嵌められていた。丁度、臍の辺りで、それはぶら／＼と揺れている。

「イヤリングの取りっこだ。先に相手のを噛みとった奴に、この豆をやるう」

高木は、ビールのつまみにしている南京豆をばいと口へ抛りこみながら

「取られた奴は鞭を十だ。出来るだけ自分の腹を守って、相手のイヤリングを奪うのだ。わかったな、伏せろ！」

二匹は、リールと高木の宴席の下で向い合つて腹這いになった。

守備品のイヤリングを腹の下に隠し、頭を抬たげて後手の肩を怒らしながら固い眼差しで、お互いに相手を窺った。

「賭けましょうか？」

高木はリールに訊いた。

「面白そうね。私はペロに賭けてみるわ。」

「じゃ、私は純情スターに賭けましょう。此奴の闘争意識は、田舎娘からスターに伸し上ったくらいだから旺盛なことは御承知の筈ではなかったのですか？ お嬢さん家畜とは違いますよ。」

飼育課長は揶揄するように、目もとで微笑して煽った。

「ふゝゝゝ、それとこれとは別なことよ。駄が物云う勝負ですからね。」

とやり返してから、家畜F三八七に向つて

「お前が負けたら、私は鞭の十ぐらいでは許さないからね。」

厳しく云つて、酔で狂った眸で見据える。高木は立上つて床へ下りると、二匹に適當な間隔をとらせた。

「それっ！」

二人の有数な美女は嗟しかけられて、弾かれたように跳躍した。背をびくつかせて鮎子は、じり／＼と這った。腹部のイヤリングが床に金属の引きずる響をたてる。伶子は、後手の掌を握り緊め、相手を凝視しながら脚を屈伸させた。

距離が次第に狭くなる。かつちりと睨み合い、大きく睨を張った。闘争心は人間にとって欠くべからざる一つの要素だ。相撲や野球などのスポーツが、原始的な争闘の変身であり、平和的な斗争心の昇華であると云えるだろうし、人間の歴史を緋けば、戦争に戦争を繰返し、血を血で彩つて進歩して来たのが解かるように、未来永劫闘争からは抜けられないであろう。

憎くしみが憤りに変わり、それ等は単純な原因によって、極めて容易に惹起される。銃を担い、戦の庭に臨んだ兵士達が、自分と同じく家庭を持ち、平和に正しく生活していた人間を殺す。戦争だとの意識の下に、憎むべき理由なくして憎悪心を抱き、殺人を敢行するのだ。

御法川伶子と和歌緒鮎子も、今の場合、それだった。何の憎むべき理由のない二人は、主人の命令に依つて、憎悪心を掻きたてられてきた。二匹は一定の間合を保つと、暫く隙を狙つて鳴りを潜めたそして、今度は右へ、右へと半円を描いて互いに相手の隙を狙つて移動する。

リールは、つか／＼と立上つて来た。動きの少ない闘いに業を煮

やしたのだ。

「ペロ／＼ 何してるの、そらっ／＼」

鞭が空気を切ると艶麗な臀部に激しく捲きついて音を立てた。

びしっ／＼ F三八七号は使喚されて、夢中で女優の胸もとへ頭を突き入れた。頬がコンクリートでざらつき、黒髪が相手の鎖骨の下で乱れた。

鮎子は僅かに身を躲して、顎で伶子の頭を抑さえ、それ以上、乳房の方へやるまいと力を籠めた。が、伶子は、尚もぐり／＼と頭を挿し込みながら潜りこんでゆく。女優は必死になった。ずる／＼と後ずさりするが、相手の頭は胸に密着したまゝ離れない。立上るには足鎖の間が短いので態勢を作れないのだ。

鮎子はあせってきた。奪られてはならない。今のうち、何とかせねば。その時、がぶ／＼と純情型は無意識に、輝やかな歯を牙に代えて、敵の肩に噛みついていった。

「あ、あっ／＼」

激痛が肌を駈けて、伶子は瞬間、全身を硬直させた。鮎子はその怯みを見逃す訳はなかった。する／＼と、横にりて身を退くと頭突きでペロの脇腹にぶつかる。

「うっ／＼」

息が詰って咽喉の奥からの唸りをあげる。鮎子はこのチャンスに逸すまいと半狂乱の如く、乱れた頭をふりたて、拗じる。伶子の心に、猛然と憤りが湧いた。噛みついていたり、頭突きを喰わしたり、何が純情スターだ。渾身の力を両足の指先にこめて、くる／＼と廻転すると膝頭で、充血しているスターの豊頬を突き飛ばす。半身になった鮎子の艶麗な双丘に、いきなり、報復の歯を当てる。

「ああ／＼」

今度は美人女優が悲鳴を挙げる番だ。

一度歯を当てると伶子の脳髄は異常な惑乱に燃え立った。ふくよ

かな肌の歯応え、唾液に縋む塩っぱい汗の香味。か／＼と狂気の激怒が全身を襲って

「う、う、う」

と凄麗な形相の唇から、犬の吠え声にも似た唸りが咽喉を鳴らした。ペロは勢こんで、敵のお留守になった腹へ喰いついて行く。鮎子は、あられもなく滑らかな太腿を、相手の首筋へ捲きつけて締めあげる。どさり、二匹の白いけだものは絡んで反転する。

鮎子は耳朶に、ちぎれるような痛みが走って、ばたばたともがいた。石器以前の本能が目覚めたか、二匹の畜生は、纏れ、絡み、呻き咆哮する。汗は淋漓と純白の肌を滑り、眸は怒りに燃え裂け、歯を剥き出して、のたうちまわる。

正に、獣の争斗である。知性も理性も良識も、かなぐり捨て、獣の習性その儘に、骨を軋ませ、肉をぶつけあう。見ていて、こんな面白いものはなからう。これが嘗てのイギリス大使の令嬢で教養を備えた上流の女性か。これが満天下の青年男女ファン渾仰の純情可憐な美貌スターか。

今、ら／＼と光る眼眸で、凄まじい争斗を展開している姿態を誰が思い描くだろうか、日天産業の社員からも、ファンからも、この二匹の獣は尊敬された女性だったのである。ペロの足が、スターの唇を蹴りつける。鮎子はもんどり打って、のけぞって転がる。伶子は、しめた／＼と弾みをつけて大きく跳躍すると、美人女優の素晴らしい乳房の上に、ど／＼と尻を落とす。

「ぐっ／＼」

女優は肺臓から押し出してきたような悶声を吐くと半眼になり、一瞬、四肢の力が萎えた。

ペロは得たりと、イヤリングに喰いつき、が／＼と歯を鳴らして喰いちぎった。

五、（家畜の褒賞と罰）

「私の勝ね、お気の毒様」

リーレは得意気に云つて、千円札を受け取る。鮎子の出演料の何十分の一の紙幣、伶子の柔かい蹠を包んでいたパンブスさえ買えない金額。その為、お互いは死力を尽して傷つく、それも、主人の懷から懷へ渡るだけなのだ。彼女達に与えられるのは、豆粒と鞭であつたのだ。

「ペロ／＼おいで」

はっはつと肩で息している白い美畜を呼び寄せる。F三八七号は疲労に喘ぎながらも、安堵で、犬が尾を振るように、いそいそと頂を垂れて蹲つた。そして、上気した頬を、主人のナイロン・ストッキングに包まれた足首に、こすりつける。

女主人は愛畜の奮斗を賞でて、鞭の柄で軽く襟脚を打ちながら。

「よしよし、褒美をやろうね」

家畜は嬉しかった。主人のその言葉を待っていた。主人の期待を裏切らず勝つたのだから褒めて貰いたい。そして、頭でも頸筋でも撫でて貰いたい。類い稀れな美貌と肢体の持主で理智の女性御法川伶子が、心からそれを願っていたのである。家畜が全力を尽す、その代償は主人の褒賞である。そうすることに依つて主人の寵を得、又繋ぎ留めることが出来る。だから、ペロが、主人のその言葉を待っていたとしても不思議はない。

南京豆が床にバラ撒かれる。ペロの舌に唾液が流れ、唇が床を舐める。

「お預け／＼」

ペロは急いで離れ、均齊のとれた雪白の肉体を行儀よく畏まらせて、次の指図を待つ。
「先に水をやろう」

女主人は井を床に置くと水差しから水を注ぎ入れた。今日のリーレは馬鹿に親切だった。

それにひきかえ、鮎子の方は哀れだった。

鼻輪を吊つて中腰にされ、後手の白指に十数貫の鉄啞鈴を垂らし、指一本一本に嵌められた細鎖の先に、重りがぶら下っているのである。腰と手に力を籠めて、その「重り」を持ち上げていないと鼻輪が引攀れて、疼痛が迫るのだ。立上ることは、腰の革バンドが短く床で留めてあるので出来ない。えくぼの刻まれている、ふっくりした掌の白魚のような細い指は、開ききつて、関節の痛みを痙攣している。

全国の観客達が待ち焦がれているフアンレターの返事を書く指なのである。サインする指なのである。スクリーンで、嫺やかに、愛しむように、二枚目の男性スターに握り締められる指である。その指先がどす黒く血の氣を失い、貝殻のような爪が紫に変色する。

鮎子は中腰の痛さに耐えきれず腰を下げる。ぐいと庶民的な美貌が仰向いて、可愛い鼻が烈痛と共に伸びた。

「う、うっ／＼ ううっ／＼」

映画スターは、呻きとも唸りともつかぬ肺腑の苦悶を息づく。

あどけない容貌が、塗炭の苦しみに歪み、フアンには覗き見ることとも出来なかった、可憐な胸の隆起が荒々しく揺れた。

「約束の鞭だ」

高木は光沢のある髪を掴み、左右に振って鼻痛を亢進させてから哀れにも一杯涙を漂わしている美眸の前に鞭をかざす。

ああ、冷酷にも、鞭の尖端には鉛玉がついていて、痛みを幾倍かに増すようになっていた。

「ひとおーっ／＼」

鞭は大きく弧を描いて馴染み深い白肌に破裂する。鞭革は、手もとから絹肌を吸いついていて、尖端で鉛玉が、ぴちっ／＼と磨滅

している神経を爆発させる。

「ああっ！」

石鹼を濡らしたような肌が反りかえる。同時に襲う鼻と指の痛みに全身は、かっと火だるまになって燃え熾かる。

「ふたあーっ！」

びしっ！ 女優は演技ならざる血涙の画面を、美しき苦悶で彩どる。

「みいーっ！」

鉛玉は骨髓を打ち砕いて、脳底をずんと痺らせる。ぽきっ！指関節が脱れて、鮎子は

「わああっ！」

と五色の火花を網膜に散らして、絶叫を遊らせた。

六、（家畜の実体）

「課長。お呼びだそうで——」

大野六太は入ってくるなり、南京豆を食んでいる伶子に、じろっ！と視線を注いだ。

ペロは声で昔給仕だった今の飼主を覚えて、ぞくっ！と胸内を不思議な風が走り去った。

「うん、昨夜、本国から調教師要員が着いたのだ。君が案内して要領を教えてやってくれ」

高木は泡を吹いている美貌スターの鎖を緩めながら云った

「はい。承知しました」

軽く目礼して出て行こうとするのを、リーレは呼びとめて

「大野さん、ペロを連れて行かないの？」

「でも、今、お使いになって居られるのでしょうか？」

「ううん」と手で否定して

「貴方が調教中のを取り上げて、申訳ないと思っているの



よ。私の帰国迄、まだ間があるから、育ての親の貴方からは、特に厳しく調教して貰わなくっちゃ」

「はい、出来るだけ努力致します」

「こいつが貴方のこと、お礼云ってたわよ」

「まだ、口だけでしよう、心から家畜にして貰ったことを感謝しているといったような動作じゃないですよ」

六太は苦々しそうに云って、伶子の傍へ寄ってくると

「膝立ち！」

と命じて、鞭の柄で強く理智のひらめいた額を小突きながら

「とんま！ お前のこの中は石ころでも詰っているのか？ 幾度教えたら解かるんだ。まぬけめ！」

正規な学業課程の上に、語学、文化其の他特殊教養を身につけ、西欧の文明に接して育ってきた、美貌の女性が齡下の走り使いしか能がないと思われる愚鈍そうな少年に、間抜け呼ばわりをされ、額を蹴られて、白肌を戦かせ、裸身を縮める。

「俺が入って来たのを知っていた筈だ」

ペロは頷く。

「何故、挨拶をしないの？ お前は今、ルホーターさんに使用されているのだから、わざわざ、俺の足下へ来る必要はないが、豆を食うのを途中で止めて、何故俺に頭を下げないのだ！」

六太はドタ靴で家畜の衿首を踏まえると、烈しく難詰した。伶子は虚点をつかれて狼狽える。ぎりぎり首筋が痛んで、鼻梁が床で押し潰された。

やっこのことで貰った豆に未練もあったし、上級者であるリーレに使用されているのだから、女主人の差図だけで動作すればよいと思っただのだ。

「大野さんはお前の大恩人なんだろう。そんなざまだから出来損いって云われるのよ、犬だって三日飼えば尾を振るもんだよ。お前は

幾日、飼育されたんだい？家畜というお前の本来の生き方を教えて下さった恩人に挨拶もしない、そんな恩知らずなのかい。大野さん連れてって、うんと仕込んでごらん、息の根さえ停まらなけりやいから」

売春宿の召使は酒で濁った眼をつりあげて冷淡な慷慨の口を添えた。高木は、引据えた鮎子の頬を靴先で悪戯しながら、盃を含んでいる。

「私、出掛けるから、構わないの。連れてって——」

と六太を促してから思い出したように、高木に向って苦つぽく眉を顰めて

「相木の奴、此の頃、騒ぎ出したらしいわね、一思いに殺してしましようか？」

と同調を求める。

「今、軽々しく動いたら危険じゃないですか、なるべく自重した方がよいと思いますが——」

年配者らしく、分別を示す。

「でも、この建物の出入りまで一々見張られたんじや、仕事やり難くて仕方がないわ」

相木研一が、その出入者を知る為に、資源幹旋会の建物を昼夜、密かに監視させているのを彼等も逸早く、察していたのである。

「ええ、それには、何か適切な手を打たねばならんと思っていますがね」

高木も、渋った声音になった。

「何とか早く仕末して頂戴」と督促してから

「じゃ、出掛けて来ます」

と急に立上った。どうやら、高木の生温い態度に対して、胸に一物あるらしい様子だった。

三浦半島へ上陸して、新たに家畜の上に君臨する使命を帯びた斗士達は、すでに控室で指示を待っていた。

紅顔の少年達で、六太より二ツ、三ツくらいは若いだろう。選ばれた者のプライドに弓の弦のように張切って、自分の生命を国家に捧げ、上官の命令を至上として実行する新進鋭の連中である。

「諸君、本国からはるばる潜航して来られてまことに御苦労でした」

六太は堵列して自分を見上げている若者達を構ってから胸を張った。

「諸君は選ばれた人達である。家畜調教と云う、地味で根気のいる仕事に、挫けない意志の持主として抜擢され、又、将来、情報収集と云う、発見されれば殺され、国からは見殺しにされるスパイの仕事、即ち、恵まれず、報われない影の役目ではあるが重要な任務を、遂行するに相応しい実力者として、着任して来られた人達である。諸君は、先ず、それを自覚されて、如何なる困難にも挫けず、これからの仕事に携って貰いたいと思います」

と、きっぱり云ってから声を改め

「家畜のことは、大体飼育課長から聴かれたことと思いますが、要するに……」

と伶子の、白桃色に耀いている肉体を、皆の視線の届く処へ引き据えて

「これは、人間ではないと云うことです。この通り、人間の顔を持ち、手足を持ち、白い皮膚を持っている。併し、我々Y国人とは異なる生物であり、間違つて人間の如き肢体を有して生れ出たに過ぎない畜類であります。我々に奉仕させる為に生存を許してある家畜であります。こいつ達は人間面をし、人語を操つり、のぼせ上つて第二次大戦に便乗し、我が国土を荒らし、同胞を大量に虐殺した憎むべき獣類であります。諸君はこの思い上った牝達の軀を嚴重に調

教し、心を矯めて、従順で忠実なY国人の飼育物にして下さい。諸君は調教中には、これ達の素質や畜体強度を知ることが出来るでしょう。愛玩用、皮革又は骨細工用、医学実験用と、それぞれの用途がありますから、それをよく判断して、振りあてて下さい。譬えば僕はこれを……」

と伶子の上胸部に「愛玩畜ペロ」と墨書してある文字を示し、「この通り、愛玩用に定めました。これは、元イギリス大使の娘で上層階級に属します。それに、僕が情報工作している会社の秘書でしたので、下級社員で薄野呂だった僕に責められたことは大分堪えたらしく、手こずらせました。併し、これ達の本性は人間ではありません。だから、インテリであろうと、高級社員であろう、その性は畜類です。家畜暮らしに馴染むのが早く、足で撫でてやれば直ぐ喜びます。諸君も鞭を振っている中に解ると思いますが、我々Y国人の玩具に丁度適した下等動物です。それら、ご覧なさい」

六太は伶子を立上らせる。そして命令して、『膝立ち』や『伏せ』をさせたり、例の猫鳴きをやらせたり、片足揚げから逆転させて動物的な姿勢をとらせたりした。

ペロは柔軟な肢体で、無表情に命令されるままに踊り狂った。且つて反撥で歯茎を鳴らし、屈辱に肌を燃えたたせていたものが、今では心に多少の凝りがあつたにしても、操つられる人形の如く、主人の意の儘、衆人環視の中で、肌も染めずに命じられたままに挙措する。そして、その家畜ぶりを褒められようと、足下で鼻面を鳴らす。

やはり、伶子も畜生の性だったか？

「調教施設を案内しよう」

六太は先に立って歩き出した。

七、(畜体展示室)

「此処は畜体展示室です」

中央に七、八匹の白い家畜が、膝立ちに開いた足首を空間で括られ、後手は振り上げられ、顔は仰向いて、しっかりと微動も出来ず固定されて並んでいる。

「こいつ達は獲ったばかりの獲物です。『轡嵌め』と『記号彫』の終った奴を此処で展示して、一般の観覧に供しているわけです」

家畜それぞれは、乳首に大判の荷札をぶら下げている。新任者の一人が、手を伸して見る。

家畜番号	P 一八八	畜身	一六二
過去名	月山規子	畜体	五二
生年月日	昭和十一年三月三日	畜胸	八九
		畜腰	六二
		畜腎	九十
		畜調	B
出產地	東京品川	皮膚質	B
捕獲場所	東京有楽町駅	捕獲人	YZ三十二
		捕獲日時	昭和三十一年十一月十日
			午後九時三十分

(備考) P一八九と同時捕獲

昨夜、仲良しの友達と映画でも見た帰りに、二人して捕獲されたのだろう。地下のじめついた冷氣に滑らかな肌が鳥肌だっている。「こいつが捕獲される前に、何を食べたか調べると思いますね、それには……」

六太は、支え棒をされて開けっ放しになっているP一八八号の口へ小さな丸い容器のついた紐を繰入れる。レストランで友達と楽しく語いつつ舌鼓を打って胃の腑へ納めた食事を掬う為に……。

白い歯並の奥で咽喉の肉が動いて、意志に関係なく、ごくんと嚙下機能が付く。家畜は眉根を寄せる。異物を呑みこんで息が詰る。

食道を冷く、不愉快な圧迫が下っていった。

「これ達の身上調査の時、さりげなく、何を食べたか訊いておくのです。それとこれを照らし合わせるんです。時間が経つと消化して了ってますけど、もし違っていたら、うんと罰してやるんですよ」

六太は紐を手繰り上げる。何も知らない純真な少女は、胃の腑迄勝手に掻き廻される暴圧と、不快な刺戟に、只青褪めて涙を浮べるしかし、冷徹な機械的刺戟は咽喉仏をごくごくと上下させたかと思ふと、げっげっ／＼と器具を吐き上げる。出てきた黄色の不消化物に紛って肉片が入っていた。

「なあんだ、最後の晚餐はカレーライスか」

そうだ、人間の食事はあの時を以てお終いになったのだ。これから以後は飼料と呼ばれる家畜の餌を口にしなければならぬのだ。

六太は氣紛れに慰んだ女の濡れ睨んでいる臉を指先で撮まむと、ぐっと引開けて、唾をべっと吐いた。澄んだ瞳は無頼男の不潔な唾泡に蔽われる。女にとって、恐らく、胃の中をいじり廻されるのも始めてなら、眼球に唾を吐きかけられたことも始めてだろう。驚愕に戦いて、頬がびく／＼と恐怖の律動を刻む。

「眼潰しに唐辛子を使いますが、本当に眼を潰す恐れがあります。だから薄荷か、又は薄荷を成分にしている創薬を使って泣かせると面白いですよ」

六太は傍の棚から傷薬を取って

「おい、お前もこれからは簡単に涙を流せなくなる。今の内せいぜい泣いておくがいいよ、俺のせめてもの老婆心だ」

臉の裏へなすりつけられる。

ピリリ／＼と網膜が焼け熾って、みるみる紅涙が涙管から湧き出てくる。家畜は刺戟に耐えきれず、眼を瞑ろうとする。だが、六太は臉を撮まんで、薬が隅々へ行きわたるように、満遍なく動かしている。

焦点が霞んで、眼球の奥の奥迄痛みが渦巻いた。泳えが声となつて呻めき、十八才の品川生れの乙女は、ほつれ毛を汗に粘らせ、泉の如く、とどめなく涙滴を溢れ落した。

六太は、それを見捨てて、隣へ歩を移す。

P一八九は友人の苦悶を聴き、六太の姿に電流でも通されたように、わなわなと十六才の汚れない心で恐怖した。委細構わず、案内者は実りを前にした果実のような、固い双隆の脇から、肋骨の間にぐりぐりと指を差しこんで計った。

「牝もこのくらい若いのは、まだ伸びますから、こうやってみるんです。あばら骨の間が広いものは、狭いものより成育した時に胸が広くて嵩が大きくなるのです」

と、その手を脇腹へずらして、骨の彎曲を探りながら

「あばら骨が背骨から出ると直ぐ膨れあがるように張っていないければいけないんです。骨が張っていれば、胸部が大きく、消化器がよく発達してくるものです」

六太は仔牛か、仔馬でも調べるように、未成熟の骨の太さを指先で計り、緻密な若肌を撫で、拇指でボンと撥じいて、弾力を試した。「皮膚は撮まんでみて、肉も共に持ちあがらなければいけません。生毛は白く、細く、生毛もののものを感じさせないように植っていて毛穴のわからない程良品です。無論、白くなければいけません、静脈の浮いてみえるようなのは、あまり丈夫とは申せません」

六太は咽喉仏の繋ぎを揉むようにして調べ、鎖骨をとんとんと鞭の柄で叩いて硬さを推し計った。

正に生きた物品の点検だった。

明朗な美貌ではしやぎ廻り、甲高いアルトの笑いを撒きちらし、総てが楽しく、屈託ない日常を過していた少女達は、清浄な裸身を生れて此の方、想像も及ばぬ苛酷な扱いをされ、身も心もなく動願して、只、動かせぬ軀でおどろくと竦みあがっていた。

八、(畜体強度試験)

「こいつは少し贅がたっていますね。」

と次のデパート・ガールの腹部の弛みを掴み、荷札を覗きみながら、

「二十五才か——、曲るかな？」

と独り言ってから、六太は側部のハンドルを廻す。手と頭部を定着してある金具が、徐々に床へ吸いこまれてゆく。小柄で、二十才位にしか見えない婀娜やかな半身は、腹部で曲って、のけぞって、後へ下へと反ってゆく。

「このくらいになると骨が固まりますから、この機械にかけてみるのです。八〇度以上に曲らない奴は労役にも弱いですから、他の機能と照し合わせて標準以下なら潰しものです。」

デパートガールのウェーブした黒髪は腿の合間に隠れる。腹も胸も、前面の皮膚は極度に張り詰めて、腿の間から呻きが洩れる。

「うっ、うっ！」

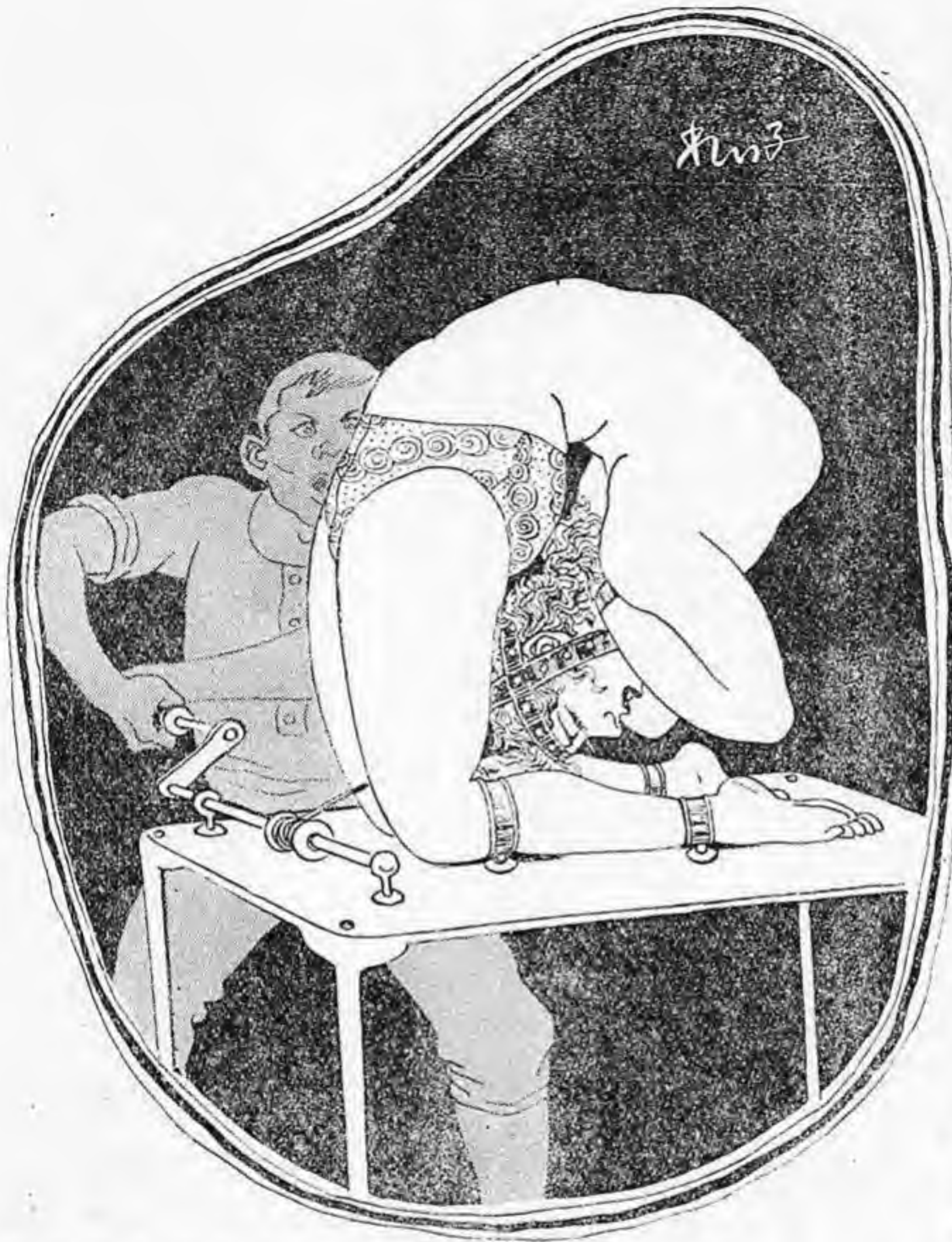
「お客は如何なる場合も正しい」をモットーにしているデパート店員も、この客には笑顔で応待することは出来ない。売り子も今では逆に売られる品となって、その品質を検査されているのだ。

二十五才の女盛りの素肌は、Y国人の愛玩品として適するか、どうか？

二十五才の骨が、苛酷な労役に耐えられるか、どうか？ ペーパーナイフのような骨細工に使った方が得か？

二十五才の運動機能が、家畜動作を完全に出来るかどうか？ 餌代を費し、調教費用を賭けて損にならないか？

終始、にこやかで、売場の花形だった彼女も物品としてこのように並べられてみると、特売品ぐらいにはなるだろうと価値判断される。そして、品質に価値を認められたものは、更に売りよい良品に



する為、火と水と鞭で、冷酷な品質改良が行われるのである。女店員の頭部は、今度は両腿の間から前へ索かれ、自分の臀部に密着する。咽喉も腿も伸びきって、関節や脊椎が軋しむ。心臓の鼓動も肺臓の律動も、張りつめた皮膚の下で極端に圧迫されて、せつない喘ぎをあげる。もし、刃物をその表面に当てたとしたら、ばちっとは

じけ裂けて、皮がくるくると剥けてゆくことであろう。六太は一同を次の部屋へ導く。其処は、畜体の強度試験をする部屋だった。

伶子は忠実な犬のように、六太の靴へまつわりついて膝行していたが、捕えられて最初に悲喟のどん底へ投げ込まれた時、人間剝奪の試験をされた機械類に再会して、思わず眼を外むけて唇を噛んだ。

家畜としての習性も身につき、軀も柔軟に調教された今、この機械に架けられるのだったら、そう歎きもせず、諦観の中で耐え得られたであろう。併し、人間の社会意識が粘着していた頭脳と脆弱な肉体では、正に驚天動地のショックと苦悶だった。秩序ある生活の中で学んだ道徳観念も、正義感も、嵐に吹き払われる木の葉のように消し飛び、只管暴力に怯え、呻き、咽び、晦冥の淵へ沈んで了った。あの当時のことが、暗澹と回想されるのであった。

丁度その時の自分のような、何も知らず、ダリアのごとく咲き誇っている青春の花々が、今、いろいろな機械に固定され始めた。目白押しに、疎みきって並んでいる後手に縛られた新入家畜の前には、さまざまの器械が羅列してある。白い皮膚の、ある部分を顕微鏡に依って拡大しスクリーンに投影しながら、その部分に幾段階かの熱度を加えて焼き、或いは氷

点下に冷却し、皮膚の変化、強度を見る畜皮耐度検査機。

皮膚を伸長しながら、その組織、細胞の変化を調べる伸縮計器。

骨髓迄電針を刺し貫いた二の腕に電流を通じ、或は重圧をかけて伝ってくる骨の震動をグラフ記録し、圧力メーターを照合しながら特殊レントゲンで透視して骨の硬度を計る、畜骨強度検査機。

毛髪の強度光沢を調べる畜毛選別器。

涙液、唾液、血液其の他身体から分泌する液のPH（アルカリ度と酸度を表わす）を見る畜分泌物試験器。等々――。

六太は負荷の測定をする為に一匹の牝畜を固定する。坐った背に鉄塊を載せ、突伏したような姿勢でいるが、直ぐ、胸の下あたりの床で電熱器が点くのだ。急激に直接肌を襲ってくる熱気に、弾かれて背を起し腰を反せねばならない。脂汗は全身に滲み出し、鉄板はじりじり持ち上り、計器の針が家畜の死力を知るように、ぶる／＼と目盛を刻んでゆくのだ。

牽引力検査にしてもそうだ。女は轆具を肩と腰に装着される。バネの伸度によって輓力を計る装置になっていて、号令と共に一鞭され、ぎく／＼と綱を張る。続いて、二鞭、三鞭、終いには尻を針で刺されたり、焼燙を弱されたり、最後の気力の一滴をもふり絞って、眼が霞み、失神の一步手前迄責められて検査されるのだ。やがて、阿鼻叫喚が壁に反響して、死物狂いの汗から発散する家畜の匂やかな体臭が、部屋一杯に充満することであろう。

九、（畏にかゝった誘拐者）

フロントガラスに秋雨が白い飛沫をあげる。カチツカチツと、ワイパーが根気よく拭いの作業を続ける。車は溜り水を跳ねあげて、丸い建物の前を横切った。

相木研一は鋭い眼光をあたりへ注ぐ。森閑として、何の気配も見せていない。車は都電の通りを渋谷に向った。研一は胸に凝ってい

る悔みに、ハンドルを廻す手も、とかく滞りがちだった。

彼が丸い建物の見張りにつけていた部下が二人共不慮の死を遂げたのである。一人は情報部への帰途、何者の運転するとも知れない車に轢かれ、一人は車諸共、墨田川へ転落溺死したのである。しかも、それが、単なる事故死として片付けられないものが裏にあった。

車に轢殺されたのだから、通行人が、誰もいない寂しい通りでやられたのである。従って、はっきりと轢かれる現場を見たものが一人もいない。無惨にも轢にかけられた死体が、ボロボロのように街路樹の根元に投げ捨てられてあるのを発見した時は、附近には、それらしき車の影さえなかったのである。なんという巧妙な殺人。

溺死はもっと疑問のある死である。

「リーレ・ルホーターらしい女が門から出て来たので尾行する。」と車からの通信があつて、追尾経路を通報しながら江東地区へ向つていったが、突然、ぶつりと通信が断れたので、急拠搜索の車を派遣したところ、川の中へ車を突込んだまゝ、塔乗員は不可解な転落死を遂げていたのだった。深更のことゝ目撃者もない。

当然、リーレらしい女が疑しくなってくる。――が、疑しいだけで何等確証がないのだ。日本人なら早速事件当時のアリバイを調べることが出来るが、Y国人ではそれも儘にならなかった。おまけに、彼の仕掛けた罠に緑川百合子は乗ってこない。殿村可奈子、実は諜報員甲21号に警戒員をつけ、短波送話器も持たせて、百合子の周囲を泳がせているのだが、どうしたことか彼女は見向きもしない。

自分の推理は間違っていたのだろうか？ 彼女は単なる洋裁の注文で、Y国資源幹旋会へ顔を出したのだろうか？

研一は手掛かりのないもどかしさと二人の部下の不慮の死と云う打撃が重つて、アクセルを踏む足も心なしか力がなかった。国鉄、都電に四つの私鉄、それと十七、八系統もあるバスの発着。渋谷は雨の中でも相変らず賑わっていた。

華やかに装飾した店先を、色とりどりの傘が通る。濡れた敷石の上を、可愛い、レイン・シューズがゆききする。その中に多穂子の姿を発見した研一は、車を徐行させる。自分が命じた警戒員は四、五間離れて、多穂子の護衛に任じている。す早く目配せで合図してから、

「多穂子ちゃん！」

と呼びとめる。

「あら！」

と喜ばしように立止って寄り添う恋人を、扉の中に迎え入れて

「何処へ行くんだい？」

「注文品を届けに——」

「どっち？」

「すぐ其処よ。その角を曲ったところ」

車は道玄坂を上りきって右折すると、石垣を繞らした洋館の前で停る。

「ちよっと、待ってね。」

多穂子は、ナイロンのストッキングに包まれたすらりとした脛を躍らせて降り立つ。若鹿のように潑刺とした肢体に、研一はふと心を咬られる。手を掴んで引戻すと軽く抱きかゝえて、紅らんだ頬に唇を当てる。処女は上氣した眸で、じっと艶じて、

「いやあ！」

「早く行って来いよ」

照れ臭そうに云って、研一も胸の中に、こそばゆいものが湧いた。多穂子は五、六分で息をきらして戻って来たが、研一の耳元へ早口で報告した。

「此処のお嬢さんも被害者らしいわ。」

「ええッ、帰って来ないのかい？」

「二、三日前から帰らないらしいの、最初に留守だなんて云ってい

たけど、何時頃お戻りですか？ と訊いたら、旅行してますと云うの、重ねて幾日にお滞りですか、と尋ねると解らないって返事なのよ。」

多穂子はせきこんで報告を続ける。

「よし、僕が訊ねてみよう。」

研一がハンドブレーキを入れて腰を上げる。

その時だった。情報局通信指令部からの放送が、車のスピーカーを響かせた。

『五九号車、五九号車、応答願います』

研一は素早く送話器を取り上げる。

『こちら五九号車、相木研一乗務、どうぞ』

『只今、四六号車より報告ありました。甲21号はT六七の地点に於いてXの車に同乗、TB方面に向いつゝあります。四六号車は只今追跡中、五九号車も追尾して下さい。』

甲21号は殿村可奈子の諜報員番号であり、Xとは緑川百合子のことである。即ち、可奈子は百合子の車に乗ったのだ。

『了解。五九号車はPD二三の地点に向い、其処で待機します。』

研一は送話機を置くと東京全都を縦横に数字とアルファベットで割った暗号地図を展げる。

「T六七は日比谷辺だと思ったが……」

指が紙面を辿る。

「あった、帝国ホテルの前よ。此処で二人は車に乗ったのね。」
多穂子が若やいだ声で見つけて云う。

「TB方面とは赤坂溜池方面だ。」

五九号車は翻転すると疾風のように雨の中を突走る。PD二三の地点。即ち、丸い建物の近く、神宮外苑の森へ向って、アクセルを一杯に踏み込みながら宮益坂を登る。

「あら、それ、テープレコーダーじゃないの？」

片手で運転しながら、空いている手で脇の箱の蓋をとると、四分の一時程のテープが捲きついたリールが見えた。

「どうするの？」

多穂子が重ねて訊いた。

「甲21号は短波送信器を持っている。彼女達の会話を録音するのさ。」

「そんなもの持っていたら緑川先生に解ってしまうじゃないの。」

「大丈夫！」

研一は確信ありげに云った。

「どうして？」

「君はしてないね。」

と多穂子の胸に眼を注いでから、

「甲21号はアクセサリに、ひまわりのブローチを胸につけているんだよ。それがマイクロフォンなんだ。多穂ちゃん、僕が合図したら、テープのスイッチを入れてくれよ。」

車は外苑の樹蔭を選んで停まる。右手に樹の間越しに丸い建物が僅かに望見される。研一は、インターフォンのダイヤルを廻して、波長を合わせる。恋人同志は今までのお喋りをやめた。胸の鼓動が数えられるような静けさ。

十秒、三十秒 五十秒……。

研一の緊張した耳が動くような息づまる一瞬。

「何処かしら？ 先生、幕を開けてみてもいい？」

不意に、甲21号の明るい声が響いた。研一が手を挙げる。テープ

レコーダーのリールが廻転を始めた。

「いけませんわ、プレゼントを貰った時でも直ぐ開くより、お家迄何かなあと中味を想像しながら持ち帰ってから開ける方がより楽しいでしょう。今、表を見たら、私の趣向は台無しになってしまうよ。」

「でも、やっぱり見たいわ、何処へ連れて行かれるんだか、解らないんですもの」

「ふふふ、楽しみにしてらっしゃい。いゝ処よ」

「いゝ処だけじゃ解らないわ、どんな集りなの？ 女の人だけ？」

男の人もあるの？」

「貴女のようなお嬢さん達ばかりよ、美しい顔と姿を持った淑女たちのグループ」

「あら、そんな私なんか除け者だわ、おどけ顔ですもの」

「そんなことありませんよ、貴女は飛び抜けて奇麗でいらっしゃいますわ。それに、キングサイズと云われる素晴らしい身体を持ってるしやるじやりあませんか」

「ふふふ、褒められると、お世辞だと分っていても、やっぱり嬉しいわ」

研一は聴耳をたてゝいたが間合を計って、つと瞳をあげた、轍で水煙をたてながら、窓を遮蔽したビューイックが、五九号車の前を走り過ぎる。

多穂子は思わず、汗ばんだ手で、恋人の腕に縋る。甲21号が、懸命に何か手掛りを訊き出そうと努力している会話が続く。

「そのお身体を、私の下手なデザインで包んでしまわれるのは勿体ないですわ」

「恐れ入りますわ。でも、ヴィーナスになる訳にもゆかないもの」

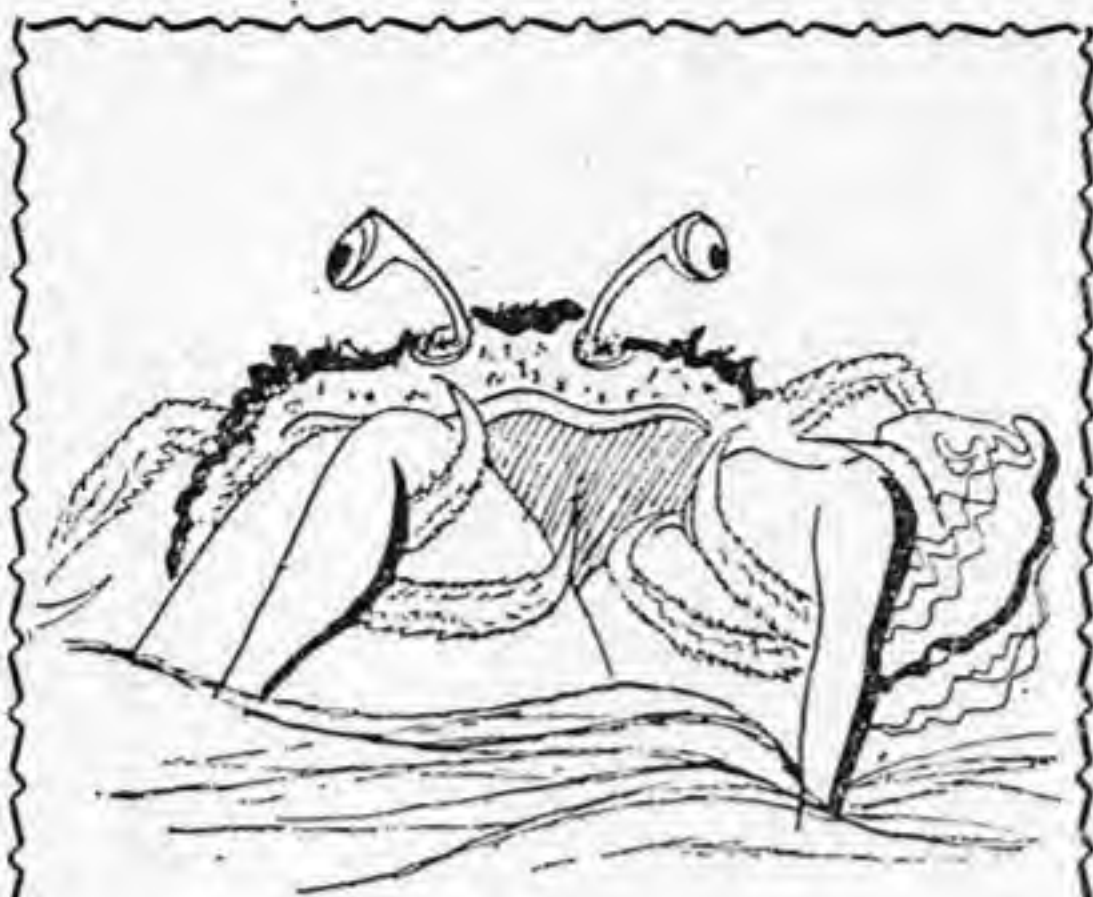
「女は本来ヴィーナスの方が美しいのじゃないかしら」

「あら、高名なデザイナー緑川百合子先生のお説としては納得出来ませんわ」

「醜い女が衣裳で隠すのは仕方がないとしても、貴女のような方は衣裳のない方がいくらか美しいかしれませんよ」

「先生が女性の裸体讃美？」

「そう、貴女の美しい肉体を是非鑑賞させて戴きたいわ」



懐しい『浪人街』の

牛裂の刑

嵯峨美也子

往年の山上伊太郎の名作「浪人街」がまたマキノ雅弘のメガホンにより京都映画で撮影されている。これには、裸体で美女が牛裂きの極刑にあうというサシスチックなシー

ンがあり、いつも問題になっている。これまでも、この女巾着切りのお新を、古くは南光明夫人になった大林梅子、最近の東映作品の「酔いどれ旗本八万騎」では宮城千賀子が

さてこの作品は横暴極める旗本八万騎と素浪人の激しい対立を背景にして、強い奴、弱い奴、潔癖なのや野放図なの、哀しいのや面白いの、そういった浪人が救いもなく浮び上る

やり、奈良ロケで、芝生の上白衣で縄でしばられ、長時間ころがされていた辛い経験をもっている。今度は最近ヴァンプ女優として売出してきた水原真知子がこのお新をやる。はじめに高峰三枝子がいわれていた。彼女は「次郎吉格子」のお仙から「弁天夜叉」の後家お世紀と縛られ役ばかりやってきたが、今度は放免で湯女の小芳に廻った。水戸光子のお新の話もあったが、「美女蝙蝠」のあの風呂場、場面ではね。

「いやね、先生。裸なんて下劣だわ」
研一の眼は、緑の葉を通して、ビュイックが丸い建物の塀に沿って曲って行くのを捉えた。車は門を素通りして、尚も進んでゆく。
「あっ！ 裏だ、裏に隠し口があったんだ」
「下劣？ 肉体を晒すことがなんで下劣？ 貴女に相応しいと思うのだけれど」
「え？ あら、もう着いたの、停ったようだけど」
「いよ／＼到着ね、貴女の本当の生き方をと／＼くり教えてくれる処

へね」
「本当の生き方？」
「そう、お前のような生れ損いを……」
五九号車のスピーカーに、モーターの響きに以た音が交ったように思えたが、其処で吸いこまれるように声が消えた。研一は周章で、ラジオバリコンを調節したが、まるでダイヤルを嘲笑するよう、何ら感度はなかった。緑川百合子と甲21号を乗せたビュイックはその時、エレベーターですでに電波の届かない地底の囚獄に着いていた。
(未完)

日がいづくとも思えない暮しの中で温い友情の花を咲かせ、明日への望みをもって宿命の時代に生きる姿を数々のエピソードを織りこんでいる興味波乱万丈篇である。

サジステイックなシーンを中心に物語を綴ってみよう。

酒と女に身を任かせ浮世暮しの素浪人荒牧源内に、お新はホレ切っており、巾着切りで金を男に貢ぎ歓心を買っている。だか金をもつと湯女の小芳の所へ飛んでゆき浮気してくる源内である。源内と悪旗本小幡伝太夫の争いで、源内はお新を捨てて逃げる。お新は人質として小幡に捕えられ、土蔵の中に縛られ監禁されてしまう。

旗本についた浪人赤牛弥五右衛門が小幡七郎右衛門に智恵を貸す。

「その女子をぶちのめして、ねぐらをつきとめるのがいいと思うが」

「それがよい。オイ、中川、そいつを叩いてみる」

「心得た」

後手に縛られたお新をなぐる。古風に責めたてる中川。宮城千賀子のお新も後手縛りで、なぐられ、廊下にぶったおれる相当な責のシーンを見せたが、今後もマキノ監督は以後よりも大いにいいところを見せるだろう。どんなに責められてもお新は音をあげない。「しぶとい女め」となぐられ蹴上げられる。

この作品にはもう一人縛られ責められる女がいる。帰参を願う浪人土居孫八郎の妹おぶんである。紛失した短刀を探すために、あいまい宿に身を沈め好色な老人に身を金のために汚されようとして殺して逃走する。短刀のために、源内にいわれ、お新を救いに行き捕えられる。このおぶんは前は藤間紫だったが今度は松竹の縛られ女優の一人山鳩くるみである。お新と共に捕えられ、二人とも縛られる。

いよいよ牛裂きの刑の相談である。

「いつぞや人に聞きました。よその国では牛裂きの刑というのがありますそうな。」

藤兵衛の言葉に七郎右衛門はボンとヒザを叩いて

「兄者、こいつら、引出して一つ牛に裂かせてみようではないか」皆が目を見張った。

伝太夫「牛裂の刑罰か、素晴らしい思いつきだ。よし明日の夜、子恋の森ということにしてフレを廻そう」

七郎右衛門「自分の女が、真二つになるところを見せてやりたいが……」

すると赤牛が縛られているおぶんを見て

赤牛「オイこうしろ、こいつを放してやれ」七郎右衛門「バカ何をいう」

赤牛「ま放してみる。源内の奴のり出してくる。来ねえような男なら、彼奴は人間じゃねえ」

お新は縛られてカゴに乗せられ子恋の森へ運ばれる。

入りあいの鐘をあいずに、猿ぐつわのおぶんは小幡家からつきはなされる。狂った如くおぶんは町を走ってゆくときに岡っ引佐吉、金五郎に怪しまれる。子恋の森では、裸形で歯をくいしばったお新が目をつぶってころがされている。

お新の足首へ結びつけられる綱、空にたくましい牛、牛、グル／＼巻いた太い綱。おぶんの注進でガバとはねおきた源内走り出す。

子恋の森へ、お新を救いに、

子恋の森では「お旗本衆の牛裂きの刑、前代未聞、後々までのかたり草になりましよう」

「やれ」「やれ」

仲間共がお新の左右に牛を寄せて向をかえる。

イダテンでかけつける源内

「天下のお旗本衆か、牛裂興行の勧進元をさそれようとは、さても奇っ怪、世も末よ、オイそれでいくらもうかるのだ」

「おいお新、いま助けてやるぞう。」

大立廻りになる。

一方おぶんは岡っ引に縛られて引立てられてくる。というシーンもある。兄に助けられるが……。

(おわり)

円照寺七不思議「弁才天利益雪解」

三 場

伊 藤 晴 雨・作並二画

甲 斐 仁 参・提 供

(この脚本は来る五月一日に埼玉県西武町野田の円照寺で不二栄子一座によって上演される事になって居る。背景、演出も伊藤先生御自身これに当たられる。提供者記)

第一場 村端れの居酒屋

敷基正面帳場、此上縁喜棚大阪格子、下手に酒樽を据えたる帳場格子など総て野田村々端れの居酒屋。雪おろしにて幕が明く。

仕出しの百姓、酒を呑んで居る。

百姓「時に御亭主、此の野田村の円照寺の弁天様は不思議な御利益があつて昔しから池の水が濁る時は村中が火に崇られる相だが眞実かね。」

亭主「昔しからそう云う云い伝えて御座居ま

すから満更嘘と計りは云えませんが。去年も此池から大きな鯉を一匹盗んで喰つて了つた

登場人物

庄屋の娘	深 雪
その継母	お 力
相 撲 取	峰 の 山
居酒屋の亭主	弁天おさよ
女 賊	大 勢
捕 手	大 勢
百 姓	大 勢
下 男	
女 中	
僧	

男が有りましたが、喰べた翌日急に吐血して

死んで了いました。弘法大師の罰でムいまいよ。」

百執「恐ろしい事だね。噂に聞けば此村の庄屋様の奥様は文明開化とか云う事で旧幣嫌いだと云うが、お寺の池の水を汲み干して了おうとして居なさるそうだが眞実かね。」

亭主「人の噂だからたしかな事は判らねえがそう云う評判が立って居ますだ。」

百姓「其奥様の実子を可愛がる計りに先妻と庄屋様との間に出来た一人娘の深雪様を、エラく邪魔にして居る相でねえか。」

亭主「高い声じやア云われねえが今の奥様は元飯能で凄腕の芸妓上り、勤めの内から間夫があつて、其男との仲に出来たのが今の実子、先妻の跡取りの嬢様を箸の上げ下しに弄めて出て行く様に仕向けて居る相だ。」

百姓「有るから財産争いも起るんだ、ヘエ、いっそこちとら水呑百姓は反って丸く家の中が納りますだよ。オヤモウおつもりだ。旦那又帰りによります。これから江戸の新宿まで行かざあならねえ用があるから明日帰りに又よりますだ。」

亭主「雪の夜道は氣をつけて行かっせいよ。」百姓捨ぜりふにて這入る。

表の方騒がしく、御用、御用の声、女賊弁天おさよ馳け込んでくる。

さよ「旦那、助けて下さいまし、御願いでムいます。」



亭主「大変息を切って居なさるが一体どうした訳なんです」

さよ「今、此先の川端を通り掛るとお役人が
妾しを何かと間違えて召捕ろうとしますから
お宅を見掛けて逃げ込
みました。どうかお願
いでいます。助けて
下さいまし。」

亭主「此頃此近所に女
の賊が入り込んだそう
だから大方それで間違
えられたんだらう。よ
しく、美しいお前さ
んが悪事をするとは思
えない。奥の一ト間へ
隠れて居なせえ。」

さよ「有難うムんす。」
と入る。

捕手「三人入り来る
捕手「亭主、今茲へ奇
麗な女が這入って来な
かったか。」

亭主「存じませんよ。」
捕手「嘘を申すと為に
ならんぞ。」

亭主「決して偽りは申
しません。」
捕手「ソレ、屋捜しを
して見る。」

一二、ハツと入る

「どこにも居りません。」

捕手「たしかに此家へ追込んだと思ったが、
それでは見違いだったのか。他をさがせッ。」
一同入る

村の庄屋の妻、お力、風呂敷に包んだ鯉を
抱えて出る。

力「御亭主、妾しやあ今此鯉を池から一匹生
捕って来た。寒さ凌ぎに鯉のコクシヨウこれ
を肴に一杯やりたい。早く料っておくれ。」

亭主「ア、コリヤ見覚えのある円照寺様の池
の鯉、どうしてこれを……」

力「大根や芋では口に飽きたから一匹黙って
上げて来たんだ」

亭主「昔しからの云い伝えを、奥様あなたは
信じませんか。」

力「文明開化の明治になって、弘法様もある
もんか、生魚が喰べたいから、コッソリ一匹
捕って来たのサア。」

亭主「後の祟りが恐ろしいから、料理は私し
には出来ません。」

力「臆病だねえ、こうしてするのだ。」

と包丁で鯉を切る。仕かけで頭が切れる。

亭主「デモ恐ろしい。鯉が白眼んでいる様だ。」
力「お前が料理が出来なければ、妾しが自分
で料理して見せるよ。」

鯉を喰うこなしよろしく

力「あゝ旨かった。久しく生魚が口に入らな
いので骨離れがする所だったが、これで少し

は助かった……罰が当るもないもんだ。チットも何ともないじやあないか。」

亭主「ア、恐ろしい事にならなければいゝがナア。」

深雪出る。

深雪「母様。仰有り附けの年貢のお金の五十両茲へ持つて参りました。」

力「オ、代官所へ納める年貢のお金、茲へ置つて早く帰りや。」

深雪「ハイ」

と金包を置く。のれんの間から白い手（女賊おさよ）が出て此金をとる。吹きかえの事力「ハテ、今たしかに此処へ五十両の金を置いたに違いないが。」

と四方を見て……

力「御亭主、茲へおいたお金の財布を知らないかい。」

亭主「気がつきませんでしたね。」

力「そんならもしやあの深雪が妾しに渡したと見せかけて盗んだのではあるまいか。こりやいゝ折檻の種が出来たねえ。」

とニツコリする。

上手から以前の女賊、弁天おさよ出てお力と顔を見合せる。

さよ「ホ………」

力「フ………」

よろしく見合つて幕。

第二場 庄屋の雪の庭

道具は道具帳による事。

女中、下男立ちかゝり居る。全じく雪おろしにて開幕。

下男「どうも近頃此村に異つた事が出来ねばよいがと村の古い老人達が寄ると触ると噂さだが変つた事がなければいゝが……」

女中「弁天様の池の水が急に濁つたと云う事だから、昔しから云い伝えの通り此村が大火事にでもならねばいゝが。」

下男「此大雪だからめつたに火事もなかんべいが、此降る雪に奥庭であの意地悪の奥様に縄で縛られ責められるお嬢様は嘸苦しい事だらうナア。」

女中「年貢のお金の五十両をどこへやつたと



責められているお嬢様の泣き声が耳について
お可愛相だねえ。」

下男「また飛ばつちりを喰わねえ内に部屋へ
這入って暖まろうか。」

と二人は入る。

峯「サア、キリ／＼と歩みやがれ。」

と以前の深雪を荒縄にて手荒く縛り、峯の
山が引立てゝ来る。中央の松の木につなぐ。

力「峯の山、白状したかい。」

峯「荒増白状しやんしたが、まだ泥は吐きま
せん。も一責めしたら泥を吐くに違いねえサ」

力「サア、年貢の金の五十両、どこへやった
か素直に白状しておしまい。白状しない其時

は痛い目させるから覚悟をおし。」

深雪「サア先刻も云う通り、お母さんの目の
前でお渡し申したあのお金、妾しは盗んだ覚

えはムいせん。」

力「イヤ、そうは抜けさせないよ。お前に渡
した金包、たしかに屈けて居ないから盗んだ

ものに違いない。サア云え、これでも云わぬ
か、コウたゝかれても白状しないか。」

続け打ちにする。

深雪「ア、苦しい。妾しが知って居る事なら
ナンでお隠し申しましょう。ア、手が切れ

る様に痛い。ア、苦しい。」

峯「金包出さない其時は此相撲の峯の山が土
俵の力のあるっ切り、打って打って打ちのめ

して責殺してやるからそう思え。」

打つ。

深雪「ア、苦しい。一ト思いに殺して下さい
頼みます。ア、切ない、身内がチ切れる。オ

、寒い。」

力「オ、寒かろう、切なからう。其苦しみも
心が盗んだお金を出してお仕舞い。」

深雪「知りません。存じません。」

力「少し寒さが烈しいから可哀相だよ、峯の
山チト暖めてやりましょうか。」

と見合せる。

峯「ようがなす、暖めてやりましょう」

と火鉢の中へ鏝を入れて焼き之を内股へあ
てる。

深雪「ヒー、アツ、アツ、」

力「寒いと云うから暖かにしてやればつけ上
る、憎い奴め、こうしてくれる。」

とたぶさをとる。毛少し抜け、顔に血にじ

む事。

峯「こうしておけば雪に凍えて大方死ぬに違
いない。そうなる時は兼ての望みだ。」

力「えゝまゝ子と云うものはこう迄憎いもの
かねえ。」

と打つ。深雪ガックリとなる。

此時、縄を切る。深雪井戸の中へ落ちる。

井戸より水吹き出して流れる。(二役早替り)
いぜんの女賊おさよ四辺を伺い出て深雪の縄

をとき助ける心にて吹替えを介抱する事。半
鐘を打込み、火事の仕出し出る。

サア大変だ、村は火事だ、雪のふる中を此
大火、早く消さねえと大変だ、水を運べ／＼
と早鐘の音でひようし幕。

第三場 焼跡の場

一面焼跡の景色になり、残雪の上に所々焼

棒杭あり、茲にいぜんのお力、氣狂いの盲目

で立っている。大勢の村人立かゝり居る。

甲「池の鯉を喰ったので盲目になったア自業
自得だ。」

乙「苦しいか、御利益のある弁天様をナメて
掛ったのが悪いのだ。」

力「ム、苦しい。ア、片目の鰻が妾しの首を
締る。ア、苦しい、南無弘法大師様、どうか

お許し下さいまし。ア、苦しい。」

僧「どうだ弁才天の利益の程思い知ったか。

南無大師遍上金剛。」

とよろしく印をむすぶ。

男「やあ、今迄茫々としたお寺の庭に草一本
も無くなったは、不思議な事を見るものじや

ナア。」

僧「これぞ弘法大師の奇蹟でムる。南無大師
遍上金剛。」

とよろしく一同合唱する。お力笑う。一同

思ひ／＼の見場にしひようし、幕。

(終り)



女サジストの記 (一)

鷹野 めぐみ

私の拙ない告白も娘時代まで書かせて戴きました。が、いろいろの事情で一応中止させて戴き、今後は現在の事を思いつくまゝ書いてみたいと存じます。

その前に、誌上において私にお呼びかけ下さった方へは厚く御礼申し上げます。今の処どなたにも御返事を差上げて居りませんが、近々必ず何らかの方法で御返事申し上げます。今までに御住所明記の方々の分は私の手帳に控えさせて戴いて居ります。

娘時代以後の主な事としては、私の結婚となり、その相手は父の会社の御得意先に関係のある人でした。けれども私達の此の結婚は性格の相違からか、すぐ破たんを来たし、私は実家へ帰ってしまいました。私の不満は、やはり封建的な家族の中にしられる事にあつた様でした。それにも増して、平凡な夫婦

の営みが一番の原因だったかも知れません。

実家に戻ってからは、いろいろの事情から私は自分の家を持ち乍ら父母の許を離れて現在のアパートに移ったのです。それ以後の事は省略して……。今のお店に勤める様になって私と始めに知りあつた男は木原と云う、或る会社の係長をしている人でした。四十才位の人でよくコーヒを飲みに来ましたが、私に或る時、奇クを見せてくれたのです。パラ／＼とめくって、まず私の目にとまったのは春日ルミさんが男を苛めているフोटでした。その号はたしか、ルミさんが男の人の顔の上に逆に馬乗りになっているものでした。くい入る様に見る私に木原は、「君はその写真、どう思う？」ときくのです。私は大胆に、「こんなの好きよ、私もやってみたいワ」と云うと、木原の顔が何故か生き／＼と輝いた

のでした。その後、私がいらないと云うのにすぐ立派な贈物を届けて来ました。正直な話、私は、父母の処へ行けば何でもあつたので何も欲しくなかったのです。でもむげに返すのも悪いので貰いましたが、その御礼がてら私のアパートへ招いた事がありました。その時始めて私と木原はあのマゾフオトの様なプレイをしたのです。木原は悶々と自分の性癖を話しました。そしてプレイだけでいゝから満足させてくれと云うのです。普通の女性なら気味悪がつたかも知れませんが、私は何とも感じなかったのです。

「いゝわ、してあげる」

私はそれだけ云って木原の身体の上に跨つたのでした。普段は平凡な、正常な女性でありたいのが、私の何時も抱いている気持ですが、プレイはプレイとはっきり割切っていたのです。

私は木原の両手を後手に縛りあげて、両足も縛り、手と足を一緒にして結きました。弓なりになって酔いばかりでなく、真赧になっている木原の顔を踏みつけ乍ら私は、

「あなたの奥さんが見たら、いゝえ子供さんが見たら何て云うかしら」と云い乍ら、私も段々サジズムの快感に酔って来たのでした。

時

評

叩くと云う事は音がするので、私は足の紐だけを解いて、衣紋持を並べてその上に正坐させ、私が身体ごとひざの上に乗ったたり、今にも手が折れると云う処まで腕をねじあげたり、呼吸がしばらく出来なくなる程、私のお尻でふみしいたりしたのでした。

やがて私はもつとくいじめぬきたい気持ち

に駆られてとうく我慢が出来なくなりました。ふみつけたり、抑えつけたりしているだけではすまなくなりました。私は自分にとつては最も汚い、木原に云わせると最高の女王の神酒をのませてしまったのです。

麻

生

保

チェッコの大作作曲家、ドヴァルザーク（新世界交響曲で有名な）のオペラ「鬼とガーチャ」は殆んどチェッコ以外の国では上演されないものらしく、私も見た事も聞いた事もない。山根銀二著、音楽の旅（岩波書店発行）の二百十二頁にこの筋が掲載されているので全文を写して置く。一寸面白い筋で、チェッコの民話からとられたものらしい。

「わがまま娘ガーチャは、団欒する村人から相手にされない。ガーチャは誰も遊んでくれないなら鬼とでも踊ってやるとわめいていると、そこへ忽然と鬼のマルプエルが現れる。地獄の王チルフアーの命令で、侯爵夫人が管

理人のどちらかを、やがて地獄へ連れて行かなければならぬ事を伝えに来たのである。ガーチャは鬼のマルプエルと仲良しになり、一緒に踊り狂い、意気投合の結果、マルプエルにおんぶして地獄へ行く事となる。地獄でもガーチャはマルプエルの背中から降りようとしないで、馬のように乗り廻してハシヤいである。羊飼いの青年イルカが心配してガーチャを探しに地獄へ来る。それでもガーチャは聞かない。金の鎖を見せてガーチャを釣り、やっと鬼の背から降りさせて、イルカはガーチャを地獄から連れ戻す。鬼はイルカに恩返しに、管理人のところへ現れて地獄へ連れて行くと威すところを救わせようとする。イル

カは命の恩人として、管理人からたんまりお礼を貰う。侯爵夫人は、管理人がイルカに助けられた話を聞いて、自分も善行を積み救われようと決心する。農奴を解放し、イルカに地獄行きが助けてもらえたら、お礼を沢山すると約束する。イルカはガーチャを呼んでくる。鬼のマルプエルが侯爵夫人を掴みに現われると、イルカは「ガーチャが居るぞ」と大声で叫ぶ。鬼は、又、ガーチャに捕ったら大変だと、ガーチャの姿を見るなりあわて、逃げ出してしまふ。侯爵夫人は約束通りイルカを大臣にとりたて、ガーチャに望み通りの家を建て、やり、人民には大宴会を開いて御馳走する。」

以上が筋であるが、何分にも全く知らない作品であり、レコードも恐らくは無いと思われる。しかし何はともあれ、このわがまま娘ガーチャの性格は一寸面白いし、演出方法によつては、特にガーチャが鬼のマルプエルを

馬にして乗り廻すくんだり等、マゾヒスト達にとつては一寸いける代物ではなからうか。

ボリス・エーデル著 タカクラタロー訳

猛獣使いの回想 (理論社発行)

ソヴィエトの有名な女猛獣使いの自伝。羊

頭狗肉とも思わないけれども、マゾヒストを堪能させてくれない。なぜなら、彼女の信条として鞭を最少限に節約して、あくまで愛情のこもった愛撫を以て動物に芸を教えるのである。彼女はこの本の中で、叱責、激しい鞭による仕込みを有害無益なる方法として攻撃

して居る。(誰ですか、なんだつまらないな——と言ったのは) 然しながら、口絵による彼女の乗馬服姿の写真はマアマア悪くないでしょう。



読者提供のアイデア

(本誌の口絵として)

高 井 好 晴

(一)「罪と罰」

△罪と罰は世の定め、旦那様へのサービスを怠った時は、どんな罰がよいでしょう▽

①見出し 朝寝過ぎた時は——これなら明朝は大丈夫。

(図) 鶏小屋の中の柱につなぎ、頭をずっと下げて杭に結ぶ側にニワトリ数羽。

②見出し 靴を磨くのを忘れたら——それは大変、お帰り次第、早速

(図) 主人は上り框に腰をかけ、その前に跪

いて口にブラシをくわえ磨いている所。勿論後手の嚴重な縛り。

③見出し 弁当に箸を入れるのを忘れたら——晩御飯は口だけで喰べなさい。

(図) 食膳の前、自分は跪き上からぶら下げたパンと瓶から口で喰べる。パン食い競走と同じ要領。勿論後手しぼり。

④見出し 俄か雨に傘を持って行くのを忘れたら——こんな罰は如何。

(図) 建物の直ぐ近くの茂みに細長い台を置き、仰向けに緊縛、建物のトユを引いて顔の

上へ水が落ちる様にし、容赦なく水が顔に当たっている所。

⑤見出し 御飯を炊くのを忘れたら——御飯の炊けるまで、百面相でも御覧に入れて旦那様をなぐさめましょう。

(図) ヘツツイの側の柱に緊縛、煙を顔の所へ導いて松葉いぶしとする。

(二)「S M運動会の巻」

Sの御主人、Mの奥様と、揃って仲のよい

夫婦たちが数組、運動会を開きました。

①見出し 球拾い、規定の数だけ拾って箱へ入れたら勝です。

(図) 女性三人、いずれも全裸、後手に紐(赤色)で緊縛、膝を揃えて縛り、足首は少し開くようにする。座敷の中央に三つの箱を置き、パチンコ球をまいて、それぞれの箱へ口で拾って入れる所。

②見出し 静止競技——涙が落ちたら負けです。

(図) 台を三つ並べて置き、それぞれに前の女性を一人づつ仰向けに置く、頭髪と足首を結び後で引き逆にそらせる。顔の真下に洗面器へ水を入れたのを置き、涙が落ちたらよく解るようにする。台に身体を固く縛る。

③見出し 舞踊——足の下の電熱がはじめの合図です。腰の鈴とお尻のカスタネット(?)それに頭上の鎖の伴奏、誰が一番悲しい曲をかなでるでしょう。

(図) 前と同様の女性を金属の台の上にのせ

〔レポート〕

妻を立木にしぼる

米兵との間にヤキモチ

(讀売新聞、23年2月11日付京浜版)

十日午後十時十五分ごろ、横須賀市西逸見二の山中で女の悲鳴が聞えるという知らせが横須賀署にあり、同署パトロールカーが現場に急行捜査したところ、同町二の八四駐留軍要員帰山辰江(五三)の妻ことえさん(四四)が顔を血だらけにしてクヌギの木にしぼりつけられていた。

調べによると同日午後四時ごろ辰江の友

人、米海兵隊員二名が自宅に遊びに来て一緒に酒を飲んだが、一人が酔いつぶれたので、ことえさんがかいほうしたところ辰江がやさもちをやいて暴行したものとわかった。

ことえさんは顔面に三週間の負傷。同署では辰江を傷害容疑で身柄在宅のまゝ調べている。

て、台の下に電熱器を置く。足は短く鎖でつなく。両手を上げさせ少し長い鎖でつなぎ、その中央が頭上から吊られた鉄の輪を通している。(一方を下げれば片方を上げねばならぬ)胸、腰、尻等に、各所に鈴等の鳴物をつける。電熱が熱くなれば足踏みをせざるを得ない。

④見出し 頑張り競走——真先に悲鳴をあげては御主人の名折れ、みんなしっかり。

(図) 横に渡した棒に連縛、それぞれの背中に灸をすえる。

⑤見出し みのむし競走——座敷のこちらが決勝点です。フリーフレー

(図) 前と同様の女性、後手、足首、膝等を緊縛、座敷の中央に机を横に並べて、今みんな越えてやろうと苦戦している所。

⑥見出し 自由型——抽籤で当たった奥様に悲鳴を最初に上げさせたら勝です。やり方自由、但し傷をつければ失格です。

(図) 手前に横に寝させて杭につないだ女性にくすぐり責め、向う松葉いぶし、一人は鞭打ち等。

画はいずれも迫真の方がよろしいが、但しあくまでも競技らしく、明るさをモットーとして残虐的なものはさける。大体は写真でも出来ると思いますが、但し美人を選ばないと気分がこわれます。

『和装教室』

—春の巻・振袖幻想篇—

白 金 紅 次
瀧 れ い 子 ・ 画

『あなたのたつてのきつい御下命に従い、持参しました、如何取計らいましたら宜しゅう御座いましょう?』

『馬鹿に改まったね——それじゃ?こちらが殿様に奉られたようだよ、何でもいふんだよ、あんなもんでありや』

『あとう、方々廻って訊いて歩いたんですの、だって今時、こんな——』

『だからさ、お見合写真なんで、一寸拝借したいんですけど——とでも云ってさ』

『馬鹿ねえ——一本芸者が気でも狂ったんじゃないかと云い触られますわよ』

『どうせ湯の中から生れて湯の中に育ったんだから、正気の沙汰に御無沙汰することは一ヶ月のうち、ちよいちよい、ありますわよ——って云い返えすもんだよ、そんな時は。』

『ずい分口上の長いこと、サア、問答はそれ位にして、重ねてこの品、如何取り計らいましょうか? モシ、こちらのお殿様!』

平和が蘇み返って、死ぬべくして命を全うし、潰れた軍需会社が専売公社のお先き走りじやないがピース何某の平和産業に見事鞍替神の悪戯か、工員上りの無学無粋の人間が不思議な縁で一躍課長級に昇進するに及んでは最早や悲しくも死別した女房殿には申訳けないが、過去の迷夢よ、一切合切、煙のように雲消して了えである。

——そこで、あの、ちよいと地位と身分に物申し、誠に自他共にお忙しい日常の一刻を割いて、たんまり息を抜かせて貰うべく斯くは花(何の花か判らないが)咲く湯源郷へ——いにしえのホーゼ懐しき故里へと旅立ち、否立ち寄った次第は次第である。

『まあ一息、つかせて呉れよ、原稿書きの三流文士だって、さあそのあと、どうする、どうするツと詰め寄せられたら死んで了うぜ』

『マア、ずるいお方、あの時あれ程、きつい御注進でしたでしょう? うなされて、おいッ今だ! 助けてやれッて大声を張り上げた事から、そもそも斯うなったんじゃないやありませんか。』

『それは正しくその通り、春は花咲く弥生の頃、いや、そうじやな

い、空は灰色、褪せた万目緑の曠原だ——と抜かしたっけ』

『処と背景はどうだっていいの、出て来る人物が、肝心だわよ』

『そうとも云えないよ、緑中紅一点とも云うからね、ガサガサした野暮ったい背景が、とってもまたいいんだ。』

『よくよくの強情張りね、その強情振りで一思いにキユウツと抱いて頂け——ませんか?』

『よせよ、まだ早い——』

この機に及んで由来、無学無粋の人間は気が至極楽なものである。

刹那に酔って刹那に歡樂を求める処までは甚だ尋常並みだが——ただ困るのは手の届かぬ夢の顛末とその快美なる再現なのである。

『じや着るわよ、お床の中であゝ可哀そうだと、お喚き遊ばした通り、やって見るわよ、おお、寒い』

『全部お召し替えかい。そりやまた、どうも……』

『だって、そのお嬢さん、お腰はサラサラしたメリンス見たいなものだったと仰言ったでしょう。忘れん坊ね』

『そう云えば、その上に巻くものはピンクの裾除けだったっけ?』

『お指図の通り、一通り揃えて参りましたの、お腰はデシン物で我慢して頂戴、フフフ馬鹿ねえ、女のお腰に借り物がありますか。裾除けもデシンのピンクで我慢して頂戴。』

『そこまで判っきり、この眼があいていなかったんだ。ただ、何んとなく赤い下着に淡い紅色がひらめいていたから、多分そうなるかも知れん』

『しっかりして頂戴、じや、そのお腰、紐付きかしら?』

『紐付きの腰巻は君には不要なんだよ。それでいゝじやないか、ちよいとはさんでおけば……』

幸か不幸か、この花の宴の教室に第三者が御侵入遊ばさないからいいようなものの、甚だ以て和服問答は次第が面倒で複雑である。夢よもう一度は少々その度合いがひど過ぎたようだ。

『どう? お腰と裾除けは、これでいゝとして——肌襦袢は白でいいでしょうか』

『まあ、いゝだろう』

『じや、その腰紐取って頂戴……』

『いやに下拵らえから慎重だね、こんな紐十何本も巻き付けたら、締め過ぎて行李見たいになっちゃうぜ。』

『黙って見ていらっしやい、お裾除けの上の長襦袢は、どんなだったか覚えていらっしやる?』

『さあ——判っきりしないわ、君のそれでいゝだろう』

『あなたの夢って、何処を見ていらっしやったの? この場合長襦袢が大切なんでしょ、赤の紋羽二重じや無地で野暮ったいし、一越縮緬じや勿体ないし——』

『それでいゝじやないか、赤い縮緬で充分だ』

『何んでも赤のお好きな方、はい、じや、これ着るわよ、一寸衣紋抜いて頂けませんかしら?』

『どうかい? で、また腰紐だろう、乳が凹っこんでお腹が泣くぜその腰紐はもう要らないだろう』

『女は裾が拡がらないように斯うして締めますの、フフフ』

手をさし伸ばせば女は勿論、そこらあたり手当り次第揃かめる四畳半に白足袋白襦袢、眼も覚めるような緋の下着で泳いだ芸妓駒子の艶麗極まりない仇姿が一言交わして裾除けを巻き、云い返しては紅無地上等縮緬の長襦袢をはふった一駒は川端康成作『雪国』の男、島村でなくとも春眠曉を覚えぬの夢を追うた本篇無才の野郎の心を動かすに——否無類の興奮を誘うに充分であった。

『さあ最後はお望みのお振袖、どう? 想い出すでしょう? 小紋模様と伺ったから、新柄襦子縮緬よ、この桜の花びらの散らし、吹雪のようで綺麗でしょ』

『成る程、よく借りられたネ、袖も少し長いや』

『アラ、袖丈は三尺あるわよ、』
『やっと思ひ出した、胴裏はピンクで、と裾廻しが黄色と行きや、ズバリだ』

『そう仰言つたじやありませんか、首の座についてお裾が捲くれた時は黄色だった——と』
さて愈々これからが大変である——。並大抵で運ばない道楽の道を独り良がりひた向きに馴染みとは申せ、一人の女性を相手として、恐怖に満ちた灰色の世界に哀しくも散つた——であらう、その場面を処もあらうに湯煙り昇る宿屋の一角、この部屋で——さてさて誠に心の疲れる御念の入ったお芝居を——御苦労様なことである

『さあ、ぼんやりしてないで、あとは帯だけ残つたわ、この伊達巻はどうせ見せないから、これでいゝとして、どう？ この帯、素晴らしいでいいよ、女将さんの娘さんのを借りて来たのよ、柄は緞子の唐花模様、ちよいと、何処を見てるのよ？ 裾の方はあとでゆつくり御覧遊ばせ、その帯揚げ取って頂戴、帯の結び方が大変なのよ、結べるかしら？ やつて見るわよ、何んでも背中に背揚げちまえばいゝんでしょ』

『そのややこしい帯は何んと云つてた？』
『ええと、立矢に似てるから、そうそう、おたて』とか云つてたわ、おかしな名前ねえ』
『とうとう、本式になつちやつたぞ、お可哀いそうに、お座敷着は当分の間おあずけだ』
『それとは別問題、帯締めは花嫁さんみたいに羽二重の白丸柄が似合んでしょ？ キュウツと締めて、と、さあ——出来ました。お苦しい、胸が痛い位』とニンマリ笑う。



ポツンと床の間の一角に置かれた朱塗りの鏡台が部屋に似合わず草臥れて霞んでいるから、花も恥じらう妖艶極まりない振袖姿は、一方的に男の眼底に集中して馬子にも衣裳とはよく云ったもの——女ならではの写し出された最高の生ける人形と斯くは相成って眼前に現われたのである。

『一寸こゝらで、サイダーでも飲もうじやないか。息が詰まっちゃったよ』

『そう、案外弱虫なのね、これからがあなたのいや、お殿様の天下じやありませんか、サアお可哀そうな処を始めましょうよ、しっかり御覧になった夢を想い出して頂戴！』

『まあ待てよ、じやぼつぼつ取りかかるかな、何んでも万目録の涯しない平原だったと思ひ給え、僕を含めた数百人の土民が何を喋っているかあたりは騒然として黒々と蠢めいている。』

突如！へあッ来た——来たッ日僑婦人到来了！わあーいわあーいの中には早くも好奇心にかられて固唾をのんでいる奴もいる。顔も肌も真黒く薄汚れた土民達は次第に近づく古びたガタガタのトラックを今か今かと見守っている——うちにバサアーと降りかゝる砂煙と共に二台のトラックが着いたのだ。

観衆は再びわあーと周囲を取り巻くように集って来る、先行のトラックから勢よく飛び降りた青い色の制服に身をかためた警官とも保安軍ともつかぬ連中は「コラッ、近寄っちゃいかんッ」と高い声でとなり乍ら群衆を制止、追払らい始めた。

そして今一台のトラックにバックを命じ所定の位置に停ると、後ろに廻って後蓋を開け、板切れを添えて「降りろッ」と命じたらしい……。見ると裸のトラックの上に長い間蹲踞^{うすくま}って窮屈な思いをし、しびれでも切らしたもののか、一人一人起ち上って、力なく降り始めたのが、何んと若い女ばかりだ！

『何人でしたの？』

『さあ、何しろ夢の中の事だから、いちいち勘定する訳にも行かんが、七、八人位かね、その中の一人が君だッ』

『あら嫌やだ。あたし、こんなにピンピンしてるわよ』

『まあ逆らうなよ、で、みんな思い思いの振袖を着て——中には高島田に結って裾をからげた女もいたが、あれは君の仲間じやないか？ どう見てもその筋のきれどこナンバーワン級だったね』

『それから？』

『それから——と、その前に一つ大事な事を忘れてた。その気の毒な女の人達は銘々細引のようなもので念入りに後手にくぐられ、強制的にトラックから降ろされた後、頭数^{ひたかず}を点呼、そして一人一人前の方に敷かれてアソベラの方へ曳かれて行って、横に一行にならばされて座らされたんだが、そのトッパがやっぱり君なんだよ。』

『毎度御最^ご願にあずかり有難う存じます』

『でね——、君はその時、一寸若作りの髪を束ねて造花の飾りなど挿していたけど、ひどく髪が乱れて哀愁に満ちた白い項を垂れて縄尻を取られ、なかばどやされ乍ら、よろめいて薙の上へ坐ったんだが、君を曳いて行った人相の悪い兵士は「覚悟シテイマスカ？」って日本語で云った筈だが——どうだった？』

『それは、あなたじやありません？人相が余りよくないから——フフ』

『どうも今の俺れじやなさそうだ、別の僕かも知れん』

『じや、両手を後ろに廻わすわよ、細引でくくって頂戴！ どうせ土民のあなたに殺るされるんだから、ひどく思い切り縛って頂戴、さあ、早く、この縄で——』

夢が現実になつて観念の座についた駒子はくるりと後向きになり、弱やかな両腕を後ろに廻わして黒髪を垂れる。

『君をくくるのは日本式にしよう、お乳のどこ、痛くはないかい？ この振袖、高帯も案外邪魔になるわ、こうなると——。二巻き位、

胸に掛けてと、髪はこの画のようにバラバラにするぜ、帯揚げは一
寸垂らしておこう、裾は、これは先きでどうにでもなるから、この
ままで——と、ようし、大体出来た、いい姿だ、こちらを向いて御
覧／＼ つまりあの夢の中の君は斯うなんだよ。苦しい？せつない？
どう？」

『……』
『さて、これからが処刑なんだが、今度は君がどん尻なんだよ、向
うに板囲いの柱が見えるだろう。あそこへ行つて一人一人射殺され
る、君のような美しい和服姿の女が柱に、いわえられて耳をつん裂
く銃声と同時に白煙を透してグウーンと身体をそらしたと思うと帯
の処から二つに屈曲、強直した白足袋がやがてグンナリと力が抜け
て、ズ……ッ……と柱に添うて身体が倒れ始める』

『いいから、早く処刑して……』

『そう簡単には執行出来ないよ、青い制服の兵士達は今の今まで生
きていた美しい着物姿の無惨に横わった死骸を足を持ちたり胴体の
ところを抱えたりして片付けている。例の高島田の姐さんは、君よ
り一足先きに射殺されて柱の横に倒れたが、豪華な振袖の裾が直一
文字にひらいて朱無地の長襦袢が股のあたりで捲くれ、白い脛に真
紅のお腰がまつわりついて、何んとも云えないような哀れさを漂わ
せていた。群集はこのような情景を一人一人の日本婦人について倒
れるまで見守った訳なんだが——さて、

いよいよ最後の八人目が君の番に廻つて来た。美しい振袖姿の日
本娘は君を最後として永久に眼前から消え去るのだ。すると突然、
急に僕の周囲にいた土民の群れがバラバラッと走り出した。それこ
そ死に物狂いに駆け出して柱の方へ行く、僕も土民の一人だから馳
け出そうとしたが、どうしても思うように走れない。やっこの思い
で柱の処に着くと先程、青い制服の兵士が片付けた七人の女の死骸
の廻わりを、何やら訳の判らぬ言葉でわめきちらして口論し合つて

いる。或る者は手の指を五本高く挙げたり或る土民は両手の指を突
きつけて相手を屈服させようとしたりして……。すると群集の中か
ら一人の男が飛び出して二言、三言叫んだかと思うと、ワアッ——
と連中、着物の死骸に取りついて、てんでに先を競つて着物を脱が
せ始めた。

彼等は優美なるきものに美こそ感ずるが、脱がせ方は全然知らな
いのだ。長い帯がやっこの事で解かされた。紅縮緬の押箔小桜模様
の浮出しの帯揚げ一本を持って汗を拭き拭き脱け出す奴もあるが白
綸子葉玉模様の長い振袖は四五人で奪い合つて収まりがつかない。
美しい令嬢が着ていた錦紗トキ色地の長襦袢はせり合つたはずみに
片袖がちぎれて了つた。中でも一番悲惨だったのは、皆が皆締めて
いた赤いお腰の類で、何に使うのか女の死体から脱すとパツと抜け
て、そのまま頭に乗つけて帰える奴があるかと思うと、丁寧にたた
んで薄汚れた服の内に蔵つてケロリと澄ます奴もいた。不思議な事
に白足袋だけが、ところどころ残つていたのは足袋はだしのまゝ曳
かれて来たため汚れた精かも知れない。

着物を剥がれ白足袋をつけたまゝ冷たくなった肉体の描写は物語
るに忍びないから想像してくれ給え。』

『いゝ、の八人目の女の女になるわよ、早くあたしを曳き立てて頂
戴／＼』

『じゃ、いよいよ最後の一人を処刑する事にするッ、起てッ』
『ハイッ』

で、ここで君はアンペラの控庭の上で右の膝から起ち始めるんだ
が、振袖の裾が重いから裾前が割れ赤い長襦袢に裾除けからお腰の
一部をのぞかせて、それから左足を立てる。その際、身体はうつ向
き加減にして、そう、そうして。もう少し右足を外向きに、そうだ、
この刑は判きり夢で見た通りだ。静かに起つ、背中をこずかれて君
は力なく柱の方向に向つて足袋はだしのまゝ、振袖を右に左に小刻

みにふるわせ乍ら曳かれて行く。大勢の観衆はそれこそ最後の一人として美しい君の姿を固唾をのんで見守っているに違いない。僅か百米足らずの泥道だが、君に取っては生きて再び帰えられぬ怪なのである。もう群集の中から二人、三人と君のきものをねらって先を競うべく、せり合い始めた——その情景が手に取るように見える。

サアこれが怖ろしい柱だよ。既に七人の君の仲間がいわえつけられ身に数弾の弾丸を受けて敢無く散った処だ。

「保安軍の命によって処刑するッ、用意！」

——で君はくると柱に背を向けてびったり柱に身体をつけ、縄

と前に揃えられる。

やがて合図に従って君を射殺する兵士達は君の前五十米の先に勢揃いをした。指揮官様の男が静かに君に近寄って、射殺の準備全く整った事を確認するだろう、そして——

「何か云い残すことがあるか？ あつたら伝えて置こう」

と冷ややかに君の耳元で喋るに違いない。

「ハイッ、何も云い残すことは御座いません。駒子は日本女性として、喜んでお国のために死んで参ります。駒子は、駒子は……」

——と君が云い終らないうちに、君の口元へは顔の半分を覆う位

尻を十字の柱にくくりつけられると同時に今一つの縄で胸のところを二巻き三巻きギユウツと縛り上げられる。日本女性としての最期を恥ずかしめないためだろう——君の裾前は青い兵士の一人の手で下からお腰、裾除け、長襦袢、総模様の振袖と順序よく重ねられ、白足袋の両足先きはきちん



な白い布切れが立ち処に巻かれ、君の声は永久に封じ込められて了うのだ。

『僕だよ、笹本だよ駒ちゃんも惨じめな姿になったね、一体どうしたの？ 振袖のまゝ猿轡をかまされ十字の柱にいわえられて。ウー、君の声はよく判らない！ この白い猿轡を脱して上げようか』
『あっ笹本さん、逢いたかったわ。どれ程お待ちしたことが、でも、あたし、とうとう保安軍に捕えられたのよ、そして日本女性の最期だから、と云ってお振袖に胸高の帯を要求され足袋はだしのまゝ操さん、美継ちゃん、それに大和家のはん子姐さんと近所のお屋敷の娘さん、それはそれは美しい日本娘ばかり四人総勢八人、その場で一人一人後手にくくられ銃剣を突き付けられてトラックに乗せられたのよ。そしてこんなに大勢の男の人達の前で処刑柱の前に立たたされ、今の今まで口惜しそうに眼くばせしていた、はん子姐さんッたら、御覧なさい、あれあのようにお腰まで剥ぎ取られて、高島田の髪も半分泥に埋れて可哀いそうだわ。惨酷だわ、どうして斯んな目に逢わなければならぬでしょうねえ。あっ、青い服の保安軍の兵士がまたやって来る。色々と生前は可愛がって頂き、本洞に有難う御座いました。駒子は射殺されてもあなたの愛情は忘れは致しません。では永遠にお別れしてよ。お達者でね、さようなら』
『駒ちゃんッ、駒ちゃん、君の命を奪う弾は何処を射抜くのだ、君のこゝかい？ こゝかい？』

『両方のお乳と、帯の上、そして、お腹なのよ、あっ苦しい。せつないわ』

『コラッ、何をぐずぐず云い交わしてるんだ。八人目の最後の日本婦人だ。その男はどけッひっ込んでろ、バタバタしたんだらう？ 折角の着附がすっかり乱れとる。おいッ、女ッ。射殺が終わったらお前の着ているきものは、その赤い腰巻と云う物から帯、襦袢に至るまで一切合切剥ぎ取って土民達にくれてやるのだッ、判ったな、サ

ア時間も来た。兵士達は弾を装填したぞッ、じっと、そのまゝ身体を動かさずに。構え！ 銃！、目標ッ前方の女ッ、五十、射てッ！

パアーン白煙が立ち籠める、残念乍ら、哀しくも弾は命中したのだよ。

『さよう、なら、皆さーん、さよう、な、ら』

『そこで、身体を、そう、そう、ぐうんとそらし乍らお腹から下が折れるように、まだ、まだ、顔を右横に倒し乍ら、ひざを割ってそうそう、柱に添うて、静かに、崩れるように。この画のようにして——。そのまゝ地面の方へ』

『これでいゝかしら、嫌やよ、そんな処ばかり見ちゃ、お好きねえ、御注文通りに裾が括がらないのよ、じゃ、斯うしたら？ あいう、後手に柱にいわえられた縄尻は、あたしの重みで自然と切れるんでは、だから、あたしのお腹を前の方へ出すようにして、この足を後ろに引くわ、長襦袢が、うんと出るでしょう。ここで身体を捻じって見ましようか。あ、痛いッ、もう一本縛られた後手の処が、とっても痛いわ。ふくら脛が見えたら、いゝんでしょ。お腰をからみつかせて——白足袋はこの位が一番綺麗でしょ？ もう少し捲かれた方が実感があるの？ じゃ股に弾が当たったことにして左脚を後ろにひらくようにして見ようかしら』

『縛られた処刑女がよく喋るねえ』

『だってエ、あなたが御覧になった夢の中の女性ですもの、磔でも打首でも和服でよろしかったら、いつでもお望みのようになりますわ。あらッ御免なさい。殺される途中で、お邪魔立てしてすって。』
『ここらで一枚写真を撮って置こうか、どうも青い制服の保安隊は惨酷のようで間が抜けてるね、間が抜けてても鉄砲玉が当たると死ぬんだから、こゝからもう一ぺんやり直しするか、いいね？ パパーンと射たれる、お乳と帯の上に二発、それからお腹と股のところ

一発宛、君の振袖を通して射抜いて了った。そう、思い切って両脚をひらくようにして、ストップ！ 動かないで、そのまゝ、そのまゝ、ハイ一枚終り。さあ、それから下に崩れるように、そうそう、ドスンと倒れる。冷たい地面に横わって君の身体はもう絶対に動かないのだ。駒ちゃん！ とうとう射殺されたんだね、可哀いそうに随分助けてやり度かった！ 保安軍に拉致されたと聞いてから方々どれ位探したか判らない。死出の華向け衣裳に振袖を着て、こんな惨酷に両手を後手に縛られて——、さぞ、口惜しくて情けなかっただろうね」

「コラッ、どいた、どいたッ。最後の日本女だッ、きものを剥ぐ！ 裸にするッ、穴に埋める、わあーい、取り掛かれッ」

「一寸、待って呉れ！ そんな、そんな残酷な事が出来るかッ、そう押さずに、待って呉れッ」

「ヤカマシイワイッ、女の、きもの、要る！ それ皆欲しい！ この男ッつまみ出せッ、わあッ——」

みるみるうちに駒ちゃんのおたて帯から解かれて行く長い帯を奪い取った男は、得々として擱んだ両手を高く揚げて出て来た。悪いことに駒ちゃんのお手は細引で嚴重に後手に縛ってあるから、その縄を解かない限り振袖や長襦袢は剥ぎ取れないのだけだ。

「それッ、この美しい着物、三人で分ける、いゝか、次！ そらッ赤い、も一枚、着物、出て来た。よしッ、その二人で、分ける。次

！ 薄赤い布、紐ついてないアレ、まだ、ある、今度は真赤いやつ何？ 日本女のコシマキ？ アハッハッハッ、うん、綺麗！ 綺麗

！ 長い紐、幾らでも、ある。このアシ袋、要る人、あるか？ 野郎共ッ、みんな、奪い取ったか？ それッ、引揚げろッ」

「サーさん、あたしを裸のまゝ縛り上げては、恥かしいからお腰だけはつけさせてね、穴の中へ放り込んで頂戴！ お願い」

「ようしッ夢には出て来なかったが、きつく縛り上げてと、おいこ

らしよつと穴の中へ、ドンと蹴込まれて了ったよ」

「これでお終いなんでしょう？ 御苦労さま、お蔭でとうとう裸になっちゃったわ。でも随分、あなただったら、あたしの為にかばったわねえ。途中で初めのお嬢さんと駒子とがこんがらがったけど、あなたが本当のお殿様だったら振袖の替りに矢絣の腰元衣裳を着てあげるわよ、サアサア、商売商売！ お座敷着に着替えてと、そうよ、馬鹿ねえ、これは外行の腰のもの、フフフ……、今度は駒子姐さんのお勤め用のお腰を嵌めるわ。だって、あなたが承知なさらないんですもの。夢のお嬢さんで散々こっぴどく縛られたんだから二度目は経験済みよ。アラ、もう？ お元氣ねえ、ホホホ……。」

春は斯くして静かにたそがれの、薄闇の中に一抹の紅を漂わせ、脂粉を残こして「夢」にうらみは数々あれど、以て生れた道楽稼業、安易に気軽に「きもの」と組んで、先ずは振袖妖艶ばなしの一席！

——お退屈さま。(この項終り)

【代理部だより】

○代理部分譲品目録の新しい分はまだ出来上っておりません。新しい分が出来上りましたら新刊誌上にてお知らせいたします。既に予約にて目録をお申込み下さっている方には出来次第お送りすることにします。○現在分譲中のものは、分譲打ち切りになりますと、以後絶対に入手出来ません故、今の中、多少に拘らずお申込下さるようお待ちいたします。○アルバム「美しき縛しめ」第二集、未製本三十二葉、僅少在庫、一揃送共三百十六円です。○時代物責絵巻、未製本八枚一組、若干在庫、一組送共百五十円。○現在企画中の「四馬孝画集」並に「北原純子画集」はまだ完成しておりませんが、出来次第新刊誌上にてお知らせいたします。



玉稿落穂集

誌上に載らなかつた

原稿のことども——

編集部

毎月、多少なりとも好評を頂いております

「玉稿落穂集」も、誌面の都合によって、二月号、三月号、四月号、と三回に亘って休載のやむなきに至りました事は、まことに残念でしたが、本月号より再び続けることに致しますから、どうぞ御愛読願います。

さて、今月は「あやま・いがきち」という方の『魅入られた女』という一篇から御紹介してみましよう。この作品は、冒頭から数枚に至る書き出しは、まことに巧妙といつていゝ書きぶりで、この式であとの方も進めて貰えれば、非常に秀れた文章になるのですが、惜しいことには、途中から、いわば、この作者のいよ／＼書きたいと思つている個所へ来てから、急に低調となつて、（良く云えば筆が走りすぎて）途端に公開禁止の場面に逢著

してしまいます。

以下、適当にそういつて個所は省略しながら、この文を掲げてみましょう。

『魅入られた女　あやま・いがきち

慣れてみると厭ではなかつた。収入も思つていたより多い。警戒心もやゝゆるむ。女将の言つたとおり客種もよかつた。

新しい流行の仕立下しのキモノを身につけると、やはり女である。娘ごころのように心が軽々と浮く。五つ六つは若くなつて見える。鏡の中の自分にオヤと思うこともあつた。

こゝで彷彿ようになった原因の苦しい家計もよくなつた。

心には懸けながら、六ヶ月の家賃が滞こおり、出てくれるかと責められた。

それとも……と言ひ寄る男は、同じ町で妾

の三人もあるボスで、町会議員の肩書に重ねて公安委員の職権を笠に悪どい仕事をしていると言う噂の主だつた。

生活苦の圧迫に、まゝよ……と思うものゝ、女関係の狼狽さが、毛虫に這われるような感覚で厭だつた。

母は千枝子の苦しみを見て見ぬふりで、すましている。心の底では涙にじませ、あきらめてゐるにちがいない。

亡夫そっくりの子供の寝顔に、千枝子の身はうずいた。しかし、迫る男の口車にうかつに乗つて、町の人々の噂にされたくない。

胸もとにいっぱい濃い毛が見えて、手の甲は獣じみた逞しい毛が生えている町会議員の男の事を思うと、むしずが走ると言うのか、どうしてもうなづけけない。

そんな時、「いろは」の女将が助けてくれたのだ。

たゞ彼女と同じ境遇の未亡人の友が、「いろは」に勤めていてというだけの縁故で、あつさり七千円を借してくれた。

毛むくじやらの男は言つたものだ。

「少しは計算もしてみるもんだ。パンパンだつて、え、上玉で二千元が相場なんだからなあ……へムムムへ……」

酒の気を借りての言葉と聞き流しながら、千枝子は憤怒でその身をふるわせていた。

それから考えると、七千円、彼女にとって

は大金である。

「あんたも、思い切って、偽いてみるといゝわ」

偽いて月々、返してくれゝばいゝと言う。

千枝子の心は動いた。

友もいる心安さに、千枝子は、勧められるまゝ「いろは」に通いはじめた。

もう——三月になる。

秋の涼風に女将の祝儀も出て、単衣の一枚も作ることができた。

子供がどうにかなるまでは、勤めたいと思つた。

千枝子は二十九である。

その客は馴染みだった。いつも中年男らしい身だしなみを崩していない。時には客を連れて来ることもあったが、一人が多い。

女将も一々挨拶に出て、大切にしている。

材木のブローカーだと聞いていた。

来れば必ず定ったように千枝子と呼ぶ。

同輩はそう思っているようだし、第一、女将がそう決め込んでいる。

「山さんは、上客なんだから……ね。お千枝さん、うまくやってね、お願いするわ」

頼まれてみると、厭とは言えないし、山村の席が彼女自身にも厭ではない。

払って帰ったことはないが、月末、まちがいない。

女将が山さんの払いを、いつも月末の予算に組んでいるのだ。

「いろは」に勤めてみれば、千枝子も、その思いになる。

ある夜、もう一人、千枝子に執心して通う客——彼は銀行支店次長だった——とぶつかった時、山さんは男をあげたのである。

二次会の支店次長がいさゝか悪酔いして、

「千枝子と呼べ。お千枝を連れて来い」

と、妙にからみ始めた。

困り果てた朋輩の一人が、千枝子を頼みに来た。

「待つてゐるんだろう。行ってやれよ。酒の上だからって、男に恥をかゝせちやあ、可哀想だよ」

「すみませんねえ。お楽しみのところを……」

朋輩が言った。

「そんな仲なら嬉しいんだがね。はゝゝゝ、俺じやあ、お気に召さないそうだよ」

「まあ／＼」

と、千枝子は本気で驚いて、山村に傾いている自分の思いを悟った。

「仰言つてゐる！」

と、朋輩は

「ねえ……」

千枝子にうなづいて、

「後で、お泊りでしよう？ ほゝゝ、ごゆっ

くり楽しんでいたゞくとして。ほんとに、五月蠅いんですよ。すみませんが、ほんの少々お千枝さんを貸してくださいな」

年輩の女はしやあゝと巧みに言った。

その夜泊った山村に、千枝子は拒むことが出来なかった。

夫に別れて六年、第二の初夜であつた。」

水商売に転落していった女のいきさつが、簡単に要領よくまとめられています。このあとに続いて、当然のように愛欲描写があるのですが、省略しておきます。田村泰次郎の新聞小説なんかには、第三者的立場から見ても、相当度胸のある描写を、堂々と各家庭へ配達される新聞の第一面に掲載していますが、なくもがな、の個所は深く削除の斧を入れてゆきましよう。

『しかしその後の山村は、淡々と振舞っている。一向に泊るといふような素振りも見せなかった。一夜の浮気かと、千枝子の方がいらゝ／＼していた。そうした或る日、

「どうも、ね。こゝじや、落着かないよ。お女将さんに話してみようか？」

「でも……あまり、勝手過ぎるようで……つらいわ」

「俺から言えば、まさか、お女将、苦い顔もすまい」

「そりやあ、そうだけど……」

煮え切らぬ千枝子に苦笑いしていた山村はふいと、凄味のある声で言った。

「別荘が、借りてあるんだぜ」

押しつけた言い方であった。

千枝子は山村に、外泊旅行を誘れたのである。

駅前には車が待っていた。

山村と千枝子の姿を見ると、合図もしないのにもう寄って来た。

小型のヒルマン五五五型、心地よかった。

運転手は山村の友人なのか、心安く話していた。

チャリと見た時、白盤に緑のナンバー・プレートは、営業車ではない。

温泉の方へ、ハンドルは廻されていた。

いよ／＼温泉宿の点在する近くに来ると、車は、赤松林の中を右に折れた。個人の別荘地帯である。

岩のあらわな溪流を巡った山裾に、小じんまりと整った洋風の戸が建っていた。

自然石の低い門を、車は入った。

「淋しい位、静かなんだ」

「ほんと、いゝ所ね……」

と、小娘のように、はずむ心の若やいだ声で、千枝子は答えた。答えながら、この家で過す三日間の幻想が、もう彼女の心を浮き浮きさせているのだった。

導れたのは奥深い洋間。窓の真紅のカアテン。壁に寄せたダブル・ベッドは、重いピンクのカアテンが垂れていた。思わずしらず千枝子は耳朶が熱くなった。

そっと、山村を見た。山村の意図が早く知りたいのだ。

山村は知らぬ振りで、中央の円卓にグラスを置いている。扉寄りの食器棚から、手慣れた様子でゆっくりと出しているのだ。美しい変型の酒瓶は、いづれ洋酒であろう。

「さ、二人限りだぜ。ゆっくりと、遊べるんだね、三日。いらっしやい」

千枝子は楽しさに笑った。山村に勧められて、乾杯した。「いろは」に勤めて、アルコールにも少しはなれている。山村とたゞ二人少しはくずれてもいゝし、その方を喜ぶ山村の性分も探り当てゝいる。何のこれしき——と、思ってもいた。

山村は勧めた。

「あまり、飲めないもの……」

と、甘えてみるのも、媚であり、また楽しい。

足がふんわりと宙に浮く感じは、抜けてゝもいるように快い。

「何と言う、お酒ですの？」

「恋の酒」

その名のとおりであろう。この気分、とろける——言葉のそのまゝ、胸が温む。

千枝子にはっこりうなずいた。

温泉旅館へ遊山に来た二人の男女の有様がよく描かれています。このあと、山村が水商売の千枝子が他にも男があるだろうと、嫉妬して、独占欲にかられる場面があります。可愛さ余って、千枝子をいじめる件り、は御想像にお任せするとして、次に移りましょう。

『……お前を苦しめてやるんだ』

叫ぶように、素早く、そして脅かすような太々しい声で、千枝子の耳許で言った。

どこにどうしてあったのか、彼は、よくなれた小指程の太さのロープを捌いている。

多分、ベッドのマットの下か、その辺りに秘かに準備してあったのだろう。

何のことか判らず、千枝子が呆気にとられている隙に、彼は千枝子の背にのしかゝって

いた。押えつけられては、胸が苦しい。ぐつと、双腕を捻じあげられて、背で強く締めあげられた。たわむれにしては度が過ぎている。あつと呻いたまゝ、

「やめて……痛い……あ、やめて……」

思わず上げた声にも、山村は動じない。

「ほんとに、厭。痛い。冗談は、ほどほどにして……やめて……」

怒りの声に、眉をけわしくしても、山村は千枝子に見えぬ彼女の背の上で、ニヤリと笑

っていた。

身悶える下あごに手を入れて、ぐいと反らせ、滑らかな白いのどへ、ロープを廻してかける。ロープは背に縛った手首をくぐらせるのだ。

「何、なさる……」

強く言い切った。

が、山村はせゝら笑って言った。

「さわぐなッ」

凄い、するどい、惨忍な声だった。

「あ！」

と、山村の仕草の真意を迷い、思い巡らせている時、千枝子の口に、布をゴリ／＼押し込まれてしまった。

「起きろッ」

無言で抗うと、ずいと、ロープを引かれた。のどが苦しく、どのように力を引くのか、腕のつけ根が捻られる痛さである。

訳が判らず、山村を眺めると、彼は眉一つ動かさないうで冷かに言った。

「おとなしくしてな。さもないと、お前もほんとの啞にするぜ」

ぞっとした。あの女も山村の手で啞にされたのだろうか。

「さ、歩けッ」

ロープの尾が、山村の右手で手操られた。

「歩かないのか、おいッ」

ピシリ、ロープが千枝子の尻でひびいた。

廊下の突当りに、大鏡があるのだ。

千枝子は、ぎよッと、立ちすくんだ。何とあさましい姿だろう。

「歩けッ」

と、ロープがおどった。

よろ／＼とよろけて、千枝子はおそろしい目を開いた。髪は乱れ、唇からはみ出ている布片、ロープに巻かれて捻れたまゝの乳房、薄い縞の桃色の長襦袢の前がはだけ、腰布も取られた……」

「ハッ」と恥しい。唇いっぱいこの布は、千枝子自身の腰布なのだ。

くた／＼とくず折れかゝると、ピーンとロープがしごかれる。

「ふゝゝゝふ。もっと面白い目を見せてやろう……楽しく遊ばせてやるぜ。上るんだよ、右の階段だ。おいッ、上れ。落花の舞をさせてやる……」

ぐい、ぐいとロープを引かれ、ピシッとロープを尻や腿へ打ちつけられて、千枝子は上らねばなるまい。

上った。怖しいのが先だ。

いゝ人と思つた山村が、今は全く鬼なのだ。一時間前は、彼女の肌を讚美し、彼女も甘えていたその山村が、千枝子に君臨する強権の鬼となっている。それも、何をさせられるのか、判らないではないか。

思うと二階が怖ろしい。

哀願の表情をこめて、千枝子は腰を折り曲げてみせた。手が自由であったなら、山村を拜んだであろう。

しかし、山村は、たゞ笑って立っている。

階段に膝を突いて、叩頭を重ねたがむだである。

「上りやあ、いゝんだよ」

ロープを短かく引かれると、後手の腕が痛い。

「むうッ……」

と呻いてよろけて立つと、山村が支えてくれた。そのまゝ崩れるように凭れ、身を悶え甘えてみたが、山村は平気だ。

むしろ、彼女の感触を楽しんでいる風で、

「止せよ」

と、一語。

そして、ロープがおどる。痛烈な肌をつツ走る感覚。

「殺すんじゃないやねえ。もっとも、お前の出方次第だがね。五、六日も遊べば、元のお前にしてやるさ。後で下手アごてると、あの女のおりだぜ。忘れるんじゃないよ。よく言っとくがね」

背が寒い。

もう力なく、千枝子は、一步一步、二階のホールに立った。……」

こゝで一寸付け加えておきますが、「おとなしくしてな、さもないと、お前もほんとの啞にするぜ」という会話があって、あの女も山村の手で啞にされたのだろうか、というところ。これは先に省略した個所で、玄関に迎えに出た女を示して、山村は千枝子に「あいづは啞にしてあるんだ、だから大丈夫なんだよ」という会話があり、こゝでは、その女のことを云っているのです。さて、愈々、千枝子は山村のために、無惨にも縄を掛けられて引き廻されます。然し、山村の趣向はそんなことだけではなかったのです。次をごらん下さい。

『……「あッ」』

と、不自由な口でおどろいた。開かれた扉の向うに、四人の男がそれ／＼の席に着いている。十畳はあろうか。長椅子と椅子ばかり、その外に何の調度もない。素足で判るのは、軟かいじゆうただけ。千枝子は蹲み込んでしまった。

「いよう、いらっしやい」

「山公、待たせやがった」

「ふうむ、いゝ女じゃねえか」

「当分、かわいがってやれるか」

口々に言う男は、一人残らず……平然としていた。

千枝子はくらく／＼とした。

「男の味は知っているんだからな。楽しみがあるよ。どうだ、思ったより上玉だろう？」
山村は誇らしげに言った……」

と、いう位合で、千枝子は山村を主とした嗜虐グループの哀れな犠牲とされます。二十数枚に亘る刻明な描写は、こゝに掲載する自由は持ちませんが、男五人に対して、啞にされた女を混えて女二人、といった取合せのプレイは、皆さまの空想され得る限りの空想を仿かされて、このあとの文章を綴られたら、丁度以下削除した文章に似合うだろう、ということだけを申し添えておきます。

尚、蛇足ですが、この山荘は、五楽荘、又は娛樂荘、一名を業楽荘と呼ぶのだ、ということが末尾の方に書かれています。総枚数三十数枚の中、二十数枚まで省略してしまいました為、隔靴搔痒の感を与えたこと、と思いますが、この引用文があまりにも傑作中の傑作だった故で、御容赦願います。

次に御紹介する文章は「私の体験告白記」とあって、題名も筆名も書いてありません。所は尼崎市、本名は伏せておいて、仮に山田周二とでもしておきましょう。

最初に「奇譚クラブの編集部の方へ」という便りがありますので、以下御紹介の文章を理解して頂くための参考に掲げてみます。

『読みずらかったでしようが、どうか御許しのほど、字もまちがいが多過ぎます。文は下手なのはわかっていますが、何故か私はこの事を書きたくて仕方が御座居ませんでした。これは本当に私の告白なのです。私は自分の体験した事を自分一人で思っているのが惜しい様な気がして、つい書いた様なわけです。私は気が短いので書き初めると、つい紙が無いと思っても買いにゆく間も面倒になり、こういう色々な紙に書き申訳ありません。』

筆者の本当の告白だそうですが、それは以下に紹介します文章によって読者の皆さまの御判断にまかせたいと思います。

『昭和二十年の五月頃でした。私は小学校四年生でした。その時、私は姫路の仁分野という村に住んで居ました。私の家は昔からの旧家でしたので、かなり大きな家でした。姫路地方は五月になっても、可成り寒い日がありました。その時分に、大阪から私の家と親戚に当る人が大阪も危いので疎開して来たのです。その時分は、もう疎開するには晩すぎるぐらいでしたが、とにかく私の家に落着きました。母子四人連れでした。父親は工場の事故で疎開する一月前に死んだのだそうです。母親と国雄という五年生の男の子、三年生になる長女の道子と一年生の美代子といった

四人です。私はこの人達とは初めての対面でしたが、すぐ仲好しになりました。私は一人息子なので、その頃は我儘一ぱいに育っていました。すぐ大将になって気まぐれに振舞っていました。その子達と遊んでいても、いつも頭から私がきめつけますので、よく口喧嘩をして口もきかなくなることでありました。そんな時は、私の顔を見てもつんと横を向いて他所で遊ぶ有様です。そうなる私に口惜しくて仕方ありません。自分の悪いことに気がつかず、私はその子供等を本当に憎みました。子供の頃は、喧嘩をしても、すぐ仲好しになるものですが、その当時から私は、こういうわけか執念深い人間だったんですね。

さて、私は一ツ年下の道子というその子供が好きでした。可愛い顔をして居ました。私は或る日、道子がよその子供と遊んでいるので私は道子に「道ちゃん、家へ行って僕と遊ぼう」と誘いました。すると道子は、「いや、うちはこの子等と遊んでんのんや、かまわん」と言っていてふりむきもしません。私は頭へカーッと血が上ってくるような気がして、手がぶる／＼とふるえました。家へ帰っても口惜しくてたまりません。夜もその日はろく／＼眠れない位でした。

その翌る日でした。学校から帰ってみると道子はまだ帰っていません。「よし、今日こ

そ道子め、どうするか今に見ろ」と思いながら家で待っていました。程なく道子は学校から帰って来ました。道子がカバンを置いて外へ出ようとした時です。「道ちゃん、さっき家の裏で誰か道ちゃんを待っていたぜ」と私は嘘をつきました。道子は、「そう？ 誰やろ」と呟きながら裏へ行きます。すかさず私は、「おかしいな、さっきまで其処にいたのに、そや、物置小屋かもしれんぜ」と言いました。私達はよく以前は物置小屋を遊び場所としていましたので、道子は何の気もなく物置小屋へ入りました。私は待っていたとばかり一緒に中へ入り、物置の戸をしめ、かけがねをはめてしまいました。道子は、あっという間に顔をびくつきしたように見ていました。

私は「おい、お前よくも僕と遊べへん言うたな、おぼえて居るやろう」と言うなり早く道子をそこへ押し倒して馬乗りになり、傍にあつた藁縄で両手を前で縛り初めました。その時になって道子は泣き初めました。私は平気です。何故かと言いますと、今日は家に誰もいませんし、大きな声を立てても物置からは外へ余り聞えない事は私がよく知っています。だから私は道子が泣き初めても平気で両手首を縛ってから、足をばた／＼させて居るので足も縛り初めました。足の方へ廻り縛ろうとすると、道子は足で私を蹴りました。これで私は余計に気が立ち、夢中で足を

縛り上げました。それでも、まだ大きな声で泣き叫びながら前で縛られた両手を上や下に振り足をイナゴのように、びよん／＼跳ねて暴れています。私はすぐに、これは口も縛らないと駄目だと思い、また藁縄で道子の泣き叫ぶ口へ無理に噛ましました。そうです。三巻か四巻ぐらい、ぐる／＼と口へまき付けました。すると道子は、「うわうわ」と変な声を出しながら、前で縛られた手で口にまきついた縄を取ろうとします。私はそうはさせじと手を下へ押えつけ、びよん／＼跳ねる足と一緒に縛りつけてしまいました。

これで道子は暴れられなくなりました。私はほつとした気持で一吋手を休めました。そうして道子を見ますと、涙をぼろ／＼こぼし「うわうわ」と変な声で泣いています。私の耳には道子のその声がまだ大きいので、私はぼろ布をさがし出して道子の口と鼻の上にかぶせて、その上から更に藁縄で丁度藁縄のツルに巻くように、口から鼻と眼の下まで、ぎっちり縛りました。今思っても、よくも三年生ぐらいの女の子に、あんな猿ぐつわをかませたものだと思います。だがその時の私は無我夢中でした。

縛り終って道子を見ると、もう殆ど声も出せません。かすかに「ううう」とうめいて居ました。そうして私は言いました。「お前が僕と遊ばんから、こう目い目に合うのだ。

わかるまで、そうして居る」私は、勝手なことを言つて、更に道子の手と足の間へ藁縄を通して柱へつなぎ、道子の身体の上へ藁をかぶせて外へ出てゆきました。

さて外へ出るには出たものの、氣になつて遊ぶ氣にもなりませんので、そつと物置小屋へ行き戸を少し開いてのぞきますと、道子の上にかぶした藁が、がさ／＼動いているだけで声は聞えません。……」

こゝで急に心配になつて、道子の手足の縄をほどいてやるのですが。この事が母親に知れて、その夜、夕食のあとで母親からひどく叱られることになります。そんなことから、道子とは益々口をきかなくなつたのですが、その中、終戦となり道子達一家は大阪へ帰つてゆきます。そして次に彼女が女を縛る機会に出会つたのが六年生の時です。

『……私が六年生になつた時、父の仕事の関係で、名古屋市港北の方へ引越しました。引越した当座は友達もなく家の前で一人で何にするともなく遊んでいました。一カ月程した時分、私の家の右隣の家の娘で年は私より五つ上でしたから、数え年十八才になる文子という女学生と仲よく話をするようになり、私は「文子姉さん」と呼んで学校の宿題を見て貰つたりオヤツを貰つたりして、本当の弟

のように可愛がつてもらいました。そのうち彼女も私の名前を「清次、清次」と呼びすてにする位になり、半年も経つた頃には、時折彼女の家で泊めて貰うこともありました。ですから学校から帰ると、すぐ彼女の二階の部屋へ行つて二人で相撲をとつて遊んだりしました。相撲ではいくら私が力一ぱい、かゝつていつても彼女にはかないません。彼女は、その時、身長五尺三寸五分からあり、体重はきゝませんでした。今思うとたしかに十六貫はあつたと思います。……』

話はまたこれから長々と続いているのですが、彼の経験したという「縛り」には関係しない事柄が多いので、一足とびに最後へ持つてゆきましょう。夏休みになつた或る日、彼は夏休みの宿題を見て貰うため、文子姉さんの部屋を訪れます。そこで彼は彼女を縛つてみたくなり、腰紐を持つて飛びかゝつてゆきますが、彼女の反撃にあつて、逆に後手に縛り上げられ、更に足も縛られてしまします。そして猿ぐつわまで噛まされて、腋の下を擦られる責苦に逢います。そして、その夜、彼は彼女の家に例の通り泊めて貰うのですが、その夜中、熟睡している彼女を縛り上げてしまふ、というのが、彼の第二の経験になるのです。こゝのところの描写も相当長いのですが、公開如何かと思ひますので省略して、最

後の方を摘出してみましょう。

『……私は「文子姉さん」と声を出してゆり起しましたが、本当によく眠っているの、私はしばらく彼女の寝顔を見て居ましたが、ふと私は、「そうだ、今日の仇をとつてやる。」と思ひ、彼女の帯やら腰紐を探し出してから、へまをせぬ様考えました。私は先ず彼女の足元に坐り込み、そつと片足を持ち上げ足首を揃えておいて、腰紐で二回まわして足首をゆるく、彼女が眼をさますと駄目だから、ゆるく縛りました。ゆるくといつても、彼女が足をいくら動かしても抜ける様なことは絶対ないと私は見て取りました。それから次は両手です。これが大変、私は彼女の頭の方に上つて居る手を下におろすのに苦心しました。何にも下に廻さず、そのまゝ頭の上で縛つた方がよいではないかと思ひになるでしようが、若し頭の上で縛ると、前にも書いたように彼女は力が私より、うんと強いので彼女が眼をさましたら、ちよつと手古ずると考えたのです。それで苦心して両手を後に廻したわけです。廻わしたといつても、両手を後に組合わせる事は出来ません。そんな事をすればすぐ眼がさめます。……』

『……眼をさました彼女は、一瞬びくつとした様でしたが、私だとわかれると、笑いながら「清公、やったなア」と言いながら、私をは

ね返えそうとしましたが、もうおそすぎました。……」

『……まだ縛っておきたかったけれど、あまりしつこくしては駄目だと思い、すばやく解き放ちました。彼女は猿ぐつわを自分で取りました。しばらく、ぐったりとしていましたが、やっと、笑いながら口をききました。』

「清公、とうとう仇をとったなア」と言いまして。私は彼女にこっぴどくやられると思つて居たのが、彼女が案外怒っていないし、笑っているのが意外な気持ちでしたが、私はどうも縛ってやったと、心の中で満足しました。それから後、私と彼女は益々大胆になり面白い事もあるのですが、この辺で一回切り

らせていただきます。』
 今月は二篇だけの御紹介しか出来ませんが、これ以上、読者通信の頁に喰い込むことも許されませんので、次回に譲ることにいたします。

映画速報欄

千葉 栄市

新東宝「真田十勇士総進軍」

木村重成の密使として紀州九度山の真田幸村の許へ派遣された菊乃（藤木ノ実）は途中、徳川方の侍達に捕われ後手に縛られ駕籠の中へ、然し、すぐ猿飛佐助の忍術によって救われるが、ラスト近く再び捕えられ、今度は白布の猿ぐつわまでされた上、後手の縄目の間に刀の鞘を入れられ鑑で乳房のあたりをギリギリ折檻される。八本号の口絵、楓月太郎氏提供のスタイルを御参照下さい。V

東映「大名ばやし」前篇

世の中の非道な男達に痛めつけられた女達を助け、女だけの城を

築こうとの信念に生きる当り矢お今（勝浦千浪）は矢場を鬼倉本陣のやくざ共に襲われ、お豊（谷鈴子）お春（円山栄子）の二人は豆しぼりの猿ぐつわをされ、押えつけられてしまう場面で前篇の終りお今は縛られぬが、後篇では縛られ鬼倉の屋敷へ監禁される。その他、吉野登洋子も縛られる由。

★四月号「口絵」訂正

四月号の口絵、楓月太郎提供、解説の「縛られた女優たち」四葉の中、左下の「夕立勘五郎」（花柳小菊）という説明は、編集部の手違いにより写真の挿入を誤りしたので、左記の通り訂正いたします。四月号の左下の写真は、

四、「喧嘩駕籠」（八千草薫）

ある大名の勝気な姫君（八千草

薫）は將軍家の仲人により強制的に決められた、まだ顔も知らぬ松平源太郎を嫌い故意に我儘一杯にふるまい、家中誰一人として逆う者としてないが、只一人新参の厩仲間、実は松平源太郎（大谷友衛門）だけは事々に姫をやりこめる。初め憎んでいた姫も次第に彼の男らしさに、いつしか愛慕の情を抱く

そして或る日、源太郎が初めて我が屋敷を訪れるという報に接し、気に入りの腰元を身代りに立て、自分は恋しい厩仲間を心を打ち明けようと広い庭を探すうち、植込みの蔭に待ち伏せていた浪人達に白布の猿ぐつわを噛まされて、かつき上げられる。宝塚映画。

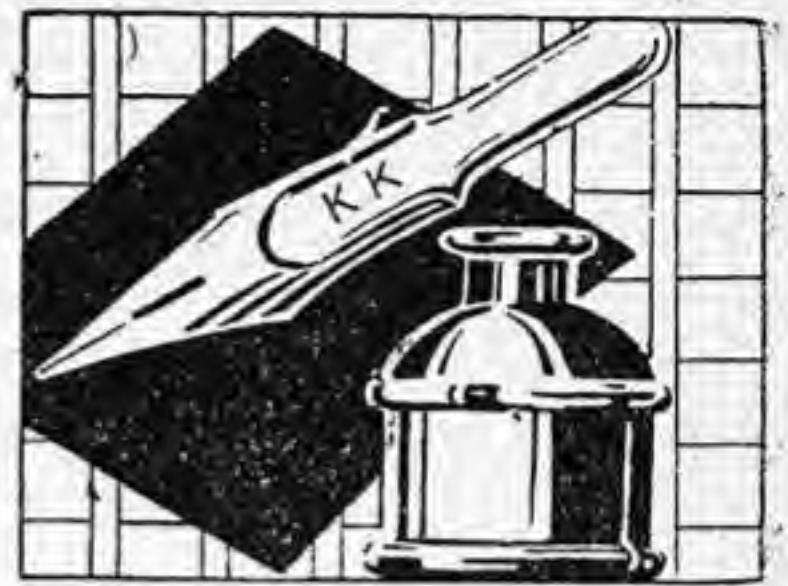
以上の通り訂正願います。編集不手際の点、読者並に提供者の方

六月号口絵解説

『振袖狂女』の吊し責め

楓月太郎、提供

徳川家康を討たんとして捕われの身となった宮城野由美子は、家の「女の身体にきくのだ」と云う言葉に、さつと場面は責場に変わり、後手高手小手のまゝ綱で宙吊りにされる。手首に喰い込む縄目、打たれて悶え、呻く姿、苦痛にゆがむ顔の表情。全く真に迫った映画のシーンとしては珍らしい本格的な責場面である。



【読者通信】

○ 昼行燈様、奇ク三月号を飛び上る様にして拝見しました。「雪ちゃん事件」の概略、一日も早く待ちこがれます。御住所、是非御報下さいませ。(西成区海道町九佐藤千春方 毛利宅一生)

○ 奇ク愛好読者の皆様、吹きまくる心なき世の嵐にめげず、敢然と私等の胸底に流れる血潮の動きに同調され、発行を継続される私等の愛誌奇クを機関誌として、各地各所に私等の同好の会を結成致しましょう。左記、御共鳴の方々、一応御文通をお願い致します。(一) 女装に興味をもたれる方、女装して縛られ又、責めを受けたい方、女装した人を責めてみたい方。(二)

奴隷プレイに興味を支配してみたいと思われ男女の方。(三) 男女何れの方でも責めやお仕置きプレイに興味をもちMを好みとされる方又、Sを望む方。(四) 其の他、右に類似のプレイを行う事に趣味のある方。(石川県能美郡根上町福島加沢天恩)

○ 三月号大変たのしく拝見しました。特に「続・潰滅の前夜」の登場を歓迎いたします。個々の点については、この所をもっとつとつとんで発展させてもらいたいとか、こんな刑罰、こんな能力試験をと、色々思う点もあります。しかし各人には夫々の好み、アイデアがあると思いますので、かえって色々の意見にあまりわずらわされすぎないで、土路氏自身のよきアイデアとその発展を待ちたいと思います。私自身は殺すとか、肉にするとか、肉体の変形は好みません。相当多数の人が期待しているのではないかと思われまして、土路氏の今後の活躍を念じております。それと関連して言いますが四馬氏の口絵、とてもよいと思いました。この頃ちよつと四馬氏が見られなくて寂しく思っていた所でしたから。実際には不可能の

様なものであつても、画として、そこに或るものがはつきりあらわれていれば、それでいいのではなないのでしようか。全く素人考えですけれど四馬氏にも大いに活躍していただきたいと思っています。ただ一方的な見方かも知れませんが、今月は先ず感じられた二つの作品について感想を述べさせていたいただきました。(東京 水木生)

○ 此処一年来、アクロバットに関する記事、写真等の掲載の要望が甚だ多い。多数の同好者のあることを喜んでいきます。東京では僅かにストリップ劇場でR・テンブルマリア・マリ。エミール山村の諸嬢が常時観賞出来るが、これも各々出演劇場が異なり、約二時間の公演中、僅か数分間の演技だけに物足りぬ感が深い。一時盛んであったストリップも殆んどが同じ趣向で変化に乏しく相当に腐れている。変化をつける上にも、きつとアクロバットの活用が望ましい。最近見たものでは、昨秋上映された天然色映画「肉体の魅惑」は、内容は凡そ題名と縁遠い魅力のないものだが、若山昌子のアクロと、もう一人(名前失念)のアクロは断然光っていた。近くは「女護ヶ島

珍騒動」にもアクロが入っている注目されるのは、往年の名手、岡本八重子の経営する「アクロバット研究所」であり、正式には「アメリカン・モダンバレエ研究所」という由であるが、東京芝金松橋にある。確か昨年、小説春秋八月号の色ページに記事として載り注目していた処、探偵実話十一月号週間アサヒ芸能二月二十四日号、雑誌少女三月号と何れもグラビアに依り、矢継早に報ぜられている。但し何れも肉体の未熟な少女を主体としているので、我々の憧れる官能的なイメージとは、かなり縁遠い写真ではある。この他一寸古いが探偵実話三月号には浅草のマリア・マリのグラビアが出ていたが、彼女は最近の舞台では下手な踊りの中に二、三の演技を見せる程度で、全能力を発揮していないのは、その豊満な肉体よりして全く惜しいものと思う。アクロに関する記事、小説等は非常に少く、本誌に掲載された辻村氏の「拷問に笑う女」は異色あるもので好評を博したものだと思えます。これと共に旧号の大阪の方で、本欄に少年時代に見たサーカス内部での皮鞭の下で行われる少女の訓練、九州氏のアクロバット通信等は短文

乍ら印象が深い。又、アクロバットと題する峯氏の素晴らしい迫力ある口絵も忘れ難い。特に九州氏の某紙で読まれたサーカス育ちのダンサーの手記の転載（適宜脚色して）は、アクロ技術の各名称と解説、これ等の写真、画、實在ダンスの手記、対談、サーカス内の訓練の絵物語等、題材は多く同時にサド、マゾ愛好の方々にも十分に満足し得るものと存じます。是非、御掲載を切望致します。

（T・U生）

○ 人体腹部加虐は潜在的な人間の原始的な本能、それも最も原始的な虐殺の欲望と直接つながるものと思われまゝ。これを日本の古典の中——例えば鎌倉以降の戦記、或は物語、江戸期の近松、京伝、乃至、馬琴に現われたる部分、支那古典中、水滸伝に出てくる部分更に東洋サジズムの影響を受けたりと見られるアナトオルフランスD・H・ロレンス等に見られる部号。最後に、今次大戦中に見られた邦人及び中国人の生々しき実記等、見聞のままをこのあと筆にして、貴誌の読者に呈したいと考えております。貴誌を通じてでも結構ですが、「藤山秀緒」氏と文通

の便を得たいと思ひますが如何でしょうか。猶、女体腹部加虐に関する資料、何なりとお教えの程御願ひします。（宮城 正木生）

○

女装マニアの意外に多いことによろなく嬉しいと思ひますが如何でしょうか。私もその一人です。「我が異常性の記」を発表されている南時夫様の御意見には全く同感です。私の場合は女性特有のふつくらとした乳房のふくらみを包むブラジャーとメンスバンド、それもズロース型、パンティ型ではなく、以前からあったゴムを紐で吊す式のものにひかれます。ブラジャーをつけ、その中にパットを入れて女性のふくらみを作り、メンスバンドで男性を意識しないような型にする、もう私は女性になったと身をくねらせ限りなき陶醉に浸るのです。それも萩千恵子嬢、中富綾子嬢、川辺砂登子嬢等や原美智子嬢、鷹野めぐみ嬢のブラジャーメンスバンドを着けられ、女装して縛られてみたい。そして目隠し猿ぐつわをされ、鞭打、吊責め、くすぐり責めなどの拷問を受けてみたいと思ひています。こんな男を責めてみたいと思われる方のお呼びかけをお待ちしています。小

生は三十四才、十五貫、五尺四寸内気です。大阪の森田二郎様、名古屋の酒井二三夫様、大阪の住田勝美様のお名前を知りました。一度お会いしたいと思ひています。（神戸 T・I生）

○

三月号、誠に有難く拝見しました。小生、昨年の十二月以降の奇クを都合により見ておりませんので本当に嬉しく存じました。今後共貴誌の上に有益な資料文献等が入り次第御送り申し上げます。又告白、体験も暇を見て書いて送らせて頂き度く思ひて居ります。三月号もなかなかの出来栄で、毎月継続発行をされる御努力、正に感服の至りと存じます。以後、益々充実したアブ文獻誌として愛読者に応えて頂き度くお願い致します。一月号、拝見しておりました。北原純子さんの「お灸責め」の口絵の掲載を主要目次広告で知りました。お灸責めマニアにとつては、毎月お灸に関する記事を沢山載せて頂きたいのですが、色々の好みの方もありまじょうし、そのはなかなかないものとの諦めではおりますもの、全国に居られるお灸マニアの方達の告白体験等や灸責めの挿絵や写真と共に拝

見出来ればと思ひておる次第です。殊に女性のマゾ的な立場から、お灸に関して興味をお持ちの方々の奇クへの告白体験談と共に御便りをお待ち致しております。小生は二十六才の一青年で、太り過ぎ痩せ過ぎを治してホルモンのお灸で美人を造る研究等ではよりよい効果を挙げております。特に研究のため、お灸に興味をお持ちの女性の方々の御便り鶴首申し上げます。（横浜市甲子局上 田近正次）

○

中谷冷一様、三月号の「捕われの令嬢」についての私見を讀ませ戴き、私が貴方と全く同様な感じを抱いておりましただけに、この上なく嬉しくなりました。私も私。私もかねてから女性の背明きフアスナーには、堪まらない愛着を覚えていたのです。貴方は背明きフアスナーの魅力として(1)(2)(3)(4)をあげておられますが、私もそれについて何もかもそのとおりだと思ひます。どこまでも同感のとばかりです。ただ私はワンピースに限らず、ワンピースの上衣でフアスナー背明きのものにも、同じような魅力を感じるのです。何故ならば、これはワンピースの場

合と違って、下まで明いてしまおうオープン・フラスナーを使いますので、着て締めあげたときの、おしやれな美しさにひきかえ、これを引き下して公開してしまおうと、明いた背中からは下につけたブラジャーやニッパ等の下着が丸見えになり、ウエストはダブダブになって、女性にとつてはどうも人に見られたくない羞しい恰好ですし、又これを着るときの苦労は、ワンピースのように金具を持ってただ上に引き上げるだけにはいかないものです。それにしろ決して容易ではないのに、下まで全開して別々にわかれてしまっているのですから、先ず下端の金具の左右をはめ込まねばなりません。上に引っぱり上げられるところまでにするのに独り自分でするとなるとちよつとやそつとの難事ではないからです。特に上衣のウエストの部分で、身体にピッタリしたドレスであれば、なお更の苦しみですから。「現金に手を出すな」というフランス映画だったと思います。が、ジャン・ギャバンがマガリ・ノエルの方の立つた後から、黒のワンピースのフラスナーを引き下して脱がせるシーンがありました。御覧になりましたか？。日本映画で

も「夜の河」の始めの辺りで小野道子が、やはりワンピースのフラスナーをかけて貰うのがありました。最近では、このフラスナー明きの服が流行なので、映画でもたびたび観られるようになり、そのたびに観て興を感じています。三月号の映画速報を拝見すると、松竹映画「この女に手を出すな」に興味あるシーンがあったらしいですが、私は見落してしまつて残念でなりません。何とかして見る機会を得たいものと願っています。毎日新聞（大阪）の本年一月三十一日附家庭欄のカットの画は、私の貴重な切抜きの一件になつていますが、若い女性がワンピースの背部フラスナーを締めている後姿の画です。どうか一度御覧になつて下さい。フラスナーについての御便り、もつと書きたいことがあります。中谷さん、どうか御便り下さい。（阿川準）

初めてお仲間入りさせて戴きますわ。二十三才の女性です。今度偶然、御誌を拝見して、男性のマゾの方の以外に多いのに驚きました。私は一人娘として両親に甘やかされて育ったせい、今では身長五尺四寸二分、体重十六貫もあり

四馬孝・傑作集

『美しき女体家畜飼育室』

（―潰滅の前夜―より）（詳細解説は本誌九月号、十月号にあり）

（大中判印画紙）焼付 八枚一組 八百円（送共）

ります。一人で風呂に入っている時など、自分の股の太さにくづく呆れることも御座居ます。尤も、スポーツは大抵やりませんが、就中、乗馬が一番好きです。今でも週二、三回遠乗りします。私のボーイフレンドは三人程ありますが、御誌にある様なマゾ的男性です。マゾの方の御便りをお待ちして居ります。

（東京 服部みどり）

三月号を読了していろいろな感慨にひたっています。今回は読者通信から纏めてみたいと思います。まず東一郎氏のお便りですが、氏の御努力を顧る時、重ねて感謝せずにはおれぬ気持です。次に増田進一氏のお便りですが、私の抱いているイメージを意図されたように、できれば誌上に同氏の画を發表して頂きたいと思ひます。一七

一頁のA氏は私のことを指しておられるのでしょうか。店名を度忘れしましたが、あの書名は奇く愛読者の足許につけ込んでかなりポルのです。奇く稀小価値からして当然でしょうが、それにならつて「縛り」のある他の古雑誌にも高い価格をつけているのはナンセンスです。私は二十七年四月号以前のもののしか求めませんでした。処でA氏や愛媛のT・K氏が男性サドの意見の減少を嘆いておられますがマゾヒスティンの出現が少いことはともかく、サディストはあくまで奇くのパックボーンであると信じています。そこで奈良の大谷喜一郎氏の御意見が注目されるのですが愛読者諸兄姉は、いかがお考えでしょうか。益田愛子さんの呼びかけとその応答を私は注目して来ましたが、三月号において他の方の叱責を覚悟の上で京都

のY氏に声援を送りたいと思いましたが。昼行燈氏の雪ちゃん事件はほゞえまじいお便りでした。巻頭口絵ではアメリカン・フォトと栗原伸氏の「浴槽の新妻」のみ抜群でした。続いては若水美子のアツプと四馬氏の力作でした。記事については「花と朔風」は次号待ちと云うところ、「あぶり責め奇聞」の唯一の短所は元三よりお辰が主になつたところでありませんか。サディストの物足りなさがあるようです。「燃ゆる男装」続・潰滅の前夜」は楽しい記事でした。岸本さん、日下さんは次号を待たれます。嵯峨美也子さん、東一郎氏の今後一層の御活躍を祈ります。只今、四月号を拝受致しました。毎度のことながら奇クだけは封筒から取り出すと最後の二頁を読み裏表紙のカットを見るまで、他の仕事の手につかないのです。途中でページを伏せることができないので、いつも困っています。特に四月号は素晴らしい記事が満載で感嘆措く能わざる処です。巻頭の口絵。四馬氏の墨筆は、台上の女体の腰部から上の素晴らしいに只々見惚れるばかりです。映画のシーンでは楓氏提供の西条鮎子と浅茅しのぶ、千葉氏提供の西条鮎子が

よかつたと思います。藤木氏提供のロロブリジダの拷問シーンは足枷を締められる直前ですが、鎖を引かれてベルトは既に喰い込んでおり、打ちひしがれたような囚われの表情が体全体に表れていて正に圧巻です。南氏の続稿が楽しみに待たれます。藤山さんの男装の切腹はいつも娛ませて頂いていますが、一度その麗姿をフィルムに収めて頂きたいものと思います。甲斐氏の木馬責に関するノート、四月号の傑作の一篇と思います。私のレポートにまた／＼貴重な誌面を多く割いて頂いて恐縮です。カットが気に入りました。泉かよ子さんからのお手紙は、素敵ですね。誌上での活躍を待ちたいものです。本田氏のアヴァン座公演のレポート拝見しました。随分と楽しい読物に肉付けされていますからアヴァン座も喜ぶでしょうが、本田氏の期待に反しアヴァンの低調はかくせません。南川さん、法谷氏の作品は編集後記にある如く佳品でした。北原さんの「花と朔風」は話が大幅錯綜して来たところでおしまいになりましたが、北原さんの上に些か道子の倅を求めるのは失礼でしょうか。感謝と共に次作を期待します。土路氏の大

作は益々佳境に入つた感じがします。殊に(五)の水責の章は挨拶といい、責苦といい素晴らしいイメージを抱かせられました。岸本氏の作品、中年の女性はずべてマゾの魔性がありそうに錯覚を起します。佐々木氏のアイデアは大変参考になりました。私も何か考えてみたいと思います。甲斐氏の鞭打のアイデア(2)の哀憐な表情の見事なこと、まず進品です。読者通信の岩瀬氏、御自愛の上再び御活躍の日の速やかに至るようお祈り致します。京都の奥村さん、兵庫の森さん、大いに誌上で御活躍下さるようお願い致します。伝言板を読んで日下さん、白金氏、藤山氏、甲斐氏の作品が今から楽しみです。次号の入手を、もう夢見る程です。今、午前二時十五分近く、大分長くなりましたから、この辺でペンをおきます。さようなら。

(東京 近藤一)

○ 御無沙汰しております。毎月の発行が待たれてなりません。和服姿の御婦人の方の姿が私の目に映ずる時、何となく和やかな嬉しさとそして私の好きなお腰、それも赤や、時色のネルモス地の柄物等、嬉しい妄想が浮かんできます。以

前「綿ネルの妄想」を發表させて貰つて以来、別に何か書こうと思ひながら、のびのびになつていいます。又、あぶみ様が「女の随筆、お腰について」を書かれんことを望んで止みません。私の対象は中年の女の人で、それも着物の好きな方です。そんな人と文通をしたくてなりません。女中さん又は家政婦さんで、家事や、お洗濯、お買物をしてみたい私なのです。勿論好きなお腰を穿いてです。生れ変つてみたくてたまりません。それから水上流太郎さん、沢田順次郎氏の変態性慾の種々相という本を探しているのですが、見せて貰えないでしょうか。絶対にお返しするのですが、御借り出来ないでしょう。最後に、お腰のフェチの皆様、他の方々に負けない様、私達の傾向を發展させましょう。

(福本時三)

○ 僕は最近の読者通信欄に、六尺禪愛好者の多いのを喜んで、六尺男の一人です。六尺禪を締めた感じは全く素晴らしく、猿又などは頼りなくて使えません。日本の男のみの味える喜びです。六尺禪に関心を持つ諸兄に依つて「ふんどし倶楽部」を造り、禪愛好者の文通

◎次号の本誌は五月上旬発売です

本誌は今後毎月上旬発売の予定です。三ヶ月分、半年分予約の方々は出来次第お送りいたします。毎月お申込の方は、下旬頃までに誌代のお送りを願います。

や会合を致したく思っています。
同好の諸兄のお便りをお待ちして
居ります。(大阪市住吉区浜口町
四〇二 山田又市方 中井光次)

○

拝啓、三月ともなれば流石に春
めいて日一日と暖くなつて来まし
た。最近の御誌の充実は中々目覚
しいものがあり、我々の待望の作
品が誌上を飾るようになり喜びに
堪えません。第一に映画にあらわ
れた女優の緊縛場面など鮮明な画
面にたんのうしております。又、
絵も昔なつかしい人々のもあらわ
れ、北原女子の絵のみで淋しかつ
た誌面も賑かになつてきました。
先ず十二月号では、口絵の北原氏
のいでゆの湯殿の柱へ腰巻一枚で
ぎりぎり縛りつけられた姿、乳
房の上から二の腕に食い入る太い
縄、かたく縛られた手首など、苦
しげな息づかいが聞えてくるよう
です。又、同じく「或るポーズ」
の雲井久子氏の下着の縛られた姿

も秀逸です。すんなりのびた両脚
を揃えて、優雅なシユミーズ姿を
乳房の上から三重にからむ太縄う
つむいた姿など実に可憐です。印
刷の工合で腕のあたりがはつきり
しないのが残念です。これは焼増
して頂けませんか。「レイ子素描
集」もたのしみの一つ。欧米式新
スタイルは毎号いただけません。
絵も下手で寒気がします。「文学
にあらわれた責めの描写」は毎号
楽しみです。絵も中々よろしい。
毎号続けて下さい。映画の速報は
嬉しいもので大分お世話になりま
した。一度カメラで撮つてやろう
と思うのですが、つい気がおくれ
て未だ撮つておりませんが、撮ら
れた方がありましたら、条件をお
教え下されば幸いです。新年号の
花嫁受難も又良いですね。はじめ
ての「鳴門の妖鬼」の吊し責めの
場面の美しさに驚きました。見落
したのが残念です。映画シナリオ
「赤いネオンの消える頃」は二月

号の「街の道化者」と共に中々の
もので感心しましたが、もう少し
責め場を濃厚にしてほしいと思ひ
ます。これは是非絵か写真にして
頂きたい。「魔海の業火」は素晴
しいのに絵が一つもなく残念至
極。「誰かが見ている」テレビよ
りは袖無しブラウス姿の美少女が
縛られていたとの事。私の様な美
少女の緊縛マニヤには全く見落し
出来ぬものですが、如何せんテレ
ビでは再現して頂く由もなく残念
無念です。二月号に入るや映画の
緊縛、猿轡場面が大分あり、更に
「捕われの令嬢」「庭先でのお仕
置」と並んで快調でした。「令嬢」
の方は、もつと優しい顔立ちの娘
が、足を投げ出さず横坐り位の姿
で猿轡を噛ませられている方がよ
いと思います。又「お仕置」の女
学生も顔が少女らしくなく、姿も
可憐さが余りなく、いつもの北原
氏特有の可憐な感じがなく残念で
す。女学生は可憐さがなければぶ
っこわしです。何か、後手にきび
しく縛られて苦悶している感じが
稀薄です。落穂集中の「京子」は
近年にない作品で感激しました。
優しいおとなしい新妻京子を、こ
んなに愛しつづ責める男の幸福を
しみじみ感じます。初々しいはじ

らいをみせつつ夫のいうなりに縛
り上げられ責められる京子という
女性には、我々サジストの理想の女
と思います。しかも残酷さやグロ
の無いのは、とても後味のよい何
度読返してもあきないものです。
責めたあげく殺したり気狂いにし
たりする、救いのない作品は余り
残酷すぎて私は嫌です。どんなに
責められてもよいが、救いのない
ものは胸糞がわるくなります。又
乳房マニアの私にとっては、乳房
をつぶしたり焼いたりするような
ものはやりきれません。「水責め
のアイデア」はなかなかよいので
すが、北原氏の絵はいつも縄が二
本づつ乳房の上下にかかつてい
るだけで、もつと縄のかけ方をかえ
て緊縛感を出すようにして下さい
と良いと思います。三月号で、菰
氏の「森の小径で」は、黒い太い
縄が柔肌にぎりぎり縛めつけら
れて実によいのですが、表情が余
りよくなく、もつと可憐さがほし
い。「魔の花嫁衣裳」の写真は実
に傑作です。映画も二回見ました
が、この場面は現代娘の責めとし
ては「隼の魔王」の田代百合子、
「中野源治の冒険」の中原ひとみ
と共に傑作の一つです。今後もこ
ういうものをどんどん載せて下さ

い。「あぶり責め奇聞」は余り残酷で血なまぐさくて敬遠です。「電気責め」も余りひどすぎて頂けません。「潰滅の前夜」も同じくどうも残酷すぎて一寸ついていけない。鼻にくつわをはめたりするのは、どうも無趣味？ですね。くだらぬ勝手ばかりを書きましたが、次第に復刊当時より向上しているのは嬉しいことです。読者通信もサジストのが少く、マゾや切腹、フンドシに占められて淋しい限りです。私のいる名古屋にもサジストや奇クの同好者はいるのでしようが、一つ同好者が文通やら交際をしたいたいものです。サジストとしての私の希望は(1)美少女であること、又は新妻(可憐、素直、おとなしい)(2)全裸よりも女らしい優美さのある下着(シニミーズ、スリップ、ブラジャー、腰巻、長襦袢等)又はセーラー服、半襟の開襟シャツ、ボロシャツ、ブラウス運動シャツ姿等。(3)縄はやや太い目で紐類、ビニール紐等でなく麻縄又は荒縄で、必ず後手で乳房の上を二巻、三巻し下も縄をかける脚もしばると更によい。首縄は余り好まない。(4)姿は足を投げ出したり、あぐらを組んだり、足をあげたりしてゐるより、正坐又は正

座の姿勢のくずれた横坐り程度、又は横にころがす、柱へ縛りつける等。猿ぐつわは必らずすること。これも鼻に一寸かかる位で余り顔一ぱいにするのは見苦しい。髪はオカッパ、お下げ、又は軽いパーマ、戦国時代頃の女の下げ髪等がよく、アツプや丸髷は余り好まない。(5)縛られた娘のそばには、責め道具其他、責めの雰囲気であらわすものがほしい。地下室、土間等、青竹や鞭や縄、鎖など、あたりに散乱している。又は男の太い足や手が、美女を苛む場面、例えば休刊前の「手袋」の如き、固く縛られ猿ぐつわを噛まされ身動きの出来ぬ美女の美しい乳房を、掴みいたぶる黒い革手袋、恨めしげに仰ぐ眼などは数年来の傑作でした。唯、女を縛っておくだけでは能がない。責められ又、責められんとして、ふるえおののく可憐な美女の無惨な縛られた姿を、画に写真に文章に我々を喜ばして下さい。何度もお願ひする事です。分譲写真の小型写真にしての紹介サジ特集の発行などは是非実現して下さい。(名古屋 M・M)

○ 始めて便り致します。小生、二十才になる一男性です。筋肉た

くましき男性肉体美にあこがれるソドミアです。最近、復刊号を知り早速愛読しましたが、少々がっかりしました。口絵に全然男性緊縛フオトがなく映画の縛り場面が少々多い様に見受けられました。たとえ一枚でもよいから男性の責め場がみたいのです。揮、又はナイロンの様なびったり肌に密着した少々すき通る位薄いブリーフ一枚にされた青年が、雁字がらめに縛られ凄惨拷問を受けている様なフオト……。小生の愛用している下着は、家にいる時、又、就寝の場合には六尺褌です。外出又は勤めの場合はナイロンブリーフ等です。二月号の浜松のT・K生様、是非御友達に成りたいがなって頂けません。奇ク愛読者の皆様の中で小生と同じ傾向の方、御友達になりたく思いますので御便り下さい。(名古屋市北区南上飯田町二の二八四 古川実)

○ 奇ク愛読者の皆様、誌上を借りて御相談申し上げます。此度、本年一月より奇ク愛読者の方々にてGRクラブなる同好会を作りました。御連絡下さい。山田正男様の計画を具体化に移しましょう。私もその一人でS傾向の女性です。

春日ルミ様の大ファンです。十二月に山田様の計画を拜見し、数人の同好者と共に前記の会を作りました。山田正男様始め御賛同の方々、御連絡下さい。皆様からのお便りお待ち致しています。(東京都板橋区上板橋三の三六三島影方 中富啓子)

○ 復刊後、次第に奇クが調子をあげてきたことは喜びに堪えません。やはりサドの方が最も多いのではないかと存じますので、どうかこれを主にして頂きたいと願うのは私一人の勝手なことではありません。まい。神田神保町の某書店にかなりあった奇クが、いつのまにか売れてゐるのを見て、今更乍ら人気絶大に驚いています。かつての分譲写真が絶版になったのは非常に残念です。再発売の方策はありませんか。虫の好い話かも知れませんが、ないとなると無性に欲しいものが、見せて頂く丈でも結構ですが、どなたか東京附近の方で御交友賜りたいものです。映画シーンよりのグラフは大変結構です。ぜひ続けて下さい。小生も機会をとらえてはパチパチやっておりますが何分にもレンズ交換のきかない悲しさで上つぽみになってしま

代理部分讓品総目録

新作発表！

御入用の方は八円切手封入の上御申込み下さい。お送りします。

います。(東京世田谷志度好一)

鷹野めぐみ様、三月号の僕の通信に早速お呼び下さいましたにも拘わらず、生憎出張中で非礼の段お許し下さい。僕にとって折角の機会を逸し落胆致して居ります。何卒、如何様にも女王様にお詫び致しますから、もう一度お呼出し賜わらんことを切にお願い申し上げます。(東京 中野行雄)

悪条件にも拘らず徐々に内容を充実させていく奇巧の編集諸氏に先ず敬意を表し、愛読者の皆様、特に女装マニアの方々に、親近感に満ちた御挨拶をお送りする次第です。私は女装に興味を持ち初めてから六、七年にもなりました。か。二年程前に奇巧を知り、同好の方々も少くないことを発見して一寸驚きました。それまでは、こんな妙なことに興味を持ち続けるのは、自分だけではないのだろうかと、たまらない孤独感を抱いていたのです。それ以来、どんなに

力強く感じたか判りません。少年期を過ぎる頃から、人一倍虚無感に悩まされてきた私にとつては、女装するということは現実逃避の最も効果的な方法だったのです。最近では女装のまま外出すること出来る様になりました。また或る女性が、時々私を女装させて縛り、馬乗りになつたり色々無理なことをさせようとしたりするプレイを共にしています。彼女とは同じスタイルの下着やスカートなど(サイズは違いますが)種々持っています。彼女と同じ下着を身につけて鏡を見る時、すべての現実的な世界はどこかに飛び去つてしまふのです。この感情はマニアの方には判って頂けないでしょう。私の女装を知っているのはこの女性だけなのです。外出しても、それは女性としてですから、私が女装しているという事は誰も知らないわけですね。最近、女装同好会を結成しようという気配がある様ですが、できたら参加してもいいと思つています。男性に私の女装

を知られることは嫌ですが、同好の方なら又、別なわけです。

(東京 有田生)

小生は二十八才のマゾヒストです。サジストの御婦人と交際したいと思ひます。御婦人の方に辱しめられながら責められたいと思ひます。力の強い女性の手に裸にされ厳重に縛られ、ゴム製の猿ぐつわをされて鞭でどかされ乍ら仕置場へ引立てられ、エビ責め股間縛り、吊し責め、クスグリ責め足なめ等が辱しめの内に行われ、この様な夢の中に画いている男です。この様な男を責めてみたいと思はれる御婦人方のお出をお待ちしています。

(名古屋 酒井二三夫)

小生、「夢の国」と題する長篇小説のアイデアを持っています。女はいずれも全裸又は肌着の破れたものを着せる、こんな構図は如何でしょう。誰かこれを小説にして載けてませんか。詳しい筋書と場面の構想など出来て居りますが、私も人目がなければ書きたいのですが到底だめ、この手紙でせいーばいです。

(高井好晴)

○

久しぶりに口絵に四馬孝氏、栗原伸氏の登場、期待以上の力作でありました。尙、裏表紙のカットも外国作品のものとしては佳作。これは又素晴らしい出来栄です。非常に効果的です。本文では佐々木ツトム氏の「悪魔の勝利を夢みる男」がよかったです。共感を呼ぶものがあつた北原純子さんの幻想的な人形のカットも素晴らしい。九雅氏の「特異な角度から」も簡にして要を得ており、中々に参考になりました。土路氏の「続・潰滅の前夜」これ又、サジズム愛好家としては又とない好読物でした。しかし前編に比して物足りない点もありましたが、土路氏の書き慣れた文章を補つて余りありません。滝れい子さんの挿画は平凡、むしろ口絵の四馬氏の作品の方がよかったです。本月号の様に毎月二編位時代物の作品を取入れて欲しい。

(東京 東一郎)

◎五月号休刊◎

都合により五月号は休刊としましたので、五月号として予約下さいました方々へは、本月号(六月号)をお届けいたします故、左様御承知願います。